
人形の救世主

すとりぼらんぷ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人形の救世主

【Nコード】

N1582U

【作者名】

すとりぼらんぷ

【あらすじ】

魔物や周辺諸国との戦いに明け暮れるグランディール王国に生まれた貴族の娘、フェリシア。彼女は世界を救うと予言されながら魂を持たない抜け殻だった。

しかしある夜、ついにフェリシアは覚醒する。刺客を蹴倒した救世様は呆然と呟いた。

「ここ、どこですか？」

予言の救世主に宿っちゃった現代日本の女子大生がトリップ先の

異世界を救う(?) 主人公最強系・愛と勇気と希望のスペクタクル
冒険記。 たぶん。

登場人物紹介（前書き）

登場人物紹介です。

初登場話数も併記しておきましたので、ネタバレが気になる方は参考にしてください。

読まなくても差し支えありませんが、よろしければ備忘録にどうぞ。

登場人物紹介

フェリシア・チェンバレン（第1話登場）

性別：女性

年齢：20歳

外見：ダークブラウンの長髪、黒い瞳。身長・体重共に平均値。
グランデイル王国最有力貴族の一つチェンバレン公爵家の一人娘。
先のグランデイル魔道師団長によって世界の救世主になると予言され、世界最強生物である竜族に匹敵する魔力を持って生まれてくる。

しかし、感情持たず、自発的には言葉を発することもない動く植物人間状態。人は彼女を皮肉って人形姫と呼ぶ。

斉藤 優花（第1話登場）

性別：女性

年齢：20歳

外見：ダークブラウンのセミロング、黒い瞳。

フェリシアの体に宿ることになった現代日本の女子大生。

基本的に楽観主義者で、考える前に手が出るタイプ。

何故か元の世界への執着が少なく、すんなり救世主フェリシアとして生きる道を選ぶ。

キアラン・グランデイル（第1話登場）

性別：男性

年齢：22歳

外見：黒髪、琥珀色の瞳。長身で筋肉質。

グランデイル王弟。

性格は生真面目、かつ冷淡（を、本人は目指している）。

兄王のことを深く敬愛しており、王と祖国に仇為すものには容赦し

ない。要はブラコン。

オズワルド・グランディール（第3話登場）

性別：男性

年齢：27歳

外見：金髪、琥珀色の瞳。正統派の美形。

グランディール王国の国王。

柔和で穏やかな外見と気性でありながら、知略に優れ貴族・庶民にかかわらず国民からの支持も厚い。

フェリシアのことをとても大切にしている。

シャロン（第3話登場）

性別：女性

年齢：四十代後半

外見：淡い金髪。体形はスマート。

フェリシアの主治医。

幅広い知識と柔軟な発想を持つ。

メリッサ・ラングトン（第5話登場）

性別：女性

年齢：17歳

外見：赤毛のおさげ。小柄で小動物的。

フェリシアの侍女。

魔力の質も量も標準、下級貴族である男爵家の出身で公爵家の姫君に仕えるには家柄も低いが、フェリシアに近づいても体調不良を起こさないため、大抜擢を受けた。

ベネディクト・チェンバレン（第5話登場）

性別：男性

年齢：65歳

外見：ロマンスグレーの紳士。若い頃は勿論、今も懸想する女性が後を立たない。

チェンバレン公爵、位は宰相。フェリシアの父親。
仕事場では時に王すらも小童扱いする辣腕政治家。私生活では好々爺然としている。

四十過ぎてから授かった一人娘であるフェリシアを溺愛しており、優花にも優しい。

ダリル・スマイサー（第8話登場）

性別：男性

年齢：五十代

外見：灰色の髪、鋭い目つき。キアランに次ぐ大柄な体格。
魔道師団長。フェリシアの魔法の師匠。

寡黙で話すときも静かだが、妙な迫力がある。

ハロルド・アーデン（第10話登場）

性別：男性

年代：五十代

外見：金髪碧眼、整った顔立ち

チェンバレン家と比肩する有力貴族アーデン公爵家当主。位は將軍。
グランディール国軍の最高責任者であり、文官トップのベネディクトとは、対立していないが馴れ合ってもいない微妙な関係。

ヴェロニカ・アーデン（第10話登場）

性別：女性

年齢：18歳

外見：金髪碧眼、気の強い美少女

アーデン家の次女。

高慢ちきで高飛車、フェリシアに対しては敵意満々だが、キアランやオズワルドの前では猫を被っている。

マルグリット・アーデン（第13話登場）

性別：女性

年齢：24歳

アーデン家の長女。王国軍少佐の男勝りな美女。

妹とは正反対のサバサバした性格で、何故か女性からの人気が異様に高い。

フェリシアに対しても好意的で、冗談でよく口説いている。

キアランとは、子供の頃から共に訓練場で試合をする腐れ縁。故に彼の弱みを色々握っている。

エドモンド・アーデン（第19話登場）

性別：男性

年代：25歳

外見：金髪碧眼、女性と見紛う絶世の美青年

アーデン公爵家の嫡男。

魔道師団の副団長も勤める将来有望な青年のはずが、常に好奇心の赴くまま突飛な行動に出るため全てを台無しにしている。

ディラン・ヘイグ（第23話登場）

性別：男性

年代：四十代

外見：熊のような巨躯

グランディール近衛騎士団団長。キアランの上司にして師匠。

貴族階級出身にもかかわらず一般兵からたたき上げ、後に騎士団へ転向した異色の経歴の持ち主。

細かいことにはこだわらない豪快な気質だが、部下からの信頼は厚く、腕も立つ。

設定集（前書き）

設定集というか、作者の備忘録です。

構想中のネタもあるので、ある日突然堂々と変わっていることもあります。

せっかく書いたので、興味のある方だけどうぞ。読まなくても特に差し支えはありません。

設定集

<地名>

レーア大陸

この物語の舞台。

大陸のほかに、いくつかの島もある。

グランディール王国

国家元首：国王オズワルド

三百年ほど前、魔物の侵攻から人の地を守った英雄が建国したかつての大国。

国土が分断されてなお人の国の中では最強の勢力を誇っているが、魔物と各国を同時に相手できるほどではなく、その国力は少しずつ衰えている。

ウルリーク魔法共和国

国家元首：大統領

グランディール初代国王没後、離反した人の国。
グランディールから見て、ローレル樹海を挟んだ大陸西部に位置する。

魔法技術の発展に力を入れており、マイペースな国柄。

ボニファーツ帝国

国家元首：皇帝

ウルリークと同じくグランディールから離反し、神への信仰を捨てた軍事国家。

サナデイス大河を挟んで東に位置する。

ミネレア教国

国家元首：教皇

グランディール南部の宗教国家。

世界中のグラノーヴァ信者達の総本山であり、小国ながらその影響力はグランディールを凌ぐともいわれる。

グラノーヴァへの信仰は絶対だが、創生神とは別の女神も信仰している。

コナリー山脈

レリア大陸の中央部を横に分断する峻嶒な山脈。
北部の魔物の地と南部の人の国を分断している。

大陸北部

レリア大陸コナリー山脈より北の、魔物の地。

そこでは魔王が魔物たちを治めている、上位の魔物や竜の巣が広がっている、古の邪神が眠っている等と人々は憶測するが、長らく深部に人が立ち入ったことはないため真相は定かではない。

牢獄島

かつて創生神が魔物などの「悪しきもの」を封じたとされる北の最果ての島。

その詳細は勿論、実在すらも不明。

<魔法>

水呼び

水を精製する魔法。魔力があれば誰でも使える簡単な魔法で、日常的に使われる。

火起し

小さな炎を作る魔法。最も簡単で、水呼びと並びよく使われる。

停止

水呼びなど、一度使うと術者の魔力が切れるまで効果が持続する魔法を止めるための魔法。

消去

停止の上位魔法。魔法の効果を消し去る。自分の魔法にかける他、他人の魔法にかけて妨害することもできる。後者の方が難易度も消費魔力も高く、術者・被術者の双方にダメージが加わる。自分で自分の魔法にかける場合は魔力の消費のみ。

閃光

強い光で対象を焼き貫く上級攻撃魔法。狙撃性に優れる。

爆風

広範囲をなぎ倒す上級攻撃魔法。多数相手に有効。

突風

強い風を起す魔法。

飛来してきたものを吹き飛ばす他、自身にかけて滞空することも可能。ちよつと腕のいい魔術師でなければ使うことのできない中級魔法。

火焰

対象を火で焼き尽くすポピュラーな攻撃魔法。

<時間表記>

レーア大陸の時間は十進法で表される。

一日の長さ、一年の長さは現実世界と同じ。

一の刻 00:00~02:24

二の刻 02:24~04:48

三の刻	0 4 : 4 8	0 7 : 1 2
四の刻	0 7 : 1 2	0 9 : 3 6
五の刻	0 9 : 3 6	1 2 : 0 0
六の刻	1 2 : 0 0	1 4 : 2 4
七の刻	1 4 : 2 4	1 6 : 4 8
八の刻	1 6 : 4 8	1 9 : 1 2
九の刻	1 9 : 1 2	2 1 : 3 6
十の刻	2 1 : 3 6	0 0 : 0 0

一年も十ヶ月。

一ヶ月は6日×6週間の36日間、年末に5日間の”何にも属さない日”がある。

<お金の単位>

青銅貨・赤銅貨・銀貨・金貨の四種類の貨幣が使われており、十枚ごとに一つ上がる。

青銅貨 10円

赤銅貨≡青銅貨10枚 100円

銀貨≡銅貨10枚 1000円

金貨≡銀貨10枚 1万円

円やドルなどの単位はなく、例えば一万五千円相当の品物は金一枚銀五枚という形で表される。

貴族の間では紙幣や小切手も使われるが、一般的ではない。

<国軍階級表>

元帥

軍事国家ボニファーツのみ存在する軍のトップ。皇帝が兼任。

將軍

ボニファーツ以外の総大将。

佐官（大佐・中佐・少佐）
皆や大隊以上の指揮を任される。

尉官（大尉・中尉・少尉）
左官の補佐・中隊の指揮。

下士官（曹長・軍曹・伍長）
尉官の補佐・小隊の指揮。

兵（兵長・一等兵・二等兵）
分隊以下のまとめ役。

ちなみにグランデールの魔道師団長と騎士団長はだいたい同格。
国軍とは独立した機関であるものの、無理矢理階級分けするなら左官と將軍の間ぐらい。ウルリークでは魔道師団が將軍より上だった
り、ボニファーツでは魔道師団自体が存在しなかったりします。
現実世界の軍の階級はまだもっと色々ありますが、あまり細分化すると逆にわかりにくいので、あえてこんな感じです。

元帥がボニファーツ以外にいないのも、帝国が軍事国家と言うことを際立たせたいためであって別に作者が忘れてたわけじゃないよ！
本当だよ！！

1・討伐（前書き）

この小説はフィクションです。
実在の人物・団体・事件などとは一切関係ありません。

1・討伐

塔は闇に包まれていた。今は真夜中、使用人たちが忙しく働いていた時は灯されていた魔法灯もすっかり消えて、分厚い雲に覆われた空には月や星の明かりもない。塔を上るキアランにとって、手にした小さな燭台の蝋燭だけが道しるべだ。しかし、堅固な石の塔を覆う暗闇は、頼りない明かりのためだけではなかった。

（今日は一段と重い……）

キアランは、ひととき足を止めて精悍な顔を顰めた。塔の頂上に近づくと、常人であれば気分を悪くするような、濃密な魔力の気配が濃くなっていく。魔力とは本来、善悪のない純粹な力だ。しかし彼には、まわりつくような重い空気が、何か禍々しい物に思えて仕方なかった。

（まさか俺を止めようか？ いや、あの人形に意思などあるまい）

キアランは思い直して、使い慣れた愛剣を握りなおすと、再び階段を上り始めた。

塔の最上階には、四隅を金属で補強された木製の扉が佇んでいた。キアランは耳を澄まし、階下が騒ぎになっていないことを確認すると、昏倒させた見張りの兵から奪った鍵を扉の鍵穴に差し込んだ。鍵はあつけないほど滑らかに回り、音もたてずに扉が開く。豪華な内装や調度品が、蝋燭の光に照らし出された。慎重に部屋へ入り、猫足の机に燭台を置く。整いすぎた部屋の内部は、貴人の私室であることを差し引いても殺風景だった。人が住んでいればおのずと出てくる、私物や装飾品、嗜好品による生活感がまるでないのだ。しかし、この部屋は無人ではない。

「神よ、偉大なるグラノーヴァよ、わが宿命を照らし給え」

キアランは剣を抜き放ち、創生神グラノーヴァへの祈りの聖句を唱えながら、奥に設えられた天蓋つきの寝台へ歩み寄った。大気に歪

みを生じさせるほどの、強大な魔力の源へと。寝台を覆う布を取り払うと、まずはダークブラウンの髪が視界に飛び込んでくる。塔の最上階で暮らす莫大な魔力の持ち主は、長い髪を広げて仰向けに眠る人間の娘だった。娘の顔の造作自体は、平凡よりやや上といった程度だが、眠っていても滲み出る人にはあるまじき力が、この世の者ではないかのような妖艶さを醸し出していた。

「魔女が……」

しばしその顔を見つめたキアランは、吐き捨てるように呟いた。彼の琥珀色の瞳には、憎悪と殺意が浮かんでいる。

「お前のような者が、救世主であるものか。人を惑わす悪魔め、この俺が討ち取ってくれる」

下の方で、人の叫ぶ声と足音が遠く響いてきた。見張りを昏倒させて塔に忍び込んだことに気づかれたらしい。段々と近づいてくる複数の足音を忌々しく思いながら、キアランは抜き身の剣を構えた。

「グランデールに！オズワルド陛下に栄光あれ！！」

祖国と王を讃えながら、躊躇なく娘の心臓めがけて白銀の刃を振りかぶる。小さな炎の光を受けた刃が煌いた刹那。娘の目が見開かれた。

「！！」

深い闇の色をした瞳に見据えられ、キアランの動きが僅かに停止する。すると、娘が叫んだ。

「痴漢ー！！！！」

続けて、寝転がった体勢から見事な蹴りが放たれ、キアランの鳩尾に衝撃が走った。と、思う間もなくキレのある右ストレートが彼の頬を打つ。本来なら、騎士団で厳しい訓練を受けて育ったキアランが、女の力で殴り倒されるなどありえない。しかし魔術で抵抗される可能性は考えても、まさか蹴る殴るといったおよそ淑女とは思えぬ方法で反撃を食らうとは夢にも思っていなかった彼は、思わずよろめいた。それでも、騎士の意地で手にした剣は離さない。素早い動きでベッドから降り仁王立ちした娘は、キアランの剣を見て更に

捲くし立てた。

「刃物？じゃあ痴漢じゃなくて強盗殺人！！？正当防衛！！！」

娘は叫びながらキアランに肉薄し、膝を蹴り上げた。素人、それも年若い女の攻撃をともに喰らったショックで呆然としていたキアランは、強烈なトドメの一撃をさされてうずくまる。

「ぐうつ……！」

二十二年間生きてきた中で、味わったことのない類の屈辱と激痛に、彼はとうとう剣すらも放り出して股間に手を当てた。ガランと間拔けな音を立て、剣が転がる。

「フェリシア様、ご無事ですか！！？」

それと同時に激しい音を立てて扉が開き、武装した数人の兵士達が部屋へ駆けつける。彼らが灯した魔法の明かりで、部屋の中は昼間のように明るく照らし出された。

「え……キアラン殿下？」

槍を構えていた兵士の一人が、あっけに取られて呟いた。彼らの前には、きょとんと小首を傾げる娘の足下で、国一とも謳われた騎士が股に手を当てて倒れ呻く珍妙な光景が広がっているのだ。無理からぬことではある。しかし兵士達が更に仰天したのはその後だった。

「あの、すみません」

兵士達の誰一人として、能動的に喋るところを見たことのなかった娘が、彼らの方を向いて尋ねた。

「ここ、どこですか？」

「フェリシア様が喋ったー！！！」

娘の問いに返って来たのは、まるで珍獣が喋ったかのように驚愕する兵士達の絶叫だった。

1・討伐（後書き）

ネットをよく見る異世界モノを書いてみた。初投稿よろしくおねがいします。

真面目っぽい章題と書き出しで始めましたが、イケメンが股間を蹴られて悶絶で第一話終わり。シリアスの皮を被ったコメディです。おそらく全編こんなノリです。

2・人形姫の目覚め

娘は混乱していた。目が覚めた瞬間刃物を持った男に襲われ、寝ぼけつつも撃退した安堵を味わう間もなく、気づけば見知らぬ部屋に立っている。そんな状況で混乱しない方がおかしい。ところが、騒ぎを聞きつけてやってきたらしい、コスプレ外国人集団はもっと混乱しているようだった。人間、自分よりも動転した相手を前にすると、いくらか冷静になれるものだ。娘はもう一度、彼らに問いかけた。

「あの、すみません。ここどこですか？というかフェリシア様って誰ですか？」

問いかけに、西洋風兵士のコスプレをした集団は水を打ったように静まり返り、娘を凝視した。

「まさか私？ひ、人違いですよ！私の名前は斉藤優花です」

娘——自称斉藤優花、他称フェリシアがわたたと自己紹介すると、兵士たちは一人残らずひれ伏した。

「ついに、ついに救世主様がお目覚めになった……！」

「フェリシア様、どうかこの国に光明を！」

「グランデールに勝利を！」

「俺に彼女を！」

「明日の夕飯、豚の香草焼きになりますように！」

そして、感涙に咽び泣きながら懇願する声。

（後半は何かが違う気もするけど。私、妙な宗教団体にでも拉致されたのかなあ。逃げるにしても、海外じゃあどうすればいいのか……日本大使館ってどこにあるんだろう）

どう考えても生まれ育った日本とはかけ離れた、中世ヨーロッパ風の人々と内装をきよろきよろと見渡して、優花は嘆息した。

「ああ、フェリシア様がお嘆きだぞ！」

「何か足りないものがございましたか、救世主様……！」

その様子を見た兵士達が優花に詰め寄る。

「もつと綺麗なお召し物を持ってきましようかつ!？」

「おい誰か果実水を差し上げる!」

「お菓子もありますよ!」

仄かに淡いオレンジ色に光る見た事のない飴を差し出され、思わず優花はふらふらと前に出た。

「美味しそう……って、そうじゃなくて!」

「お前ら……何をしている……」

すっかり菓子に釣られそうになった優花が我に返った足下で、地を這うような低音が唸った。

「?」

視線を向けると、床でうずくまっていた黒髪の青年——キアランががばりと身を起こし、しなやかな動きで立ち上がる。

(うわっ、いい男。ハリウッドの男優みたい)

自分で蹴り倒した相手であるにもかかわらず、優花はその顔に一瞬見とれた。欧州系の彫りが深い顔立ちをした青年の、不機嫌そうに眦められた琥珀の瞳が優花を一瞥し、次に周囲の兵士達を睨みつける。

「お前達、こんな娘のことよりも、まずは俺が倒れていることに気を配れ。ここは王の居城だぞ、侵入者でもあったらどうする!」

「ハッ! 申し訳ございません!」

自身が侵入者であることは棚に上げてキアランが一喝すると、持ち場を離れていた兵士たちは慌てて部屋から出て行った。キアランは改めて優花に向き直り、非友好的な態度でじろじろと眺め回す。

「雑兵どもは救世主の目覚めだと寝言を言っているが、お前……本当にフェリシアか?」

「だから、違うって言うっているでしょう!？」

失礼極まりない言い草に、優花は一瞬前まで相手に見とれていたことも忘れて言い返した。

「ほう……フェリシアでないと言うなら、お前は何処の誰なんだ?」

「だから、日本国・東京都在住、斉藤優花です、つてば！」

「知らない」

「は……？」

断言された言葉に、優花の目が点になる。

「ニホン？ トウキョウ？ そんな国も町も、聞いた事はないぞ。サイトー・ユウカなどという女も知らん」

「中国の隣の小さい島国です、富士山とか侍とかゲイシャとか有名でしょ！？ そもそも、貴方達が私を拉致してきたんじゃないんですか！？」

問いかけながらどんどんパニックに陥っていく優花を冷たい眼差しで見下ろし、キアランはため息交じりに答えた。

「ニホンもチューゴクもお前の頭の中にしか存在しない国だろうが、教えてやる。ここはグランディール王国、お前が守護すべき神聖なる大国だ」

「ぐらんでいーる……？」

優花はとつさに世界地図を思い浮かべた。九年間の義務教育を終えた人間のたしなみとして、少なくとも「大国」と呼ばれるほどの国なら知っている。その中に、グランディールという国名は存在しなかった。

「……あの、まさか、ここ、地球上ですらない、とか言わないですよね……？」

自分の国が大国だと信じて疑わなかったあの痛い人であってくれ、と念じながら優花が恐る恐る尋ねると、キアランの眼差しは侮蔑を通り越して何かかわいそうなものを見る目になって来た。

「チキュウとは何だ？ ここはレーア大陸に決まっているだろう」

「……」

聞いた事もない大陸名に、優花はとうとう沈黙した。

（まさかの異世界コースっぱいんですけど……）

「兎追いかけて穴に落ちたわけでも洋服ダンスに突っ込んだわけでもないのに、何でこんなことに……」

そもそも私、目が覚める前何してたっけ、と考えて米神を押さえる優花。なんだか頭痛がする。

「何をブツブツ言っている。とにかく、気が狂っているとしたか思えないとはいえ、お前にも自我が芽生えたのならその使命を果たす義務が」

「あー、あのー、待って、待って下さい、実は私、異世界人なんですー！」

キアランの台詞を遮って叫ぶと、一瞬沈黙が降りた。

「……そうか」

（まさか、信じてもらえた？この部屋の明かりも魔法っぽいし、やっぱりファンタジーな世界なのかな？）

優花の期待は、すぐさま打ち破られる。キアランは整った顔に、凄絶な笑みを浮かべていた。本物の殺意が漲る笑顔で、優花を射抜くように見据える。

「そうか、そんな下らない偽りを吐いてまで、己が役目を放棄する気か、フェリシア・チェンバレン。貴様など、やはりこの俺が成敗してくれるー！」

「……！」

叩きつけられる殺気に声も出せず優花は目を見開いた。キアランが拾い上げた剣で、今から刺し殺されるのだと、比較的能天気な彼女にもはつきりわかった。だというのに——あるいは、命の危機が迫っているからこそ——優花は疑問に思った。

（そういえば、私、なんでこの人と会話が成立してるんだろう。この外国人さん、日本語しゃべってるわけじゃない……私がこっこの言葉を、話してる……！？）

そのことに思い当たった瞬間、先程の比ではない激しい頭痛に襲われた。

「うあつ……！」

膝をつき、ずきずきと痛む頭を抱える優花の脳裏に、情報の洪水が流れ込む。グランデール、予言の救世主、各国の侵略、魔物、な

どの言葉が暴力のように次々と浮かんでいく。

「おい……？この期に及んで、弱ったフリをしても、俺の気は変わらんぞ……？」

キアランはそう言いつつも、騎士として明らかに様子のおかしい女性を切り捨てる事も躊躇われ、剣を下ろした。目前でもがき苦しむ娘に近づくと、ガクガクと震える手が必死にすがり付いてくる。腕の中に倒れこんできた体は、高熱を発していた。

「たすけ、て……」

優花はそれだけ掠れた声で呟くと、激痛のあまり意識を手放した。

「……どうしてそれを、俺に言う」

呟くキアランの声は、彼自身も思いがけず途方にくれていた。

2・人形姫の目覚め（後書き）

この小説、ジャンルは間違いなくファンタジーですが、異世界の後につくのは召還なのか転生なのかトリップなのか、ちょっと分類に困ります。多分全部足して割るのが一番正しい。

3・予言

世界は神代の時代、創生の神グラノーヴァによって生み出された。一つの大陸といくつかの島からできたその世界は、善いものも悪きものも混沌としており、争いが耐えなかった。そこでグラノーヴァは悪しきものを北の果ての牢獄島に封じ、信心深い人々や気性の穏やかな動物達を大陸や他の島々に住まわせ、天上の国へ帰っていった。

レーア大陸と名づけられた大地は肥沃で、牢獄島を除いた島々もそれぞれに美しく、善いものたちは平和に暮らしていた。ところが、牢獄島に押し込められた悪しきものたちはそれを妬み、呪った。彼らの執念は神の施した結界すらも徐々に弱めていき、ついに一部が外の世界へと漏れ出したのだ。悪しきもの——醜く獰猛な魔物たちの前に、善いものたちは無力だった。知能を持つ魔物たちは瞬く間に大陸の北部を占領し、自分達の国を立ち上げ、知能を持たない低級の魔物を大陸中に放った。

人も家畜もただ殺戮されていく現実には、人々は恐怖した。その中で、一人の青年が立ち上がり、悪しきものたちに戦いを挑む。グラノーヴァの加護を受けた青年は最強の魔物である竜をも倒す力を持ち、果敢に戦った。その姿に心打たれた人々も団結し、戦い方を学び、魔物を撃退するようになった。人々の国は創生神の名前を冠してグランディール王国と呼ばれ、青年は初代国王となった。

初代国王の尽力により、人々は悪しきものたちに対抗する手段を得たが、彼も万能ではなかった。やがて老人となった初代王は亡くなり、身体能力で魔物たちに劣る人々は抵抗しながらも、徐々に国土を侵されていった。さらに、強力な守護者を失い不安に駆られた人々は、人間同士でも争い、王国は四つに分断された。

そして、建国から三百年余りが経過したグランディール王国は、最盛期の半分以下の領土と国力で、魔物やグランディールに成り代わ

ろうという周辺諸国と戦っていた。そんな敵ばかりの絶望な状況の中、先代の魔道師団長が、ある予言を残した。

『私の死後、グランディールに救世主が生まれるだろう。初代国王陛下に匹敵する魔力を持つ救世主は、世界を救う。だが気をつけよ、その力が奴らの手に渡れば、我らに未来はない』

高名な預言者だった魔道師団長は、全ての力を振り絞るようにその言葉を残した後、息絶えた。そして彼の急逝からわずか一カ月後、予言通り強力な魔力を持つ赤ん坊が生まれる。その赤ん坊——チェンバレン公爵の長女フェリシアは、王宮に引き取られ、大切に育てられた。

「それが、こんな木偶の坊だとはな……」

ひとまず、斉藤優花と名乗るフェリシアを王宮の医務室に運んだキアランは、眠る娘の顔を見下ろしてため息をついた。

王宮で大切に育てられたにもかかわらず、フェリシアは感情を持たなかった。朝になれば目を覚まし、食事をし、勉強を教えれば理解はしている様子の彼女だが、幼い頃から遊んだり、趣味に興じたりすることはなかった。笑わず、泣かず、まるで魂だけが抜けたようにいつも無表情で過ごす彼女を、人々は人形姫と皮肉った。また、フェリシアの強い魔力に当てられた力の弱い者は体調を崩すこともあったため、今では一日の大半を結界の施された塔に閉じ込められるようにして彼女は暮らしている。

「木偶の坊とは酷い言い草だな。フェリシアは、自分で物を考えて話している様子だったのだろう？」

背後からかけられた声に、キアランは立ち上がった。振り返ると、肩まで伸ばした金の髪に琥珀色の瞳の、豪華な夜着を纏った男が一人で医務室の戸口に立っていた。

「陛下！このような時間に、このようなところへ、共もつけずに出歩かれては危険です！」

国王オズワルドは、大声を出すキアランに微笑みかけ、そつと口に指を当てると、控えていた医術士に簡単な挨拶をして部屋に入って

きた。

「非公式の場合だ、兄上で良いといつも言っているだろう、キアラン。大丈夫だよ、私も自分の立場はわきまえている」

琥珀色の瞳以外、あまり弟には似ていない柔和な美貌に笑い皺を刻み、オズワルドはキアランの傍らに立った。

「何より、私の愛しいフェリシアの一大事だと言っじゃないか。執務中だろうと就寝中だろうと駆けつけるに決まっているさ」

「おやめください……」

キアランは短い黒髪をがしと掻き毟った。オズワルドは、フェリシアを予言の救世主として以上に、大切にしている。敬愛する兄王が、予言と魔力ばかりで実際には何の役にも立たない娘に傾倒する様子は、キアランにとってひたすら不愉快だった。

（いや、兄上は悪くない。悪いのは、抜け殻の分際で兄上を誑かすこの女だ）

子供の頃から積もり積もった鬱憤で、キアランのフェリシアに対する心証は最悪である。もっとも、今宵ついに彼女へ剣を向けるに至ったのは、それだけが原因ではないのだが。

「部屋に戻ってお休みください、と申し上げても無駄でしょうから、簡潔に報告させていただきます」

キアランは諦めて、オズワルドに塔で起こったことを話し始めた。勿論、自分がフェリシアを暗殺しようとしたことは伏せておく。

「なるほど、今のフェリシアは異世界人だと名乗っているのか」

説明を聞いたオズワルドは、愉快そうにくつくつと笑う。

「面白がらないで下さい、兄上。そんなもの、使命を果たしたくないが為の出任せに決まっています。何処まで無責任な女だ」

嫌悪と侮蔑を込めて娘を見下ろすキアランを、オズワルドは咎めた。「いくらお前でも、彼女を侮辱するのは許さないよ、キアラン。責任の如何を問うなら、一人の女性に全てを押し付けようと言う我々の方が、よほど無責任なのだから。ねえ、シャロン先生？」

オズワルドが話を振ったのは、部屋の隅で試験薬を解析している中

年の女医だった。夜中にもかかわらず皺一つない白衣を着た医術士のシャロンは、フェリシアの主治医である。

「さて。そもそも、フェリシア様が異世界人、というのは案外正しいかもしれませんよ」

試験薬から視線を上げて、中年医師は人の悪い笑みを浮かべる。

「どういうことだ？」

キアランの剣呑な眼差しに、シャロンは怖い怖いと口先だけで首をすくめた。

「ご存知の通り、フェリシア様は人形と揶揄されるほど感情の欠落された方ですから。体調管理はもとより、精神面の診断も定期的に行っております。胡散臭い言い方をすれば、魂の状態を調べるのです。姫君は、魂が空っぽの状態でした」

「その話は聞き飽きた。フェリシアは精神疾患を抱えているのではなく、魂そのものがない、とかいう怪しげな話だろう？」

「それが、今のフェリシア様には魂があるのですよ。しかも、召還術を行った際に現れる異世界の残滓、この世界には存在しない魔力の名残を帯びた魂です。その影響か、フェリシア様の莫大な魔力も、常人が傍に寄っても耐えられる程度には抑えられている」

シャロンは新たに手帳を捲り、複雑な計算式を書き付けながら続けた。

「異世界は、百年ほど前ウルリク魔法共和国の空間術学者がその存在を唱えて以来何度も賛否が分かれてきた議題ではありますが、簡単な召還術は我が国でも成功しており、信憑性は近年高まりつつあります。同時並行的に存在するどこかの世界に住んでいた、『サイトー・ユウカ』さんの魂が、何らかの原因でこちらの世界に飛ばされ、フェリシア様の体に宿ったのだとしたら。ありえない話ではありません」

「だが、シャロン。フェリシアはグランディールの標準語を話したのだぞ。この娘の中身が本当に異世界人ならば、こちらの世界の言語を理解すると思うか？」

キアランの指摘に、シャロンは初めて少し困った顔をした。

「確かにその点は、私にもわかりません。あるいは、彼女の魂がこちらに来るときに、グラノーヴァ様に授かったとか」

最後は冗談めかして付け加えたシャロンに、キアランは呆れた眼差しを向けた。明らかに信用していない様子である。一方それまで黙って話を聞いていたオズワルドは、神妙な顔つきで頷いた。

「そうか。フェリシアの魂は、フェリシアのものではない可能性もあるのだな」

「陛下といえど、ご不安ですか？」

「いいや」

シャロンの問いに、オズワルドはきつぱりと首を横に振った。

「フェリシアの人格が異世界人であろうとなかろうと、彼女は私の大切な人だ。シャロン、引き続き看病を頼む。フェリシアが目覚ましたらすぐに呼んでくれ」

「御意」

かしこまるシャロンには目もくれず、世界で一番大切な宝物でも触るかのように、優しくフェリシアの髪や頬を撫でるオズワルド。その様子を不機嫌そうな顔で眺めていたキアランは、さっと立ち上がり、恭しく手を差し出した。

「もうよろしいでしょう、兄上。部屋までお送りいたします」

「そうだな、そろそろ休まなければ、明日の政務にも差しさわりが出るか。名残惜しいが」

オズワルドはため息混じりにキアランの手をとり、重い腰を上げた。そして、二人の兄弟は部屋を出て行く。

真夜中を過ぎた廊下は暗く静寂に満ちており、二人が進む硬質な足音だけが響いていた。キアランが携帯用の魔法灯に灯した光は、先程使っていた蠟燭よりは明るい、廊下の先は闇に包まれている。

「……」

「……」

二人ともなんとなく黙って歩いていたが、王族の居室がある棟に差し掛かって、オズワルドが何気なく口を開いた。

「ところでキアラン。フェリシアを嫌って、最近ではめつきり彼女の塔には近づかなかったお前が何故、あの塔にいたのだ？」

その質問に、不覚にもキアランは一瞬足を止めた。先程は上手く話を逸らせたと思っていたが、とんだ思い違いだった。

「それは、塔の見張りが騒いでいたので、仕方なく様子を見に行っただけです」

苦し紛れにまったくの嘘ではない言い訳をすると、オズワルドが背後で笑む気配がした。

「お前は相変わらず嘘が下手だね。まあいい、そういうことにしておいてあげよう」

二人は王の居室の前までやってきて、足を止めた。キアランはゆっくりと兄王の方を振り返る。魔法灯に照らされたオズワルドの笑みは、何故だかいつもより物騒な気配がした。口付けでもするかのように至近距離から顔を覗き込まれ、キアランは背中に冷や汗を浮かべる。

「キアラン、お前は賢い子だ。まさか私の宝を、勝手に壊したりはしないね？」

瞳の笑っていない笑顔の、小さな子供に言い聞かせるような優しくゆっくりとした問いかけに、キアランはぎこちなく頷いた。

「勿論です」

「なら、いいんだ。妙なことを聞いて悪かったね。おやすみ」

そしてキアランの頭を幼い頃のように撫でるオズワルドは、いつもの彼だった。穏やかな笑みを浮かべた彼は、部屋の中に控えた不寝番を呼び出し扉の向こうへと消える。

「……」

キアランは無言で長い息を吐き出し、自室に帰るべく歩き出した。

3 予言（後書き）

ここでようやく世界観を少し出してみました。とりあえず、救世主だと予言されたのに植物人間状態のお嬢様、それに宿っちゃった現代日本人の主人公、デレデレの王様、ツンツンの王様弟、だけわかっていただければ問題ないです。

ここまでの三話が一文で済んでしまったよ……。

4・救世主

翌朝優花が目を覚ますと、夜中にいた豪華な部屋と違った内装に目を瞬いた。まだズキズキと痛む頭痛を押して起き上がると、つんとした薬の香りが鼻をつく。すると、奥の机で書き物をしていたシヤロンがこちらを向いた。

「おや、目が覚めましたか？おはようございます、フェリシア様」
女医は挨拶をしつつ立ち上がり、自分の下で働く若い医術士のたちの一人に小声で指示をする。指示を受けた医術士は、頷いて医務室を出て行った。

「あの、私……」

「待って、お話は後にしましょう」

戸惑った様子で言葉を紡ごうとする優花を制し、シヤロンは傍らの水差しからグラスに中身を注いだ。そして、グラスを優花の前に差し出す。

「まずはこれでも飲んで、落ち着いてください」

「ありがとうございます……」

穏やかながら有無を言わずグラスを渡され、優花はそつと中身をのぞきこんだ。中に満たされているのは淡い黄緑色の液体だ。思い切って口をつけると、さわやかな甘みと薄荷に似たスッキリとした後味が残る。水差しは常温で置かれ、氷の入っているような音もしなかったのに、程よく冷えていた。

（美味しい……アイスハーブティだ）

優花はこくこくとグラスの中身を飲み干し、ほうと一息ついた。その様子を見たシヤロンが笑みを深める。

「リラックスできましたか？では、お話を聞きましょうか」

シヤロンが切り出したときだった。医務室の出入り口の向こうから、入室を求める声がした。

「早かったですね。入ってもよろしいですよ」

シャロンが許可を出すと、先程出て行った若い医術士に先導されたオズワルドがやってきた。オズワルドはシャロンへの挨拶もそこそこに、真っ直ぐ優花の元へ歩いてきて、ベッドの上に身を乗り出し満面の笑みを浮かべた。

「フェリシア！よかった、目が覚めたのだね。どこか具合の悪いところはないかい？」

「だ、大丈夫です」

美形の青年に抱きつかんばかりの勢いで迫られ、優花は後ろに身を引きつつ頷いた。実際、先程の頭痛はシャロンから貰ったハーブティとオズワルドの勢いによって吹き飛んでいる。

「ああ、すまない。今の君はフェリシアではなく、サイトー・ユウカ殿、だったね」

困惑気味の優花に気づいたオズワルドは、身を引くと胸に手を当てて一礼する。

「信じて、もらえるんですか？」

この世界で目覚めてから、初めてまともに名前を呼ばれた優花は目を見張った。異世界人だと言った瞬間、まともに取り合ってもらえないどころか殺されそうになったことは覚えている。驚く彼女を安心させるように、オズワルドはにこりと微笑んだ。

「もちろん、君を信じるよ。君が嘘をついているようには見えないからね。それに、君の魂が異世界の者である可能性が高いこともわかって……おや？」

気がつけば、優花はボロボロと涙を零していた。自分の言うことを全面肯定され、緊張の糸が切れたらしい。

「泣かないでくれ、君が泣いていると私も悲しいよ」

「ご、ごめんなさい、私、なんだか安心しちゃったみたいで……」
何とか涙を止めようと目を擦る優花の頭に、ぽんとオズワルドの暖かな手が乗せられた。女性のように優美な顔立ちから想像していたよりは大きな手が、滑らかに動く。

「大丈夫、泣かなくてもいい。君は何も悪くないのだから」

「あ、ありがとうございます」

半ば抱きかかえられるように頭を撫でられ、今更恥ずかしくなってきた優花は身じろいだ。亡くなった祖父と父親、「いいこいいこ」を覚えた幼稚園児の弟をカウントから外せば、男の人に撫でられるなど初めてだ。そんな彼女の胸のうちを知ってか知らずか、オズワルドは優花を放す様子もない。自分を慰めてくれている相手を邪険にすることも躊躇われ、優花が固まっていると、廊下からバタバタと足音が響いてきた。次いで、医務室に二人目の来客が現れる。

「失礼する！」

それだけ告げて勢いよく扉を開けたのは、キアランだった。

「ここは医務室ですよ、静かになさってください」

シャロンの注意に等閑な謝罪を返し、キアランはずかずかと優花たちの元まで歩み寄った。

（この人……！）

それが昨夜二度に渡って自分に剣を向けた相手だと思い当たり、優花はオズワルドにその事を訴えかけようとした。キアランはそんな彼女からオズワルドを引き剥がすように間に割って入り、小声で呟いた。

「余計なことを話せば、殺す」

「！」

ひやりとした感触に視線を横へ移すと、優花の首筋にナイフが当てられていた。キアランの体で死角になっていているらしく、オズワルドやシャロンが咎め立てする気配もない。必死で悲鳴を飲み込んだ優花は恐怖に青ざめたが、不意に先程オズワルドから言われた言葉を思い出した。

——君は何も悪くはない。

（そうよ、私は何も悪いことなんてしてない）

自分を信じると言ってくれた人の言葉を、信じようと思った。

（なのに、なんでこんな奴に殺されなきゃならないの）

同時に、恐怖を怒りが凌駕した。傲岸不遜な目の前の男を負けじと

睨み返すと、キアランはフンと鼻を鳴らしてナイフを引っ込める。
そして、オズワルドの方を振り向いた。

「おはようございます、兄上。この女に、何もされませんでしたか？」

「おはよう、キアラン。お前も大げさだね、少し彼女を宥めていた
だけだろう。私の至福の時を奪わないでくれ」

「戯れはおやめください。御身に何かあつてからでは遅いのですよ？」

小言じみた注意を繰り返す弟を脇に退けて、オズワルドは優花へさわやかな笑みを向ける。

「弟が失礼したね、サイトー・ユウカ殿。そうだ、私たちはそもそも、自己紹介もしていないじゃないか。丁度いい、お前も挨拶していきなさい、キアラン」

「俺は兄上のご様子を見に来ただけですよ！？何故」

いいから、と引っ張り出してきた椅子に無理矢理弟を座らせようとするオズワルドに、優花はおずおずと声をかけた。

「あ、あのっ……多分、それには及ばないと思います」

「どうして？キアランはともかく、私のことは知っていて欲しいな」

「それは、その、私、皆さんの名前がわかるんです。貴方のことも知って、いえ存じ上げています、オズワルド陛下。女医さんは、シヤロン先生ですよね？」

優花の口から飛び出した王と主治医の名前に、オズワルドは目を見開き、シヤロンは片眉を上げて驚きを示し、キアランは思いつきり顔を顰めた。

「どういうことだ。お前はやはり、フェリシアなのか？」

尋問口調で問い質すキアランをむっとした表情で一瞥し、優花は主にオズワルドとシヤロンに向けて話し始めた。

「ええっと、私は斉藤優花、で間違いないんですけど……フェリシアさん、ですか？彼女の記憶も、あるみたいなんです」

本人が一番信じられないと言う顔をして、優花は告げた。

「どういうことか、話していただけるかしら、サイトー・ユウカさん」

「斉藤か優花でいいです。斉藤が家名で優花が個人名なんですけど、お好きな方で呼んでもらえれば」

シャロンにそう返し、優花は推測を交えて自分の身に起きたことを話し始めた。

優花がグランデールで目を覚ます以前。日本での最後の記憶は、トラックのヘッドライトだった。大学からの帰り道、雨の降る夕暮れの歩道をぼんやりと歩いて帰宅していた優花の背後から、突然運転を誤った大型トラックが突っ込んできたのだ。

（即死、だったんだろうなあ、あれは）

振り返った瞬間衝撃を受けて、目の前が真っ暗になった。その後のことは覚えていない。無理に思い出そうとすると、恐怖で体が震えるのだと話せば、オズワルドもシャロンも無理に聞こうとはしなかった。キアランだけは不満げだったが。

「ちなみにトラックっていうのは、物を運ぶための乗り物で……大きくて速い馬車のようなものです」

物凄くアバウトな説明だなあと自分で呆れる優花だったが、オズワルドの表情は沈痛だ。優花は罪悪感に駆られつつも、気を取り直して話を続ける。

「あの時たぶん死んでいたはずの私が、どうやってこの世界に来て、フェリシアさんの体に入ることになったのかは、私にもわかりません。私の世界の天使や神様に面会したわけでも、こちらの世界のグラノーヴァ様にスカウトされた覚えもないですから。それで、目が覚めたら……」

キアランと目が合う。首筋に、冷たいナイフの感触がよみがえった。

「あの騒ぎだったんです」

キアランの暴拳は許しがたいとはいえ、王弟殿下に二度も殺されそうになりましたとは言えず、適当に言葉を濁す。

「その時点では、フェリシアさんの記憶なんてなかったんですけど。こちらの言葉を話していたということは、無意識にその記憶を使っていたんでしょうね」

今の優花は、グランディールの標準語を理解できるようになっていた。日本語を話すように流暢にグランディール標準語を話すことができるが、一つ一つの音は日本語とは全く違う。

（英語でもここまで流暢には喋れないのになあ）

異世界の言葉をまるで母国語のように話す自分に不気味さを感じないでもなかったが、今後の生活を左右するであろう相手と意思の疎通ができるのはありがたい。

「それで、何で私、こつちの世界の言葉が話せるんだろう、って疑問に思った瞬間に、フェリシアさんが知っている情報が一気に雪崩れ込んできて。知恵熱出して倒れました」

「知恵熱だったのか、あれは」

「多分。その節はお世話になりました、王弟殿下」

キアランのツツコミに棒読みで礼を返しながら、優花は小首を傾げた。

（そういえばあの時はすっかり目の前の相手に助けを求めてしまったけど、この人、私の事殺そうとしてたのよね。私があの子じゃなくて医務室にいるってことは、助けてくれたのかしら）

実はいい人なんだろうか、と思いキアランの方を窺うと、不機嫌そうな顔で睨まれた。

（まさかね）

心の中で舌を出し返し、思い直す。

「そういうわけなので、私が体をお借りしているフェリシアさんが予言の救世主様だとか、それなのに私が入るまでは動く抜け殻だったとか、大体わかってるつもりです」

「それが全部本当なら、随分と難儀な死後体験ね」

同情すると言いたげなシャロンに、優花はこくりと頷いた。

「はい。本当、とんでもないところに迷い込んでしまったというか

……私、どうしたらいいんでしょう？」

「そんなもの、決まっている」

オズワルドの方を見上げると、彼が答えるより早くキアランが口を出した。

「フェリシア・チェンバレンに宿っている以上、お前はこの国の救世主だ。グランディール王国と国王に尽くし、戦え。お前にそれ以外の価値などない」

斬って捨てるような言い方に、シャロンが青ざめた。オズワルドにいたっては渋面だ。

「キアラン殿下、それではあまりにも……たとえ同じことをお願いするにしても、もっと丁寧になさった方が良いのでは」

冷静なシャロンには珍しく、言葉選びに迷いながら進言する横で、優花がこくりと頷いた。

「わかりました」

静かな声に、キアランすらも驚きを露にした。不覚にも瞠目した彼は、目を見開いたまま優花に詰め寄る。

「妙に物分りがいいが、何を企んでいる、異世界人。お前が本当に異世界人ならば、元の世界に帰せだとか、自分にかかわりのない戦いに巻き込むとか、もっと抵抗するのが普通じゃないのか!？」

「それがわかっていて、どうしてあんな言い方するんですか、王弟殿下は。まあ、わかりやすくてよかったですけど」

ため息混じりに呟く優花。

「多分、数ヶ月前の私なら、元の世界に帰してって駄々を捏ねたと思います。でも、フェリシアさんの記憶曰く、この世界に魂だけ別の世界に飛ばす魔法なんて無いでしょう?」

フェリシアは予言の救世主として、高度な魔法の授業を受けていた。その知識は、そのまま優花に受け継がれている。

「万が一戻ることができても日本での私は死んでいるだろうし、生きていたとしても」

言いかけて、優花ははっと口をつぐんだ。

「とにかく、元の世界に戻れない以上、こつちの世界で頑張ってみようかなと思っただけです。強いて企んでいることと言えば、衣食住の保障だけです。異世界人と動く植物人間が合体しただけの私が、一人で放り出されて生きていくのは難しいと思うので。そのかわり、私にできることがあるならやります」

本音を言えば、戦争に巻き込まれ魔物と戦うのはやはり恐ろしい。しかし働かざるもの食うべからず、と教育されてきた優花にとってこのままニートを続けるのも気が引けた。

「いいのかい、ユウカ？その道を選ぶなら、君はこの先フェリシアとして生きることになる。もう誰も、君をユウカとは呼んでくれないよ？」

気遣わしそうなオズワルドの声に、優花は笑みを返す。この細やかで心優しい王様の役に立ちたいと思った。

「大丈夫です。フェリシアさんの体を借りている以上、いつまでも優花でいられないのはわかっています。それとも、私の力が必要ありませんか？元の世界にいた頃は護身の体術を習っていたし、フェリシアさんの記憶を使えば、魔法も使えると思うんですけど」

優花の申し出に、オズワルドはとんでもないと首を振る。
「予言の救世主殿の助力が得られるなら、国王としてはとても心強いよ。フェリシア・チェンバレン、私とこの国を救ってはくれまいか？」

差し出されたオズワルドの手を、握手の形で優花は握り返す。

「私でお力なれるのなら、よろこんで」

そうして優花は、フェリシアになった。

4・救世主（後書き）

これまで主人公名「優花」と「フェリシア」が混在していましたが、今話の主人公の選択を受けて、次回から基本的に地の文は「フェリシア」の方で統一していきます。異世界で救世主として生きる選択に、覚悟が伴っているかはまた別問題ですが。

5・侍女と父

優花の魂が宿り、魔力の自然放出を抑えることができるようになったフェリシアには、王族棟の隅に個室が与えられた。メインとなるリビングルームに、寝室、風呂場、トイレ、使用人が控える小部屋までが一続きになった、華麗な内装や調度品の部屋である。高級ホテルのような部屋を見たフェリシアは、今まで住んでいた塔でも十分すぎるほどだとオズワルドに訴えたが、食事や洗濯物の運搬など、世話係たちもこちらの方が楽だからと押し切られてしまった。

「ここは王族棟の中で一番質素な部屋だよ。今城に住んでいる王族は私とキアランだけなのだから、本当はその次に豪華な部屋を君に割り当てたのだけれど」

フェリシアの様子見に訪れたオズワルドが残念そうにそう言うと、兄に付き従ってやってきたキアランがとんでもないという顔をする。「チェンバレン家は名家であるとはいえ、家臣を王族棟に住まわせるなど俺は反対ですよ！それとも兄上はこの女を王妃にでもするおつもりですか？」

「もちろん、フェリシアさえ良ければ、それが一番いいね」

のほほんと微笑みながら返すオズワルドと、兄を見て蒼白になるキアランの図に、フェリシアは噴き出した。

「オズワルド陛下、そんな冗談を言ったら、キアラン殿下がまた癩癩を起こしますよ」

すると今度はオズワルドが笑顔のまま固まった。どうしたのだろうか。と小首を傾げるフェリシアと、照れることすらされず落ち込む兄王とを見比べたキアランは、複雑な表情で失礼すると呟いて、呆然としたままの兄を連れ部屋を出て行った。

「なんだったんだろう、あの二人。仮にも王様とその弟なら色々お仕事も忙しいだろうにね」

フェリシアが言いながら振り返った先には、メイド服を纏った赤毛

の少女が所在なさげに立っていた。フェリシアの生家であるチェンバレン家から派遣された唯一の専属メイドだが、主と目が合うと脅えたような表情になる。

「あのね、メリッサ。中身が異世界人といっても取って食うわけじゃないし、そんなに怖がらないで欲しいな」

「は、はい、お嬢様」

メイドの少女メリッサは、小さな声で頷いた。メリッサはフェリシアより三つ年下、男爵家出身の娘である。まだ年若い低級貴族の彼女が、大貴族チェンバレン家の娘の専属メイドに抜擢された理由は、その体質にある。メリッサは強い魔力に耐性があり、抜け殻だったフェリシアの无尽蔵に流れ出す魔力にも体調を崩すことがなかったのだ。しかしメリッサ本人の魔力量や質は大多数の一般人と変わらず、フェリシアに対してもきこちない。

（せっかく私の正体を知っているんだし、仲良くなりたいたいんだけどな）

フェリシアの魂が異世界人であることは、現在ごく一部にしか知らされていない極秘事項である。国王兄弟とシャロンの他は、専属メイドのメリッサと、フェリシアの父親チェンバレン公爵のみである。フェリシアが予言の救世主として生きる道を選んだ今日は、チェンバレン公爵との対面の日でもあった。

（フェリシアのお父様、か。どんな人なんだろうな。優しい人のような気はするんだけど）

この世界で生きてきたフェリシアには、無論両親も居る。体が弱かったという母親は既に他界しているが、父親とは何度も面会した記憶があった。しかし抜け殻だった頃のフェリシアは情緒面の記憶が酷く曖昧だ。例えば父親の名前や職業といった情報は明確にわかるが、実際に会ったときの話の内容や相手の表情は霞がかかったようにぼんやりとしている。

（名前はベネディクト、年は六十五歳、職業はグランデール王国有数の大貴族チェンバレン公爵家の当主で、宰相。日本で言う総理

大臣。とつつきやすい要素が何処にも見当たらない……なんでそんな人の娘なんてやることになっちゃったんだか)

フェリシアは肩を落として鏡台の前に立った。全身が映る大きな鏡には、二十歳前後の娘の姿がある。

(でも、一番不思議なのはこれだよね……)

フェリシアはそつと鏡に触れた。こげ茶色の癖のある長い髪に、黒い瞳、平均よりは可愛らしいが、絶世の美女ではない、ヨーロッパ風の顔立ちの娘。それは、気味が悪いほど『斉藤優花』そっくりの姿だった。

(おばあちゃんがアメリカ人だから、純日本人の顔じゃなくても違和感はないけど。ここまで前の世界と同じ顔だと怖い気がする)

初めて鏡を見たときは、体ごと異世界に飛んできたのかと仰天したものだ。フェリシアが日本で斉藤優花として生きていた頃セミロングだった髪は腰まであり、護身に習っていた空手の稽古でできた膝の傷跡も無い。すぐによく似た別人だと気づきはしたが、気を抜けば斉藤優花のままだと錯覚しそうになる。

「あの、お嬢様。お召し替えはいかがいたしましたでしょうか？」

そんなフェリシアの思考を破ったのは、メリッサだった。我に返ったフェリシアは、困惑した表情で振り返る。

「やっぱり、この服のままじゃダメかな？」

フェリシアは身に着けている上質な生地ワンピースを摘み上げた。目覚めたときに着ていた寝巻きや、今着ているような普段着はフェリシア一人でも着替えが可能なシンプルな作りだ。しかし、ドレスとなるとさすがにそうもいかない。

「と、当然でございます！旦那様は、王族の方の次に高貴な宰相閣下でいらっしゃるのですから」

珍しく語気の強いメリッサに気圧されて、フェリシアは頷いた。

(ついさっきこの格好で王様兄弟に会ったわけだけど、それはいいのかしら?)

そんな疑問を問いかける間もなく、メリッサは何だか一人で盛り上

がつている。

「旦那様の大事なお嬢さまを、簡素なお召し物のままお引き合わせするわけには参りません！」

そして、衣装棚を開けてドレスの吟味を始める。ふりふりフワフワのウェディングドレスのような物を出されたらどうしよう、とフェリシアは危惧したが、メリッサが候補に選んだのは準正装の比較的シンプルなドレスだった。それでも背中には細かなボタンやリボンがいくつもあしらわれており、一人では着られそうに無い。

「失礼します、お嬢様」

当然のように、メリッサがドレスの着替えを手伝い始めた。

（これは着物の着付けと一緒に、着付け）

現代日本人として、同性とはいえ人に着替えを見られるのは恥ずかしいが、一人で着る訳にもいかない。フェリシアは自分に言い聞かせながら、少しでも恥ずかしさを紛らわせようとメリッサに話しかけた。

「ねえ、メリッサ。メリッサは私のお父様に会ったことがある？どんな人だった？」

「えっ……？」

怪訝そうな顔をするメリッサに、父親の情報は知っていても人柄はわからない旨を説明すると、彼女は納得したように頷いた。俯いた頬は、心なしか赤い。

「旦那様には、お嬢様のメイドとして採用されたときに、一度だけお会いしたことがあります。没落寸前で明日にも身売るしかないと考えていた私に働き口を下さった、大恩人です。それに、お人柄も大変優しい方で」

そう語る素朴そうな少女の顔は穏やかで、メイドが主人の娘に雇い主の陰口を叩く筈がないことを差し引いても、信頼できる言葉だとフェリシアは感じた。初めて父親に対して安心材料ができたところで着付けは終わり、鏡台の前に移動して髪を結い上げる。

「こんなに長い髪、一人で大変じゃない？」

「いいえ、大丈夫です」

言葉通り、メリッサは手際よくフェリシアの髪にブラシを当てて長い髪を編み上げていた。フェリシアとしては邪魔な髪を切ってしまいたいのだが、キアランの前でそれを言うとは蔑む目つきで見下された。曰く、髪の短い女は罪人くらいのものだという。

「お前には短い髪が似合いかもしれないがな」

などと言っていた台詞まで思い出し、自然に表情が険しくなるフェリシア。彼女を鏡越しに見たメリッサが脅えているのに気づくと、慌てて表情を正した。

「ご、ごめんね、怖がらせちゃって。あの馬鹿王弟のことを思い出したらつい」

「ば、ばか……？」

髪を結う手を止めて目を丸くするメリッサに、フェリシアはいけないと口を手で押さえた。

「いくらなんでも王弟殿下に馬鹿は無いか。内緒にしててね？」

お願い、と念を押すと、メリッサは初めて口元に笑みらしきものを浮かべてこくんとうなずいた。

身支度も無事に終わると、程なくして控えめなノックの音が響いた。まずはメリッサが対応に出ると、扉の前に立っていたのは執事風の壮年の男だった。

「ベネディクト・チェンバレン公爵の先触れに参りました」

「どうぞ、こちらへ。お嬢様がお待ちでございます」

優雅な物腰で挨拶する執事に緊張気味で返し、メリッサは二人の男を部屋の中へ案内する。一人は先程の執事。その後に続くのは、きらびやかな装束を纏った初老の男——チェンバレン公爵ベネディクトだ。フェリシアは座っていたソファから立ち上がり、礼をとった。

（格好いいおじいちゃんだあ……）

若かりし頃はさぞかし女性に人気だっただろうと思わせる整った顔

立ちに、派手な衣装を下品に見せない気品のある佇まい。現国王であるオズワルドさえ敵わない威厳と風格を漂わせたベネディクトは、しかしフェリシアの姿を見ると相好を崩した。すると、一気に親しみのある雰囲気になる。

「おお、私の可愛いフェリシア。元気にしておったか？」

「は、はい。あの、はじめましてというか、お久しぶりです、と言
うか……」

どう挨拶をしたものか今更になって迷うフェリシアがオロオロして
いるうちに、ベネディクトは足早に娘へ歩み寄り、その体を抱きし
めた。

「ふえっ!？」

「ああ、本当に、この娘が、フェリシアが自ら言葉を発するとは…
…神よ、グラノーヴァよ、感謝いたします」

フェリシアは眉根を寄せた。突然抱きしめられたことに嫌悪を覚え
たのではない。驚きはしたが、いやらしさが一切感じられない抱擁
は、ベネディクトがどれだけ娘を思っているかよく伝わってきた。
だからこそ、本当は彼の娘ではないことが申し訳ない。するとフェ
リシアの様子に気づいたのか、ベネディクトが腕を解き、執事を下
がらせた。

「いや、驚かせてすまなかった。お嬢さんの魂が、異世界の者であ
る事は聞き及んでいるよ」

滑らかな動きでフェリシアをテーブルまでエスコートし、椅子を引
く。今日の面会では、共に昼食をとる事も含まれていた。主たちの
様子を見た執事が料理を申し付けに部屋を退出し、メリッサも慌て
てお茶の用意を始める。フェリシアの正体を知るものだけになった
部屋で、口火を切ったのはベネディクトだった。

「まずはサイトー・ユウカ殿、貴女に最上級の感謝を捧げたい」

フェリシアの向かいに座ったベネディクトは、穏やかな笑みを浮か
べて感謝の言葉を告げた。

「そ、そんな、感謝だなんて。私はただ、とりあえずの生活を確保

したくてフェリシアさんとして生きようと思っただけです……よくも娘の人生をのつとたな、って、怒られても仕方がないのに」

「怒るなど、とんでもない。一生自意識が芽生えない可能性が高いとシャロンから言われ続けて、諦めかけていたのだよ。そのフェリシアが自分の意思で動いて、話しているところを見られただけで、親としては感無量だ。それにフェリシアは並みの娘ではない。生まれながら救世主としてのお役目を背負わされた子だというのに、よくぞこんな重大な決心をしてくれた。ありがとう」

感極まった表情で語るベネディクトに、フェリシアは居心地悪く身じろぎした。やれるだけのことをするつもりはあるが、そこまで重い覚悟の元選択した道でもないことに、罪悪感が募っていく。メリッサの用意してくれた紅茶を一口飲み、深呼吸して切り出した。

「あの、私、まだ実感ができていないこと、たくさんあると思います。魔物との戦いや、人間同士の戦争なんて、前の世界でも似たようなことはあったけれど、私自身の生活とは無縁だったから。どこかで投げ出してしまうかもしれません。それでも、ここにいて、いいですか……？」

最後の方は消え入りそうな声で、フェリシアは尋ねた。するとベネディクトは、笑顔で頷く。

「勿論だ、そもそもこんなか弱い娘に世界を救えと言う予言の方がおかしい。おかげで可愛い娘を王城に取られて、面会もままならん万が一救世主としてのお役目を果たせなくても、フェリシアはチェンバレン公爵家のただ一人の跡継ぎ、いつでも帰ってきなさい。国王や重鎮がなんと言おうと、私が黙らせよう」

「ありがとうございます、公爵様」

力強い確約の言葉に、フェリシアは泣きたいような、笑いたいような気持ちで頭を下げた。すると、初めてベネディクトが表情を曇らせる。

「公爵様、か。ユウ力殿にも、元の世界にご両親が居るのは承知の上で、こんなことを頼むのも気が引けるのだが……どうか、私を父

とは呼んでくれまいか？卑怯な言い方になるが、私は君を娘のフェリシアとして扱っているつもりだよ」

思いがけない頼みに、フェリシアは一瞬躊躇った。

「ありがとうございます。お父様とお呼びするだけなら、できると思います。でも、私の父は、やっぱり……」

『斉藤優花』の父親はアメリカ人と日本人のハーフではあったが、西洋風とはいえ無骨な顔立ちだった父と、気品溢れるベネディクトは似てもつかない。優花にとってはやはり他人でしかない相手を、いきなり父親とは思えない。

「それでも構わんよ。ユウ力殿から、本当の父上を取り上げてしまうつもりは無い。父と呼んで欲しいのは、私の我侭だ。ただ、いつか私をこの国での父と思ってくれる日が来れば、存外の幸せでもある」

「では……お父様」

父と呼ばれ本当に幸せそうに笑うベネディクトを見て、フェリシアも自然と笑みがこぼれた。命をかけるほどの覚悟はまだできないが、これで恩を返したい一がまた一人増えた。

その後、運ばれてきた昼食を親子二人で口に運びながら、和やかに会食は進んだ。グランディールでのテーブルマナーは大貴族の令嬢として作法を叩き込まれているフェリシアの記憶に従っていればそつなくこなすことができる。何より、一国の宰相でもあるベネディクトの話術は多岐に渡り、会話も弾んだ。

（礼儀作法だけじゃなくて、生活習慣までわかるっていうのは地味にありがたいよねえ……トイレの使い方なんて、メリッサにでも聞きづらいし）

ちなみにグランディールのトイレは魔法を使った水洗式である。そんな、食事中には相応しくない感慨を抱きながらも、楽しい食事の時間はあっという間に終わった。

「ふむ、そろそろ時間か」

懐中時計を取り出したベネディクトが、不機嫌そうな顔になる。

「お時間があれば、また来てください、お父様」

しかしフェリシアがそう言うと、たちまち笑顔に戻った。

「勿論だとも。また会いに来るまで、元気でいなさい」

「はい」

「メリッサも、娘を頼んだぞ」

思いがけず声をかけられたメリッサは、大きな目を更に丸く見開いて飛び上がった。

「は、はい！お嬢様のことはお任せください、旦那様！」

そして、真っ赤になって背筋を伸ばす。

（赤面症なのかしら……小動物みたいで可愛いなあ）

フェリシアがほっこりとした気分で隣を窺い見れば、ベネディクトも似たような表情を浮かべている。親子二人で和んでいると、無粋な咳払いが響いた。

「旦那様、お時間も押しておりますので」

彼とてこの場で声をかけるのは不本意なのであるう、恐縮と言わんばかりの表情で告げた執事に、ベネディクトはため息混じりに頷いた。

「わかつている。では、お父様は仕事に戻るよ、フェリシア」

「はい。お父様もお体に気をつけて」

フェリシアの一礼に遅れて、メリッサもぺこりと頭を下げた。

「行つてらっしゃいませ、旦那様」

二人の声を背に、ベネディクトは名残惜しげに娘の部屋を後にした。

5・侍女と父（後書き）

こういう系統の話で大体障害になる言葉や文化の壁は、フェリシアの場合ほぼ無問題です。お風呂も一人で入れます。作者と主人公は楽ですが、異世界トリップ物の醍醐味は薄れてしまったかもしれない。とはいえ、フェリシアが知らないことは優花にもわかりません。人形姫フェリシアはほぼ塔の中で引きこもり生活だったので、城内のこともよくわかってない主人公です。と言うわけで次回はお城を探検します。

6・城内探索

翌朝、寝巻きのネグリジエから普段使いのワンピースに着替えたフェリシアは、リビングルームへ移動した。忙しく朝食の用意をするメリッサの仕事が落ち着くのを待つて、話しかける。

「おはよう、メリッサ。今日の私の予定って、何か言われてる？」

「おはようございます、お嬢様。今のところ、本日は何もございません。自由時間で大丈夫だと思います。まずはお食事をどうぞ」

まだ緊張気味ながら、初日に比べれば打ち解けた様子でメリッサも返事をした。

「ありがとう。メリッサも食べる？」

昨夜の夕飯時はメリッサが忙しそうで声をかけそびれていた。多分断られるだろうと思いつつ誘うと、意外にもメリッサはこくりと頷いた。

「はい、お毒見でございますね」

「お、お毒見？」

「専任の方がいらっしゃるので、大丈夫とは思うのですが」

そう言つてカトラリーを手に取ったメリッサを、フェリシアは慌てて押し留めた。

「ま、待つて、私、そんなつもりじゃなかったの。そもそも、毒殺の危険性なんて、考えもしていなかったし」

「……？」

きょとんとつぶらな瞳で見上げられ、フェリシアはため息をついた。

「食べる？って聞いたのは、一緒に食事をしないか、ってこと」

「そ、そんな、メイドが主人と食事の席を共にするなんて、畏れ多いことでございます」

ようやくフェリシアの意図を理解したメリッサは、とたんに青くなつて頭を振った。

「それにお嬢様は、世界を救つと予言された方。お命を狙う勢力は

いくらでもあります」

「うん……それは私が軽率だった。ごめん」

フェリシアには専属の護衛こそいないが、今も部屋の前ではオズワルドに命じられた兵士が二人、扉を守っている。それが誰のためなのか、実感できていないとはいえ、考えもしなかったなどと軽々しく口にするべきではない。

「メイドと一緒に食事しようとしたり、謝ってくださったり……

お嬢様は、不思議な方ですね」

ぼつりとメリッサが呟いた言葉に、今度はフェリシアが小首を傾げる番だった。

「そう？昨日もそうだけど、お仕事している人の横で休んだり食べたりって、何か落ち着かなくて」

「控えの間に居りましょうか？」

「ううん、そこまで気を使わなくていいよ。何かそっちで別の仕事があるとか、メリッサも休みたいとかだったら別だけど」

「では、寝室のベッドメイキングをしてまいります。何かございましたらお呼びくださいませ」

メリッサが頭を下げて、隣室へと向かう。

（一応お布団は整えてきたんだけど……まあいいか）

あまり人の仕事に五月蠅く口出しするのもまずかろうと、フェリシアは朝食の並ぶ席についた。グランデールの食べ物、どちらかと言えば洋食に近い。今日の朝食はふくらと焼きあがったパンにオムレツ、サラダとチーズだ。使われている野菜の種類や卵、チーズの風味は日本で食べていたものと若干異なるものの、口にするのに抵抗があるほどでは無い。フェリシアの食卓に出されるものはどれも最高級品らしく、口当たりがいいので尚更だ。主食の穀物は麦だが、この世界の麦は米にも似ており、パンやリゾット風の粥にして食べる。

（このパン、米粉パンっぽいなあ。そのまま炊いたら麦ご飯みたいになるのかしら？）

そんな事を考えながら朝食を堪能した後、フェリシアはふと気がついていた。

（どうしよう……暇だ）

抜け殻だった頃は魔法や礼儀作法の授業、中庭の散歩をしていたらしいが、今は特に何かをしるとも言われていない。

「ねえ、メリッサ。お城の中って、勝手に歩き回っていいの？ 問題ないなら、少し部屋の外に出てみたいんだけど」

なにしろ幼い頃から王城で暮らしているといっても、溢れ出る魔力のためほとんど塔から出たことが無いのだ。フェリシアは意外なほど城内の地理に疎かった。ならば観光してこようと、食器を片付けていたメリッサに尋ねる。すると彼女は頷いた。

「はい。お嬢さまがご希望なら、王族棟の内部と中庭は自由に歩いてよいと、陛下の侍従様から言伝がありました。それ以外の場所も、兵士の方には言えば案内してもらえるそうですよ」

「そうなんだ。じゃあ、ちょっと出てくるね。お昼までには戻ってくるよ」

「かしこまりました」

丁寧にお辞儀をするメリッサに見送られて、フェリシアは廊下に出る大扉を開いた。すると扉の両脇で控えていた兵士が彼女を迎え、そのうちの一人が申し出た。

「フェリシア様、陛下から城内を案内するよう仰せつかっているのですが、いかがでしたでしょうか？」

「ありがとうございます、お願いできますか？」

「もちろんですとも。グランデールの救世主様を案内できるなんて、光栄です」

物腰柔らかな女兵士に先導され、フェリシアはまず王族棟から一番近い行政棟へと向かった。国王の執務室や謁見の間、会議場や大広間がある中枢部と、中枢部での決定を処理する市政部に、図書館や医務室などが併設されている。その位置を説明しながら、女兵士は侍従を通して聞いたオズワルドの言葉を告げた。

「図書館は自由に使ってよいとの事です。医務室も、シャロン先生が居られますから、おいでになる機会は多いかと。それ以外の場所には、あまり立ち入らない方がよいでしょう」

「ええと、図書館は一階渡り廊下の奥、医務室は市政部の二階ですよ。王族棟も立派だけど、行政棟も大きいなあ」

フェリシアは威圧的な石造りの建物を見上げ、呟いた。

「それにお城つてもっと煌びやかなイメージだったのに、飾り気も少ないし」

口に出してから失言だったかと言葉を飲み込んだが、案内の兵士は気にした風もなく説明を続けた。

「この城は元々、宮殿ではなく砦ですから。それに外装は無骨ですが、陛下の謁見室や舞踏会も開かれる大広間は大層美しいのですよ？」

「そうなんですか。見られる機会があるといいけれど」

二人は話しながら更に先へ進み、使用人棟へと出た。建物には木造部分が混ざり始め、行政棟周辺までは綺麗に手入れをされていた庭園は木の生い茂る小規模な森のようになっており、この周辺から庶民的な雰囲気になり始める。森の入り口には創生神グラノーヴァを祀る礼拝堂、遠く森の外れには塔が見えた。フェリシアが元々住んでいた塔だ。

「この建物は城に住み込みで働く人々の生活スペースですね。行政棟に近いほど上の者が使っています。それから洗濯場、厨房や家畜小屋もありますよ」

「厨房？王族棟までお料理運ぶの、大変じゃないですか？」

「いいえ、王族棟内部には専用の炊事場がまた別にございますから、大丈夫です」

フェリシアは再度塔の方を仰ぎ見た。確かに王族棟内にあるという厨房から今の私室に食事を運ぶより、使用人棟からあの塔の最上階に運ぶ方が労力は大きい。

（それはそれで、今までの世話係さんの苦勞を思うと何だか申し訳

ないけど)

どちらにしる恐縮するフェリシアだった。

最後に案内されたのは軍事棟だ。訓練場と王国軍部、近衛騎士団の支部、魔道師団から為るその建物は、王城内の他の施設を守るように横に長い造りになっている。

「騎士団だけ、支部なんですね」

「軍と魔道師団は国を守りますが、近衛騎士団は王を守る組織です。から。騎士団の本部と魔道師団の研究室は行政棟にありますよ。他の部署より小さいので、先程の説明からは省かせていただきました」
軍事棟の向こうには、高い城壁がそびえていた。城門をくぐれば城下町が広がっているというが、さすがに今日は城の外まで出るつもりは無い。フェリシアたちは学校の校庭を思わせる訓練場をぐるりと回り、王族棟へと引き返した。

「まだ昼食には時間がございますが、お部屋まで案内いたしますしよ
うか？」

王族棟の玄関ホールまで戻つてくると、兵士は壁にかけられた時計を見て尋ねた。

「王族棟の中は一人で出歩いても大丈夫なんですよね？なら、まだ
ちよつと見て回りたいです」

「そうですね。では、私は失礼します」

「はい。案内ありがとうございます」

礼を言うフェリシアに敬礼を返し、女兵士は颯爽とフェリシアの自室へ戻っていった。その方角が自分の記憶と間違いないことを確かめ、フェリシアはまず目の前の大階段を上り始めた。吹き抜けの階段にはふかふかの赤絨毯が敷かれ、歩き続けた足に優しい。最上階の四階にたどり着くと、左右に長い廊下が続いていた。右へ進めば、先程の女兵士より豪華な鎧を着込んだ騎士が、長槍を掲げて制止して来る。

「フェリシア・チェンバレン様ですね？これより先はオズワルド陛下の私室でございます。ご遠慮くださいませ」

「ごめんなさい、知らなかったんです」

なるほど入ってはいけなところにはちゃんと見張りが立っているのかと納得して、フェリシアは素直に引き下がった。とはいえ、この調子で無駄足を踏むのも面倒である。

「他に入らない方がいいところって、ありますか？キアラン殿下の部屋とか」

聞いてみると、騎士は今来た通路を引き返し、左側に入った突き当たりだと教えてくれた。

「手前の部屋などは、入っても差し支えないかと存じますが……」
「ありがとうございます。でも四階の部屋はまた次の機会に見学させてもらいますね」

わざわざあのいけ好かない王弟に近づくこともあるまいと、フェリシアはさつさと下の階まで引き返した。二・三階はフェリシアが使っているような私室のほか、日当たりのいいテラスや遊技場、音楽室が備えられていた。絢爛豪華な内装を楽しみ、陽だまりに和み、遊び方のわからないゲームの遊戯盤を眺め、ピアノとはまた趣の異なる音を出す鍵盤楽器を叩き、すっかり観光客気分であちらこちらの部屋を覗いて回る。そして、空腹を覚えて自室に戻ろうとし、はたと立ち止まった。

「……ここ、どこ？」

気がつけば、玄関ホールに通じる大階段もわからないほど奥まで迷い込んでいた。

（とにかく一階に降りなきゃ）

自室のある一階に通じる階段を求めて歩き回るが、人っ子一人見当たらない。

（そういえば、今王族棟を使ってるのって、王様兄弟と私だけってオズワルド陛下が言ってたような……だからメイドさんや兵士さんも他のところと比べてずっと少ない……？）

嫌な推測を振り払うように頭を振って、フェリシアは再び歩を進めた。すると、細い通路の奥に幅の狭い階段を発見する。

（使用人用かな？炊事場に出られるかも）

期待を込めて駆け寄り、先の見えない階段を慎重に下る。しかし、下りきるとまた代わり映えのしない廊下が続いていた。

「まあ、一階に降りられただけよしとしよう」

フェリシアは自分に言い聞かせるように呟き、部屋の窓から自分の使っている部屋が見られるかもしれないと、とりあえず手近な扉のドアノブに手をかけた。

「ふえ？」

しかし彼女の視界は豪華な内装の部屋ではなく、黒色に覆われた。否、それはよく見れば黒い布だった。金の縁取りがされた、黒い騎士服。

「……おい、フェリシア・チェンバレン。貴様、ここで何をしている」

同時に、頭上から最も会いたくない人物の声が振ってくる。地獄の底から響くようなドスの聞いた声にゆっくり顔を上げると、そこにはグランディール国王王弟キアランの苛立ちに満ちた顔があった。

「え、と……迷子になりました」

キアランの迫力に気圧されて正直に打ち明けると、右の二の腕に鈍い痛みが走った。続けて、ドンという音と共に背中を衝撃が走る。腕を掴まれて背後の壁に押さえつけられたのだ、と理解した瞬間、耳のすぐ横の壁を殴られた。

「迷っただと？下らない嘘を吐くな、阿波擦れが」

「わ、私は、本当に迷っただけで……お、王低殿下こそ、お部屋はもつと上なんでしょう、どうしてこんなところに!？」

「五月蠅い、詮索好きの嘘つきめ!!聞いてるのは俺だ!!!!」
びりびりと空気が震えるほどの怒声に全身を打たれ、フェリシアは恐怖に目を見開いた。今にも泣き出しそうな様子に、キアランはフンと顔を顰める。

「勝手に嗅ぎまわって虚言を吐いた挙句、都合が悪くなるとすぐ泣き出す。女とは便利な生き物だな、見ているだけで胸糞が悪い」

敵意に満ちた視線に、フェリシアの体が震えた。忘れようとしていた記憶がよみがえる。クォーターの優花に、理不尽な言葉の暴力を浴びせていた中学時代の同級生達。

（何でそこまで言われなきゃならないのよ）

あの頃、祖からに暴力で解決してはいけないと教えられていたというのに、何故か今は手が出た。

パンツ！

掴まれていない方の手でキアランの頬に平手を打ち付ける。思いがけずいい音が響き、僅かに溜飲が下がった。

「放して！迷っただけだって言っているでしょう！？」

一瞬拘束がゆるんだ隙に抜け出して、キアランから距離をとる。そのまま後ろを向いて廊下を走って行ってしまいたかったが、それをするに逃げ出したようで癪だ。長身のキアランの顔を睨み上げると、不愉快そうな目で睨み返された。

「迷った、か。もし本当なら、それはそれで暢気なことだな、救世主殿」

今度は嫌味で返され、フェリシアは言葉に詰まった。暇だからと城内を観光して迷子になったのは、確かに間抜けだと自分でも思う。

「こ、これからお世話になる場所のことを知っておこうと思っただけです。私には、塔の周辺の記憶しかなかったから」

「それで、王族棟の中くらい自由に歩けると判断した挙句迷ったのか」

小馬鹿にしきった口調に腹は立つたが、先程の恐怖は薄れてきた。フェリシアは慎重に距離をとりながらも、目覚めたときから気になっていたことを尋ねてみる。

「どうして王弟殿下はそんなに私に対して敵意満々なんですか。他の皆さんは優しいのに。私、貴方に何かしましたか？」

すると一瞬、キアランの表情が歪んだ。それが苦悩ゆえだったこと

は、フェリシアは知る由も無い。

「何もしていないからこそだ。世界を救うなどと大それた予言をされたお前の力を奪おうと、魔物を含めた各国がこの国を狙っている。お前が生まれて二十年間、人形の救世主など守るためにどれだけの人手と国税が無駄になったと思っている？」

「それは……」

すうっと胃の腑が冷えていった。今朝、食事に誘ったメリッサが当たり前のように毒見と結びつけた衝撃が蘇る。

「何より許せないのは、お前が兄上の足枷でしかない事だ。オズワルド陛下は、グランディール史上最も賢く、慈愛に満ち優れた名君。何の役にも立たない人形姫に傾倒さえしていなければ、だ！俺が予言の救世主なら、とつくに世界を救って兄上に捧げているものを！」

「……つまり、大好きなお兄さんを取られて悔しいと？」

「だ、黙れ誰がそんな話をしている！」

キアランが若干動揺している。あながち的外れでもないなと推測して、フェリシアは内心ほくそ笑んだ。前半の話はシヨックだったが、後半はブラコンの戯言と思っていれば聞き流せないことも無い。

「だから、私を殺そうとしたんですか？私を生かしておいたらお金も護衛も無駄になるうえ、オズワルド陛下のためにもよくないから？」

「……そんなところだ。くれぐれも、俺が剣を引いたからといっていい気になるなよ。今は一応この国のために動く気があるようだから生かしておいてやるが、役に立たなければ殺す」

フェリシアはその言い様にむっとしたが、深くは追求しないでよかった。もう十分怒鳴られて睨まれたというのに、これ以上つついて蛇を出すことも無い。

「お前の周囲が好意的なのは、兄上が人員を選んで配置しているからだ。お前は常に兄上に守られている。それを肝に銘じて、一刻も早くそのご恩に報いるのだな」

「わかってます、私だって王弟殿下はともかくオズワルド陛下の役

には立ちたいし。さよなら」

フェリシアは会話を打ち切り、踵を返した。

「おい」

その背中に、キアランから声が掛かる。

「……まだ何か？」

嫌味を言い足りないのかと振り返ると、妙なものでも見るような顔のキアランが反対方向を指差していた。

「お前の部屋は向こうだぞ」

「……それはどうも、ありがとうございます」

穴があつたら入りたい気分で、フェリシアはくると引き返し足早にその場を後にした。

6・城内探索（後書き）

お城のざっくりとした構造と、後半はVS王弟殿下編でした。キアラン君はツンデレというよりツンギレですね。一応恋愛物なのに、今のところ好意をもたれる要素がまったく無いよ！オズワルド陛下がデレデレしているから別にいいのか……？

フェリシア（というか優花）は元苛められっこ。特に方向音痴という設定ではないんですが、入り組んだ構造の建物の中でふらふらしているうちに迷いました。

7・中庭の麦畑

コンコン、というノックの音に、フェリシアは顔を上げた。傍に控えて繕い物をしていたメリッサがこちらを窺うので、一つ頷く。
「どうぞ、お入りください」

メリッサが開けた扉からは、昨日フェリシアに城内を案内した女兵士が入ってくる。手には数枚の紙をとじた薄い冊子があった。

「失礼します、フェリシア様。城内の見取り図をお持ちしました」
「ありがとうございます」

彼女が持ってきたのは、城の地図だ。

「私の案内に、不備がございましたでしょうか？」
不安げに問う女兵士に、フェリシアは首を振った。

「ううん、そういうわけじゃないんです。ただ、王族棟を一人で歩いているときに迷子になっちゃって。おまけに王弟殿下と出くわして……ちよっと、色々言われたから、慣れるまでは地図でも携帯しておこうと思って」

「キアラン殿下に？四階は確か、見張りの騎士が立っていたかと思えますが……？」

「あ、会ったのは本人の部屋じゃなくて、一階だったんです。随分奥のほうにある、狭い階段の傍の部屋に入ろうとしたら、中に殿下がいて」

それを聞いた女兵士は、ますます怪訝そうな顔をした。

「それはひょっとして、『影王妃の間』……？」

「知っているんですか？」

尋ねるフェリシアに、あまり気持ちのいい話ではありませんがと前置きして、女兵士は話し始めた。

「正式な名称ではないのですが、王族棟にそう呼ばれる部屋がある」と先輩から聞いたことがあります。何代か前の王が正妃の目を盗んで側室に会いに行くために、人目を憚んで階下に下りられる階段を

設けたとか。それ以降、代々の王は正妃以外に寵愛深い側室をその部屋に住ませるようになったそうです」

「だから、影の王妃様のお部屋、で『影王妃の間』……」

「はい。私も実在を確かめたことはございませんが。あつたとしても現国王のオズワルド陛下には正妻も側室もいらっしやいませんし、無人だと思いますよ？」

「ふうん……」

いまひとつ腑に落ちず、フェリシアは首を捻った。昨日のキアランの反応は、ただ曰く付きの部屋に入ろうとしたところを咎めたというには、過剰反応が過ぎる気がする。そもそも無人の部屋から出てくることからして怪しい。そこまで考えて、突然ひらめいた。

「あ、じゃあ、王弟殿下がその部屋に恋人を住まわせているとか。だから昨日あんなに怒ったんだ」

納得するフェリシアに、女兵士は懐疑的だ。

「キアラン殿下も独身ですし、それなら早く公表してしまえば良さそうなものですけど……そもそも、殿下に恋人がいるだなんて、聞いたことはありませんよ？」

「確かにあの性格じゃあ、王様の弟でももてないか。……まあいいわ、いつまでもあんな人のこと考えるのは時間の無駄だし。地図、ありがとうございます」

「いいえ。城の内部構造は一応軍事機密ですから、無くさないようにお気をつけ下さいね」

「は、はい。気をつけます」

受け取った小冊子をこわごわ見つめるフェリシアに敬礼し、女兵士は颯爽と部屋を出て行った。フェリシアは早速ページの一ページ目を捲る。すると、一枚の紙が挟まっていた。

「オズワルド陛下？」

それはオズワルドからフェリシアへ宛てた短文の手紙だった。微かに花の香りのする薄紅色の上質紙には、なかなか様子を見にいけないくて申し訳なく思っていること、キアランがまた何か言ったのでは

ないかという心配、手配した冊子を役立てて欲しいということなどが、綺麗に整った字で綴られていた。

「この冊子、陛下が用意してくれたんだ……すぐにお礼の返事を出さないとまずいわよね、やっぱり。それともお忙しくて、私の出した手紙なんて読んでられないかしら」

悩んでいると、メリッサがおずおずと話しかけてきた。

「お花をつけてお贈りすれば、私的なお便りの目印になると思います。そうすれば後で渡すか先に渡すか、陛下の侍従様が本文を見なくても判断してくださるでしょうから。今の時期なら、感謝を表す春告げ花がぴったりじゃないでしょうか」

貴族の礼儀作法は一通り心得ているフェリシアでも、状況による対応は難しい。思いがけない助言を得て、彼女は手を打った。

「いいね、それ！ありがとうございます、メリッサ」

「い、いいえ。春告げ花は中庭の花壇にたくさん生えていますから、摘んでまいりましょうか？」

「ありがとうございます。でも、せっかく地図もあることだし、自分で選んで採ってくるよ」

フェリシアはそう言うと、軽やかな足取りで部屋を出た。

城内見取り図曰く、中庭とは王族棟と行政棟が建っている区域の手入れが行き届いた庭園のことを指す。行政棟より外側の、庭というよりも森に近い場所は外庭だ。今フェリシアがいるのは、王族棟周辺の最も華やいだ庭だった。一面敷き詰められた芝生に煉瓦の飛び石、両脇の花壇には色とりどりの花が咲き乱れており、遠目には瀟洒な東屋や温室が見える。そんな美しい庭園の風景を愛でながらも、フェリシアは少し困っていた。

（春告げ花ってどれだろう……？）

メリッサに教えられた花の種類がわからないことに、今更気づいたのだ。一緒に来てもらえばよかったと後悔しながらも、部屋に戻るのも面倒で、そのまま進む。

（メリッサの言い方からしてメジャーな花だよね。小難しい魔法の

論理はいくらでも知っているのに、有名な花の名前もわからないで、年頃の娘としてどうなの)

宿主の偏りすぎた知識に文句をつけつつ、花の名前を書いた札でもないかと庭園の奥へ奥へと進んでいく。そして、フェリシアは奇妙なものを見つけた。

「……畑？」

華やかな庭園に突如として現れたそれは、麦畑だった。二十五メートルプールほどの広さの土地に、まだ青い麦が揺れている。洒落たイングリッシュガーデン風の庭に突如として現れた場違いな光景に興味を引かれ、フェリシアは麦畑に近づいていった。天に向かって力強く伸びた麦に手を伸ばす。

「何をしておる！」

しかし穂に触れる寸前で、しわがれた老人の声に咎められた。驚いて横を見ると、庭師の格好をした初老の男が、険しい表情でこちらへやってくるところだった。

「大事な麦に、悪さしておらんだろうな!？」

仁王立をして、素朴な訛りのある話し方で牽制する庭師に、フェリシアは素直に謝った。

「ご、ごめんなさい。綺麗な麦だったから、ちよつと触ってみたくなっただんです。筆ったり千切ったりはしていません」

するとそれを聞いた庭師は、少し表情を和らげた。

「そうじゃ、良い麦じゃろう。気持ちはわからんでもないが、素人が触ると受粉前の雌蕊を潰してしまう恐れがある。そつとしておいてくれんかの？」

「はい」

フェリシアは頷き、数歩下がった。入れ替わりに庭師が麦畑の傍に屈み、草取りを始める。その合間にフェリシアの方を見上げ、声をかけてくる。

「怒鳴って悪かったの、お嬢さん。何しろ貴族の娘といえば、花ばかり可愛がって地味な麦なぞ雑草扱いするものじゃからの」

「そうなんですか？穀物って大事なものでしょう、食べ物が必要れば私たちは生きていけないんだから。主食なら尚更」

当たり前顔をして言うフェリシアに、庭師は意外そうな顔をした。「変わったお嬢さんだの。城の客人かね？」

「客……うん、まあ、一応そういう扱いでいいと思います。おじいさんは、庭師さんですよ？どうしてお城の中庭で麦を？」

尋ねると、庭師は立ち上がって誇らしげに胸を張った。

「ここはキアラン殿下の畑じゃ。わしは時々様子を見に来る程度での、普段は殿下が世話をなさっておる」

「王弟殿下が？」

高慢な王弟と畑仕事。あまりにも似合わない組み合わせに目を丸くするフェリシアに、庭師は頷いた。

「キアラン殿下はこの畑で、麦の品種改良を進めておられる。戦争で土地は荒らされ、農地は減る一方。不作の年には餓死者も出るから。荒廃した土地でも育つ強い麦を作ることがこの国を救うことになる、殿下は自ら中庭の一角を耕して、麦の栽培をなさっておるのじゃ」

「そう、なんですか……」

意外な話に、フェリシアは麦畑をただ見渡した。時折吹く風に心地良さそうに揺られ、小波を描く麦畑。両親——優花の両親はガーデニングが趣味だった。家族そろってよく土いじりをした記憶が蘇り、フェリシアの瞳が揺れる。もう絶対に戻れない、幸せだった頃の記憶だ。彼女は小さく頭を振って、それを取り払った。するとその様子をどう思ったか、庭師が片眉を上げる。

「意外かね、キアラン殿下が民草のことを考えて土に塗れておるのが」

「あ、いえ、ちょっと昔のことを思い出していただけなんですけど……確かに、王弟殿下についてもすごく意外です。あの人がこんな立派な麦を育てているなんて。民衆なんてどうでもいい、とか言いそうなのに」

「随分と、正直なお嬢さんだの」

からからと庭師は笑い、膝を打った。

「お嬢さんの言うとおり、殿下はとても愛想が良いとは言えん方じやからのう。誤解されがちじゃが、殿下は偉い方の中の誰よりも、国を思い民に尽くす方じゃよ。少なくとも、わしはそう思っておる」誠実そうな庭師の言葉に嘘は感じられず、フェリシアは複雑な心境だ。

「おじいさんの言うことを、疑っているわけじゃないんです。でも私は、お国のために働くためにここへ来たのに何もしていなくて、王弟殿下に睨まれていているから」

大雑把な説明にもかかわらず詳細は聞かずに、庭師は頷いた。

「殿下はご自分に厳しい分、他人にも容赦ないからのう。じゃが、お嬢さんはいい娘さんじゃ。これからたと働けば、殿下の目も変わってくるじやろ。有能な者を、いつまでも冷遇するお方ではないよ」

「そうだといいんですけど」

庭師の励ましにフェリシアは笑い、それから不意に本来の目的を思い出した。

「あ、そうだ。おじいさん、お庭の春告げ花を少し頂きたいんですけど、いいですか？」

「数輪なら特に断りはいらんぞ？こんな奥の方に来なくとも、手前の花壇に植えたはずじゃが」

「それが、春告げ花がどの花なのか、知らなくて。お仕事の邪魔でなければ、他の花の名前もいくつか教えていただけるとありがたいんですけど」

「はて？麦は知っていて、春告げ花を知らんとは、本当に変わったお嬢さんだの」

そう言いながらも、庭師は快く中庭の花を教えてくれた。地球上の植物はそれなりに詳しいと自負しているフェリシアだが、異世界の植物の知識は無に等しい。とはいえ、中には麦のように、地球上に

存在するものと同じ名前と姿の植物もあった。薔薇や百合などは、こちらでも好まれている花らしい。春告げ花はマーガレットに似ており、黄色い花芯の周りを小さなたくさんの白い花びらが縁取っている。名前の通り春先に咲く可憐な花だ。

（グランデールは日本ほど変化が激しくは無いみたいだけど、一応四季はあるんだね）

庭師の説明を聞きながら、春告げ花の他にもいくつか花を摘む。やがて花壇一つの花の種類が尽きたところで、話は打ち切られた。

「有名な花はこの辺りかの。こんなところでよかったかい、お嬢さん」

「はい。ありがとうございます、助かりました」

丁寧に頭を下げるフェリシアに、庭師は照れた笑みを浮かべた。

「いや、わしも楽しかった。花が必要なら、また来なさい」

「ありがとうございます」

フェリシアは再度頭を下げると、小ぶりの花束ほどになってしまった花と城内見取り図を両手に、自室へと戻っていった。

7・中庭の麦畑（後書き）

お気に入り登録してくださっている方々、ありがとうございます！拙作ではありますが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。傾向的に、やっぱり女性向けと思われるのでしょうか。確かに否定できない要素満載ではありますが、そのうち魔物相手にドンパチしたり戦場の描写が入ったりする予定（なので残酷表現あり）です。でもR15はどちらかというとエロ描写のためにつけました。本当にエロくなるかは未定ですが。とりあえず作者はおっぱい星人です。

8・魔法実践（前書き）

残酷描写ではありませんが、部屋に水が溢れる（腰の高さ程度）描写があります。気になる方は飛ばしてください。

8・魔法実践

オズワルドに花と手紙を送るよう兵士に言付け、昼食を終えたフェリシアは、再び暇をもてあましていた。城内の見取り図があるので散歩に出ても良いのだが、今の彼女にはそれよりも気になっていることがあった。

「魔法、使ってみたい……」

グランディールの伝説的英雄である初代国王に匹敵する魔力を持つと言われながら、フェリシアは魔法の発動方法を知らなかった。例えて言うならば、どんなに複雑なプログラムでも組み立てられるのに、実行キーとなるスイッチがわからなくて起動できない、という間抜けな状態。フェリシアの魔法の教師は現在の魔法師団長で、その授業は巧妙にスイッチの場所を隠して行われていた。

（魂抜けた人形が、うっかり大規模攻撃魔法なんて発動させようものなら大変だし、隠す理由はわかるけど。魔法さえ使えば、役に立てるのになあ）

すると、難しい顔で考え込んでいた主を見かねたメリッサが、おずおずと話しかけてきた。

「お嬢様、簡単なものでよろしければ、私も存じ上げておりますが

……」

「本当！？教えてくれる？」

「は、はい」

メリッサの手を取り、身を乗り出すフェリシアに彼女は小さく頷いた。

「ええと、私が見えるのは、火起こしと水呼びの魔法です」

火起こしはマッチ程度の小さな炎を作る魔法、水呼びはコップを満たすほどの水を精製する魔法である。どちらも平均的な魔力の持ち主であれば発動できる初歩の魔法だ。特に火起こしは、数多ある魔法の中で最も簡単とされている。

「火起こしの魔法でよろしいでしょうか」

しかし、メリッサの提案にフェリシアは頭を振った。

「ううん、できれば水呼びの方を教えて欲しいかな。火は、事故になっただけ怖いし」

「かしこまりました。では、水呼びを使ってみますね」

メリッサはティーセットの中から小ぶりのポットを取り出し、蓋を開けて手をかざした。

「えいっ！」

勇ましくも可愛らしい掛け声と共に、メリッサの手からポットへ、魔力の奔流が流れる。するとまるで手品のように何処からともなく沸いた水が、ポットの中を満たしていった。

「ふう。もっと魔力のある方は、これに発熱の魔法をかけて熱湯を作ったり、逆に冷却の魔法で飲み物を冷やしたりできるんですが、私にはこれが精一杯です」

「それでもすごいよ、メリッサ！便利だねえ」

無邪気に喜ぶフェリシアに、メリッサは少し疲れた顔ながら、はにかんだ笑みを浮かべた。

「発動方法は、体の中の魔力を使う魔法に合わせて丁度よく混ぜて対象へ流す感じ、なんですけど……あの、私、上手く説明できていますか？」

「大丈夫、実践してくれたのが良かったみたい。なんとかなりそう」ポットの横に空のティーカップを置き、フェリシアは目を閉じた。日本にいた頃は意識もしなかった、エネルギーの塊が体を循環しているのを感じる。それを練り上げ、膨らませ、カップへ落とし、魔力を魔法へと変換する。詠唱はあっても良いが、なくても良い。要は魔力を変換させるためのイメージの問題で、メリッサの「えいっ！」も一種の詠唱だ。

（水出て来い！）

フェリシアの場合は、強く念じることで魔法のスイッチを入れた。すると、ぱしゃんと音を立ててカップに水が溜まる。

「できた！見てメリッサ、成功だよ！……って、あれ？」

はいしゃいで水の入ったティーカップを差し出していたフェリシアは、すぐに首をかしげた。ティーカップの中に満たされた水はとどまることなく、みるみるうちに溢れ出しフェリシアの腕を濡らす。

「ぎゃあっ！？ちよつと嘘、止まってよ！！」

泉のように滾々と水を吐き出すカップを手で押さえたが、水は指の間から溢れ出た。

「お嬢様、ひとまずこれを！」

メリッサがとりあえず水を受けるための洗面器や桶をありったけ持ち出したものの、すぐさまそれも水でいっぱいになり、上等な絨毯の上に染みを作っていく。

「ど、どどどうしましょう！？」

「だ、大丈夫よ、簡単な魔法だもの、止める方法はいくらでもあるはず」

とりあえずフェリシアはカップを浴室に移し、パニックに陥って右往左往するメリッサを宥め、必死に対処法を考えた。

（カップを壊せば……いや駄目だ、受け皿を壊しただけじゃ発動途中の魔法は止まらない。寧ろ「カップに水を満たす」という制限が外れて、一気に大量の水が溢れて悪化する恐れがある。こういうときは、ええっと、そうだ、停止の魔法！）

常人であればカップから水が溢れる前に魔力が一時的に枯渇し、強制的に魔法が終了する。この事態は、フェリシアの無尽蔵の魔力によつて引き起こされたものだ。強い魔力を持つ者が簡単な魔法を使う場合、発動中の魔法を中断する停止の魔法を併用するのが常識である。それに思い当たったフェリシアは、早速叫んだ。

「よし、止まれ！」

そして、カップに向けて魔力を流し込む。

バシャアッ！！！！

しかし水は止まるどころか勢いを増し、噴水のようにカップから水が噴き出した。

「な、なんでえっ！？止まれ！止まって！！」

カップに魔力を流すたびに水の勢いは強くなる。反動でティーカップが固い床の上に転がり、砕け散った。次の瞬間、カップのあった場所を基点に水の爆発が起こる。

「きゃああっ！」

瞬時に浴室が大量の水で満たされ、水の流れに足を取られたメリッサが悲鳴をあげて倒れる。

「メリッサ！！」

フェリシア自身も濡れてまわりつく服に足を取られながら、壁に手を付いてメリッサに近づき助け起した。浴室の扉を打ち破った水は、洪水のように部屋を流れ廊下にまで溢れていく。

「た、大変だ……！」

椅子や机などの軽い家具が流され水浸しになった部屋を見て、フェリシアの全身から血の気が引いた。次の瞬間、頭に殴られたような衝撃を受けて浴室の床に倒れる。

「お嬢様！？」

突然倒れた主に悲鳴に近い声を上げたメリッサは、ふと周囲の水が引いていることに気づいた。フェリシアの魔力に限界が来て、魔法が停止したのではない。それならば、今までに出した水はそのまま残っているはずだ。しかし今は、二人の髪や服は湿っているものの、先程まで部屋中に溢れていた水が無くなっていた。

「う……だ、大丈夫。水は……？」

何とか起き上がったフェリシアが疑問を口に出す間もなく、複数の足音と、バンツ、ドタンと何かを打ち付ける音が近づいてくる。

「フェリシア・チェンバレン！！貴様、今すぐ出て来い！！！」

次いで、びりびりと空気を振るわせるキアランの怒声が響いた。

机や椅子が転がったままの自室に、フェリシアとメリッサは並ん

で立たされていた。正面には、精悍な顔を憤怒に歪めたキアランが腕を組んで二人を睨みつけている。その後ろには、こんな騒ぎを起したフェリシアに対して変わらず気遣わしげなオズワルドと、フェリシアの師である魔道師団長ダリル・スマイサーが無表情で立っていた。

（怖い……）

今回ばかりは全面的に自分が悪いと自覚しているフェリシアは、そつとキアランから目を逸らす。

「おい」

その瞬間、不機嫌絶頂の声で呼びかけられた。

「説明しろ」

「水呼びの魔法を使いました」

簡潔な要求に、フェリシアも必要最低限の言葉で答える。この状況で、長々と言いつけるほど図太くは無い。

「お前のような化け物じみた魔力の奴が停止魔法の併用なしで下級の魔法を発動させて、どうなるのか想像はできなかったのか？」

「はい。発動させた後に気づいて、一応停止の魔法も試みてはみたんですけど、使い方がわからなくて」

「馬鹿が。ダリルがすぐに駆けつけて対処していなかったら、どうなっていたか」

フェリシアが倒れたのは、発動中の魔法に他人から無理矢理消去の魔法をかけられたためである。彼女の魔法の効果自体を無に帰したのは、ダリルだった。灰色の髪に猛禽を思わせる鋭い目つき、苦み走った五十絡みの魔道師団長は、魔術師というより歴戦の猛者といった風情の大柄な男だ。

「軽率な行動でした。申し訳ありません」

フェリシアが頭を下げると、キアランはフンと鼻を鳴らし、今度はメリッサの方へ視線を移す。

「侍女。この馬鹿に水呼びなど教えたのはお前だな？」

「ひっ……！」

キアランの険しい眼光に射抜かれ、メリッサは縮み上がって息を呑んだ。

「俺の質問に答える！」

「ちよつと！」

キアランがメリッサへ詰め寄ろうとした瞬間、フェリシアはとつさに二人の間へ割って入っていた。メリッサの震える手が遠慮がちにフェリシアの服を握るのを背中に感じながら、庇うように両腕を広げる。

「この騒ぎを引き起こしたのは私です。メリッサは何も悪くない、脅さないで！」

「その娘に咎があるか否かを決めるのはお前ではない。下がれ！」

「嫌よ！だいたい、メリッサの立場で主人に逆らえるはずないでしょう！？悪いのは全部私、でいいじゃない！」

「五月蠅い！！！」

激昂の末、キアランが大きく腕を振りかぶる。

「キアラン！」

オズワルドの鋭い声と共に、キアランの手首が背後から掴まれた。見れば、キアランの手をダリルが掴んでいる。決して強い力で掴まれているわけではないが、キアランは振りほどけずただ不機嫌そうにダリルを睨んだ。

「そこまでになさいませ、殿下」

静かな声で制止した魔道師団長は手を離すと、魔法のようにすんなりとキアランを押し付けフェリシアの前に進み出た。教え子を見下ろす彼はやはりポーカーフェイスを保ったままだ。状況が状況なので彼にもフェリシアの魂が異世界人であることは説明したのだが、その表情からは何を思っているのか窺い知れなかった。

「フェリシア」

「は、はい、お師匠様」

シャロンが先生なので、とりあえずダリルにはお師匠様とつけることにして、フェリシアは返事をした。

「私が教えたことは、記憶しているか？」

「はい。閃光の魔法でも爆風の魔法でも、発動方法さえわかればすぐに使えます」

どちらも最上級の高等攻撃魔法である。物騒な返事にキアランが顔を顰め、オズワルドは引きつった笑みを浮かべた。

「低級魔法を使うときは停止魔法と組み合わせる、基本中の基本もか？」

「知っていました。けど、使うまで失念していました。せっかく教えていただいたのに、申し訳ありません」

再度、フェリシアが頭を下げると、ダリルは足元に落ちていたポットを拾い上げた。メリッサが水呼びに使ったポットである。彼は瞬き一つでそのポットに水を満たした。

「魔法の効果は、消去の魔法で消し去ることができる」

ダリルの言葉と共に、ポットから水が消えた。停止の上位魔法である消去は言うほど簡単に使えるものではないのだが、フェリシアは黙って師の言葉を聞いている。

「しかし、魔法によってもたらされた結果まで元通りにすることはできない。水に流されて倒れた椅子は倒れたままであるし、溺死者が息を吹き返すことも無い」

決して教え子を責めるわけではなく、ただ淡々と話すダリルの言葉にフェリシアの全身が震えた。ダリルがいなければ、自分の魔法が何の罪も無い人を殺していたかもしれない。それはキアランの罵詈雑言よりもよほど恐ろしい事実だった。

「だから、以後気をつけるように。侍女殿も、魔法の発動を知らない者にはそれなりの理由がある。不用意に教えたりしないように」

「は、はい。申し訳ありませんでした」

フェリシアの後ろで弱々しく謝罪するメリッサの声を聞いたダリルは、くるりと踵を返した。拍子抜けしてぽかんとその背中を見上げるフェリシアに変わり、キアランが彼女の言いたいことを代弁する。

「おい、魔道師団長！それだけでいいのか！！？」

するとダリルはキアランの方を振り返り、こくりと頷いた。

（お師匠様って……体が大きいところといい寡黙なところといい、なんだかチェンバレンのお父様よりよっぽどお父さんに雰囲気似てるなあ）

優花の実父を思い出し、フェリシアがしんみりしていると、今度はオズワルドが進み出てくる。

「大丈夫かい、フェリシア？下級魔法とはいえ、この部屋の周辺一帯が水浸しになるほどの魔法を使ったんだ、疲れてはいない？」

心配そうな琥珀の瞳に、フェリシアは笑顔を返した。

「大丈夫です、陛下。ご心配とご迷惑をおかけして、本当に申し訳ありません。あの、メリッサのことは……」

「ああ、君の言うとおり、使用人が主人の要求に逆らえるはずもないからね。今回のところは不問に付そう。勿論君もだ、フェリシア」とすると、それを聞いたキアランが更に眉を吊り上げた。

「兄上！こんな騒ぎを起して何の罰も無いとは甘すぎます！本来なら極刑に処されるべきところですよ！？」

「お前は どうしてそう、フェリシアが絡むといちいち騒ぎ立てるんだい、キアラン。幸いにも人的被害は出なかったんだ、いいじゃないか。これは不幸な事故だ、私が決めたことだよ」

穏やかながらきっぱりと宣言され、まだ不満そうにしながらもキアランは押し黙った。そんな彼の様子を横目に、フェリシアは躊躇いがちにオズワルドへ話しかけた。

「あの、陛下。メリッサのことを不問に付してくださるのありがたいと思います。でも、私は許されるべきではないと、自分でも思うのですけれど……」

「おや、お仕置きして欲しいのかい？私は歓迎だけれど」

にこやかに不穏なことを口走るオズワルドに、フェリシアは啞然とした。そんな彼女の反応を見て、オズワルドはくすくすと笑う。

「冗談だよ。だが、そうだな。今まで、フェリシアが自我を持ったことは、ダリルにすら知らせていなかった。けれど、こんな騒ぎが

起こっては隠し通すのも難しい。そこで、君のお披露目を開こうと開こうと思うんだ」

「お披露目会、ですか」

「ああ、各国への牽制にもなるしね。本当は、もう少し根回しをしてから開こうと思っていたんだが……仕方ない」

一瞬為政者の顔で思案したオズワルドは、次の瞬間にはまた甘い笑みを浮かべてフェリシアに向き直っていた。

「フェリシア、君は何も心配しなくてもいい。綺麗に着飾って、美味しいものを食べて、できれば笑っていてくれれば、それでいいからね」

「は、はい……？」

戸惑うフェリシアと、楽しそうに彼女へ話しかけるオズワルドを横面で眺めたキアランは、そっと重いため息をついたのだった。

8・魔法実践（後書き）

ここでそろそろ、主人公最強の片鱗を少し。本気になれば災害級の魔法も使えます。

このご時勢に津波を連想させるような描写をするのは不謹慎だったかと、書いた後から思い当たった不届き者です。万が一気分を悪くされた方がいらっしゃいましたら、申し訳ありません。ストーリーの進行上必要な箇所でもありますので、どうかご容赦ください。

9・披露会準備

翌日から、退屈だったフェリシアの生活は一変した。ついに自我を持つに至った救世主の、お披露目会の準備のためである。フェリシアは基本的な礼儀作法ならば問題ないが、流行の衣装や社交場での話題選びには疎く、舞踏会必須のダンスも踊れない。多くの貴族令嬢を育てたという家庭教師が何人もつき、朝から夕方までみっちり勉強させられた。他にもダリルの魔法学授業が始まり、忙しい時間の合間を縫ってシャロンの元で健康診断を受ける日々。

「うう……着飾って食べて笑ってるだけでいいなんて、オズワルド陛下の嘘つき！」

特訓が始まって十日目。午前のダンスで体力を使い果たし、午後の勉強で精神力を限界まで削られたフェリシアは、医務室のベッドに頭から突っ込み、この場にはいない国王に向かって暴言を吐いた。

「大分煮詰まっていますね、フェリシア様。体調はいかがですか？」
子供のようなフェリシアの様子に苦笑しつつ、久々に顔を合わせるシャロンが特製アイスハーブティを差し出してくる。フェリシアはがばりと起き上がり、すっかり好物になったそれをいそいそと受け取った。

「元気ですよ。毎日へとへとになるまで勉強漬けですけど、ご飯は美味しいし、疲れているからよく眠れるし。それにダリルお師匠様の授業は、どんどん使える魔法が増えて楽しいです」

前の世界では、こんなにも充実した日常を取り戻せる日が来るとは思ってもみなかった。そう言い掛けて口をつぐんだフェリシアに気づかない振りをして、シャロンは首肯した。

「それは何よりです。魔道師団長とは昨日少し立ち話をしましたが、貴女の成長は著しいと仰っていましたよ。人を貶すことは無いかわりに、褒めることも滅多にない方なのに」

「本当ですか？嬉しいなあ」

くすぐったそうに笑うフェリシア。それから時計を見て、ベッドから立ち上がる。グランディールの時間表記は一日を一から十の刻で表す十進法だが、魔法仕掛けで動くその時計にもようやく慣れたところだ。

「いけない、もうすぐ八の刻だ。これからお師匠様の授業なんです、失礼しますね。ハーブティ、ごちそうさまでした」

「はい、どういたしまして。無理はなさらないで下さいね」

心身共に疲れているとはいえ、一番好きなダリルの魔法授業が控えているとなれば足取りも軽い。医務室の水場で洗ったカップをシャロンに返すと、フェリシアは急ぎ足で建物の外に出た。七の刻の終わりといえば、日本で言う午後四時半ごろに相当する時間で、早めに仕事を終えた役人達が使用人棟や自宅に戻っていく。その流れとは逆方向に向かう背中を発見して、フェリシアは声をかけた。

「お師匠様、こんばんは！」

フェリシアの声に振り返ったダリルは、口の端に笑みらしきものを浮かべて頷いた。そのまま二人は連れ立って、王族棟の中庭に向かう。王族棟正面の開けた広場まで移動した二人は、そこで立ち止まった。国王兄弟とフェリシアの三人で使っている建物の周囲には、人もいない。

「授業を始める」

はじめて、ダリルが口を利いた。

「よろしく願います！」

フェリシアはぺこりと頭を下げ、ダリルから一步距離を置いた。既に机上で勉強する魔法論理は叩き込まれた状態のフェリシアにとって、魔法の授業とはすなわち純粋な実践を意味する。

「まずはいつも通りに」

「はい」

初めて水呼びを使ったときの散々な結果のためか、ダリルはまず、いついかなるときでも停止の魔法を使えるようにすることを徹底的に教え込んだ。停止の魔法は魔力を断ち切るイメージである。魔力

を注げば、初日そうだったように、対象の魔法を増幅してしまう。彼が虚空に指先で丸を描くと、フェリシアは水呼びと停止の魔法で指定された場所と大きさに水の玉を作った。今日はそれに、消去の魔法をあわせてみる。次々と描かれる円に寸分違わぬ大きさで水の玉が現れ、次の瞬間には弾けて夕日に煌きながら消えた。幻想的な光景でありながら、それを作り出す二人は真剣そのものだ。

「っ！？」

不意に、フェリシアが作った物ではない水の玉が彼女の横に現れ、足元に降ってきた。

「集中を乱すな。次は当てるぞ」

ダリルに声をかけられた時にはもう、三つの玉に周囲を囲まれている。水の玉の動きは早く、足に布地がまとわりつくワンピースを着たフェリシアが逃げるのは至難の業だ。

（でも別に、避けるとは言われてないよね）

フェリシアはそれを突風の魔法で防ぎながらも、ダリルが指示する水の玉の精製も忘れない。お返しに水の玉の一つを、ダリルの真上に誘導して落としてみるが、完璧な消去の魔法で揺らぎもせず消されてしまった。速度や軌道を変えて何度か試してみるものの、水の玉はやはりダリルにぶつかる寸前で消える。

「そこまで」

やがてダリルが終わりを告げると、フェリシアは肩を落とした。他人から魔法を消去されると双方に負荷がかかるものだが、小さな水の玉を消された程度では、ダメージはさほどでも無い。純粹に悔しさからの落胆である。

「まだまだ、お師匠様を出し抜けるようにはならないなあ……」

「気にするな。経験が違う」

「と、思わせてもう一発！」

叫びながらダリルの背後に水の玉を作り、高速で飛ばす。自分ながら最速の出来とフェリシアは思っていたのだが、彼女の目の前でダリルが飛んだ。

「え？」

突風の魔法を駆使してダリルが滞空した一瞬の間に、水の玉は彼の体があつたところを通過し、フェリシアの額にぶつかる。

「きゃー、せめて消去してくださいよ、お師匠様！」

顔面から水を被ったフェリシアは、猫のようにごしごしと顔を拭いながら泣き言を言った。

「もう春だ、すぐ乾くだろう。さて、次の段階だが」

ダリルは魔法に関してはなかなかスパルタである。幸い、手早く作つた小さな水の玉が服を濡らすことは無かつた。フェリシアは諦めて、師匠の言葉を待つ。

「本格的な火の魔法に移る」

言われて、フェリシアの瞳が揺らいた。火は苦手だ。最低級の魔法である火起し程度なら問題ないが、最も攻撃に適しているという火の魔法は、忌まわしい記憶と直結している。

「これができなければ、いくら巧みに魔力を扱おうと、魔術師と名乗ることすらおこがましいぞ」

そんな弟子の心を見透かしたように厳しい言葉を投げつけるダリルへ、頷いたときだった。

「フェリシア、スマイサー魔道師団長」

名前を呼ばれて二人同時に横を向くと、行政棟から帰ってきたオズワルドの姿があつた。背後には護衛の騎士やお付の使用人たちが十人ほど、ずらりと並んでいる。その最前列に、キアランの姿もあつた。

「フェリシアに話があるのだが、今日は授業を打ち切ってもらっていいだろうか？」

いつもなら残念に思うところだが、フェリシアは正直ほつとした。ダリルも頷き、退出の礼をとって使用人棟の方へと歩いていく。その姿を横目にしながら、オズワルドはフェリシアに歩み寄つた。

「授業中にすまないね、フェリシア。急ぎ伝えたいことがあるものだから」

「いいえ。陛下こそお忙しいのに、わざわざ申し訳ありません。お話というのは？」

「ここでは憚られる。私の部屋に来てくれないか？」

オズワルドの言葉にフェリシアは目を丸くし、キアランが眉間に皺を刻んだ。

初めて訪れる国王の私室は、広々として煌びやかだった。毛足の長い最上級の絨毯に、金箔や精緻な彫刻の施された家具、高い天井からぶら下がるシャンデリア。

（私の部屋も豪華だと思っていただけ、さすが王様の部屋は違うなあ）

魔法光の数は少ないというのに、昼間のようにまぶしい部屋を見回すと、キアランが不機嫌そうに鼻を鳴らした。

「きよるきよるするな、兄上のお部屋が穢れる」

「何よ、人を黴菌みたいに」

小声で言い合う二人に、オズワルドが声をかけた。

「やめないか、キアラン。フェリシア、弟の言うことは気にしなくても良いからね」

今この部屋にいるのは三人だけだ。フェリシアとキアランは、ふかふかのソファの上に距離を置いて並び腰掛けていた。その正面では、オズワルドが泰然と座っている。

「まずはフェリシア、君の披露会の日取りが決まった。明後日だ」

「明後日……」

「重鎮達が五月蠅くてね。もう少し猶予期間を伸ばしたかったんだが、これが限界だった。大丈夫かい？」

オズワルドの問いかけに、フェリシアは覚悟を決めて頷いた。

「大丈夫です。その日の為に、今まで勉強してきたんだから」

「たった十日ばかりの付け焼刃で大した自信だな」

フェリシアはちらりと横を睨み、すぐに正面へと視線を戻した。オズワルドの言う通り、相手にするだけ無駄というものだ。寧ろ余裕

と言わんばかりの涼しい顔を造って見せるが、その表情も長くは続かなかった。

「披露会の形式自体は、一般的な舞踏会と同じものだ。そして舞踏会には、パートナーが不可欠だからね。キアラン、フェリシアのパートナーをお前に頼む」

『はい！？』

オズワルドの言葉に、指名を受けたキアランばかりか、フェリシアも裏返った声で返事をした。

「兄上！何故俺が、この女のパートナーなど務めなくてはならないのです！？」

「そうですね、コレがパートナーだなんて披露会を始める前から失敗させる気ですか！？考え直してください、陛下！」

互いに隣を指差し、身を乗り出して国王に訴えかける二人に、オズワルドは苦笑いを零す。

「本当は、私がフェリシアにつきっきりでいたいだけだね」

「論外です！」

一言で切り捨てるキアランに、オズワルドはわかっていると頷いた。「披露会に招かれる各国の代表者の興味を私へ逸らすためにも、一緒にいられないのはわかつている。だからフェリシアの正体を知っていて、なおかつ信頼の置けるお前に頼んでいるのだよ」

「そっ……」

信頼の辺りでややぐらついたキアランだったが、それでも彼は反論を試みた。

「それならチェンバレン公爵やスマイサー魔道師団長だっていいでしょう！？」

「フェリシアがあらゆる勢力から命を狙われていることを、忘れたわけではないだろう？フェリシアのパートナーは護衛もできなくて。万一刺客でも紛れていればチェンバレン公爵には太刀打ちできない。かといって平民出のスマイサー魔道師団長では、披露会に出席させること自体が難しい。お前が一番適任だ、キアラン」

「ですが！」

声を荒げるキアランを、フェリシアは初めて心の底から応援した。ただでさえ緊張するであろう披露会で、こんな男が一緒では気も休まらない。しかしオズワルドは無情だった。

「誰が反論して良いと言った？これは命令だよ、キアラン・グランデール。披露会の間フェリシアのパートナーとして、彼女を守れ」命令と言われてしまえば、キアランには拒めなかった。彼は苦虫を噛み潰したような顔でしばらく目の前のテーブルを睨み、低い声でぼそぼそと答えた。

「……御意」

弟の返事に満足げに頷いたオズワルドは、フェリシアにも顔を向ける。

「というわけでフェリシア、弟をよろしく頼むよ。愛想が無くて悪いけれど、剣の腕だけは保障するから」

「は、はい……」

確定事項を語る笑顔は、フェリシアにすら反論を許していなかった。

それから披露会当日の打ち合わせを終えたフェリシアは、王の私室を出て大きくため息をついた。そのすぐ後ろに、キアランがついてくる。披露会の予行練習だといって、フェリシアを彼女の自室まで送り届けてくるようオズワルドに命じられたのだ。

「別に、本当についてこなくていいですけど、王弟殿下」

顰め面のまま一階までついてきたキアランを振り返り、フェリシアは剣呑な声音で辞退した。日の暮れた廊下は薄暗く、使用人の姿もなく、魔法灯の仄かなオレンジ色の光だけが二人を照らしている。

「兄上のご命令に逆らうわけには行かない。無駄口を叩いていないで行くぞ」

キアランはフェリシアの方を見ようとせず、彼女を追い抜かしてさっさと歩き始めた。フェリシアは仕方なくその背中を追いかけながらも、我慢できずに愚痴を漏らす。

「そこらの刺客より王弟殿下の方がよっぽど危険よ、突然横からグサツとやられそう。オズワルド陛下も、貴方が私を殺そうとしていたの知らないとはいえ、酷い采配」

「兄上を悪く言うな。……それに、兄上はおそらく」

フェリシアに優花の魂が宿ったあの夜、キアランが彼女を殺そうとしていたことを、知っている。思わず口に出しかけて咄嗟に言葉を切ったキアランに、胡乱げな眼差しが向けられる。

「いや、なんでもない。心配しなくとも、兄上の許可無くお前を殺すつもりは今のところない。披露会も、命の保障だけはしてやる」

「いちいち引つかかる話し方ね。この間は私が国のためにならないから殺そうとした、なんて仰ってましたけど、本当は個人的な恨みでもあるんじゃないですか？」

敵愾心満々のフェリシアに、キアランはそっぽを向いて歯切れ悪く答えた。

「別に、魂の抜けた人形姫にどうこうされるほど落魄れてはいない。それにお前こそ、本当は今まで兄上と」

「フェリシア様！」

キアランを遮るようにして、甲高い娘の声が響いた。二人が正面を向くと、頬を高潮させたメリッサが駆けて来るところだった。いつの間にか二人は、フェリシアの部屋のすぐ近くまで来ていたのだ。

「お帰りなさいませ、今日のお夕飯は子羊のローストですよ！お疲れでしょう、たっぷり召し上がってくださいね！」

「ありがとう、メリッサ」

王弟を完全に無視した侍女の非礼な態度に、キアランがますます顔を顰める。その怒りがメリッサに向かないうちに、フェリシアは話を切り上げることにした。

「じゃあ、ここまでありがとうございました、王弟殿下」

「あ、おい」

一応感謝の意を告げて完璧な礼をとると、呆然と立ち尽くすキアランを置いて、メリッサと二人そそくさと自室に引っ込む。

「もう、王弟殿下に目をつけられたらどうするの？」

キアランから逃れてほっとしたものの、主人の義務としてメリッサをたしなめると、彼女はしゅんと肩を落とした。

「申し訳ございません。お嬢様が、嫌な事を言われたら大変だと思つて」

「うん、気持ちちは嬉しいよ。ありがとう。でも、私だってメリッサがあの人に怒られるところを見るのは嫌だからね？」

フェリシアが言うと、メリッサはぱつと顔を輝かせた。水呼びの魔法の失敗に巻き込んで以来、フェリシアはメリッサに嫌われることも覚悟していたのだが、結果は逆だった。怒鳴るキアランから庇ったのがよかったのか、メリッサはこれまで以上に甲斐甲斐しくフェリシアに仕えている。一方キアランには並々ならぬ敵意を抱いている様子で、今日のように非礼な態度に出ることも珍しくなかった。

（おつとりした子だと思つてただけだなあ……）

意外な過激さに驚くフェリシアだったが、今日のように助かる場面も多々あった。深くは気にせず、メリッサの給仕してくれる夕食の席に着いたのだった。

9・披露会準備（後書き）

本格的に魔法の授業が始まりました。

ところでキーワードに恋愛？とつけているからには主人公は誰かといずれ恋仲になる予定です。相手はオズワルド陛下（王道）かキアラン（どうせデレるんだろ）と思われていそうですが、アレですよ、メリッサという可能性もありますよ。何か変なフラグ立ってるし。女の子同士がイチャイチャしてるのいいよね。ガールズラブつけたほうがいいのか。でもそれをするボーイズラブも必要になってくる気がする（キアランの兄上命ぶりに）。注意書きだらけなものか？なものでこのまま行きます。多分注意が必要なほど酷いことにはならない、はず。

10・披露会にて（前編）

そして、披露会の当日がやってきた。午後からの開催ではあるが、その日は朝から忙しかった。昼食をとってはられないので通常の倍近い量の朝食を詰め込み、それが終わればすぐに正装の華やかなドレスに着替える。

「うわぁ……動きにくそー」

薄絹とレースがふんだんに使われたドレスを見たフェリシアは、暗澹とした表情で呟いた。フェリシアとて、綺麗なものは好きだ。しかし自分で身につけるものは使いやすいのが一番だ、という彼女の信条は通用しない。

「チエンバレン公爵家のお嬢様の正装ですもの！今日お見えになる王族の方々に女性はいらっしゃいませんし、遠慮なく着飾りましょう！」

主とは反対に、メリッサは張り切っている。そんな彼女にドレスの減量を申し出ることもできず、フェリシアは乾いた笑みを貼り付けて頷いたのだった。

コルセットやペチコートといった下着類から始まって、何重にも重ね着するドレスをメリッサ一人で着付けるのは至難の業だ。城で働くほかのメイドたちも呼ばれ、一気に華やいだフェリシアの私室で着付けが始まった。この世界のコルセットは中世ヨーロッパのコルセットとはつくりが違うのか、息もできないほど締め付けられることは無い。しかし、嬉しい誤算といえはその一点くらいだった。フェリシアは寢室の中央で突っ立って、指揮を取る王族棟の侍女頭に従い時折屈んだり足を上げたりを繰り返す。手伝おうと指示以外の動きをしようものなら全員から鬼の形相で睨まれ、身じろぎ一つままならない。

「ねえ、舞踏会があるたびにこんなにしなきゃならないの……？」

たまりかねて泣き言を言つと、メリツサが当然といわんばかりの顔で頷いた。

「大丈夫ですよ、お嬢様。とってもお綺麗です！絶対、苦勞したかいがあるつて思つていただけますから！」

そして着付けが終わり、今度は鏡台の前に連行される。大きな姿見には、午前中だというのに疲れきつた表情のフェリシアが映つていた。

（お綺麗なのは私じゃなくてドレスだよねえ）

などと卑屈なことを考えているうちにも作業は続く。丁寧に梳つた長い髪を高く結い上げ、髪飾りや生花で飾り立てる。顔の両脇に垂らした髪には饅頭を当て、緩やかにカールさせられた。顔にはうつすらと白粉がはたかれ、ほんのりと紅をさされる。

「意外と薄化粧なんだね」

顔に何もされていない僅かな隙を縫つて呟くと、化粧を担当していたメイドが首をかしげた。

「濃い化粧は下品ですよ？それにフェリシア様はまだお若いのですから、素材を生かさなくては。ご命令とあれば厚化粧にもいたしますが」

「あ、いえ、このままでいいです」

これ以上時間をかけてこねくり回されてはたまらない。即答するフェリシアに微笑んだメイドは、再び作業に戻つた。化粧が終われば手足の爪を磨かれ、ペディキュアを塗られ、長時間立ち、踊ることを見越してマツサージが施される。足の刺激にうつとりしている間もなく、気づけば昼を過ぎていた。

「さあフェリシア様、準備ができました。そろそろ広間に向かいましょう」

「ありがとう」

最後に薄く透けるレースの長手袋に腕を通し、足元に用意された靴を履いて立ち上がったフェリシアは、ちらりと姿見に目を向けた。鏡にはベビーピンクのドレスを纏つた彼女が映っている。色合いこ

そそれほど派手ではないが、幾重にも布地を重ねて作った襞と繊細なレース、散りばめられた小粒の宝石で飾られたドレスは可憐で、やや幼い顔立ちのフェリシアによく似合っていた。結い上げられた髪や化粧の映えも美しく、フェリシアは本当に自分なのかと二度見したほどだ。

（なるほど、苦勞した甲斐はある、か。メイドさんたちはすごいなあ）

着飾っている間は鬱屈としていたフェリシアだが、いざ完成形を目の前にしてみればやはり嬉しい。最後は軽やかな足取りで自室を後にしたのだった。

披露会の行われる大広間は、行政棟の中央、最も立派な入り口から、ホール中央の扉をくぐるとすぐに出られるという。行政棟の前は、貴族や各国の重鎮が乗りつけた馬車や、着飾った紳士淑女たちで溢れ賑わっていた。しかしフェリシアは来客ではなく、お披露目される側である。極力来客から姿が見えないようベールを被り、メイドたちに囲まれて、行政棟の裏手から建物の中へ入った。

「ここからは、お付はメリッサ嬢お一人です。よろしいですね？」

「大丈夫、道順は覚えています。ここまで、ありがとうございます」

王族棟の侍女たちは他の仕事が残っているのでここまでだ。人垣を作ってくれた彼女達に礼を告げて、フェリシアとメリッサは広い廊下を歩き始めた。今日はメリッサもいつものメイド服ではなく小花柄のドレスを着て、お下げにしている赤毛はゆるく後頭部で纏めてあった。

「私の準備もあったのに、よくそんなに可愛くできたね、メリッサ」
半歩遅れてついてくるメリッサを振り返って声をかけると、彼女はぽつと頬を赤らめる。

「そ、そうですね？変じゃ、無いでしょうか」

「ううん、可愛い。よく似合ってるよ」

「ありがとうございます。でも、お嬢さまの方がもっとお綺麗です」

はにかみながら笑うメリッサに癒されているうちに、フェリシアは大広間の控え室までたどり着いた。見張りの騎士に名前を告げると、恭しく扉を開けられる。中はフェリシアの私室のリビングルームと同程度の広さと内装の部屋で、奥の一人掛けソファにオズワルド、その両脇の簡素な椅子にキアランとベネディクトが座っていた。

「遅い」

フェリシアの顔を見るなり顔を顰めたキアランは、相変わらず黒い騎士服だ。普段の物よりは上等らしく、金のラインやボタン、飾り襟なども豪華だが、たださえ短い前髪を上げているので強面度が上がっている。そんな王弟殿下には目もくれず、フェリシアは部屋の中央に進み出てオズワルドとベネディクトに向かって優雅に腰を折った。制服をたたきちゃんと着ただけのキアランと違い、二人はそれぞれ華やかに着飾っている。

「ご機嫌麗しく、オズワルド陛下、お父様。お待たせして申し訳ありません」

楚々とした令嬢を演じるフェリシアに、オズワルドは満面の笑みを浮かべて立ち上がった。

「とんでもない、披露会には十分時間があるよ。いつもの君も可愛らしいけれど、今日は一段と綺麗だね、フェリシア」

「まあ、ありがとうございます。陛下もとても素敵ですよ」

につこり笑うフェリシアの横で、ベネディクトがうんうんと頷いた。「綺麗で当然、私の愛娘ですぞ。やはりフェリシアにはこの色がよく似合う」

「このドレス、お父様の見立てですか？ありがとうございます」

道理でセンスがいいはずだと自分の着ているドレスを見下ろすと、オズワルドが苦笑した。

「私もドレスを贈ろうとしたら、チェンバレン公に先を越されてしまったよ」

「そんな、お気持ちだけで十分です、陛下」

和やかに会話する二人と、それを顰め面で睨みつける王弟という

つもの図をしばし眺めたベネディクトは、不意に部屋の隅に控えるメリッサに視線を移した。目が合い飛び上がるメリッサに微笑みかけ、立ち上がる。

「久しぶりだな、メリッサ。今日のお前も可愛らしいよ」

「あ、あ、ありがとうございます……」

真つ赤になつて消え入りそうな声でぺこぺこ頭を下げる彼女に、楽にしているとベネディクトは手を振るう。

「私も今日は各国の使者と会談がある。ずっとフェリシアについてはいられないから、娘を頼んだよ」

「は、はい！お任せください！私、絶対にお役に立つて見せます！」
少なくとも王弟殿下よりは、と胸の内で付け足したメリッサの心を知つてか知らずか、ベネディクトは鷹揚に頷くとフェリシアたちを振り返つた。

「さあ若人達よ、そろそろ宴の時間だ。準備はよろしいかね？」

その言葉通り、披露会の始まりを告げる七つの鐘が鳴り響いた。

披露会場は四段の高さに分かれた広大な扇形の部屋だった。頂点の部分が最も高い段で、王の座る玉座が据えられている。そのすぐ下に、王弟のキアランや宰相ベネディクトらが控える段。それから一段下がった広いスペースに集まつた来客たちが並び、扇の弧にあたる最も低い段に、料理や酒の載つたテーブルが設えられている。まだ外は明るいにもかかわらず天井から吊り下げられたシャンデリアには残らず明かりが灯され、精緻な彫刻の施された柱や美しい絵の描かれた壁や天井を明るく照らしていた。

「皆の者、今日はよく集まつてくれた。社交シーズンには早い今、城にご招待したのは他でもない。我が国に真の意味で救世主が誕生したためである！」

厳肅な空気の中、まずはオズワルドの朗々とした口上が広間に響いた。オズワルドの合図を受けたフェリシアは覚悟を決めて控え室から玉座の横に出る扉を潜ると、ゆっくりと胸を張って彼の横に並び

立つ。その姿が観衆の目に映った瞬間、静かだった広間が俄かにざわつき始めた。

「静粛に！」

フェリシアが聞いた事もないようなベネディクトの鋭い声が飛び、人々はすぐに静まり返る。しかしその目は好意的なものも訝しげなものもすべて、フェリシアに向けられていた。ごくりと唾を飲み込み、まずは淑やかに一礼する。

「はじめまして、皆様。わたくしは、フェリシア・チェンバレンと申します」

打ち合わせどおりに自己紹介を始め、フェリシアが考えたのではない抱負を語る。予言の救世主として生まれながら、今まで国に貢献することなく恥じていること、そのかわり今後は身を粉にして王国と国王に仕えるつもりであること、そして世界を平和に導きたいことと等々、一夜漬けで覚えた選挙演説のような台詞をなんとか間違えずに言い終えると、拍手と歓声が上がった。本当に歓迎されているかはともかく、表面的には喜ばれている様子に、ひとまず胸をなでおろす。

「聞いての通り、長らく病床の身であったフェリシア嬢の回復とその力添えは近年最大の慶事である！グラノーヴァの奇跡に感謝を！」

『我らが神に感謝を！』

オズワルドの神に捧げる感謝の言葉を人々が復唱し、宴は本格的に幕を開けた。広間の隅に集まって歓談する貴族、中央に躍り出て、楽隊の生演奏にあわせて踊る貴公子や令嬢、人々の間を忙しそうに動き回る給仕。御伽噺のような光景にしばし見入っていたフェリシアに、オズワルドが苦笑交じりに声をかけた。

「フェリシア、君も楽しんでおいで」

「は、はい！」

下の段に移動すると、キアランが心底嫌そうな顔で腕を差し出してくる。

「どうぞ、フェリシア嬢」

ベネディクトの手前、言葉遣いは丁寧だが声音は棒読みである。

「……よろしく願います、王弟殿下」

フェリシアも最低限の礼儀としてそれだけ挨拶して、その腕に手を伸ばした。とはいえ完全に頼り切るのも癪なので、キアランの腕に触れるか触れないかのところで手を浮かせる。

「おい、どういづもりだ馬鹿女」

「馬鹿女に触られるなんて嫌だろうから、気を遣って差し上げているんじゃないですか」

すると、キアランの表情がくしゃりと歪んだ。

「いいから掴まっけていろ、転ばれでもしたらみつともない。これ以上兄上の顔に泥を塗るな」

「あら、いいんですか？私が見ただけでお部屋が穢れるんでしょう。私が触ったりしたら、腕、腐り落ちちゃうかもしれませんよ？」

「貴様ッ……」

埒の明かない嫌味の応酬に、ベネディクトがごほんと咳払いをする。フェリシアもキアランも、今の会話を観衆に聞かれてはまずいと思うくらいには冷静だった。よってそのやり取りは小声で為されていたのだが、腕を組んだままその場から動かず囁きあう二人の会話の内容が、睦まじい愛の言葉だと周囲に誤解されるのは当然の流れだ。その事実気づいた二人はそろって青くなり、そそくさと段を降りた。すると人々が一斉に、フェリシアに向かって話しかけてくる。

「フェリシア嬢、この度は目出度く意識を回復されたということですが、お話を窺ってもよろしいですか？」

「近々戦場に出られる予定は？お父上はそれについてどう思っておられるのかな？」

「そんなことより、僕と一曲踊っていただけますか？」

「あら、私はフェリシア様の魔法が見てみたいですわ、すごい魔力の持ち主でいらっしゃるのでしょうか？」

老若男女問わず四方から質問攻めにされ、控えていたメリッサが近

づくことも敵わない。そんなフェリシアを救ったのは、キアランだった。

「失礼。チェンバレン公爵令嬢はまだ社交に不慣れだ。歓談やダンスの申し込みは、まず俺を通していただきたい」

真つ当な助け舟の出し方にフェリシアとメリッサが意外そうな顔つきでキアランを見上げる間にも、興味本位で声をかけてきた貴族たちがキアランの迫力に負けて去っていく。残った中からキアランが問題なしと判断した者はフェリシアと主に魔法について言葉を交わした。その合間を縫って、メリッサが軽食や飲み物を運び、甲斐甲斐しくフェリシアの世話を焼く。

各国からの招待客やフェリシアやチェンバレン家に害意を持つ貴族たちは、オズワルドとベネディクトが相手をしていた。そんな中、何度キアランにあしらわれてもやってくる金髪の男がいた。年代も体格もダリルに似た、逞しい体躯の男。しかし雰囲気はどちらかといえばオズワルドやベネディクト側で、中年ながら端正に整った顔立ちをしている。その青い瞳は先程から品定めするようにじろじろとフェリシアに向けられていた。

「ねえ、あの人、何？」

周囲の人が途切れたのを見計らってキアランに尋ねると、相変わらず不機嫌そうな声が返ってくる。

「ハロルド・アーデン将軍。アーデン公爵家の当主だ」

それを聞いたフェリシアは思い当たった。知識だけならば知っている。フェリシアの生家チェンバレン家と双壁を為す王国最大の貴族だ。

「やっぱり、お父様と仲が悪いの？」

「さあな。表立って対立してはいないようだが、お前が救世主となるのを苦々しくは思っているだろう」

宰相であるベネディクトが文官のトップならば、ハロルド将軍は軍のトップだ。国防の領域にチェンバレン家の娘がしゃしゃり出てくるとなれば、なるほど確かにいい気はしまい。父の政治家生命のた

めにも事を荒立てない方が良さそうな相手だと、フェリシアは將軍の顔を記憶した。

「しかし、捌いても捌いてもきりがないな……」

また数名、こちらへ向かつてくる貴族の団体を見つけて、キアランが疲れたため息をついた。口には出さないがフェリシアも同感だ。かれこれ半刻、まずいことを口走らないよう神経を削りながら喋りつばなしだ。丁度そのとき、広間に張り出したバルコニーで音楽を奏でていた楽隊が新しい曲に入った。

「……致し方ない。踊るぞ」

「え、ちよつと」

心底仕方なさそうな顔で広場に進み出るキアランに引つ張られ、フェリシアは彼の向かいに立たされた。途端に、周囲の令嬢達が騒がしくなる。

「キアラン殿下が踊りを！！？」

「私、殿下が踊るところなんて初めて見るわ……」

「何度お誘いしても踊ってくださらないのに」

「あの娘、予言の救世主だからっていい気になって！」

しかしフェリシアは、そんな囁きも耳に入らないくらい慌てていた。

「こんな速い曲無理だつてば！聞いてますか馬鹿殿下！！？」

ダンスの手ほどきは受けているとはいえ、フェリシアが知っているのはゆっくり踊る初歩のステップのみだ。それ以外は、強いて言うなら優花が学校で習った盆踊りとフォークダンス。ハイテンポな前奏に慌てるフェリシアの腰を攫い、腕を取ったキアランはにこりともせず告げた。

「五月蠅い、誰が馬鹿だ。だいたい、踊りなんざテンポが速いほうが踊りやすいものだ。知っているステップでいいから俺に合わせたいればいい」

横暴極まりない態度と言葉に、フェリシアは半眼で目の前の男を睨みあげる。

（人の足を存分に踏みつけてストレス解消する気じゃないでしょう

ね？それとも兄上の顔に泥を塗るなど言っておきながら、すつ転ぶところを笑ってやろうという魂胆？)

ついにはそんな疑心暗鬼に陥りながらも、曲が始まると体は滑らかに動き始めた。基本的なステップは初歩のものでも代用が利く上、早いメロディは案外リズムも取りやすい。それから、意外に小学校の運動会で踊ったフォークダンスの動きも役に立った。マイムマイムのテンポで動けばいいのだ。軽快な音楽に合わせてくると舞い、跳ねる。フェリシアのドレスがふわりと広がって、腰のリボンが羽根のように翻った。

(悔しい……ちょっと楽しいんだけど。型にはまったダンスの先生相手より踊りやすいし)

ちらりとキアランを見上げると、彼は仏頂面のまま踊っていた。自分だけ楽しんでいたことにまた腹が立ち、フェリシアはパートナーの足めがけて踵を振り下ろすが、あっさりとかわされる。しかし反撃されることも無く、結局フェリシアは足を踏まれることも転倒することも無く一曲を踊りきった。

「お相手ありがとう、フェリシア嬢」

いかにも決まりごとなので嫌々やっていますという態度で礼をとるキアランは、そのポーズだけを見るなら完璧な貴公子だ。フェリシアは一瞬見惚れそうになった自分に活を入れ、負けじと美しく一礼する。

「こちらこそ、楽しゅうございましたわ、王弟殿下」

顔を上げて見詰め合う二人の間には、静かに火花が散っていた。互いに「心にもないことを言いやがって」という心境だが、少なくともフェリシアの楽しかったという気持ちに嘘はない。なんとなくフェリシアが勝ち誇った気分できると、急に周囲が騒がしくなった。

「キアラン様あ！」

「？」

黄色い声に二人して横を向くと、数名の貴族令嬢達が突進してくるところだった。もちろん、動きにくいドレスを纏った令嬢達はし

たなく走るわけではないのだが、向かってくる様子は獲物を見つけた獵犬のようだ。フェリシアがちらりとキアランの顔を見上げると、彼の顔は引きつっていた。

（この人にも苦手なものがあるんだ）

内心にやにやと笑っていると、腕を引つ張られた。

「おい、移動するぞ」

切羽詰ったキアランが促すも、時既に遅し。二人はドレスという名の戦闘服に身を包んだ狩人達に囲まれていた。

「王弟殿下、今日も素敵でいらっしますわね」

「私、殿下が踊りを嗜まれるだなんて存じ上げませんでしたわ」

口々にキアランを褒め称える彼女達の中から、特に派手な衣装を着た娘が進み出る。

「当然、私とも踊っていただけでしょう？」

言い放つ娘の表情は自信に満ちていた。それも無理からぬ事で、彼女は美しかった。黄金の巻き髪に、宝石のような青い瞳を縁取る長い睫毛も、白い肌に薔薇色の頬も、金糸銀糸で刺繍を施した目にも鮮やかな青いドレスも、いつそ傲慢さを滲ませたその笑顔すら、娘の魅力を引き立てる一因だ。一緒にいる他の娘たちは彼女の取り巻きなのだろう、今は一様に口をつぐんでいた。

「……申し訳ないが、ヴェロニカ・アーデン嬢」

どこか疲れた様子で、キアランは言葉を返す。

「今日の俺は救世主様のお守りだ。お誘いは嬉しいが、謹んで辞退させていだこう」

（ちよつとなによその断り方、こっちに矛先が向くじゃない！女の嫉妬は怖いのよ！？）

フェリシアの心の叫び通り、令嬢はこちらを睨みつけてきた。恐ろしいことにその怒りに満ちた顔までも、女のフェリシアが見とれるほど美しい。フェリシアはぎこちない笑みを浮かべて相手の情報を思い出した。ヴェロニカ・アーデン公爵令嬢、十八歳。先程見かけたハロルド・アーデン公爵の次女。その人となりまでは知らないが、

この短い間に嫌でも判らざるを得なかった。すなわち、高飛車、高慢、典型的な権力者の娘。

「あら、フェリシア様はこの世界を救う偉大なる救世主様でいらっしやいますもの。初歩のステップで誤魔化した滑稽な踊り手よりも見た目も技量もずつと華麗な踊り手のほうが、キアラン様には相応しいと認めてくださいますわよ。ねえ？」

挑戦的な美少女の眼差しに、フェリシアは戸惑った。

（ずいぶんわかりやすい嫌味を言う子だなあ。社交界でちゃんとやっていけるのかしら？）

的外れな心配をするフェリシアだが、アーデン公爵家は王国最有力貴族の一つだ。大抵の貴族は、何を言われようとアーデン家には逆らえない。ヴェロニカには、他人の顔色を窺う必要など無いのである。そしてチェンバレン家がアーデン家に比する数少ない貴族であることなどまったく意識の外にあるフェリシアは、渡りに船とばかりに頷いた。

「ええ、キアラン殿下が私のパートナーといっても、形ばかりのことですし、どうぞお二人で踊ってきてください」

「おい！」

裏切り者と言いたげな声を上げるキアランから、フェリシアはそそくさと離れた。ヴェロニカに睨まれた分の仕返しとしては上出来、してやつたりと満面の笑みを浮かべてやる。

「勿論殿下はお優しい方ですもの、ヴェロニカ様だけではなく他の皆様とも踊ってくださいますわ。どうぞ楽しんできてください、殿下」

それを聞いて黄色い歓声を上げる娘達が、キアランに詰め寄った。次は私、いいえ私がという声を背に、なぜか浮かない顔をしているヴェロニカの様子は気になったが、フェリシアは「ごきげんよう」と腰を折りさつさと退散したのだった。

10・披露会にて（前編）（後書き）

「ごきげんよう」というとマリミてを思い出すんですが人形姫の（というか一般的な上流階級の）お嬢様方の交流はもつと殺伐としていそうですね。いかに美しく洗練された言い回しで嫌味をぶつけ相手に確実なダメージを与えるか。ちくしょう夢が壊れる。

それはさておき主人公の披露会です。実は披露宴と間違えて打つこと数回。いったい誰との結婚を披露するというのが。見落とした誤字が残っていないことを祈るばかりです。これは今回に限ったことじゃないですが。

長いので前後編に分けました。

11・披露会にて（後編）

（あー、スカツとした！）

キアランの青い顔に思い出し笑いを堪えながら、フェリシアは大広間を出た。メリッサが健気に次々と運んでくる飲み物をつい断れず、飲みすぎたようだ。巡回兵にトイレの場所を聞いて用を足すと、息抜きに庭へでてみる。さすがに盾、もといキアランなしで広間に戻って訪問客達を捌き切る自信はないので、花でも眺めて時間を潰すことにした。夕暮れ時にはまだ早い庭園内には、同じく息抜きをしようとは抜け出してきた貴族の姿がちらほら見えるが、誰もフェリシアに気づかない。機嫌よく庭園を回っていたフェリシアは、建物の角を曲がってぎよつと立ち止まった。

「オズワルド陛下！？」

人気の無い池のほとりで、金の髪と衣装の国王が一人佇んでいた。その様子はまるで彼の方こそが美しい人形のような。オズワルドはフェリシアの声に振り返ると、いたずらっぽく微笑んだ。

「やあ、フェリシア。キアランはどうしたんだい？」

「嫌いな私と一緒に気詰まりでしょうから、置いて来てあげました」

あくまでも親切心からだということを強調すると、オズワルドはくすくすと笑った。

「あのキアランを出し抜くとは、君もなかなかやるね」

「陛下には言われたくないです、お供の方々はどうしたんですか？」
護身程度の嗜みしかないオズワルドには、フェリシアの比ではない数の護衛騎士がついていたはずだ。彼らの行方を問うと、君と同じだよと返される。

「私にだって羽を伸ばしたい時くらいあるさ」

「それはわかりますけど。……根回しは不十分なんでしょう？私が、馬鹿なことをしでかしたせいで」

フェリシアが水呼びの失敗などしなければ、急いで披露会を開く必要も無かった。

「私のせいで、暗殺者でも入り込んでいたら、大変なことに」

そこでオズワルドはフェリシアの顔に指を伸ばし、彼女の鼻をちょんと摘んだ。

「ふにやつ!？」

オズワルドは驚くフェリシアに微笑み、言い聞かせる。

「あまり、私とこの国の騎士団や軍部を見くびらないで欲しいな。城の警備は完璧だよ?ここにいて誰一人、命の心配なんてしないでいい」

「でも、もつと根回しする時間が欲しいって?」

「それは例えば、自分が貴族社会の女主人だと誤解している馬鹿な娘が、君に酷いことを言わないようにするための時間が、少し足りなかったというだけだ。すまなかったね、私の不用意な言葉と力不足が君を不安にさせた」

「そんなこと!」

ありません、と続けようとしたフェリシアの頬を、オズワルドは掬い上げる。

「安心して、フェリシア。君は、私の大切な人だ。誰にも、傷つけさせはしない。渡さない」

次の瞬間、フェリシアは抱きすくめられていた。男にしては華奢とはいえ、女性では決してありえない力強い腕が腰や背中に回され、引き寄せてくる。フェリシアははじめて、国王兄弟に瞳の色以外の共通点を見出した。強引なところが、似ているかもしれない。

(でも……)

ぞくりと背中が栗立った。キアランに引つ張っていかれたとき腹は立ったが、あるとき、こんなに怖かっただろうか。

「陛下……離して下さい。人に見られたら大変です」

震える声でそれだけ言つと、腕は名残惜しそうに離れていく。

「こんなところで君に無体を働く気は無いよ。ただ、君を放したく

ないだけなのに」

オズワルドの目には、何かどろりとした独占欲じみた光が宿っていた。それでいて、見えているのはフェリシアではなく、フェリシアを通じた別の誰かのような、強烈な違和感。フェリシアが一步後退すると、それが合図だったかのように、オズワルドは再び優しく理知的な笑みを浮かべていた。

「いや、か弱い娘がいきなり男に抱きつかれて、怯えない方がおかしいな。すまない」

「い、いいえ……」

頭を振るフェリシアに弱々しく礼を言っ、オズワルドは傍の裏口から行政棟の中へ戻っていった。

ところで、この二人の一連の動きをこっそり覗き見ている人物がいた。ヴェロニカだ。覗き見など恥ずべき行為だと心得てはいたが、大貴族の娘にして予言の救世主であるフェリシアが自我を得た今、ヴェロニカの地位を揺るがしかねない。オズワルドと親しげに話すフェリシアに、ヴェロニカは齒を食いしばった。

（そういう、ことだったのね）

ヴェロニカがいくら声をかけてやっても断りの言葉以外は発しなかったキアランが、フェリシアと踊っているのを見たとき、腸が煮えくり返るようだった。何でも自分が一番でなければ気がすまないヴェロニカは、フェリシアから彼を取り上げる事にあっさりと成功した。しかし簡単に手に入るものに興味などない彼女は一曲だけ王弟と踊ってやり、侍従にフェリシアの後をつけさせたのだ。そして、国王とフェリシアが逢引をしているという報告を聞いて飛んできたのである。

（王弟を囚にして、自分は本命の国王陛下と逢引だなんて、ずる賢くてはしない女……！）

フェリシアが偶然オズワルドと出くわした可能性も考えず、覗きをしている自分のことも棚に上げて、ただ一人憎悪を募らせていくヴ

エロニカ。その目の前で、オズワルドがフェリシアを抱きしめる。
「！」

それはほんの少しの間のことで、すぐに抱擁をといたオズワルドは行政棟へ戻って行ったが、ヴェロニカは怒りと屈辱で白い顔を真っ赤に染めていた。

（あの女、あの女、あの女！！！）

ヴェロニカはいずれ王妃になるのは自分だと確信していた。そのために美貌と教養を磨き上げ、オズワルドに面会のかなう催しには必ず出席し、卑しい出自の王弟にも媚びてやったのだ。

（私がこの国の、世界の全てを手に入れるべきなのに！邪魔だわ、フェリシア・チェンバレン！！魔力以外の全てが私よりも劣っている、人形の分際で！！！！）

今にも無防備な背中に刃物でも突き刺してやりたいところだったが、ヴェロニカは姉と違って武術のことなど何もわからない。護身用に多少の攻撃魔法は心得ているが、フェリシアに魔法で勝てるはずも無い。そもそも、救国の英雄になると言われた相手に殺傷事件を起せば反逆罪ものだ。そこでヴェロニカは、もっとも得意とする陰湿な女の戦いに出ることにした。

（あの女の評判を地の底まで落としてやればいいわ。そして目を覚ました国王陛下に、私を見てもらうの）

まずはこの披露会を台無しにしてやることだ。この会には国内の貴族だけではなく、各国の使者や外交官も招待されているという。さぞ効果的にフェリシアの失態を広めてくれることだろう。オズワルドが姿を消した後の一瞬でそこまで考えたヴェロニカはおもむろに立ち上がり、周囲が無人であることを確認すると、大胆にフェリシアの方へ歩いていった。フェリシアは逢瀬の余韻に浸っているのか、ヴェロニカに背を向けたまま気づく様子も無い。

（あのドレスと髪が泥水でグチャグチャになれば、いくら急いで準備しなおしたって、夜まで間に合わないわ）

貴族の舞踏会は夜こそが本番だ。ヴェロニカは愉快そうに唇の端を

吊り上げ、渾身の力を込めてフェリシアの背中を突き飛ばした。

「――」

突然背中に強い衝撃を感じたフェリシアは、声も無く前に倒れこんだ。すぐに受身を取ろうとし、目の前が池では意味が無いと思い直す。思い切り体を捻れば、先程見た美しい少女の、憎悪に歪んだ笑顔があつた。ほんの一瞬にも満たない間にそれだけのことを認識したフェリシアが最後に行ったのは、

ゴオオオツ！！！！

魔法に頼る、だった。大規模な突風の魔法を発動して池の水を吹き飛ばしつつ、宙に浮いた自分の体を滞空させる。とつさに加減できずに必要以上の大風を吹かせてしまい、轟音を立てて風が吹き荒れ軽い草木が千切れ飛び、巻き上がった大量の水が降り注いだ。しかしその場にいた二人の娘の髪や衣服には、ほんの些細な乱れや汚れも残さない。

「……！」

ヴェロニカはその魔法のあまりの巧みさに、逃げることも忘れて立ちすくんだ。魅入っていたと言つてもいい。なにしろ魔法は大きな魔力を扱うほど細かな計算が難しく、難しい突風の魔法を、髪の毛一本乱さずに使うのは至難の技なのだ。

「……どうしてくれるの」

突風の魔法を持続させて池の上に浮いたままのフェリシアは、静かな声でヴェロニカに問うた。

「どうしてそんなに私を敵視するのか知らないけど、もう少しでドレスと髪がグチャグチャになるところだったでしょ！お父様が心を込めて選んで、メリツサたちが朝御飯も食べずに整えてくれたのよ！？」

「ひっ……！！」

「お庭に至っては本当に台無しじゃない、庭師のおじいさんがいたらなんて言うか！……やったのは私だけだ」

風で植物がなぎ倒され、泥水塗れの惨憺たる光景を見て、フェリシアは苦い表情になる。庭を心から愛する素朴な庭師から、説教の一つでも覚悟しなければならいかもしれない。一方、ヴェロニカはフェリシアを恐れながらも、相手の激怒するポイントがいまひとつよくわかっていなかった。衣装が台無しになると怒るのはわかるが、メイドや庭師の労力などヴェロニカにとってはどうでもいいことだったからだ。そして、無自覚に地雷を踏んだ。

「こ、こんな来る者もない裏庭の雑草が何だというのです！？取るに足りない身分の者のことなど、私には関係ないでしょう！！？」その言葉にフェリシアは目を据わらせた。事を荒立ててはまずい相手だから穏便に済ませてやろうと思っていたが、限界だった。ヴェロニカは本当に、自分より下の身分のもののことなどなんとも思っていない。今日はフェリシアに向かってきたからいいものの、メリッサや世話係たちに憎しみの矛先が変わる恐れがあった。

（そんな事、させるもんか）

フェリシアは水呼びと氷結の魔法を駆使して数本の氷の矢を作り上げると、瞬時にヴェロニカの足元に向けて氷の矢を放った。

「きゃああああっ！！！」

目にも留まらぬ早業に一瞬息を呑んだヴェロニカが悲鳴をあげる。すると、フェリシアの突風の魔法とヴェロニカの悲鳴に気づいた兵士達が駆けつけてきた。

「お二人とも、どうなさいました！？」

血相を変えて駆けてきた兵士に、ヴェロニカがフェリシアの仕打ちを訴えるよりも早く、フェリシアはにこりと微笑んで彼に言った。

「ヴェロニカ様に助けていただいたの」

「！？」

どういうことだと言いたげなヴェロニカを尻目に陸地へちよこんと降り立ったフェリシアは、堂々と虚偽の証言を続ける。

「突然、そこに刺さっている氷の矢が飛んできて、ヴェロニカ様が突き飛ばして助けてくださったのよ。でも突き飛ばされた先が池だったものだから、とっさに突風の魔法を使ってしまった。お庭を荒らしてごめんなさいね？」

なるべく可愛らしくて頭の足りない深層の令嬢を装って小首を傾げると、兵士達は「刺客だ」「賊だ」と叫んで散り散りに駆け出した。その間、ヴェロニカは声も出せないまま口を開閉していた。下手に騒げば、自分が害意からフェリシアを突き飛ばしたことが知られかねないのである。むしろフェリシアの恩人に仕立て上げられたこの状況はヴェロニカにとって幸運のはずだったが、彼女は訝しげにフェリシアを見上げた。

「どういうおつもりですか？」

「別に、私はお嬢様同士の権力争いに興味はありませんから。変にこじれてお父様の邪魔になりたくないし、私に嫌がらせしてくる程度なら穏便に済ませようと思っただけです。この程度、如何様にも防げますし」

それでも疑わしげなヴェロニカに、フェリシアはとっておきの笑みを浮かべた。

「でも、私の周りに迷惑をかけるようなら容赦はしません。次は当てますから、そのおつもりで」

それを聞いたヴェロニカは、蒼白になって踵を返した。重いドレスでできるだけ急いで逃げ帰る彼女の背中をのんびりと眺めながら、フェリシアは重い息を一つ吐いたのだった。

その後、披露会は中止されることもなく続けられた。十分に脅しておいたヴェロニカも、特に何かしてくる様子はない。しかし裏庭での騒動は国王兄弟やベネディクトの耳に入ったようで、フェリシアは主にキアランからの小言をたっぷり聞かされる羽目になった。

「だいたいだ、パートナーを他の娘に預けて女一人で裏庭散策など、非常識にもほどがある。貴様など一度頭から池に突っ込んでいれば

よかったんだ、この大馬鹿者！」

披露会が終わった後の控えの間。令嬢の輪の中へ置き去りにされ、散々玩具にされたらしいキアランは疲れきった顔だった。罵倒にも力がなく、当然怖いはずはない。涼しい顔で聞き流すフェリシアの前に、今度はベネディクトが進み出た。

「フェリシアや、私のことを気遣ってくれるのは嬉しいが、あまり無茶をせんでくれ。私の政治基盤は、アーデン公と対立した程度で揺らぐほど脆弱ではないのだから」

「う……ごめんなさい、お父様」

年老いた父親に心配そうな顔をして言われては、さしものフェリシアも罪悪感に駆られた。力なく頭を下げたフェリシアを庇うように、メリッサが口を挟む。

「旦那様、悪いのは私です。お嬢様専属メイドとあるう者が、主人のお姿を見失ったばかりか嫌な思いをさせるだなんて」

「何言ってるの、メリッサはちつとも悪くないよ」

寧ろあの場にいたらフェリシアより先にヴェロニカの標的になっていたかもしれないことを考えると、メリッサが不在の方がよかった。などと言えるわけもないフェリシアに、ベネディクトも加勢する。

「そうとも。そもそもフェリシアを守るのはその悪たれ黒小僧の仕事だったのだから、お前が気にする必要はないのだよ、メリッサ」
敬愛する主人父娘の言葉に感激して真っ赤になるメリッサを尻目に、キアランはじろりとベネディクトに目を向けた。

「チェンバレン公、誰が悪たれ黒小僧ですか、誰が」

「お前さんのほかに誰がある。か弱いご婦人ひとり守れずに、国王陛下を守るのか？近衛騎士の名が泣くわ」

王弟相手にも齒に衣着せない物言いでキアランをやり込めたベネディクトは、最後に黙って成り行きを見守っていたオズワルドにも苦言を呈した。

「陛下にも今一度万全の対策で当たっていただきたいものですな」
するとオズワルドは当然といわんばかりに頷いた。

「もちろんだとも、チェンバレン公。私達の大切なフェリシアに、万が一のことがあつては大変だからね。何なら、専属の護衛でもつけようか？」

その言葉に、フェリシアは首を振った。

「いいえ、部屋の入り口に兵士さんたちがいるだけでも窮く…ありがたいのに、そんなお話受けられません。心配なさらないで下さい、自衛はできます」

するとこちらにも本気ではなかったのか、オズワルドはあっさりと引いた。

「フェリシアが言うのなら、そのように。さあ、今日はもう遅い。おやすみ」

「はい……ありがとうございます。失礼いたします」

フェリシアは退出の礼をとってメリッサを伴い、控え室を出た。こうして、長い一日が終わったのだった。

11・披露会にて（後編）（後書き）

舞踏会編、これにて終幕です。フェリシアは基本暢気ですが、やられたらやり返す主義です。特に自分自身よりも周囲へ向けられた悪意に敏感です。穏健の仮面を被った過激派。そして最近、主人公以上にオズワルド陛下の化けの皮が剥がれてきている気がしてならない。

次はいよいよ戦闘！に、なるといいな……。

12・戦闘訓練（前書き）

愈々本格的に戦闘描写入ります。

残酷表現ありにしているので大丈夫かとは思いますが、血とか内臓とか飛び交ったりするので苦手な方はご注意を。

12・戦闘訓練

披露会から数日後。貴族たちの間で、フェリシアの評判はゆつくりと、しかし確実に上がってきていた。実績のないフェリシアの実力を疑問視する声や、単純にチェンバレン家に反感を示す勢力もあるが、先日 of 披露会の成功によりフェリシアが抜け殻でないことは誰の目にも明らかになった。加えて、フェリシアがヴェロニカをやりこめた一件も貴族令嬢達の間で静かな噂として広まっていた。

「後は実戦で戦えるようになるのみだな」

披露会が終わった後、毎日のように行われていた礼法やダンスの授業は五日に一回となったが、ダリルの授業はそのまま続いている。ある日の授業中、王族棟の前で一通りいつもの鍛錬が終わると、ダリルはまずそう切り出した。

「実戦、ですか」

「うむ。訓練用の人形を巧みな魔術で切り裂いて見せても、実際の魔物を前に恐慌状態に陥るようではいかん。実戦でこそ実力以上の力が出せねば、救世主としてのお役目など果たせまい？」

「はい……」

オズワルドは、フェリシアが軍の最後尾にいただけで士気が上がるから戦わなくていいと言うのだが、フェリシア自身はお飾りに甘んじるつもりはなかった。せめて、魔物に襲われても自分の身くらいは守れるようになっておきたい。だから師匠の言葉に頷きはしたものの、彼女には心配事があった。

「まだ、炎は苦手か？」

「すみません、お師匠様。自分でも、上手く使おうとは思ってますけど」

発動方法がわかる魔法ならばどんな高等魔術だろうと難なく連発してみせるフェリシアが、唯一思い通りに使えないのが炎を操る魔法だった。しくじらずに使えるのは最低級の火起し程度で、最もポピ

ユラーな攻撃魔法である火焰の魔法すら安定させることができない。
「火が怖いのか？」

言い当てられて身を竦めるフェリシアに、ダリルは相変わらず感情の起伏に乏しい声で続けた。

「恐れは悪いことではない。それを忘れた人間は、力に溺れ身を滅ぼす。だが、怖がってばかりでは何処にも進めんよ」

淡々と言われる言葉が、ダリル流の励ましの言葉だということとはわかっていて。フェリシアは迷いを振り切って顔を上げた。

「大丈夫です。今すぐは無理でも、いつか克服できるように頑張りますから、今日の課題を教えてください」

教え子の真剣な眼差しに、あまり感情を表に出さないダリルには珍しく微かに微笑み、頷いた。

「今日は王都郊外の平原にて魔物狩りを行う」

フェリシアは首をかしげた。城と城下町は高い城壁に囲まれて魔物に侵入されることはない。たまに鳥の魔物が飛んできて、三交代制で一日中城壁に詰めている兵士達が見つけ次第、すぐに弓矢や魔法で撃ち落している。しかし城壁の外ではいつ魔物と遭遇してもおかしくない。王都や主要都市周辺は定期的に討伐隊が派遣されるので弱い魔物ばかりだが、それでも街道に行く商人や旅人が襲われることはよくあるのだ。ダリルはそういった弱い魔物で実戦訓練をするつもりだった。

「ということは、お城の外に出られるんですか？」

「ああ。昨日、ようやくオズワルド陛下から許可が下りてな」

本来ならもっと早くこの段階に進みたかったのだがとため息をつくダリルの横で、フェリシアが歓声を上げた。なにしろこの世界で暮らすようになって以来、城の外に出るのは初めてなのだ。

「わーい、町が見られる！」

「フェリシア、気持ちはわかるが観光ではないのだぞ」

「うっ……ご、ごめんなさい」

ころころと表情の変わる弟子に苦笑を漏らし、ダリルはフェリシア

の背後に向かって手招きした。

「今日は遠出になるからな、昼食を用意してもらった」

「お嬢様、お昼ご飯ですー!」

振り返ると、大きなバスケットを抱えてボンネットを被った外出着のメリッサが駆けて来る。

「メリッサ!? 何でお出かけ服なの!? まさかと思うけど……」

「私も一緒にします!」

予想通りの専属メイドの言葉に、フェリシアは頂垂れた。

「あのね、一応これから、魔物と戦いに行くんだよ?」

「私のお仕事はお嬢様に気持ちよく過ごしていただくことですから! 郊外だろうと戦場だろうとお供します!」

一歩も引かない様子のメリッサを見て早々に説得を諦めたフェリシアは、縋るような目つきでダリルを振り返った。

「お師匠様も止めてください、危険ですって」

しかしダリルはあっさりフェリシアを裏切った。

「ふむ、いいのではないか? 守り手は何も、私たちだけではない」

「へ?」

わけがわからない、という顔の教え子に、ダリルはオズワルドから賜ったというフェリシアの外出許可証を差し出した。その条件の第一文を見て、フェリシアは顔を顰める。

「なんですかこれ! 私の外出の第一条件がキアラン殿下を護衛にすることって!」

「それはこちらの台詞だ」

フェリシアの背後からのそりと姿を表したのは、黒髪黒服の王弟殿下だった。

「うわ出た! 王弟殿下って近衛騎士団の所属でしたよね、確かこの国戦争してましたよね、騎士って暇なんですか!?!」

「そんなわけがあるか馬鹿娘。俺は日々鍛錬と兄上の護衛で忙しい! 心底鬱陶しそうな顔でフェリシアに答えたキアランに、ダリルが補足する。

「戦場に行くのは国軍と魔道師団の役割だからな。近衛騎士は王が戦場に行かない限り、戦場で剣を振るうことはあまりない」

むしろ魔道師団の長であるダリルが長期間戦場にいない方が問題である。そんな事情もあってダリルはフェリシアの教育を急いでいたのだが、弟子に余計な心配はさせまいとその事は黙っていた。

「だから王弟殿下との遭遇率が異様に高かったのか……」

頭を抱えるフェリシアを見かねて、メリッサがダリルを見上げた。

「魔道師団長様、だとしてもどうして陛下は王弟殿下なんかを同行させるようお命じになったのでしょうか？ 団長様にお嬢様がいらっしやれば、百人力ですのに」

さらに王弟をなんか呼ばわりしたメリッサを咎めることもなく、ダリルは至極真面目に答えた。

「滅多にみないが、世の中には魔法の効かない魔物もいる。だから剣を使える殿下に同行していただくのではないだろうか」

すると、フェリシアが師匠を仰ぎ見た。

「剣くらいお師匠様使ってくださいよ、その筋肉は飾りですか！！？」

「……」

八つ当たり気味の暴言を吐かれてちよつと悲しそうなダリルに、フェリシアははつと口をつぐんだ。決して、この魔法絡み以外はいたって優しい、寡黙な師匠を傷つけるつもりではなかったのだ。

「ご、ごめんなさい、お師匠様。失言でした……」

しどろもどろに謝罪するフェリシアに氣にするなというように首を振ってみせるダリル。そんな二人とメリッサを、キアランがため息混じりに急かした。

「おまえたち、そこで日が暮れるまで師弟漫才を繰り返すつもりか？ 早く行くぞ」

確かにこんな同行者がいるのだ、さっさと行って帰ってくるに限る。フェリシアは歩き出したキアランの後を慌てて追ったのだった。

使用人棟の厩舎で馬車を借りた四人は、女性陣の強い希望でキアランが御者台、他の三人が馬車の中に乗り込んでいた。貴人が使う豪華な馬車ではなく、下級役人が公務で使う一般的な馬車だ。がらがらと車輪の回る音を立てて、馬車は門へと向かっていく。

「ところで、王弟様が御者なんてできるかしら」

舌先三寸でキアランを言いくるめて御者台に追いやっておきながら、今更不安になったフェリシアがポツリと呟くと、ダリルが黙って頷いた。

「大丈夫だろう。キアラン様の出自を考えれば」

そう言われたフェリシアは、今まで考えもしなかったキアランの生い立ちについてざっと思い出してみた。キアランの母親は平民出の町娘である。妾腹、それも母親が平民という出自から遠慮したキアラン自身が、成人の折に王位継承権を放棄していた。ちなみにオズワルドは前王の正妻である上級貴族の女性が生んだ由緒正しい血筋だ。

（あの二人、腹違いの兄弟だったんだ。似てないはずだ）

うんうんとフェリシアは頷いた。先代国王と、オズワルドの母親である正妃は既に亡き人で、キアランの母親だけが実は今も存命である。フェリシアの記憶によると、理由まではわからないが田舎の離宮で暮らしているらしい。キアランが幼い頃に引き離されたようだ。幼少時のキアランは、大衆食堂で人気の看板娘をしていたという母親に連れられ、市井に顔を出す機会も多かった。母親から引き離された後もそれは変わらず、馬車の御者くらいお手の物というわけだ。

（何だか複雑だなあ……それでひねくれて育ったのかしら）

同情する気持ちも沸かなくなかったが、フェリシアはすぐに初めて見る町の景色に目を奪われた。基本的にはやはり中世ヨーロッパ風の町並みに、どこかエキゾチックな香りのする屋台が並んだ大通り。威勢のいい売り子の声に忙しく動き回る人々、時折覗く裏道の、家から家に渡されたロープに干された洗濯物に至るまで、フェリシアにとっては驚きの連続だ。

「わあ……」

窓に張り付いて外を眺めるフェリシアの頭からは、既にキアランのことなど消えていた。

五の刻を半分回った頃、町を抜けた馬車は北へ行く街道を少し進み、脇道にそれて停車した。勢いよく扉を開けて草地に降り立ったフェリシアは、気持ち良さそうに伸びをする。最近のダリルの授業ではいつも乗馬服を着ており、動きやすいのもご機嫌の理由だ。（これであの黒いのがいなければ、ちよつとしたピクニックみたいで楽しいのになあ）

一瞬そう思ってしまったが、すぐにこれは授業の一環なのだからと思ひ直し辺りを見回す。南には高い城壁と深い堀に囲まれた城下町と王城がそびえており、北には石畳の街道が続いている。街道の両脇は見晴らしのよい草原だが、地平線を望む前に、遠く霞がかつて見える森や峻険な山々が北の大地を覆っているのが見えた。

「あれがコナリー山脈だ」

じつと北の方を見つめるフェリシアの横で、ダリルがぼそりと呟いた。大陸を南北に両断する険しい山々は、北からの魔物の侵入を防ぐ最大の自然防壁だ。これがあるから人間同士で争っていられる、とすら言われている。

「ここからは見えないが、東に流れるサナデイス大河を挟んで向こう側が軍事国家ボニファーツ帝国。西はローレル樹海の向こうにあるウルリーク魔法共和国。南はミネレア教国」

地図や本でしか知らない国名、土地の名前を聞いたフェリシアはそれぞれの方角に目を凝らしたが、一番近い国内の街すらも見えない。世界の広さを痛感して、軽いめまいを覚えた。

「では、そろそろ実習に移ろう。私が魔物を炙り出すから、自力で倒せ」

「わかりました」

シンプルな指示に、フェリシアはこくりと頷いた。メリッサは今に

も馬車から飛び降りそうな顔で手を握り締め、キアランは退屈そうに御者台で胡坐をかいている。そんな二人に背を向けたフェリシアは、青空の下縁の草が揺れる平原に目を凝らした。

「――」

ダリルが何事か呟くと、草原を縦横無尽に光が走った。それに驚いた虫や数羽の兎が、一目散に飛び出してくる。その傍の木立ちから、兎を獲物に狙っていたらしい魔物が躍り出た。

「うわっ」

魔物の醜悪さに、フェリシアは思わず声を上げる。魔物は大きな狼のような生き物で、薄汚れた灰色の毛皮を纏い、牙の生えそろった大きな口からよだれを撒き散らし、ギラギラと光る鋭い目で食事を邪魔したダリルを睨みつけた。対してダリルは、いつもの無表情ながら内心焦っていた。王都周辺に生息する魔物は、せいぜい凶暴なイタチ程度のはずだ。この魔狼は、新米の魔術師が対応できる相手ではない。

「お師匠様、あぶない！」

しかし、ダリルが自分で始末すると宣言するよりも早く、フェリシアが閃光の魔法を放っていた。フェリシアのかざした手から放たれたレーザー光線が、飛び上がった魔狼の尾を焼き焦がし、嫌な臭いが立ち込める。

「む、外れた」

十分な精度に練り上げた魔法を避けられ口をへの字に曲げるフェリシアに向かって、魔物が唸りをあげながら突進する。迎え撃つフェリシアは魔物を狙って次々に魔法弾を撃ち放った。側面から、正面から、巧みに角度を変えて撃つも、動きの素早い魔狼はその悉くを避けていく。

「それなら、これでどうだ！」

フェリシアは一際大きな魔法弾を魔狼の鼻面めがけて放った。大気を焦がしながら吹き飛ぶエネルギーの塊を、飛び上がって避ける魔物。すると、そのまま後方に飛んで消えるはずの魔法弾が大きく向

きを変え、標的を背後から襲った。

『ギャオオオオオッ！！！！』

断末魔の咆哮をあげて魔物が倒れたのは、フェリシアから数歩と離れていない距離だった。メリッサが悲鳴とも歓声ともつかない声を上げるのに振り返って応えようとし、フェリシアはその場にすんと尻餅をつく。

「あ……」

見下ろせば、今頃足がガクガクと震えていた。

「お嬢様！大丈夫ですか！！？」

途端に真っ青になったメリッサが馬車から飛び降り、駆けてくる。そばにいたダリルも早足で歩み寄ってきた。

「あはは……こ、怖かったあ。今頃腰が抜けたみたい」

ダリルの手を借りて立ち上がりながら、フェリシアは後ろを振り返った。目前に迫っていた魔物の、狂気じみた光を宿した目や荒い息遣いまでがはつきりと蘇る。対峙していたときは咄嗟に追尾機能をつけた魔法弾など放つことができたが、あと一歩恐怖を覚えるのが早ければ、どうなっていたかは考えたくもない。

（やっぱり映画やゲームのようにはいかないね）

どんなにリアルな3D映像よりも真に迫っていた光景を無理矢理追い出すように首を振るフェリシア。

「お嬢様、早く馬車に戻りましょう。檸檬水を用意いたします」

「う、うん……ありがとう、メリッサ」

そして、メリッサの言葉に頷いたときだった。

「伏せる……」

ダリルの鋭い声に、フェリシアは咄嗟にメリッサを押し倒して草の上に倒れていた。

「きゃっ！？」

『グオオオツ!!』

メリッサの小さな悲鳴と、背後から獣の唸り声。そして、何かが破裂したような爆音が響く。ちらりと振り返ると、ダリルが放ったと思しき爆風の魔法で数匹の魔狼が吹っ飛んでいくのが見えた。馬車のほうに目をやれば、キアランが魔狼の一匹を切り伏せたところだ。いつの間にか、複数の魔物たちに囲まれている。

「何故こんなところに魔狼の群れが!？」

魔狼はここより更に北、コナリー山脈の麓に多い魔物である。はぐれならともかく、群れで平原に現れることなど考えられなかった。

「何者かが、我々に対して嚇けた可能性があります!」

そんなやり取りするキアランとダリルは、驚愕しながらも応戦する手並みは鮮やかだった。キアランの操る剣は一切の無駄もなく確実に魔狼たちの喉を貫き、ダリルの魔法は広範囲に散らばった敵を一網打尽にしている。

（って、呆けてる場合じゃない!）

フェリシアは慌てて立ち上がると、震えるメリッサの手を引いて馬車へと急いだ。それを見たダリルも、撤退しようと後退する。その一瞬が、隙となった。魔狼の一匹がダリルの守りを突破し、馬車へ向かって突進したのだ。

「フェリシア!!」

ダリルは咄嗟に弟子の名前を叫んで注意を促したが、その他複数の魔狼の相手をしながら援護をするには至らなかった。メリッサを馬車に押し込み、師匠の声で振り返ったフェリシアの目前に、鋭い爪が迫る。

「……!」

悲鳴も出せず辛うじて目を瞑り、腕をかざして来るべき衝撃に備えたフェリシアは、次の瞬間何かに覆いかぶさられていた。そして肉の裂ける音と微かな呻き声に薄目を開ける。

「王弟殿下!？」

フェリシアを庇うように抱きかかえて魔狼の爪を受けていたのは、キアランだった。左肩をざっくりと裂かれて血を零しながらも、横へ突き出された剣は魔狼の頭部を正確に刺し貫いている。

「騒ぐなとつと乗れ。時間がない」

キアランは馬の様子をチラチラと窺っていた。突然の魔物の襲撃に脅える馬は暴走寸前だ。馬が暴れ出せば、唯一の逃走の足を失うことになる。その意図を察したフェリシアは急いで馬車に乗り込むと、キアランの右腕を引っ張った。

「それなら貴方も早く乗って！」

「何をする！俺はまだ戦う」

「怪我人が無茶しないの、逃げるわよ！お師匠様、御者をお願いします！」

じりじりと後退していたダリルはその声に一気に馬車へと駆け寄り、御者台へひらりと飛び乗った。そして馬車は間一髪、魔物の包囲を抜けて町へと走り出す。魔狼たちはしばらくそのあとを追いかけてきたが、フェリシアが爆風の魔法で蹴散らすと散り散りになっていった。その様子を、険しい表情のキアランが睨みつける。

（……怒ってるんだろなあ。予言の救世主ならあのぐらい殲滅して見せろ、とか言いそう）

最後の魔狼を追い払ったフェリシアは、いつにも増して不機嫌そうなキアランを窺ってそう思いながらも、自分を庇って彼が負った傷を無視することもできずに声をかけた。

「王弟殿下、肩、見せてください。治癒しますから」

「いらん」

案の定拒絶され、「せっかくのお嬢様のお申し出を！」と言わんばかりにメリッサが目を吊り上げる。しかしフェリシアは、キアランからは今までありとあらゆる罵詈雑言を聞かされてきたのだ。この程度でめげる彼女ではない。

「私に怒るのはわかるけど、自分の体まで粗末にすることないですよ。いいから見せてください」

すると向かいに座ってそっぽを向いていたキアランが虚を突かれたような顔をしてフェリシアに向き直った。

「お前に怒る？何故？」

「だ、だって、私はお国のために戦うしか価値のない救世主なんですよ？それなのに魔狼一匹倒して、あとは追っただけで精一杯だなんて、役立たずもいいところ」

「ああ、そうかもな」

肯定しながらも、キアランの表情や言葉にはいつもの刺々しさが無い。なんとなくやりづらい思いをしながら、フェリシアは言葉を続けた。

「役立たずに治療されるのは嫌だろうけど、お師匠様は御者台ですし、私の治癒を受けてください。貴方に何かあったらオズワルド陛下が悲しみます」

「……そうだろうか。俺は、兄上の期待に応えられなかったのに」「どういうことですか？」

キアランの働きは、少なくともフェリシアよりは上だったはずだ。それにもかかわらず何だか気弱げな彼に、フェリシアは思わず治療のことも忘れて聞き返す。

「魔狼は獰猛な魔物だ。襲われた旅人や商人はひとたまりも無い。それを逃がしたとあつては、騎士の名折れだ」

そう呟いたきり、また窓の外を向いて後方を睨むキアランは、何より自分の不甲斐なさに腹を立てていた。その様子を見たフェリシアは、深くため息をつく。

「思い上がらないで下さい、馬鹿殿下。予言の救世主でも逃げるしかなかった魔物を一人で殲滅する気だったなんて聞いたら、そこそ陛下はひっくり返りますよ。もう、勝手に治癒しますからね」

「……」

キアランは黙ったままだったが、フェリシアが自分の左側に移動して傷口に手を翳しても、されるがままにしていた。

魔狼の群れから逃げるように走り去る一台の馬車。それを見下ろす街道脇の大木の頂に、小さな人影があった。

「あーあ、逃げられちゃった」

逃げられちゃった、という言葉とは裏腹にどこか楽しげなその声は、まだ十歳前後の少年のものだ。

「倒すべき敵に追われて逃げるのは怖いかな？悔しいかな？僕を楽しませてくれるのならどっちでもいいけどね」

上空を吹き抜ける風に翻られ、綺麗に短く切りそろえられた漆黒の髪が靡く。汚れない白いシャツにきつちりとした型のベストとそろいの生地の手パンツを身に着けた少年は、風体だけなら下級貴族の子息に見える。しかしその双眸は黒い目隠しで覆われていた。それにもかかわらず、顔はしっかりと逃げ去る馬車の方を向いている。

「とはいえ、まだ僕が直接動くときじゃないか。あまり脆弱なお人形さんじゃあつまらない。面倒だけど、後始末はしてあげないとね」少年は口角を吊り上げて、トンと軽く枝を蹴った。その小さな体から異様な魔力があふれ出し、大気が渦を巻いて彼の体を地上に下ろす。すると、先程まで馬車を追っていた魔狼たちが一匹残らず少年の周りに集まり、頭を垂れた。少年は彼らをねぎらうように頭を撫でてやり、優しい笑みを浮かべて呟いた。

「失せろ、役立たず」

次の瞬間、魔狼たちの体が紙くずのように引き裂かれて宙を舞った。血や臓物の散らばる空間に、血の一滴もその身に受けることなく少年は嗤う。

「ねえ、君たちに何が守れるのかな？世界はとても脆くて、僕はとても強いのに、ね？」

囁くような声と共に、少年の姿は掻き消える。概ね平穏なはずの平原には、人間業では為しえない殺戮のあとだけが残されていた。

12・戦闘訓練（後書き）

本当に主人公最強なのかと突っ込みが入りそうな初戦闘でした。つい最近まで普通の女子大生だった娘さんが、魔物相手とはいえないかなり大量虐殺して平気な顔してるのも不自然なので、こんなことに。そしていいところは珍しくクリアンが持つていく。きつとメリッサはハンカチ噛み締めてると思います。ご主人様を庇って負傷して看病していただくのは私の役目よ！と。……あれ、この小説そんな話だっけ。

最後に出てきた中二病臭い坊やについては、また後日。

13・初陣

フェリシアの戦闘訓練翌日。今日も朝からダリルの授業の予定だったが、フェリシアはオズワルドに呼ばれ彼の執務室に来ていた。彼女の両脇には、キアランとダリルが直立している。行政棟にある王の執務室は大広間とはまた違った煌びやかさで、厳粛な空気に溢れていた。

「三人とも、急に呼びたててすまなかったね。昨日のことは聞いている、ご苦労だった」

まずは三人を労ったオズワルドは、麗しい顔に憂いを浮かべて目を伏せた。

「本来なら休んでいてくれと言いたい所だが、そんなことは言っていられなくなった」

「魔狼の討伐ですね？ならば俺が今すぐにでも」

「いいや。それはおそらく、必要ない」

キアランの申し出を断ったオズワルドに、一同訝しげな視線を向ける。するとオズワルドは一枚の報告書を取り出した。

「昨日の夕刻、北から王都に入った行商人が、酷く脅えた様子で門兵に訴えたそうだ。城門から目と鼻の先にある街道沿いの大木の辺りに、魔狼の惨殺された骸がいくつも転がっていたと」

「！」

「確認したところ、確かに十七体の魔狼が全身を引き裂かれて死んでいた。これが昨日君達を襲った魔狼たちの成れの果てではないかと思う。勿論他に魔狼がいらないか搜索は必要だが、君達が目撃した数から見てもほぼ間違いないだろう。問題はそれを、何者が為したのか、だ」

討ち漏らした魔物が王都周辺をうろつくより、事態は深刻だった。魔法の使い方を覚えたてとはいえそこらの魔法使いよりはずっと強いフェリシアに、騎士のキアランと魔道師団長のダリルがそろって

逃走するしかなかった魔狼の群れを、逃げる隙も与えず屠るような何者かがいる。それが人の形をしている場合、最悪城下町に侵入していることすら有り得るのだ。

「キアラン、お前には第一騎士団を率いて魔狼を殺した者の正体を調査して欲しい。この上ない戦力だ、味方に引き込めるような交渉を。決裂の際にはすぐに逃げる」

「お言葉ですが、陛下。決裂の際には相手を仕留めるべきでは？」

「確かに、こちらの誘いを断るだけではなく敵対するようなら、それが一番望ましい。しかし魔狼十七体を惨殺して見せるような者相手に、お前が敵うはずもないだろう？」

その言葉に、一瞬下を向いて唇を噛み締めたキアランは、御意、と呟いて一礼した。

「それからダリルとフェリシアには、戦地に向かって欲しい」

「戦場に……？」

戸惑いの声を上げるフェリシアに、ダリルも同調した。

「陛下、この娘は昨日実戦を経験したばかりです。この段階で戦場に出すのは……」

「ああ、わかつている。ダリルはともかく、フェリシアに戦えと言っているわけではないよ」

安心させるようにフェリシアへ微笑みかけるオズワルド。

「この魔狼事件は、すぐに各国へ伝わることだろう。血気盛んなボニファーツ帝国あたりが、好機と見て攻め入ってこないとも限らない。そこで我らの救世主軍が、敵を叩き伏せたという事実が欲しいのだよ」

実質はどうあれ、噂だけでも国を守護する力にはなる。考えもなかった着眼点に、フェリシアは目を瞬いた。

「フェリシア、君は極力危ない目には合わせないと誓おう。行ってくれるかい？」

「……その前に、一つお聞きしてもよろしいでしょうか？戦う相手は、何処の国ですか？それとも魔物軍ですか？」

「魔物軍だよ。一応、君が生まれてからは各国の間では小競り合い程度しかないからね。……人を殺すことにはやはり抵抗があるのかい？」

『斉藤優花』が、ただの殺人は勿論、戦争も悪と教えられて育ってきたことは既に伝えてある。オズワルドの問いに、フェリシアはこくりと頷いた。

「それもあります。魔物なら害獣退治と割り切ることもできるけど、人間は嫌だなんて。でもそれ以上に……禍根を、残したくないんです」

フェリシア——優花の祖母はアメリカ人だ。幼い頃、国際新聞の記者だった父親と共に第二次大戦直後の日本へ来日したという彼女は、はじめ酷く嫌がったという。

——私はあのころ、残虐非道なナチスと手を組んだ二ホンを悪魔の国だと思っていたのさ。

——悪魔の国になんか行きたくない、散々ダディに駄々を捏ねて困らせたよ。

祖母は苦い顔して、そう言っていたものだ。ところがいざ日本へやってきた彼女が見た物は、アメリカ軍の空爆に焼かれた東京の焼け野原と、家や家族を失いながらもそこに生きるしかない人々だった。

——あれを見て私は思ったね。一体、悪魔はどちらだったのだろうって。

「例え魔物を打ち破って世界が平和になっても、人間同士の争いが続いたのでは、何の意味もないじゃないですか。だから、できれば人の国とは仲良くしていただきたいと、思っのです」

フェリシア自身は戦争を経験していないが、憎しみを残したことに

より何百年も争いが続いた例を、彼女はいくつも知っていた。綺麗事だ一笑に付されることも、最悪反逆の意思すら疑われかねないことも覚悟して告げた言葉に、オズワルドは笑みを深める。

「素晴らしい」

「え……？」

「それこそ、私が理想とする世界だよ、フェリシア。人は初代王の時代のようにひとつにまとまるべき、それはどの国も考えていることだ。しかし相手を倒して得た平和にどれだけの価値があるだろうか？国内の力は衰え、敗れた人々は故郷を奪われて生きなければならぬ。魔物を殲滅できたとしても、それは紛れもない悲劇じゃないか」

耳に心地よい声音で滔々とオズワルドは語る。

「だから私は、各国に対しては武力ではなく話し合いで交渉を持ち、人類を一つにして魔物軍へ立ち向かいたいと思う」

「あ……ありがとうございます、陛下」

考えを受け入れてもらえたことにフェリシアが頭を下げると、オズワルドは首を振った。

「礼を言いたいのは私の方さ。十一年前の即位の折にも同じ事を宣言したのだが、やれオズワルド陛下は弱気だの意気地がないだの、散々陰口を叩かれたからね。予言の救世主殿が同意見だと心強い」

「十六歳の王様がそんなに立派なことを考えていたのに、皆ひどい……！陛下、私、陛下のために頑張りますから！」

「ありがとうございます」

張りきるフェリシアと微笑むオズワルドの間に、渋面のキアランの声割って入った。

「しかし、陛下。チェンバレン家の娘ばかりが戦場で名を上げれば、アーデン家が黙っていないと思われませんが」

現將軍家の名前を出したキアランに、オズワルドは笑顔のまま顔を上げた。

「ああ、それなら問題ない。釣り合いを取るために、この行軍の指

揮者はアーデン家の者に任せようと思っっている。丁度今呼んだところだ」

それを聞いて、キアランの顔から血の気が引いた。隣にいたフェリシアは、げつという言葉まで聞いてしまう。そんな弟の様子に気づいていないのか無視しているのか、オズワルドは軽やかに呼び鈴を鳴らす。すると、フェリシアたちの背後でゆっくりと執務室の扉が開いた。

「失礼いたします」

先導のメイドの後に続いて入ってきたのは、二十代半ばの女性だった。凜とした佇まいの、金髪碧眼の美女。高貴の生まれだということとは一目瞭然だったが、妙なことに貴婦人の証であるドレスではなく軍の制服を纏い、渦巻く金髪を頂でくくっていた。豊かな胸元さえなければ、美貌の貴公子にすら見える。男装の麗人はまずはオズワルドの前で深々と最敬礼を取ると、ゆったりとフェリシアたちの方を向いた。

「彼女はマルグリット・アーデン少佐。ハロルド將軍の長女にしてこの度の戦闘の総指揮官だ」

オズワルドの紹介を聞いて、フェリシアは身構えた。どこかで見た顔だと思えば、マルグリットはヴェロニカの実姉なのだ。対してマルグリットは優雅に一礼し、嫣然と微笑んで見せる。

「はじめまして、フェリシア嬢。ただ今紹介いただいたアーデン少佐だ。予言の救世主殿と共に戦えるだなんて光栄だよ、よろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします」

オズワルドたちの前だからかもしれないが、マルグリットの態度はごく普通だった。妹があだったからといって、姉まで警戒しすぎるのは失礼だ。フェリシアは差し出された手を躊躇いなく、しかし何かされればすぐにやり返してやるという心持ちで握り返す。すると、その手をするりと持ち上げられた。

「ふえっ!？」

何をされるのだろうと目を白黒させるフェリシアの前で、マルグリ

ツトはにこりと微笑み、宝物のように戴いた手にそつと唇を落としました。

「え！？ええっ！！？」

何故か真つ赤になってうろたえるフェリシアを見下ろし、マルグリットはくすくすと笑う。

「ふふつ、あの我が妹をやりこめたお嬢さんはどんなにかついい娘なのかと思いきや、可愛らしいじゃないか。なるほど、オズワルド陛下が放っておかないはずだね。私が男だったらすぐに跪いて求婚しているところだ」

（……冗談、ですよな？）

あっけに取られるフェリシアの横から、キアランが進み出た。

「きつ、貴様何を破廉恥なことをしている！国王陛下の御前だぞ！！」

するとマルグリットは鬱陶しそうな顔でキアランのほうを向き、花の顔を思いつきり顰めた。

「五月蠅いね、お前に言われなくともそのくらい承知しているよ、キアラン」

「呼び捨てにするな！ここは訓練場ではないんだぞ！」

「はいはい、キアラン殿下。むさい顔を近づけないでくれたまえ、私はフェリシア嬢のような可愛らしいお嬢さんしか視界に入れたくないんだ」

「黙れ変態男女！！！」

絶叫したキアランは、次の瞬間はつと口を噤み青ざめた。フェリシアの幻覚なのか、ちょっとガタガタ震えているようにも見える。

「ふふつ、国王陛下の御前で、人を愚弄したね、キアラン？当然、自分にも同じことをされる覚悟はあるということだろう？」

マルグリットは美しい顔に笑みを浮かべていた。しかしその目は笑っていない。それどころか凄まじい怒りのオーラを背負っていた。

「例えばそう、お前が五歳の頃だったか、雷に驚いてべそをかきながら母君の部屋に駆け込んだ時の顔といったら、今思い出しても笑

える」

「止める、そんな昔の話は！！！」

「ああ、それとも七歳まで寝小便を垂れていたのを秘密裏に処理しようとしてシーツを軍事棟の洗い場まで持ってきて騎士団長にどやされたときの話の方がいいか」

「それは兄上には黙っておく約束だっただろう！！頼むから！！！」
高笑いするマルグリットと懇願するキアラン。

「あの、私たちはどうしたらいいんでしょうか、お師匠様」

「……」

フェリシアに尋ねられたダリルは、黙って首を振った。お手上げと
いうことらしい。

「いい加減にしないか、二人とも」

結局、オズワルドの一声で王弟殿下と公爵令嬢の言い合いは終わった。勿論マルグリットの圧勝だった。何事もなかったようにしゃんと背筋を伸ばして立つ彼女の横で、幼い頃の恥ずかしい話を続けざまに暴露されたキアランは哀愁を漂わせている。

「さて、フェリシア。君にはアーデン少佐指揮の下、コナリー大森林手前の駐屯地にて魔物の殲滅作戦に参加して欲しい。万一戦うことになっても、魔狼を倒せるの實力があれば問題ないはずだ」

コナリー大森林は同名の山脈の手前に広がる森だ。山脈に近いたため魔物との大規模な戦闘が起こりやすい場所だが、大きな砦もあり守りやすい場所でもある。

「現地でのフェリシアの指導は引き続きスマイサー団長に頼む。今回はアーデン少佐の指揮に入る形になるが、構わないだろうか？」

「陛下の決定に、私が否を唱えようはずもございません」

少佐という地位は低くはないが、魔道師団の団長ほどではない。しかしマルグリットは貴族の出身、ダリルは平民だ。この二人が同じ戦場で戦う場合、どちらが指揮に入るかは微妙な問題なのだが、オズワルドの采配により今回はダリルが指揮官を譲る形になった。

「では諸君、健闘を祈る」

そしてオズワルドが解散を告げると、四人は退出の礼をとり執務室を後にしたのだった。

ダリルの授業は、出撃の準備もあるだろうということで当分の間休講となった。

（いよいよ初陣か。まずはメリッサに話して、チェンバレンのお父様に連絡して、それからシャロン先生にも応急手当の方法とか教えてもらった方がいいかな）

授業がなくなったとはいえ、フェリシアにはやるべきことが山ほどある。王族棟に向かいながら頭の中でそれらを一つ一つ列挙していく彼女の背を、親しげにぽんと叩く手があった。

「やあ、フェリシア嬢」

振り返ると、そこには執務室の前で別れたばかりの金髪美女が立っていた。

「マルグリットさん」

「マルグリットでいいよ、堅苦しいのは嫌いなんだ。私もフェリシアと呼んで構わないかな」

「あ……はい。どうぞ」

顔こそヴェロニカそっくりだが、妹とは違って気さくな様子のアーデン家長女にどきまぎしながら頷くフェリシア。

（なんか、女の人なのに格好いいなあ）

ぼんやりと見とれていると、不意にマルグリットの表情が曇った。

「……すまなかったね」

「え？ど、どうしてマルグリットさん……マルグリットが謝るんですか？」

「披露会だよ。妹のヴェロニカが、失礼なことをしたそうじゃないか」

沈痛な面持ちのマルグリットに、フェリシアはぶんぶんと首を振った。

「大丈夫です、慣れていきますから。それにマルグリットが悪いわけ

じゃないのに」

実際、ヴェロニカの行為は中学時代のいじめっ子や『あのひとたち』に比べれば可愛いものだった。しかしフェリシアの魂が最近まで何処で過ごしていたのか知らないマルグリットは、慣れているという言葉から別の人物を連想したらしい。

「そういえば、キアランにも随分苛められているらしいね。あれも仕方ない男だな、気になる子ほど苛めたくなるタチらしい」

「いえ、キアラン殿下の嫌味は純粹に私が嫌いだからだと思いますけど。お二人は幼馴染なんですか？」

「まあね。とはいえ私とキアランの接点はほとんど訓練場だけだったから、君とはこれが初対面か」

それを聞いてきよんとした顔で首をかしげるフェリシアに、覚えていないのかい、とマルグリットが苦笑する。

「フェリシア、君とオズワルド陛下とキアラン。君たち三人こそ、城で共に育った幼馴染のはずだよ。特に子供のころのキアランは、それは嬉しそうに甲斐甲斐しく君の世話を焼いていたという話だけだ」

「ええ！？オズワルド陛下の間違いじゃなくですか！？」

信じられない言葉を聞いて素っ頓狂な声を上げるフェリシアに、マルグリットは頷いてみせる。

「私も幼少の頃の君に会ったことはないから、伝聞だが。あのころ、君を疎んじていたのはどちらかというとオズワルド陛下の方じゃなかったかな」

「あのお優しい陛下が！？」

「いや、今のキアランのように直接君に嫌がらせをしていたわけはないようだけど。キアランがフェリシアの世話を焼いてばかりで一緒にいてくれないと、何度か愚痴を零されたことがあるよ」

どこか遠くを見るような顔をして、マルグリットは仄かな笑みを浮かべた。

「君に対するあの兄弟の態度が逆転したのはいつからだっただか……」

ああ、あの時かもしれない」

「あの時？」

「キアランの母君が城を出たときだ。確かあいつは、十歳くらいだったかな。今思えばあの二、三年は、何か城の空気がおかしかった気がする」

フェリシアは必死に当時の様子を思い出そうとしたが、わかったのはキアランの母親が城から消えた年の前後にオズワルドの母親である正妃と前王が相次いで急逝したという事実だけだった。城の空気などという曖昧な物は、人形姫フェリシアには理解もできていなかったのだ。

「まあ、あの馬鹿の事はおいておくとしてだ」

さらりとキアランを馬鹿呼ばわりしたマルグリットは、改めてフェリシアに向き直った。

「どうかヴェロニカのこと、許してやってはくれないか？私からもきつく叱っておいたから」

「そんな、マルグリットがどうしてそこまで？」

尋ねると、マルグリットは気まずそうに俯いた。

「姉馬鹿と笑われるだろうが、私にとってヴェロニカは可愛い妹だ。私たち姉妹には兄もいるんだが、兄上は魔術師団に入って日夜大好きな魔術の研究に没頭している魔法馬鹿でね。私も見ての通りの剣術狂。ヴェロニカは不甲斐ない兄と姉の変わりに、あれでも家を守るうと必死なんだよ。その方法の良し悪しはともかくとして」

「……」

なんと言ってよいかわからず沈黙するフェリシアに、マルグリットは眉根を寄せた。

「いや、すまない。こんな話をしても、君を困らせるだけだったなフェリシアははっと顔を上げ、慌てて首を振る。

「そ、そんなことないですよ！じゃあ、また妹さんが何かしてきたら、お姉さんに心配かけないでって、説得してみます！！」

するとマルグリットは大輪の花が綻ぶように笑い、礼を告げたのだ

つ
た。

13・初陣（後書き）

マルグリットお姉様登場です。主役が霞むほど濃いです。イメージとしてはベル。ら。本当に女の子が好きな女の人なのかただの冗談なのかは今のところ内緒だ！

そして前回若干株が上がった（はずの）キアラン君ですが、恥ずかしい子供のころの話暴露によりまた急激に扱いが下がりました。これぞ上げて落とす！

14・出陣

そこは美しい春の庭だった。可憐な花々が咲き乱れる美しい庭には、上等な衣装を着た二人の子供がいた。一人は少年、もう一人は彼よりも少し年下の少女。少女は焦点の定まらない目で、無表情に虚空を見つめて突っ立っていた。その小さな手を、少年が軽く握る。「行こう、フェリシア。母上が蜂蜜水を作ってくれるって」

「……」

語りかけられる言葉にも、少女は無反応だった。しかし少年がめげることなく手を引くと、少女はその後をついてくる。ぽてぽてとおぼつかない足取りの少女に、少年はにこりと笑い歩調を合わせる。しばらく行くと、二人の背丈よりも高い花々の向こうから、丸い顔の愛らしい女が顔を出した。

「あら、早かったわねえ。でも良かったわ、丁度蜂蜜水が冷えたところよ」

女は朗らかに笑いながら、子供たちを抱きしめた。少年はくすぐったそうに笑うが、少女はやはり無表情だ。しかし女は気にした様子もなく二人を花壇の淵に座らせて、琥珀色の液体が入ったグラスを渡す。

「落とさないように気をつけるのよ」

「はい、母上」

少年ははきはきと答えて、自分の瞳と同じ色の飲み物を一気に飲み干した。対して、少女はグラスを持ったままぼんやりとしている。それに気づいた少年は、自分のグラスを地べたに置いて、少女のグラスに手を添えた。二人の手が重なり、ほんのりと少年の頬が上気する。

「フェリシア、美味しいよ。グラスの淵に口をつけて、こう。飲んでみなよ」

少年に補助されて、少女の口にグラスがあてがわれる。すると、少

女はこくりこくりと少しずつ蜂蜜水を飲みはじめた。満足そうにその姿を眺める少年に、女が笑う。

「まるでフェリシア姫の騎士様みたいね」

すると少年は照れることもせず、大真面目な顔で母親に向かって頷いた。

「そうだよ。僕、騎士になる。フェリシアは、予言のきゅーせいしゅで、この国を守るんだって。兄上と一緒に。だから、僕はフェリシアと兄上を守る騎士になるんだ」

「そう。それは立派な夢ね」

息子の黒髪を撫でる女の顔に、一瞬深い悲しみがよぎる。しかし少年はそんな母親の様子には気づかずに、ただ誇らしげな笑顔のまま頷いた。

「……はへ？」

間抜けな自分の声で目が覚めたフェリシアは、ベッドの中でまだ薄暗い部屋をぼんやりと見渡した。時計を見れば、まだ三の刻に入っただばかりの早朝だ。

（マルグリットからあんな話を聞いたせいかしら。何か、ものすごく奇怪な夢を見た気がするんだけど……あの純粹そうな可愛らしい男の子、まさかとは思いつけどキアラン殿下……よね？）

今とは違って恐ろしく好意的な態度にキアランだと信じきれない反面、何故だか覚えのある光景だった。十年以上前、本当にあったことなのだろうか、フェリシアは首をかしげる。

（そういえばキアラン殿下といえば、まだお礼言ってなかったっけ）
一昨日、魔狼から庇い助けてもらった礼を、なんだかんだで言いそびれていた。気に食わない相手とはいえ、怪我を負ってまで守られておきながら、何もしないというのも心苦しい。かといって、今更面と向かって礼を言いに行くのも気が引けた。礼を言いに行つて素直に聞いてくれる相手とも思えない。最悪、いつもの口喧嘩で終わる恐れすらあった。

「そうだ、春告げ花」

そこでフェリシアは、メリッサから教わった感謝の花のことを思い出した。簡単な手紙でもつけて贈っておけば、捨てられるにせよ感謝の気持ちを送ったことは伝わるはずだ。

（そうと決まったら早く行こう）

今は春真つ盛り、春先に咲く春告げ花の時期は過ぎつつある。フェリシアは手早く着替えると、使用人部屋のメリッサを起さないように部屋を抜け出した。見張りの不寝番には早朝散歩に出る旨を伝え、中庭へ出る。花壇をかきわけ目的の花を探すと、思ったとおり、どの春告げ花も既に散り始めていた。少ししおれたその花を摘んで、眉間に皺を刻む。

「どうして私、あんな人のために朝からこんなことしてるのかしら」そうは言うものの、ここまで来て部屋に引き返すところそ本当に馬鹿らしい。フェリシアは袖を朝露に濡らしながら、庭の奥へ奥へと入っていった。そして、見覚えのある一角へと出る。

「ここ……」

春の花が咲き乱れる美しい庭園。花の配置や視線の高さは違うものの、そこは先程夢に見た庭だった。同時に、フェリシアは思う。

（あの夢で、キアラン殿下のお母さんが出てきた部屋……『影王妃の間』だ……）

既に王族棟の造りを把握しているフェリシアは、夢で見たキアランの母親が出てきた方角にある部屋が、先日迷い込みそうになった影王妃の間であることに気がついた。そして、その時の一件がなんとなく腑に落ちる。

（あの人、子供のころ離れ離れになったお母さんの部屋にいたって事？それを私に知られなくて、あんなに怒った……？）

大真面目な顔で、フェリシアは呟いた。

「キアラン殿下ってブラコンなだけじゃなくてマザコンなの？」

「まざこんとは何だ？」

すると思いがけず独り言にツツコミを入れられた。振り返ると、花

壇の向こうに仏頂面のキアランが立っている。

「うわっ、よく会いますね王弟殿下、実は私のストーカーですか？」
「すとかー？」

この世界に存在しない言葉の意味がわからないらしく、怪訝そうな顔のキアランを見て、ため息をつくフェリシア。

「気にしないで下さい、ただの冗談です。そんなことより、何故貴方がここに？」

「それはこちらの台詞だ。俺は自分の仕事をしているだけだぞ、兄上を守るのが仕事だからな。早朝の城内をうろつく不審者を尋問している」

その言葉に、フェリシアは力チンと来た。せつかくお礼の気持ちを伝えようとしているのに、不審者扱いとは何事だ。

「私は春告げ花を摘みに来ただけです！貴方にお礼の手紙を出そうと思って！」

言い返しながらしおれかけの花を鼻先に突き出してやると、キアランは鳩が豆鉄砲を食らったような顔で問い返した。

「礼？俺に？」

「一昨日、魔狼から庇ってくださったでしょう！？そのお礼です、ありがとうございます！？」

喧嘩腰で礼を言い、無理矢理花を押し付ける。

「……なんというか、今更だな」

渡された花を見下ろして、キアランが呟いた。その顔は呆れてはいても、嫌悪は浮かんでいないことに、フェリシアの方が驚く。

（人のこと殺そうとしたり、庇ったり、何考えてるんだろっ、この人）

キアランの考えていることがわからなくて、眉根を寄せる。否、わかっていては一つだけあった。

「別に、王弟殿下が私の身を案じたわけじゃなくて、私が予言の救世主だから助けてくださったのは重々承知していますけど。感謝しているのは本当ですから」

「おい」

言うべき事を言い終えて部屋に戻ろうとしたフェリシアを、キアランが呼び止めた。

「お前、自分が予言の救世主だから助けられたと思っているのか？」

「違うんですか？」

「いいや、それもある。騎士の努めは弱きを守ることでもあるしな。お前が弱いかどうかは甚だ疑問だが」

そこでキアランは唇の端を吊り上げた。酷薄そうな笑みを貼り付けて、フェリシアを見下ろす。

「助けたのは、お前を俺の手で殺してやりたいからだ、と言ったらどうする？」

その言葉に、フェリシアの肌がぞくりと粟立った。脅えて身を引く彼女を愉快そうに眺めながら、キアランは残酷な笑みを浮かべる。

「安心しろ、俺は自我を持った救世主殿に手を出すほど考えなしではないからな。兄上の役に立つうちは生かしておいてやる」

「な、何よ偉そうに、昔はあんなに可愛らしかったのに！」

「俺が可愛いだと？」

心外そうなキアランに、フェリシアは震える拳を握り締めて言い返した。

「今朝、昔の実体験らしき夢を見انです。オズワルド陛下とフェリシアさんを守る騎士になるって言ったくせに！」

その言葉に、キアランが眉を顰めた。それはお前の妄想だと言われるかと思っただ、彼はフェリシアの言葉を否定しなかった。

「昔の話だ」

ぽつりと、呟くように言い捨てる。

「大体、お前の方が先に俺を見限っただろう？」

「え……？」

苛立たしげに言ったキアランは失言に気づいたようにはつと口を噤み、フェリシアへ背を向けた。

「とにかく、下らん夢なんざ早く忘れろ。お前も俺も、あの頃に戻

れるはずもないのだから」

そして、すたすたと歩いて行ってしまう。フェリシアは呆然とその背中を見送るしかなかった。

それから数日間、フェリシアのはまた忙しい日々を送っていた。

初陣の準備だ。図書館に通って魔物について調べ、シャロンに応急処置や戦地での衛生管理について学び、ダリルやマルグリットと打ち合わせ、その合間にしばらくの別れを惜しむオズワルドやベネデイクトの来訪を相手する。そんな中、キアランとだけは顔を合わせる機会がなかった。聞くところによるとキアランの方でも魔狼惨殺事件の犯人探しであり城には戻っていないらしいが、それでも今までの遭遇頻度を思うと不自然だ。

（避けられてるのかしら……）

図書館でぼんやり考えていると、ひょいと金髪の美女に顔を覗き込まれた。

「やあ、調べ物ははかどっているかい、フェリシア嬢？」

「わわっ、マルグリット！」

目の前に突然現れた端正な顔に驚いたフェリシアが後ろにひっくり返りそうになるのを、マルグリットのしなやかな腕が抱きとめる。

「どうしたの、上の空だったようだけれど。誰のことを考えていたのかな？ 妬けるね」

「わ、私は別に……ご覧の通り、コナリー大森林の魔物について調べていただけです」

そう言って椅子に座りなおしたフェリシアは、読んでいた魔物図鑑を見せた。恐ろしげな挿絵と共に、大森林に多く生息しているという小鬼の魔物について書かれたページだ。

「コナリー大森林の魔物、ね……魔狼を倒したという君の敵ではないとは思っけど」

「でも、相手は一応『軍隊』なんですよね？」

フェリシアの言葉に、マルグリットは頷いた。『魔物軍』と呼ばれ

るように、知能のある魔物たちは徒党を組み、時には大軍を編成して人の地に攻め入ってくる。小鬼は辛うじて上官の命令に従う程度の知能しか持ち合わせておらず、一頭辺りの戦闘能力も先日 of 魔狼とは比較にならない弱さだ。しかし個体数が多く、率いる魔物の知能によっては苦戦を強いられることもある。

「大陸の北や牢獄島って、どんなところなんでしょうね」

魔物図鑑をぺらぺら捲ると、さあねとマルグリットが肩を竦める。

「山脈より北は魔王が治める魔物の国だとか、上位の魔物や竜の巢が広がっていると、古の邪神が眠っているのだとか、色々な噂はあるけれど真相は定かではないよ。まして牢獄島なんて、初代王陛下でもお目に掛かったことがあるのかどうか。いずれにしても碌な場所ではないだろうけどね」

フェリシアは「確かに」と頷いて、読んでいた図鑑を閉じた。

「何しろ、戦場なんて行く前からあれこれ頭を悩ませて、なるようにしかならないさ。安心して、君は私がしっかり守るからさ」

「ありがとうございます、マルグリット。私も頑張りますね」

頼もしい言葉に、フェリシアもまた頷いたのだった。

そして出立の朝がやってきた。使用人棟と軍事棟に挟まれた訓練場には、五つの部隊から為る千人の兵士が整然と並んでいた。その正面に設けられた指令台では、きつちりとした軍服姿のマルグリットが兵士達を鼓舞している。その背後、指令台の下ではフェリシアとダリルが並んで立っていた。

「壮観ですねえ、お師匠様」

空はからりと晴渡り、歓声とも雄たけびともつかない声を上げる兵士達が手にした剣に、日の光がきらりと反射する。

「恐ろしくはないのか？」

今回は万単位の本格的な部隊と比べれば些細な軍勢であるとはいえ、フェリシアにとっては縁もなかった世界の光景である。弟子を案じたダリルが尋ねると、フェリシアは頷いた。

「そりゃあ怖いですよ。きつと、魔物の軍勢なんか目の前にしたらもつと怖い。でも、怖がっていてばかりは前に進めない、でしょう？」

以前自分の言った言葉をそのまま返されて、ダリルは苦笑した。

「そうだな。……そろそろ行くか」

マルグリットの演説が終わり、軍馬に跨ったマルグリットや部隊長たちが颯爽と城門の方へと向かう。フェリシアは頷いて、自分達に用意された馬車へ向かった。

「お嬢様ー！」

馬車からは、危険だといくら言い聞かせても頑固についてきたメリッサが手を振っている。その荷台には、フェリシアの着替えや日用品、果ては本や娯楽の品にお菓子まで入ったトランクがいくつも積みまれている。勿論メリッサが用意したものだ。

（遠足に行くんじゃないんだからって、他の兵士さんたちに怒られなきゃいいけど）

そう思いながらも、フェリシアはダリルと共に馬車へ乗り込んだ。御者台の侍従が馬に鞭を当て、馬車が走り出す。マルグリット率いる小部隊は人々が歓声を上げる城下町の中をパレードした後、北の街道へと出陣していった。

14・出陣（後書き）

フェリシア出陣するの巻。しばらくオズワルド陛下やキアラン殿下は出番なしです。そのかわりメリッサやマルグリットが出てきます。お城よりも戦場の方が女性比率が高いとはこれいかに。

15・コナリー大砦

マルグリット率いる千人の部隊は王都北の街道を進み、途中野営や近隣の町村での宿泊を挟み、城を出て五日後にコナリー大森林を臨む大砦に到着した。

「やっとつきましたね。これがコナリーの大砦ですか。大きい……」
部隊最後尾の馬車から降りたメリッサが、灰色の防壁を見上げて呟いた。その隣に降り立ったフェリシアも、その威容を目の当たりにして目を見張った。頑丈な山脈の岩を削り出して積み上げたという墨壁は高く聳え、大ききだけならば王城の全棟を合わせたよりも広いという砦は、左右の端が辛うじて視認できる幅だ。しかしその砦よりも更に高いのがコナリー山脈だった。王都からも眺めることのできる峻嶒な山々は、見上げると上の方に雲が掛かり、頂上すら見ることができない。

「お嬢さんたち、こっちだよ」

二人で呆けていると、苦笑交じりにマルグリットがやってきた。その背後にはダリルが付き従っている。

「マルグリットにお師匠様。お二人とも指揮官とその補佐なのに、こんな最後尾にいらっちゃって大丈夫ですか？」

「大丈夫、兵士たちは砦に入って各自戦闘準備を始めるだけだからね」

その言葉通り、兵士達の列は続々と砦の門へと入っていく。

「さあ、私たちも行こう」

「は、はい」

マルグリットに先導されて、無骨な石造りの砦へ入った四人を出迎えたのは、この砦の最高責任者だという大佐だった。

「これはこれは、アーデン少佐に救世主様。コナリー大砦へようこそいらつしました。強くお美しい貴女がたの助力を得て、我らは更なる躍進を遂げることができましょう」

大仰な言葉と共に揉み手する中年男に、マルグリットは内心の嫌悪を綺麗に押し隠して微笑した。

「大佐、ここでの貴方は私の上官でいらっしゃるのですから、そのようなお言葉は不要です。早速ですが、軍議を開きましょう。戦場での状況を窺いたい」

すると大佐は一瞬顔を顰めた。將軍である父に取り入ろうと、マルグリットが若い女性だろうと下階級だろうと上辺だけ媚び諂う者は多いのだ。しかし大佐は相手に腹の中を読まれているなど思っても見ないという笑顔で、四人を上階へと案内した。

フェリシアとメリッサは用意された個室に案内され、軍議に参加するマルグリットとダリルは更に上階の会議室へと通された。二人と別れた階段をちらりと見上げ、フェリシアはため息をつく。

「どうなさいましたか、お嬢様？」

「ううん、私じゃなくて、マルグリット。気苦労が多そうだなと思つて」

「アーデン少佐も微妙なお立場ですから。でも、格好いいですよね」
そう言ってからメリッサははつと息を呑み、

「も、もちろん私はお嬢様一筋ですけど！」

と、何故か頬を染めながらフォローを入れる。

「う、うん、ありがとう……？」

疑問系で礼を返しながら、フェリシアは砦の女兵士に案内された扉を開いた。国軍での階級を持たないフェリシアはお客様扱いで、用意されたのは客室だ。それでも岩のむき出しになった壁に小さな窓、薄暗い室内と、王族棟の私室とは比べようもない。

「まあ、お嬢様にこんなお部屋をあてがうだなんて」

ぷりぷりと怒りながらも手早く荷物を運び、カーテンを開けて光を入れ、てきぱきと動くメリッサに、フェリシアは苦笑した。

「この部屋だつて十分雰囲気があつていい部屋だよ。ええと………使用人部屋もあるね。荷解きが終わったら、少し休憩しよう」

「はい！」

隣の小部屋を覗き込んで振り返ったフェリシアに、メリッサが答える。慣れない長時間の移動で、二人とも既に疲れが溜まっていたのだ。しかし、大変なのはこれからだった。

一刻ほど部屋で休んだ二人は、夕飯を告げる鐘の音に部屋を出て、あらかじめ教えられていた食堂へと向かった。砦の食堂は大人数が一斉に食事を取れる広大な部屋だ。防犯上、砦に詰めている兵士全員が集まっているわけではないが、屈強な戦士たちが数百人、ずらりと並んでいる様はなんとも猛々しい。フェリシアたちが食堂に入った途端、その視線が一斉に二人へ注がれた。その目は明らかに敵意や猜疑心に溢れている。

（うつ……なんか、注目されてる？）

そして気圧されたフェリシアの耳に、ぼそぼそと声が届いた。

「おい、あれが城から来た救世主様かよ」

「最近まで抜け殻状態だったっていう？」

「だいたい戦場にメイド同伴なんて非常識だね」

「これだからお嬢様って奴は」

聞こえよがしに囁かれる言葉に、フェリシアは唇を噛み締めた。背後では、メリッサが脅えている気配がする。彼女を守ろうと顔だけは上げて、それでも食堂の中に一歩踏み出す勇気が持てないでいると、既に上座についていたマルグリットが立ち上がった。

「おおい、フェリシア、こっちにおいで！」

大きく手を振るマルグリットの横には、ダリルもいた。のそりと立ち上がったダリルは、マルグリットから一つ席を離れる。フェリシアはほっとして二人の間の席に着いた。背後ではメリッサが慌しく配膳の準備をしている。

「あまり気にしないことだよ。私も国軍に入りたての頃や、地方に配属されたばかりの頃はこうだった」

マルグリットは少し肩をすくめて見せ、悠然と前を向いた。その凛とした横顔に、フェリシアは恥じ入る。自分はこうして守ってもら

うために、戦場へやってきたのではないのだ。上座は一段高い場所に設けられており、見下ろせば兵士達が時折無遠慮な悪意に満ちた視線をよこす。

（私に悪感情を持っているのは、王弟殿下だけじゃなかったんだなあ……）

思えば皆に来る途中も、マルグリットの部下達とはあまり会話をしたことがなかった。上司の教育がいいのだろう、あからさまな敵意をぶつけられたことはないが、時折見かける彼らの顔は妙に胡散臭そうだった気もする。平穏な城の暮らしを思うと、改めて守られていたのだと実感した。

「メリッサ、せっかく運んでくれたのにごめん。これあげる」

メリッサが運んできた豪華な食事を彼女に押し返すと、フェリシアはおもむろに立ち上がった。

「お、お嬢様？」

食事の載った盆を持って右往左往するメリッサとは反対に、ダリルとマルグリットは落ち着いていた。

「行かせてやりなさい」

一言ダリルが告げて、メリッサに座るよう促す。マルグリットは、上座の段から降りたフェリシアを興味深そうに目で追っていた。一般兵の食事は給仕が用意するのではない。大鍋に用意された食事の前へ階級順に並び、自分で食事を盛り付ける方式だ。

「お邪魔します」

フェリシアはそういいながらぺこりと頭を下げ、順番を待つ下級兵たちの最後尾に並んだ。

「……どういふつもりだよ」

前に並んでいた、フェリシアよりも若い少年兵がじろりと彼女を睨む。その類には傷跡があり、若いといっても強面だ。

「私は戦いに関して、まだ何の実績も持たないから。今まで頑張つて戦ってきた貴方達より、いいものを食べるわけにはいきません」すると、その言葉を聞いた数人の兵士の空気が少しだけ変わった。

意外そうに目を瞬く者、まだ不審そうな者、反応は色々だが、向けられる敵意が僅かに和らぐ。フェリシアの順番が回ってくる頃には食事は冷め切り、パンも固いものばかりが残されていたが、席を空けてもらえないかと頼むと兵士たちは少しづつ詰めてくれた。

「ありがとうございます」

礼を言ってもそっぽを向かれるばかりで返事はない。しかし、フェリシアは気にすることなく席に着いた。本日のメニューは芋と肉を角切りにして煮詰めた塩のスープと、硬い黒パンだ。所詮お嬢様、一口目で匙を放り出すだろうという周囲の考えとは裏腹に、フェリシアはぱくぱくとそれを口に運んだ。

（美味しいかって聞かれると正直微妙だけど、食べられないほどじゃないね。寧ろ懐かしい味かも）

貧しい食事には、フェリシアではなく優花が慣れている。優花が中学に上がる前後までは貧乏生活だった斉藤家では、茶碗一杯の米に大量の水を入れた薄い粥を、家族で分け合うのも日常茶飯事だった。あの頃の食生活に比べれば、肉が入っている分豪華な食事ですらある。

「ごちそうさまでした」

そして、特に無理をするわけでもなく一食を平らげたフェリシアは、礼儀正しく手を合わせて夕食を終えたのだった。

翌日から、フェリシアの食事は三食下級兵士達と共にすることに なった。メリッサには、本来フェリシアに出される分の食事を食べていいといっているのだが、彼女も主人より豪華な食事を口にするわけにはいかないと、一緒に下級兵の食事を食べている。中身が庶民のフェリシアとは違い、生まれながらに一応は男爵家のお嬢様であるメリッサが耐えられるものかはじめは危惧したが、メリッサも貧しい食生活には慣れていくらしく杞憂に終わった。

「私の家なんて、本当に名前だけの貴族で、裕福な商人の方のほうがよほど立派な暮らしをしていると思いますよ。お嬢様のメイドに

なる前は、私が市場で日雇いの仕事をして糊口を凌いでいたくらいですから」

メリッサがそう言うと、彼女の隣に座る大柄な兵士が顔を覆った。
「お嬢ちゃん、まだ若けえのに立派だなあ。泣かせるじゃねえか」
ここ数日で一番打ち解けたひょうきんな兵士が泣きまねをすると、
向かいに座る女兵士がバシツとその頭をはたく。

「湿っぱい真似はやめな。これ以上スープが塩辛くなっちまったら、お嬢さんたちが困るじゃないか」

そして、周囲に笑い声のはじけた。フェリシアとメリッサも遠慮なく笑う姿を上座から見下ろしながら、マルグリットが息をつく。

「やれやれ、アーデン家の者としては、チェンバレンの娘さんと軍人が仲良くなるのは、あまり好ましくないんだけどね」

フェリシアたちがほんの一週間足らずで兵士達と軽口まで叩ける仲になったのは、何も食事を共にしているためだけではない。フェリシアはダリルやマルグリットとの打ち合わせの合間にも、皆の細々とした雑用を引き受けていた。貴族の娘といえど、中身は現代日本の庶民、優花には接客アルバイトの経験だつてある。消耗品の補充や武器の手入れ道具の中継ぎまで、どんな些事でも笑顔で引き受け、慣れないながらも一生懸命に取り組む彼女は、徐々に下級の兵士達と打ち解けつつあった。

「本当に？」

マルグリットの独り言に、ダリルが尋ねる。その真意を問うように視線を返すと、

「お顔が笑っていますが」

と指摘された。

「……さすが兄上の上司殿だな、鋭い洞察力でいらつしやる」

今度はマルグリットの方が揶揄するように笑うと、ダリルが渋い顔で俯いた。魔道師団の副団長はマルグリットの兄である。師団きつての天才にして問題児のことを思い浮かべ、ダリルは無言で米神に指を当てた。その様子に、マルグリットは神妙な顔を作って告げる。

「いや、からかったことはお詫びしよう。アレに師団を任せてきたスマイサー殿の心労を思うと、妹としても申し訳ないからな。しかし兄は、あれでも自称国王陛下の親友だ。国を裏切る真似はしないさ」

「寧ろ悪気がないから困るんだが……」

珍しく弱音らしく言葉を吐いて、ダリルは酒の杯を呷ったのだった。

15・コナリー大砦（後書き）

砦で色々編。次回は多分戦闘描写入ります。

16・魔物

フェリシアは自室の壁にかけられた暦を眺めていた。この世界の一日は、フェリシアの体感では元いた世界と大差ない。そして、一年の長さも三百六十五日だ。時間が一の刻から十の刻までの十進法であるのと同様、一年は十ヶ月である。一ヶ月は六日間の週が六週の三十六日間。十ヶ月で三百六十日、年末にあまった五日間が何にも属さない、いわば祝日的な扱いになっている。閏年という概念はない。この暦でフェリシアが砦に来て、一週間が経とうとしていた。「もう六日目なのに、何にも起きないねえ」

「よろしいことはありませんか、平和が一番ですよ」

物干し台から持ち帰った洗濯物をたたみながら、メリッサが応じる。フェリシアがオズワルドに命じられた砦の滞在期間は最長で一ヶ月。その間、何もなければ城に帰還することになっている。そうなる可能性があることはダリルやマルグリットとの打ち合わせで十分聞かされていた。魔物は人間と違い、宣戦布告もなく突然集団で襲ってくる。その頻度から襲撃を予測することはできても、フェリシアの滞在中に戦闘が起こるか否かは誰にもわからないのだ。

「私だつて戦いたいわけじゃないけど、雑用以外にすることがないつていうのもね……」

六の刻が終わった午後、一通りの雑用も終わらせて暇をもてあましていると、俄かに階下が慌しくなった。人々の駆け抜ける音に、緊張した声が飛び交う。

「何かあったのかしら？行ってみよう！」

「あ、お嬢様！」

すぐさま部屋を出て階段を駆け下りるフェリシアと、その後続くメリッサ。そして二人は、砦のエントランスを見て立ちすくんだ。「フェリシア、メリッサ嬢！見るな！」

気づいたダリルが二人の下に駆け寄り、大柄な体で視界を塞ぐが、

もう遅い。半分気を失いかけたメリツサの体を支えて、自身も青ざめながら、フェリシアは師匠を見上げた。

「お師匠様、一体……何があったんですか!？」

広いエントランスには、マルグリットをはじめとする上級兵たちの人だかりができていた。その中央部に、血塗れになった兵士が仰向けに倒れている。フェリシアも顔なじみの、若い下級兵士だ。今朝、大森林へ偵察に行くのと言って張り切っていた彼と朝食を共にしたばかりである。

「大森林の方に、魔物軍が出たと。偵察班は十人組のはずだが、おそらくあの様子では彼以外に生き残りは」

「出撃だ!」

痛ましそうに告げるダリルの声を遮るように、男の濁声が響いた。視線を向けると、初日にフェリシアたちを出迎えた大佐が兵士達に檄を飛ばしている。

「大森林の魔物軍など、所詮小鬼の寄せ集め! 剣を取れ! 出撃! 出撃!」

威勢のいい上官の命令に、兵士達も唸り声を上げて答えながら、剣を掲げて大森林側の出入り口に殺到する。その様子を見たマルグリットが慌てて大佐を止めた。

「大佐、十人からなる偵察班がほぼ全滅したのですよ! ? 出撃は、生き残りから詳しい情報を聞いてからになさった方が」

「おや、アーデン將軍の令嬢ともあるう方が弱気な。恐ろしいのなら、ドレスを着て社交場で男の狩りでも楽しまれるがいい。そのほうがお似合いですよ」

にやついた笑みを浮かべてマルグリットの胸元を眺め回す大佐。

「……!」

あまりの侮辱にマルグリットが言葉を失っていると、大佐は満足そうに笑って肩を揺らしながら出て行った。その後姿を射殺さんばかりにしばらく睨みつけたマルグリットは、昂然と顔を上げて周囲の部下達に命じた。

「私たちも出撃するぞ！」

大佐の暴走を食い止めると言葉にせずとも理解した兵士たちは、一斉に礼をとって駆け出した。

「私も行かなければ。お前たちは部屋に戻っていなさい」

ダリルもそう言っ、砦の外へと向かっていく。

「そ、そんなこと……」

人々の怒号の中取り残されたフェリシアたちは、恐る恐るエントランスへ目を向けた。そこでは伝令の役目を終えた若い兵士が、後は死を待つばかりという様子で倒れており、誰も見向きもしない。

「このまま部屋に閉じこもるだなんて、できるわけじゃない！」
見下ろせば、意識を取り戻したメリッサも、青ざめて震えながらも頷いてくれる。フェリシアはエントランスを駆け回る兵士達の間を縫って、血塗れの兵士の傍らに膝をついた。

「酷い傷……メリッサ、清潔な布と包帯、それから傷薬をありつたけお願い！あとは……そうだ、この人医務室に運ばなきゃ！担架と人手！それから医術士の人呼んできて！」

「は、はい！」

主人の命令に、メリッサが飛んでいく。一方、勢いよく命じたものの、フェリシアは兵士の傷を直視するだけで精一杯だった。

（どうしよう、こんな傷……）

背中と腹を何か大きな鉤爪のようなもので鎧ごと引き裂かれた兵士は、呻くことすらせずに横たわっている。フェリシアがシャロンから習ったのは人工呼吸の方法や添え木の当て方といった基本的な応急処置で、これほどの大怪我の前では無力だ。治癒の魔法も使えるが、日常や攻撃に使う魔法のバリエーションの多さに比べ、治癒術は被術者の自然回復力を高めるだけのもの。いくらフェリシアの魔力が質・量共に優れていても劇的な効果は望めない。

（ううん、それでもやらなくちゃ）

迷いを振り払うように頷いて手を翳し、治癒の魔法を発動させる。ふんわりと優しく光る燐光が兵士の体を覆い、出血が止まった。し

かし、傷口が塞がるには至らない。

「お願い、もう少しでちゃんとした手当てができるから、頑張つて！」

更に治癒の術で傷口を覆いながらフェリシアが声をかけると、兵士は微かに呻いて薄目を開けた。

「お、お嬢、ちゃ……？」

かすれた声でフェリシアを呼ぶ声に、首を振る。

「今は喋らないで下さい、余計な体力を使わないで。魔物軍なら、もう討伐隊が出たから安心してください」

すると兵士は目を見開いて咳き込んだ。

「や、やめろ……！」

「だから喋っちゃ駄目だって」

話す傍から血を吐いて咳き込む彼をたしなめつつも、フェリシアは眉根を寄せた。

（止めるって、魔物軍と戦うなって事？）

すると兵士は苦しい息でフェリシアの疑問に答えた。

「魔物、軍……こ、小鬼だけじゃ、ない……戦闘、熊、と混合、ぶたい……」

「ええっ!？」

戦闘熊、という単語にフェリシアは仰天した。戦闘熊も小鬼と同じくコナリー大森林に生息する魔物ではあるが、その強さは小鬼の比ではない。人の倍ほどの体躯に、強靱な筋肉を持つ、熊というより異形の巨人のような魔物だ。破壊力だけなら魔狼をも凌ぐ。大佐が出撃に伴った歩兵達では苦戦を強いられると、戦に関しては素人のフェリシアでさえもすぐにわかった。

「あんなの、砦、の、城壁、盾にして……籠城戦、しないと、勝ち目はないって、おやっさんが……」

おやっさんとは、あのひょうきんな中年兵士だ。偵察班の班長を務めていたはずの彼がどうなったのか、今は考えないようにして、フェリシアは立ち上がった。丁度、メリッサが担架と応急セット一式

を担いだ衛生兵を連れて戻ってきたところだ。

「籠城戦に持ち込まないと勝てないほどの戦闘熊の軍団が、こつちへ向かっているんだね？」

兵士を見下ろして確認すると、彼は力なく頷いた。

「ありがとう。その情報、絶対無駄にしないから、死なないで。メリッサごめん！後はお願い！！」

「ええっ！？お嬢様、どちらへ！！？」

慌てるメリッサを置いて、フェリシアは砦を飛び出した。目の前には荒野、そしてそのすぐ先に大森林への入り口が広がっている。目を凝らすと、兵士達の軍団は荒野の中ほどまで進んでいる。

（お願い、間に合って！）

フェリシアはその方角めがけて走り出した。しかしいくらも行かないうちに、岩場に足を取られて転倒する。

「痛っ……そういえば、フェリシアってまともな運動したことなかったんだっけ……」

齊藤優花は空手をはじめ様々な武術をかじった活発な娘だったが、今の彼女は運動とは無縁な深窓のお嬢様である。上手く動かない体に苛立ちながら、フェリシアは立ち上がった。

（落ち着け、こんな距離、ちゃんと鍛えた足で走っても間に合うかどうかかわらないんだから……そうだ）

ふと思いついて突風の魔法を発動し、砦の城壁ほどの高さまで上って滞空する。更に鉄の強度を誇る魔法の防壁を周囲に巡らせ、最後に背後で爆風の魔法を発動させた。

「いっけー、即席人間大砲！！！」

ドン、という爆発と共に、フェリシアの体が吹き飛ばされる。防壁のおかげで衝撃は無いが、風のように飛び去っていく風景に今更青くなるフェリシア。

（いやああああああ、怖いー！！でも気を失ったら駄目だ、防壁張ってない状態で地面に叩きつけられたらぺちゃんこだよ！）移動手段を後悔しながら、フェリシアは兵士達の軍勢を飛び越え、

ちょうど指揮官の一団の前に墜落した。場所は大森林に入るギリギリ、間一髪である。

「フェリシア！！？」

乗馬服姿の救世主様が目の前に落下、という登場方法は一同の度肝を抜いたらしい。女性としては豪胆なマルグリットすら青くなつて駆け寄り、目を回して倒れているフェリシアを助け起した。

「いったいどうしてここへ！？」

その声にはつと意識を取り戻したフェリシアは、マルグリットの腕を掴み返して訴えた。

「マルグリット！今すぐ兵を退いてください、戦闘熊が来ます！」

「何だつて……！！？」

驚くマルグリットたちに先程の兵士とのやりとりを聞かせると、マルグリットもダリルも真剣な表情で頷いた。

「なるほど確かに、皆にこもつて城壁から飛び道具を使うのが最も被害の少ない方法だ。今すぐ撤退しよう」

しかしそれに待ったをかけたのがあの大佐である。

「ここまで来て撤退！？ふざけるな、私は尉官の頃からこの砦に居るが、戦闘熊が大規模軍団に加わったことなど一度も無い！さてはお前達、戦闘熊が来るなど偽りを述べて手柄を横取りする気だな！？」

みつともなく喚く大佐に、マルグリットとダリルがそろって冷たい視線を向けた。周囲の兵士も上官たちの意見が割れたことに、戸惑い顔で歩みを止める。

（ひょつとして砦に来たとき、兵士さんたちがマルグリットの部下さんたちより態度が冷たかったのつて、この人のせい……？）

もはや隠すそぶりもなくぶつけられる敵意に、フェリシアも眉を顰めた。

「大佐殿、瀕死の伝令兵の意思を無駄にするまいと駆けつけた私の愛弟子が、偽りを申し上げていると仰せか？」

いつに鳴く怒気を孕んだ声でダリルが問い質す。すると大佐はやけ

くそ気味に答えた。

「ああそうだ、信じられるものか！魂の抜けた人形姫の言うことなど！ー！そんなものに私の築き上げた地位を、名声を奪われてなるものか！ー！」

すると、大森林から野太い咆哮が響き渡った。せいぜい子供の背丈ほどの小鬼が発するはずも無い、大型獣の叫び声だ。

「ま、まさか本当に戦闘熊……」

その声に一瞬怯んだ大佐だったが、すぐに剣を抜いて構えた。

「は、ハハ……、それが何だ、戦闘熊だろうと北の魔王だろうとこの私が討ち取ってくれる！ー！皆の者、私の後に続け！突撃！ー！」
鼓舞する声に、戸惑いつつも兵士達が武器を手にする。

「やめないか！」

しかしマルグリットの凜とした声に、すぐに彼らの動きは止まった。

「大佐。貴方の官位は私より上、皆の中では貴方の命に従うが、ここは私がオズワルド陛下より直接指揮を任された戦場だ。この場は私に従っていただく。総員、撤退！ー！」

マルグリットの号令に、兵士たちは武器をしまい後退を始めた。

「こ、この小娘が……！」

怒りに顔を真っ赤にした大佐が、なおも大森林へ突撃の構えを取る。フェリシアは思わず、その前に飛び出していた。

「邪魔だ、どけ！ー！！」

大佐が目目の前の娘を突き飛ばそうと手を伸ばす。フェリシアはその手を突風の魔法で叩き落とし、大柄な軍人を睨み上げた。

「邪魔なのは貴方です。死にたくなければ皆に帰ってください！」

「なっ、なんだと！？」

フェリシアはそれきり、絶句する大佐には目もくれず大森林の方へと向き直った。その瞬間、深い森の奥から灰色の毛に覆われた巨体が飛び出してくる。

「戦闘熊……！」

兵士の誰かが息を呑んだ。荒々しい唸り声をあげ、大木をも一撃で

なぎ倒す太い腕を振り回す魔物に、フェリシアは手を翳した。

「森の熊さんはお呼びじゃないですよ！」

叫びながら暴風の魔法を発動し、戦闘熊の体を吹き飛ばす。吹き飛ばされた巨体は回転しながら後方へ叩きつけられ、次々に出てきた仲間の体や武装した小鬼を巻き込んで転がった。

「お師匠様、ちょっと暴れてもいいですか？ 偵察兵の皆さんのルートとは方向違いだから、生き残りがいても大丈夫だと思うんですけど」

「好きにきなさい」

ダリルの了解を得て、フェリシアは森へ風の大鎌を放った。ザシュツ、ザシュと音を立て、フェリシアの視界一面、木も森に隠れていた魔物の軍勢も見境無く切り刻まれる。

（うわー、自分でやっててなんだけどグロい）

舞い散る血と肉片、輪切りになつて吹っ飛ぶ大木に、慌てて作戦変更する。

（これでどうだ！）

フェリシアが腕を振り下ろすと同時、仲間の死体を踏み越えてやってきた魔物たちの足元が盛り上がり、地震のような揺れと轟音を立てて大きな土の腕が更地になった森に乱立した。そして、一気に魔物を地中へと引きずり込む。魔物の軍勢は後から後から沸いて来るものの、フェリシアは機械的にそれを地中に飲み込み、最後に魔物たちを飲み込んだ大地に最大級の爆風の魔法を放って止めを刺した。（倒しても倒してもきりがいいなあ）

本人の心境は暢気だが、それは紛れも無い一方的な虐殺だった。人々は半ば青ざめて、一人の娘が引き起こすそれを眺めている。やがて、魔物の軍勢で殺気立ち咆哮をあげていた大森林はしんと静まり返った。

「ええと……すみません、撤退するまでもなく討伐完了？ みたいです」

くるりと振り返って報告するフェリシア自身は何の変哲もない娘で

ある。それが一層の恐怖を煽った。

「ば、化け物……」

青ざめた大佐が、ポツリと呟く。

「え……？」

よくも手柄を横取りしたなと怒鳴られることは覚悟していても、まさかそんな言葉を浴びせられると思っていなかったフェリシアが、目を見開く。大佐の言葉が波紋のように兵士達の間にはびこる前に、マルグリットが声を上げた。

「我らが救世主に幸あれ！敵は殲滅された！！」

すると兵士たちは呪縛から解き放たれたように、歓声を上げた。

「犠牲者なしの戦だぞ！」

「救世主様の奇跡だ！！」

褒め称える声をどこか遠くに聞きながら、フェリシアは背後を振り返った。魔物は血のにおいに敏感だと本に書いてあったので、死体は全て地中に飲み込んだ。全て飲み込んで、地面の中で切り刻んだ。

（あ……私）

呆然と、フェリシアは思う。

（私が、たくさん、殺したんだ）

立ち尽くすフェリシアの背中に、ダリルが歩み寄った。マルグリットは騒ぎ立てる兵士達をまとめるのに手一杯で、フェリシアを気遣う余裕は無い。そもそもフェリシアがつい最近まで争いとは無縁の世界にいたことを知るのには、この場でダリルだけなのだ。口下手な自分が何処まで彼女を支えられるのか、ダリルは迷いながらも弟子の背中に声をかけた。

「フェリシア」

命を奪うことも奪われることもない平和な世界で生きてきたフェリシアが、魔物とはいえ大量の命を殺めて、化け物呼ばわりをされて、傷ついていないか、泣いてはいないかと恐れにも似た気持ちで返事を待つ。するとフェリシアは、ゆっくりと振り返ってぎこちなく微笑んだ。傍目にも、無理をしているとわかる顔で。

「お師匠様。ええと、やりすぎだったら、すみません。でも勝ちましたよ」

褒めてください、と空元気を出しておどけるフェリシアの肩に、ダリルは手をかけた。細い感触に眉根を寄せる。

「お師匠様……？」

ダリルは知っている。この娘は、本当に嬉しいときはもつときらきらと笑うのだ。同時に、ちらりと大森林の入り口の惨状に目をやった。フェリシアの力は強大で、冗談ではなく彼女を手に入れた勢力が世界の覇権を握りかねない。今後より一層、彼女は各勢力から狙われることになるだろう。ならば、とダリルはフェリシアを抱き寄せた。

（ならば、私は世界からこの子を守る盾となろう）

彼の小さな誓いを聞く者はいない。ただ、抱きしめるといには緩く大きな腕に包まれたフェリシアが、くすくすと笑った。

「お師匠様、やっぱりお父さんに似てる」

ダリルがベネディクトではなく、斉藤優花の父親に似ていると笑う彼女は、もういつものフェリシアだ。ダリルはほっとして、腕を解き促した。フェリシアが本来の顔で笑っているだけで、彼は満足だった。

「帰ろう」

「はい」

そして師弟は、並んで砦へと後進する軍の後を追ったのだった。

16・魔物（後書き）

おまちかねの（？）主人公無双。しかし何か爽快感に欠ける終わり方だなあ。女の子主人公ではなかなか少年漫画のようにはいかないやね。

あと最後のダリル師匠は……なんか深読みしようによっては年甲斐もなく主人公に惚れているようにも見えますが、まだ辛うじてそこまではいってないと思います。父性愛です。多分。今のところ。

17・帰還

フェリシアが戦闘熊の軍団を打ち破ったニュースは、その日の内に早馬が出され、国内外へと広がっていった。頑強な砦と万の軍勢をそろえ、多くの犠牲者を出してようやく勝利できる規模の軍勢を救世主が殲滅してみせたというその話は、受け取る人間の立場によつて朗報とも凶報とも取られていく。しかし当のフェリシアはそんな事を知る由もなく、王都帰還の日を迎えていた。

「色々あつたけど、この砦ともお別れか」

感慨深く灰色の墨壁を見上げると、見送りに来た中年兵士にバンバンと背中を叩かれた。

「そうシケた顔するなよ、お嬢ちゃん。ここは戦の最前線なんだ、いつでもお待ちしていますぜ、救世主殿。……元気でな」

偵察班の班長を務めたあの兵士である。満身創痍ながらも生命力の高さで一命を取り留めた彼だったが、結局、班長と伝令に來た青年兵士以外は歸らぬ人となった。しかし兵士は恨み言一つ零さず、幾重にもガーゼの張られた顔でニカツと笑う。フェリシアもそれに微笑み返し、力強く頷いた。

「はい、皆さんもお元気で。お世話になりました」

ぺこりと頭を下げるフェリシアの背後から、マルグリットたちの呼ぶ声がする。フェリシアは慌てて脇のカバンを持ち上げると、時折後ろを振り返りながら走り去ったのだった。

帰還の行程は行きと同じく五日間である。しかし、その様相は行きたと大きく異なつた。今回の戦闘にて死傷者ゼロという偉業を達成したフェリシアは、貴族の令嬢としては格別に気さくな人柄もあつて兵士達の支持を得ていた。野営キャンプを歩けばフェリシア様、救世主様と声をかけられ、どうやって手に入れたのか差し入れの菓子まで貰う始末だ。

「兵士の人たちって、今回私にお手柄を奪われちゃった形なのに、何でこんなに良くしてくれるんだろう？」

差し入れの中から、微弱な魔力反応で淡く光る飴をつまみ上げて呟くと、おすそ分けを貰ったマルグリットが苦笑した。

「手柄を奪われた悔しさがないとは言わないけれど、皆フェリシアの強さに心酔しているんだよ。素直に誇っておきたまえ、君はそれだけの偉業を成し遂げたんだ」

そう言われても、フェリシアとしては一般人が火起しや水呼びを使う感覚の魔法を使っただけである。照れくさいやら畏れ多いやら複雑だった。

「まあ、中にはその強さを妬む者もいるようだが」

マルグリットは嫌悪を込めて呟き、最後尾の黒馬車を見遣った。罪を犯した貴人を運ぶための馬車の中には、コナリー大砦の責任者だった大佐が乗っている。危うく戦闘熊の軍勢に突っ込み甚大な被害を出すところだった責任を問われ、王都へと護送されるところだった。

「オズワルド陛下はあの人をクビにしちゃうんでしょうか、やっぱり」

「十中八九そうなるだろうね。やれやれ、後釜争いが厄介なことになりそうだな。父上は国防の要所にあんな無能を陣取らせる必要はないと常々嘆いておられたから、お喜びになるかも知れないが」

中管理職の身にもなってもらいたいものだね、とマルグリットは肩をすくめた。

そして、フェリシアを持て囃すのは兵士だけではなかった。先行している伝令兵が伝えたのだろう、王都へ帰還する途中に立ち寄った全ての町村で人々の歓声を受け、フェリシアは戸惑った。

（魔力に物を言わせて敵を叩き潰しただけなんだけどなあ……）

皆が皆、フェリシアを予言の救世主と褒め称え喝采を浴びせる。居心地の悪さは帰還の最終日、王都についてピークに達した。堀にか

けられた跳ね上げ橋を渡った先に、城下町をぐるりと囲む城壁と見上げるほどに大きな門がある。その門を一步くぐると、そこはお祭り騒ぎだった。

「救世主様のご帰還だ！」

高らかなラッパの音と朗々とした声に、フェリシアは目を見張った。王城に続く大通りの脇にはずらりと人々が並び、道には後から後から花が振ってくる。マルグリット率いる兵士たちは何処からともなく現れた楽隊に先導されて行進した。乗っていた馬車の窓からその光景を見たフェリシアは、隣に座るダリルを見上げる。

「お、お師匠様、何だか大変なことになってますけど」

「そうか？勝利祝いのパレードだ、きっとこれからもよくあることだぞ」

「ば、パレード！？」

ダリルはあわてるフェリシアの頭をよしよしと撫でてやり、馬車の窓を開けた。途端に、人々の歓声がわつと雪崩れ込んでくる。

「顔を見せて、手を振るといい。皆喜ぶ」

「で、でも、私、恥ずかしいし、そんな大した事したわけでもないのに……」

頬を染めて恥らうフェリシアの様子に一瞬何かがぐらつきそうになりながらも、ダリルは心を鬼にして促した。

「これも救世主のお役目だ。慣れておきなさい」

そこまで言われてはフェリシアとしても逆らえない。思い切って窓から顔をのぞかせると、目ざとい町人が叫んだ。

「フェリシア様だ！」

その声に、人々の視線が一斉にフェリシアのほうを向く。その顔はどれも、歓喜に満ち溢れていた。日本にいた頃テレビで見た皇族の方々を参考にしつつ、淑やかに手を振って見せると、歓声は一際大きくなった。

「お嬢様、大人気ですね」

フェリシアの向かいに座るメリッサは得意げだ。しかしフェリシア

本人は、顔では笑顔を浮かべつつも心は晴れなかった。周囲に親しい人たちがいるときは忘れていられる、大佐の「化け物」という言葉と、死体も残さず地面に飲み込まれた魔物の姿がふっと脳裏に浮かぶ。そして、そんな自分が果たして人々の尊崇を集めていいものなのかという疑問。

(……気にしたら駄目)

それらを無理矢理頭の隅に追いやって、機械的に手を振り続けた。

主役だけが気まずいパレードを終え、久々に王城へ帰ってきた一行は、訓練場に整列しマルグリットの労をねぎらう言葉の後に解散となった。続々と兵士達が軍事棟へ入っていく中から、マルグリットとダリルが人波に逆らってフェリシアの方へやってくる。

「やあ、お疲れ様、フェリシア」

「お疲れ様です、マルグリットにお師匠様。これから陛下に報告ですか？」

「ああ。侍女殿と部屋に戻っても構わないが、君も来るかい？」

問われ、フェリシアは数秒躊躇った。きっとオズワルドのことだ、大げさに労ってくれることだろうが、今は何だかそれも厭わしかった。

「せっかくのお誘いなのにごめんなさい、報告はお任せしていいですか？」

するとマルグリットは嫌な顔一つせず、笑顔で請け負った。

「大丈夫だよ、君は初陣の後だもの。ゆっくり休むといい」

その言葉に、ダリルもこくりと頷いた。

「ありがとうございます。行こう、メリッサ」

「はい、お嬢様」

二人に頭を下げ、メリッサを伴って、フェリシアは王族棟へ向かった。午後を回った時間では、人々は仕事の最中で、人影は少ない。今までの行程とは違って変わり、救世主様などと持て囃されないことにはとすると。途中、顔見知りの巡回兵や庭師とは帰還の挨拶を

交わしながら、久々に自室へ帰ってきた。

「はあ」

そのままソファに倒れこむと、メリッサが慌てて駆け寄ってきた。

「お嬢様！？どこか、体のお加減でもよろしくないですか！？シャロン先生をお呼びしましょうか！！？」

「ううん、少し、疲れちゃっただけ。先生には明日挨拶に行くから、荷解きとか、任せちゃっていい？」

「それは勿論。ですが、本当に大丈夫ですか、お嬢様？」

「うん。メリッサも疲れているだろうに、ごめんね。一通り片付いたら、夕飯まで休んでいいから」

それだけ言うと、フェリシアは風呂場に引っ込んだ。さっと湯を浴びて汗を流し、長い髪をさっと魔法で乾かし、夜着に着替えて寝室の寝台の上に身を投げる。メリッサが小物を整理する物音を聞きながら目を閉じると、うとうととまどろみ始めた。

（なんだか、すごく疲れたな……ちょっとだけ、休んでもいいよね）
フェリシアは眠気に逆らわず、瞳を閉じて長い眠りに落ちたのだった。

17・帰還（後書き）

何だか主人公死んだみたいな終わり方ですみません。単純に朝まで爆睡したというだけの話です。

それと勝手にランキングに登録してみました。もし面白いと思っていただけたら、投票いただけると幸いです。

18・城下町

メリッサは自分の力不足を嘆いていた。勿論、敬愛する主人であるフェリシアのことである。コナリー大砦から帰ってから、大切なお嬢様の様子がおかしいのだ。メリッサはその場にはいなかったが、戦闘熊の軍勢との戦いは圧勝だったという。人々も救世主を褒め称え、何の憂いなど無さそうなものだが、フェリシアはどこか憂鬱そうな表情をしていた。

（お嬢様……戦ったときに、何かあったのかしら）

聞いても、フェリシアは心配ないよと笑うばかりだ。実際、オズワルドやベネディクトへの面会や、シャロンの定期健診、ダリルの授業や偶に訪れるマルグリットとおしゃべりなどしている間はいつも通りのお嬢様なのだ。しかしメリッサは、時折一人ではんやり考え込んでいるフェリシアを目撃している。メリッサのほかにはダリルだけが何かに感じている様子で、気を配ってくれてはいるのだが、彼はずっとフェリシアのそばにいるわけにもいかない。

（ならやっぱり、私が何かお嬢様の気晴らしになるようなことを計画しないと！）

メリッサは自分だったら気が晴れないとき何をしたいだろうと考えて、すぐに一つ思い当たった。一介の侍女が申し出るには不相応なことだが、ベネディクトにも話を持ちかければ協力してくれるだろう。休憩時間に入ったメリッサは、すぐに便箋へペンを走らせた。

そして、メリッサの行動が実を結んだのは一週間後の午後だった。
「外出許可？」

専属メイドの差し出す書状に、フェリシアは目を丸くした。

「はい。私、一度お嬢様と城下にお出かけしたかったです。旦那様に手紙で相談してみたら、陛下にお願いしてくださって。一緒に行ってみませんか？」

するとたちまちフェリシアは笑顔になった。

「いいね、行こう行こう。一応変装した方がいいかな？」

「それは、はい」

戦闘熊の一件で活躍したフェリシアは、今や城下の人々にも顔を知られている。メリッサが頷くを見ると、フェリシアは顔を輝かせた。

「よし、じゃあ早速衣裳部屋へ行こう」

「え？え？お嬢様！？」

フェリシアは戸惑うメリッサを引きずって部屋を出ると、二階に駆け上がった。

「こっちこっち。この小部屋、衣装室になってるの」

城内探検の際に見つけた部屋の扉を開けると、そこにはずらりと洋服が並んでいた。王族棟を使う者の少ない現在では物置に近い有様になっており、少し古い型のドレスから使用人服の予備まで、ありとあらゆる服がそろっている。

「どれにしようかなー。せっかくだからいつもは着られないようなの着たいね」

「な、何もそこまでなさなくても……ぱつと見お嬢様だとわからなければいいのですから」

「何言ってるの、やるなら徹底的にやらないと。あ、このチュニツク可愛い」

フェリシアはごそごそと部屋を物色しながら、ぽいぽいと服を脱ぎ捨てては身に着けていく。そうしてできあがったのは一昔前の騎士のような、冒険者のような男装の娘だった。最後に金髪の鬘と大きな羽根飾りのついた帽子を被り、鏡を覗き込んだフェリシアは顔を顰めた。

「うーん、金髪に黒い目って合わない。これでどうかな」

「お嬢様？何をなさったんですか？」

鬘も帽子も取った様子がないのに満足げなフェリシアは、くるりと振り返った。その黒目は鮮やかなエメラルドグリーンに変わってお

り、顔つきも何だか微妙に違う。

「幻覚の魔法を使ってみたの。即席にしてはうまくできてるでしょ？」

「上手くできているどころか、もうお嬢様とは別人ですよ……巡回兵の方々になんていったらいいか」

「あ、そうか」

そこで一旦顔を自前のものに戻したフェリシアは、こちらも外出着に着替えたメリッサを伴って城を出ると、再度幻影の仮面を被った城下町へと続く道を二人で並んで歩きながら、思いつくままに変装のコンセプトを語る。

「目標は、コナリー大昔に行くとき見かけた冒険者のお姉さんだよ。今日の私は町から町へ渡り歩く旅人で、メリッサは久々に会った友達。で、二人で一緒にお出かけするっていう設定ね」

「楽しそうですね、お嬢様」

「うん。コスプレなんて興味なかったんだけど、やってみると楽しいね」

「こすぷれ？」

「あ、こつちの話。ねえ、最初はどこへ行く？」

「そうですね……私のおススメで良いでしょうか？」

「勿論。まかせる」

二人の目の前には大通り、その両脇には様々な店が立ち並んでいる。道行く人々にも活気があり、どの店からも威勢のいい呼び声が響いてきた。その声に誘われるようにして、歩き出す。見たこともないような野菜や魚、肉を売る店が軒を連ねる道をフェリシアは興味深そうに一軒一軒回っていた。

「この辺りは市民の台所ですね。夕方近くなるとご近所の主婦がお買い物に来るんですよ」

「今より人が多くなるの？」

「ええ。お店の方でもそれに合わせて、夕方の売り尽くし特売をはじめたりしますから」

「本当？私のところでもそういうお店は多かったよ。世界が変わっても商売の方法は案外変わらないものだねえ」

そんな話を話しながら、メリッサの示す角を曲がると、華やかな一角に出た。先程の通りが庶民の町なら、こちらは上中流階級の若い娘が好みそうな、メルヘンチックな雑貨店や洋服店が並んでいる。

「わあ、可愛い」

白とピンクのリボンやレースで飾られたショーウィンドウを覗き込み、声を上げるフェリシア。

「ここに並んでいるアクセサリーには手が届かないけど、偶にレース系やリボンの端切れを買いに来るんです。見るだけでも目の保養になりますよ」

二人は一軒の雑貨店に足を踏み入れた。発条仕掛けのオルゴールに飾り石のついた女性用の懐中時計、アクセサリーといった値の張るものから、庶民の娘でも奮発すれば買えるような可愛らしい食器、小物入れ、手芸道具まで眺めているだけでも飽きない。

（本当に、異世界なんだなあ……）

品物を眺めながら、フェリシアは感慨深い息をついた。一見現代日本にもありそうな品物でも、時計は魔法仕掛けだったり、向うでは簡単に手に入る品物が高額だったりする。例えば、ガラスケースに入ったオルゴール。日本では安いものなら百円ショップでも売っているが、こちらでは職人が一つ一つ手作りしているため金三枚という値札がつけられている。この世界で流通する貨幣は世界共通で青銅貨、赤銅貨、銀貨、金貨の四種類だ。十枚ごとに一つ上がる方式で、フェリシアの感覚だと青銅貨一枚がだいたい十円ほどの価値のようである。円やドルなどの単位はなく、例えば一万五千円相当の品物は金一枚銀五枚という形で表される。貴族や裕福な商人の間では紙幣や小切手も使われるが、一般的ではない。

（金三枚、ということは三万円か。一ヶ月分のバイト代だ……）

「お嬢様、どうなさいました？」

値札とにらめっこをしていると、メリッサがやってきた。

「何かお気に召した品でもございましたか？」

「ううん、なんでもないよ。それよりお嬢様はまずいつて」

「す、すみません。でも、どうやって呼びしらいいでしょう？」

尋ねられ、フェリシアはうーんと腕組みした。

「フェリシアの愛称ってフェリー？フェリア？シア？どれもしくりこないなあ……」

ひとしきり考えたフェリシアは、最後にあっと思いついた。

「優花、は駄目かな？」

予言の救世主フェリシアの魂が、現代日本の女子大生齊藤優花のものであることを知る者はほとんどいない。偽名としてなら使えるのではないかと提案してみると、メリッサが小首を傾げた。

「ユウカ様？」

「友達って設定なのに、様付けはおかしいよ」

「……ユウカ、さん」

「できればさんも取ってもらえるといいかな」

「うう、これ以上は無理ですよ」

「わかったわかった」

涙目のメリッサを前に譲歩したフェリシアは、それでも笑顔を浮かべていた。フェリシアと呼ばれることに慣れたが、やはり優花と呼ばれる方が自分の名前らしい。

「買うものがなければ次のお店に行きましょうか」

「うん」

そして二人はショッピングを再開した。隣の洋服店、その隣の化粧品店と、時間も忘れ見て回る。気がつけば、日が傾き始めていた。

「名残惜しいけど、そろそろ帰ろうか」

食品店へと急ぐ主婦が多くなってきた道を見て、フェリシアが呟く
「そうですね。でも、最後に少しだけ一休みしませんか？美味しい焼き菓子のお店を知っているんです」

「本当？」

「はい。すぐそこですから、買ってきますね。ユウカさんはあちら

で待っていてください」

メリッサは傍の噴水を指差すと、断る隙も与えずに菓子を売る露天へ駆けていった。

（さすが専属メイド。見抜かれてるなあ……）

フェリシアは苦笑しながらその後姿を見送り、大人しく噴水の淵に腰掛けた。半日歩き続けた足はパンパンで、足の裏が鈍い痛みを発していた。ろくに運動もしたことのないお嬢様の体では、そろそろ限界だったのだ。それをメリッサはきちんと見抜いていた。

（マルグリットに頼んで、私も基礎訓練に参加させてもらった方がいいかな。でも軍隊式って厳しそうだしなー）

フェリシアが悩みながらメリッサの帰りを待っていたときだった。

「シスター！」

小さな子供の緊迫した声に、何かがドサリと倒れる音がした。フェリシアが振り返ると、噴水前の広場に質素な聖衣を纏った老女が倒れている。その横に、膝について彼女へ必死に呼びかける小さな男の子。そして二人を、チンピラ風の男が見下ろしている。

「オイ、どこ見てんだババア！！！」

「申し訳ありません、お許してください……」

男にぶつかって倒れたらしいシスターは、短く呻きながらも男の子を庇うように下がらせて、男に懇願した。決して人通りの少ない広場の出来事である。しかし周囲の人々は、チラチラと横目にしながら通り過ぎていった。

（これだけ人がいて、どうして助けないのよ！）

足の痛みも忘れて瞬時に動いたフェリシアは、騒動に気づきながらも自分の横を通り過ぎようとした中年の男に向かって叫んだ。

「ちよつとそこの緑の帽子のおじさん、兵士の人呼んできて！」

「あ、ああ」

皆、「誰かが助けるだろう」という心理が働いて何もしないのだと何かのテレビで見た覚えがある。そこで個人が特定できる呼びかけ方をすると、中年の男はぎこちなく頷いて市中警備兵の詰め所へ走

つていった。更にフェリシアがシスター達を助けようと駆け出すと、チンピラは舌打ちして傍に落ちていた財布を拾い上げ、逃げ出した。「あ、待て！」

すぐさまフェリシアは方向転換して、男の後を追う。人々が呪縛の解けたように兵士を呼べと騒ぎ立てるが、男の逃げ足は速く、その声もどんどん遠くなる。

「これでも食らえ！」

一通りの少ない路地裏に入ったところで、フェリシアは威力を落とした雷撃の魔法を男の足元に落とした。男は痺れた足を引きずりつんのめって転倒するが、魔法の当たった石畳は黒焦げになっていた。「大人しく捕まりなさい！」

「何だ、女一人かよ。へへっ、やる気かあ？」

男は敵がフェリシア一人であることを見て急に余裕を取り戻したらしい。立ち上がってニヤニヤと笑い始めた。

「女だからって馬鹿にしないで！私は強いわよ！」

フェリシアは勇ましく宣言するが、内心では困窮していた。威力を落とした雷撃だけで石畳が黒焦げになってしまふのだ、町の中で滅多な魔法は使えない。

（こ、こうなったら殴り倒すしかない！）

そんな結論に達したフェリシアは身構えた。きちんと習ったのは空手だけだが、柔道や合気道、果てはプロレスまで、色々な武術をかじった彼女の接近戦スタイルは、どちらかというところ総合格闘技に近いものがある。

「覚悟……！」

先手必勝とばかりに拳に回転をつけて殴りかかった。隙を突けば王弟殿下も倒れる一撃だ。しかし、それはあくまでも隙があればの話である。殴りかかった手を逆に掴まれた。

「口ほどにもねえな」

「痛っ、放してよ……！」

そのまま腕を捻られそうになるのを、火起しの炎を相手の手の甲に

押し付けることで逃れ、距離をとる。

「熱いっ！！！何しやがる小娘え！！！」

手の火傷に激昂して殴りかかってくる男の手から逃れながら、フェリシアは隙を窺っていた。しかし、元々疲れていた上に男を追い回し、今は追い回されているのだ。体力の限界は時間の問題だった。

（そうだ、生身の私では勝てなくても、こうすれば！）

フェリシアの思いついた方法は失敗すれば大怪我をする危険な賭けだ。しかし他に手立ても見つからず、彼女は突風の魔法を自分の手足に纏わせると、チンピラの懷に飛び込んだ。魔法の補助で、その速さは目にも止まらぬ勢いだ。その勢いのまま、男の顎へ下から拳を叩きつける。

「ぎえっ！！！！」

男は何が起きたかわからないという顔をしたまま吹き飛んでいった。それでも油断せず、フェリシアは突風の魔法で滞空すると、とどめに鳩尾へ飛び蹴りを見舞った。チンピラは泡を噴いて、その場に倒れる。

「や、やった、とりあえず勝った！」

ガッツポーズをとるフェリシアの背後から、ようやく盗人を捕まえるという人々の声が追いついてきた。

「騎士様、こっちだこっちだ！」

兵士を先導する町の男達の声に、フェリシアは首をかしげた。騎士は国や国民を守る兵士と違って、王を守る職業のはずである。それが何故こんなところにいるのだろう、という疑問と共に振り返ると、数人の騎士が駆けつけてくるところだった。

（げっ）

その先頭は、最近顔を見なかったキアランだ。

（そういえばあの人、まだ魔狼殺しの犯人探しをしてるってマルグリットが言ってたっけ……？）

市中を回っていたキアランとその部下達の方が、先に騒ぎに気づいたのだろう。キアランはまず部下達に男の捕縛を命じ、フェリシア

の向かいに立った。

「娘、あの男はお前が倒したのか？」

「はい」

「そうか。勇敢な助力に感謝する」

どうやら念を入れた変装が功を奏して、フェリシアとは気づいていない様子である。偉そうな口ぶりではあるものの、いつもの敵意はない。むしろ本当に感謝している様子に、フェリシアは戸惑った。するとキアランはそれをどう受け取ったのか、少し心配そうな顔でフェリシアを見下す。

「どうした、怪我でもしたのか？ 応急処置の薬草でよければ提供できるが」

「い、いいえ。大丈夫です」

できるだけ声音を変えて短く返事をするフェリシアに、キアランは訝しげな顔をすした。

「お前……どこかで会ったことがあるか？」

「そんなことは」

内心冷や汗を流しながら首を振るフェリシアへ助け舟を出したのは、キアランの言葉を聞いていた部下の騎士だった。

「先輩、仕事中に女の子口説いたりしないで下さいよ」

「何を言っている、俺はそんなつもりなどない」

「はいはい、そういうことにして差し上げますよ。あ、連絡先聞いたら俺にも教えてくださいね」

「だから違うと言っているだろう！ お前こそ仕事しろよ、団長に減俸されても知らんぞ」

「うわーひでえ」

怒りながらも、キアランの表情にはどこことなく気安さがあった。目の前で後輩と軽口を叩く意外な姿にフェリシアは目を丸くするが、本当に驚愕したのはその後だ。

「キアラン兄ちゃん！」

先程、被害者のシスターの横で半べそをかいていた男の子が、広場

の方から駆けて来て、キアランの腰元に抱きついたのだ。フェリシアは青くなつたが、キアランは男の子の頭をぐりぐりと撫で回し、軽々と抱き上げた。

「久しぶりだな、元気にしてたか？」

「うん！助けてくれてありがとう。やっぱり兄ちゃんは強いや！」

格好いい、と尊敬の眼差しで見上げる男の子に、キアランは照れたような笑みを浮かべたが、彼は人の手柄を奪つたりはしなかった。

「礼なら彼女に言いなさい。あの男を倒したのはこの娘さんだ」

すると男の子はフェリシアの方を向いて、キアランに抱えられたまま丁寧に頭を下げた。

「そうなんだ。お姉ちゃん、シスターを助けてくれてありがとう」

「いいえ、どういたしまして」

可愛らしい姿にフェリシアが顔を綻ばせると、件のシスターもやってきた。

「シスター、お怪我は？」

ゆつたりとした動きではあるがしつかり背を伸ばして歩くシスターにキアランが気遣わしげな顔で歩み寄ると、彼女は皺の深い顔で微笑んだ。

「私は大丈夫。それから娘さん、貴女が助けてくださったのですってね。ありがとう」

「どういたしまして。聖職にある方を突き飛ばして財布を奪うなんて、とんでもない男でしたね。お怪我がなくて何よりです。でも、こんなに離れた場所まで歩かれて、大丈夫ですか？」

シスターの無事にほつとしたフェリシアはうつかり長い言葉を発してしまつたが、キアランが気づいた様子はない。

「大丈夫ですよ、これでも教会で引き取つた孤児達相手に鍛えていきますからね」

男の子もシスターが引き取つた孤児だという。二人で夕飯の買出しに出かけたところ、あのチンピラ男にぶつかったというわけだ。

「それに孫に任せきりというのも気が引けるでしょう」

「お孫さん？」

シスターの孫の誰かが騎士をしているのだろうかと思いを返すと、品のいい老女はこころと笑った。

「この子、キアランのことよ。血のつながりはないけれど、キアランの母親は私の教会で育った孤児でね。時々様子を見に来てくれるの」

「そうなんですか」

平静を装って相槌を打ちながら、フェリシアは驚いていた。教会で孤児の世話をする王弟殿下。似合わないさ過ぎる。しかし男の子を抱き上げるキアランの手つきは自然で、その子も彼に懐いているようだ。

（そういえば、お城で妻も育ててたっけ、この人）

城内で見かけるキアランの顔は、いつも何かに怒ったような顔で、ピリピリとした空気を纏っていた。しかし、シスターや男の子と話す彼は多少ぶっきらぼうではあるものの、オズワルドの前でも見たことがないような穏やかな様子だ。時折見せる笑顔には、いつか夢に見た素直そうな少年の面影が確かにあった。

（どっちが本当の顔なんだろう）

「お嬢さん？」

ぼんやりと考えていたフェリシアは、シスターに話しかけられて我に帰った。

「は、はい？」

「どうかしら、お礼に夕飯をご馳走したいのだけれど」

シスターの誘いに、キアラも賛同した。

「そうだな、お前はシスター達の恩人だ。俺からも改めて礼がしたい」

フェリシアは神妙な表情で首を振る。

「いいえ、せっかくのお申し出はありがたいのですが、連れを待たせているので、そろそろ失礼させていただきます」

「そう……残念ね」

本当に残念そうなシスターに謝り、男の子にはばいばいと手を振って、フェリシアは踵を返した。早足に広場の方へ戻りながら、つい先程のキアランの態度を思い浮かべる。

（私がフェリシアだってわからないだけで、何なのよ、あの態度の差は）

思い出しながら腹が立ってきた。それから、ふと思い当たる。

（そうか……いつものあの人と今日の態度と、どちらかが本当の顔ってわけじゃなくて、どっちも王弟殿下なのか。単に、あの人は、「フェリシア」のことが大嫌いなだけなんだ）

そう思った瞬間、ほんの少し胸が軋んだ。痛みというほどではない違和感に、フェリシアは首をかしげる。

「おじよ…ユウカさん」

しかしその違和感も、メリッサの声を聞いてすぐに思考の外へ追いやられた。顔を上げると、噴水広場からメリッサが駆けてくることになるだ。

「メリッサ！ごめんね、一人にして」

「それはいいんです。でも、物取りがあつたつてすごい騒ぎで。まさかとは思いますが、首を突っ込んだりしていらっしやいませんか？」

「ま、まさかあ。ちょっと野次馬しに行っただけだよ」

「それだけでも十分危険ですよ！お嬢様に何かあつたら、私はもうどうしていいか」

フェリシアの事をユウカさんと呼ぶのも忘れて小言を繰り返すメリッサを何とか宥めるころには、日が暮れかけていた。

「大丈夫、もう危なそうなものには一人で近づいたりしないって。ね、帰ろう」

「……そうですね」

まだ言い足り無さそうにしながらも、メリッサはこくりと頷いた。そして二人は夕暮れの道を並んで城への帰路に着いたのだった。

18・城下町（後書き）

城下町を変装して見物していたら気に食わないあいつの意外な一面を見てしまった編でした。長い。

大抵の方は第一印象最悪であろうキアラン殿下ですが、彼とて人の子です。親しい人は大事にするし、気心の知れた仲間とは冗談も言う。じゃあ何故主人公に対してはああなのかといえば、単に本気で嫌われているだけだと気づいてしまったフェリシアの心境はいかに……別にどうでもいいと思っただけそうなのかもしれませんが。

19・副団長

日に日に強くなる初夏の日差しが、アーデン公爵家のテラスを明るく照らしていた。日の光に眩しい白いテーブルセットの置かれたテラスでは、着飾った娘達が集まっている。その中央で女王のように君臨するのは、アーデン家の末娘ヴェロニカだ。その周囲を、ヴェロニカ主催のお茶会に参加している令嬢達を取り囲んでいる。披露会后、一旦は様子を見たものの、社交に積極的ではないフェリシアからは何も得るものが無いと判断し、ヴェロニカの取り巻きに返り咲いた娘達だ。

「ねえ、聞きました？フェリシア様の参加された軍勢、また勝ち戦だったのですって」

何某伯爵令嬢が囁けば、

「まあ、怖い。私たちと同じ貴族令嬢とも思えないわ」

震え上がってみせる侯爵令嬢に、娘達の笑い声が弾ける。

「あら、怖いだなんて失礼よ。魔物を殺す道具としては、この上なく優秀な方ですもの」

ヴェロニカは、表面上は美しい笑みを浮かべ、内心は腸の煮えくり返る思いで厭味を吐いた。コナリー砦の防衛戦から一月あまり、フェリシアは何度も魔物との戦闘に参加し、その全てに勝利していた。流石に初陣の戦闘熊の時ほど出ずっぱりになる機会はないようだが、お飾りに甘んじるつもりもないらしい彼女は自ら前線に出て、その魔法を振るっているという。今やフェリシアは、グランデールの勝利の女神であるかのように囁かれ始めていた。

（お姉様はあの女の味方をするばかりでまったく頼りにならないし……）

姉のマルグリットとフェリシアが仲のいい友人であることも、ヴェロニカにとっては苛立ちの一因だ。そんな彼女の様子に慄いた令嬢の一人が、話題を変えようとヴェロニカへ話しかけた。

「と、ところでヴェロニカ様。近々魔道師団本隊が王都へ凱旋されると聞いたんですけど、本当ですか？」

「まあ、それならエドモンド様もご帰還されるのですね」

兄の名前を聞き、ヴェロニカは別の意味で憂鬱になった。

「ええ、本当よ」

一生戦地に引きこもってればいいのに、と割合本気で思いながら、ヴェロニカは溜息をつく。魔道師団一の天才にして、問題児。彼女の兄はそう呼ばれており、その奇行は王城内で恐れと共に知れ渡っていた。

「では、久しぶりに兄妹水入らずの時間を過ごせるのですね」

「羨ましいですわ、エドモンド様は本当に素敵な方ですもの」

しかし王城に行く機会など夜会程度の令嬢たちは、うっとりとした表情でそう囁きあった。確かに、エドモンドは見てくれだけならば女性と見紛う美麗な貴公子なのだ。男装のマルグリットと並んだ様はどこか倒錯的な美しさで、二人の妹であるヴェロニカすら目を見張ることがある。その上、公爵家の長子で魔道師団副団長を勤める彼は、令嬢達からはさぞ魅力的な結婚相手に見えるのだろう。そこでヴェロニカはふと気がついた。

（あの女、フェリシア・チェンバレンの師匠は魔道師団の団長だったわね。平民の分際で随分と人望があるようだけれど、お兄様の制御に苦労しているとも聞くわ。……これは、使える）

氷の矢で狙われた時の恐怖から、披露会以来積極的に動いていなかったが、ヴェロニカ自身が手を下す必要はないのだ。厄介者の兄が、勝手に引っ掻き回してくれることだろう。そう思うと、急に兄の帰還が待ち遠しくなってきた。

「ヴェロニカ様も、お兄様にお会いするのが楽しみでしょう？」

「ええ、とても」

取り巻きの一人に尋ねられ、ヴェロニカは大輪の花のような笑顔で答えたのだった。

一方その頃、フェリシアはダリルとの授業が終わったところで、ヴェロニカたちと同じ話題を口に行っているところだった。

「魔道師団の副団長さんが帰ってくるんですか？」

先程まで戦闘訓練をしていた中庭のベンチに並んで腰かけ、シャロンが差し入れたハーブティーを口に含むフェリシア。冷却の魔法がかけられたポットに入れられていたハーブティーは、陽気の中動いて僅かに汗ばんだ体に心地よい。

「うむ。魔道師団は団長以下全員が、遠征に出ていた」

本来ならそこにダリルもいたはずなのだが、フェリシアの体に優花の魂が宿ったその翌日に、オズワルドの王命で单身引き返して来たのだ。

「そういえば私、お師匠様以外の魔道師団の方に会ったことありませんね」

今更ながらその事に気づいたフェリシアに苦笑を返し、ダリルは続ける。

「彼らはウルリークとの長期戦に臨んでいたのだが、勝利を収めて凱旋するそうだ」

「ウルリーク魔法共和国……人間の国、ですよ」

複雑そうな顔をする愛弟子に、ダリルは自分のうかつさを呪った。

フェリシアが人を殺めることに強い拒否感を持っていることは事前に知っていたというのに、嫌な思いをさせてしまった。

「いや、何、長期といえど小競り合いを繰り返していただけだ、戦闘の規模自体はそこまででもない。それに今回は両陣営とも無血の勝利なのだと聞いている」

「ええっ、それってすごい快挙じゃないですか！」

フェリシアが戦闘熊を殲滅したときは、直接彼女が守れる位置にはいなかった伝令兵とはいえ死人が出た。その後何度か経験した戦場でも、死者こそ出していないものの、怪我をする人は大勢いた。敵味方共に死者負傷者なしで勝利をもぎ取ったという副団長に、フェリシアは強い尊敬の念を抱く。

「副団長さんってすごい方なんですね、早くお会いしたいなあ」

「……あまり期待すると、外れたときのショックが大きいぞ」

「え？何ですか？」

笑顔で振り返る弟子の愛らしい笑顔に、ダリルは色々と諦めた。

（実物を見た方が早いだろう）

唯一の心配といえば、問題児の副団長に幻想を抱いているフェリシアが現実を知ったときの反応だ。口下手な自分がどうやって励まそうかと、ダリルは頭を悩ませたのだった。

そして、噂の人工ドモンド・アーデン魔道副団長と団員達が帰還する当日。フェリシアは魔道師団の研究室へと向かっていた。ダリルと共に副団長たちを迎えるため、研究室の師匠を迎えに行くのだ。（副団長さんってどんな人なんだろうなあ。マルグリットのお兄さんなんだから良い人だと思いたいけど、あのヴェロニカって子のお兄さんでもあるわけだし、皆に聞いても微妙に話を逸らされちゃうんだよねえ。魔道師団の皆さんとも仲良くしたいけど、コナリー砦の兵士さんたちの例もあるしなあ……）
だんだん不安になってきたフェリシアだったが、ふるふると首を振る。

（うつん、会ってもいないうちから苦手意識を持ってちゃ駄目だよね。まずはとにかく、会ってみよう）

そう決意したときだった。考え事をしていた彼女は何か足を取られ、躓いた。

「ぐげっ！」

「きゃっ!？」

勢いよく前に倒れたフェリシアの悲鳴の前に、男の呻き声がした。恐る恐る振り返ると、背後で男が倒れている。フェリシアはそれに気づかず踏みつけたらしい。

「わわっ、すみません、大丈夫ですか!？」

立ち上がったフェリシアは慌てて男の傍らに膝をついた。男はボロ

ボロの衣服を纏い、投げ出された手足には力なく、埃を被った髪も髭もばざばざで、まるで浮浪者だ。

（お城に浮浪者……？）

曲がりなりにも国政の中枢部にこんな怪しい風体の人物が入り込めたことを怪訝に思いつつも、フェリシアは男を助け起す。伸び放題の前髪と髭に顔が埋もれ、辛うじて小さな丸眼鏡をかけていることだけがわかった。

「もしもし、おじさん、大丈夫ですか？どうしてこんなところで倒れていらつしやるんです？」

多少警戒しながら尋ねると、男はくぐもった声で答えた。

「お……追われて、いるんだ……」

「追われている！？」

物騒な男の台詞を肯定するように、複数の足音がバタバタと階下を駆け回る音が響いてきた。

「わかりました、とにかく今はここから離れましょう」

素性の知らない人間ではあったが、このまま放っておくのも気が引けて、フェリシアは立ち上がるうとする彼に手を差し伸べた。

「いやいや、ありがとう」

男が礼を言つて、フェリシアの手を取る。

「何をしている」

そのまま一歩踏み出したところで、背後から鋭い声がかけられた。ふりかえると、険しい表情のオズワルドが立っており、その斜め後ろに渋面のダリルが付き従っている。

「陛下、お師匠様！えつと、この人は……」

まさかまずい相手に手を貸してしまったのだろうかと慌てるフェリシアにずかずかと歩み寄ったオズワルドは、彼女の手を引いて男から引き離した。

「フェリシアから離れる」

そして、フェリシアを抱きしめて男を睨みつける。しかし男は怯んだ様子もなく、両手を広げた。

「やあ、我が心の友よ！会いたかったよ、元気にしていたかい？」

「誰がお前の心の友だ！！私は出来るものなら貴様の顔なんぞ生涯見たくない、失せる！！！」

「またまた、本当は出迎えに来るほど嬉しかったくせに。照れ屋だね」

「これは出迎えじゃない！私のフェリシアに害虫がつかないようにしているだけだ！！！」

頭上で交わされるやり取りに、フェリシアは目を丸くした。主にオズワルドの態度にびっくりした。いつも穏やかで目下の者にも優しく接するオズワルドが、まるでキアランでも乗り移ったかのような暴言を吐きまくっている。こうして見ると似ている兄弟だ、などとどうでもいい事を考えながらダリルを窺うと、魔道師団長はしきりに米神を揉んでいた。頭痛がするらしい。

「ああっ、いたぞ！！」

「陛下と団長が抑えている！急げ！！！」

そこへ、男を追い回していたらしい集団もやってきて標的を囲んだ。黒を基調とした魔術師のローブに身を包んだ彼らは、更に大きなマントを羽織っていたり室内だというのに帽子を被っていたり、妙な風体だ。

「とうとう追い詰めましたよ、副団長！！！」

その中の一人が進み出て、男に詰め寄った。追っ手に囲まれ、国王から睨まれているというのに、男はその様子をのんびりと眺め回している。

（……………ん？副団長？？？）

追っ手の一人が放った呼びかけに、フェリシアが首をかしげる。すると、彼女の疑問を察したかのようにダリルがやってきて、教えてくれた。

「こんなときになんだが紹介しよう、フェリシア。彼が魔道師団副団長、エドモンド・アーデンだ」

「へ……………」

てつきりマルグリットのような高潔な青年か、もしくはヴェロニカのように嫌味な貴族を想像していたフェリシアは、斜め上に行く実物を前にしてぽかんと口を開けた。思考停止した弟子を置いて、ダリルは溜息をつきつつ男——エドモンドへと向き直る。

「この度の遠征、ご苦労だった。それで、エドモンド。今度は一体何をやらかした？」

上官の問いに、エドモンドは髭の下で満面の笑みを浮かべて胸を張った。

「新しい魔法を開発しました！早速実験を開始しようと思」

「止めて下さい副団長！」

するとエドモンドに縋りついたのは、彼を追っていた魔術師達、魔道師団の面々だ。

「犠牲は俺たちだけで十分です！」

「城がなくなります！！」

「むしろ王都を壊滅させる気ですか！？」

「城下町には彼女がいるんです！俺、この戦いが終わったら彼女と」

「しっ！その先は言うな死ぬぞ！！！！」

「別れ話をする予定で」

「結婚じゃねえのかよ！！！！」

魔術師達の嘆願で騒然となったどさくさに紛れてオズワルドの腕から脱出したフェリシアは、騒ぎが収まるまでその様子を呆然と眺めていたのだった。

19・副団長（後書き）

アーデン家の三兄妹、最後の一人登場。たぶん兄ちゃんが一番濃いです。ヴェロニカは今でこそああですが、小さいころは好奇心の旺盛すぎる研究馬鹿の兄とやたら男前な姉に振り回されて苦労しています。だからこそ兄妹に対抗するためあの性格になったのか。作者はヴェロニカ含めこの兄妹書くのは楽しいのですが。

20・魔道師団

ひとまず魔法師団の研究室へやってきたフェリシアは、周囲を見回して居心地悪そうに身じろいだ。今その場にいるのは帰還したばかりの魔道師団の団員達に、ダリルとオズワルド。エドモンドは王の御前に出るにはあまりにも相応しくないという理由で浴室に放り込まれており、その場にはいない。

（なんだか団員さんたちもオズワルド陛下もピリピリしてる……そんなに酷い人なのかなあ）

不安になり、比較的いつもと同じ顔をしているダリルの横へ移動して待っていると、ノックもなく研究室の扉が開いた。

「やあ、待たせたね」

入ってきたのは、金髪碧眼の美青年だった。華やかだが上品な仕立てのローブを纏い、波打つ金の巻き毛は項でくぐられ、長い睫に縁取られた青い瞳に、小さな丸眼鏡をかけている。

（誰だろ、この綺麗なお兄さん。……あの丸眼鏡、ついさっき見た覚えがあるけど）

フェリシアが悩んでいると、オズワルドが心底嫌そうに青年の名前を呼んだ。

「遅かったな、エドモンド・アーデン」

「ええっ！？あのおじさん！！？」

フェリシアは驚愕を込めて叫んだ。髪も髭もぼさぼさだったエドモンドは、四十台も半ばの浮浪者に見えたのだ。叫んでははつと口を手で覆うが、今更である。しかしエドモンドは気を悪くした様子もなく、無邪気に笑った。

「僕はええと、確か二十五か六か七だよ。まだ、おじさんと呼ばれる年ではないかな？」

「はいっ、すみません！」

勢いよく頭を下げるフェリシアに、仏頂面のオズワルドが声をかけ

た。

「フェリシアは悪くないよ、自分の年も把握していない上に最低限の身だしなみもなっていない相手など、汚物で十分だ」

「ははは、酷いなオズワルド」

「うむ、確かにお前を汚物呼ばわりしては、汚物に失礼だったな」
嫌味で返すオズワルドだったが、

「気にすることはないさ、誰にでも間違いはある」

生憎嫌味の通じる相手ではなかった。国王陛下は一瞬遠い目をし、周囲の戸惑いと同情の籠った生暖かい眼差しに気づいて、コホンと咳払いする。

「そんなことより、エドモンド。何故お前達がここにいる？ 帰還報告は上がっていないが」

魔道師団は国の重要な戦力だ。城へ帰還すれば真つ先にオズワルドへ報告が上がる。それ以前に、華々しく勝利を収めた彼らは城下町で凱旋パレードを行うはずだが、その知らせも届いていなかった。

「それは皆が追ってくるから逃げていたのさ！」

清々しいほど胸を張って答えるエドモンドを無視し、オズワルドは魔道師団の面々に顔を向けた。

「どういうことか、詳しい説明を」

すると目の合った一人の魔道師が、緊張した面持ちで進み出た。

「恐れながら、申し上げます。我らはウルリーク軍との戦闘において、副団長の開発した魔法に巻き込まれ、副団長に解除を要求していました」

（魔法に巻き込まれた……？ エドモンドさんは、敵味方無血で勝利したんじゃないの……？ 味方を巻き込んだって）

どういうことだとフェリシアが固唾を呑むと、魔道師は青ざめて震えながら、かぶっていた大きな帽子に手をかけた。彼が帽子を取り払うと、現れたのはふさふさのそれはそれは愛らしい——ネコミミだった。

「……！」

オズワルドとダリルは驚愕で、フェリシアは笑いを堪えるために息を呑む。そんな彼らに、ネコミミなどまったく似合わない痩せぎすの魔道師は切々と語りかけた。

「我々は何度も何度も副団長に抗議をしましたが、新魔法の効果を実験したいというアホ——失礼、副団長の前には、ウルリークの精鋭部隊すらも無力でした。あの悪魔の魔法により敵味方問わず、戦場にいた全ての人員がこのような姿に」

涙ながらに語る彼の声とともに、魔道師団員たちは身につけていた帽子やマントを取り払った。すると、まるで仮装行列のような光景が現れる。肌にシヨッキングピンクの水玉模様が浮かんでいる者、背中から子供の作った粘土細工のような前衛的なオブジェを生やしている者、頭に巨大な花が生えている者などなど、傍から見れば間抜け極まりない光景だ。しかし彼らの表情は一樣に悲壮だった。

「あまりにも滑稽な姿に変えられたウルリーク軍はすぐさま撤退し、我らも元に戻してもらったため逃げる副団長を追っていたらいつの間にか王城まで戻っていたという次第でございます」

「そうか。……諸君らの心痛、想像に有り余る。長いことダリルを借りてすまなかったね」

オズワルドは「どうやったらそれと気づかず王城まで戻れるんだ」とツツコミもいれず、いつもの穏やかな調子で魔道師たちを労った。そして氷のような冷たい眼差しでエドモンドを睨みつける。

「それで、貴様は何故彼らを元に戻してやることもせず、あるうことか王城まで逃げてきた？そもそも正規の手続きを経ずに、どうやって城まで入った？」

「せっかく成功した魔法を消してしまうのは勿体無いじゃないか！それに追いかけられたら逃げるのは生物としての本能さっ！」

オズワルドの静かな怒気の前に胸を張って答えるエドモンド。ある意味大物である。

「城には、僕が発明したこの『カベ登れる君』を使って城壁をよじ登ってみただ」

エドモンドが取り出したのは花柄のミトンだった。突風の魔法を応用して空気を圧縮させる装置を組み込んだ魔法道具であるそれは、強力な吸盤になる。それを城壁に貼り付け貼り付けして登ってきたのだ、と説明した彼は、誰も頼んでいないのに実践までして見せた。「魔力の流れで自動制御も出来るから、腕力がなくてもこの通りさ」

そう言つて、研究室の壁を高速で上り下りし、カサカサと這い回るエドモンド。その姿は、ゴから始まる名前で呼ばれる害虫の動きにとてもよく似ていた。

（すごいけど……気持ち悪い……）

一同のげんなりとした視線に臆することなく、エドモンドは褒められるのを待つ子供のように無邪気に笑っている。その笑顔は老若男女が見惚れる美貌であるのに、中身はあまりにも無残だった。オズワルドは頭を抱えて溜息をつく。

「色々と言いたいことはあるが、ウルリーク軍を撤退させた功績に免じて、この騒動は不問に付す。とっとと彼らを戻してやれ」

「えー」

「王命だ」

「仕方ないねえ」

さしものエドモンドも王命には逆らえないらしい。

「もとにもどーれ」

気の抜けた掛け声とともに軽く腕を一振りすると、魔道師団の団員達から激しい閃光と紫色の煙が発生する。それが収まった後、現れた人々の姿はアフロだった。全員、虹色の派手なアフロヘアへと変貌を遂げていた。互いにしばらく無言で見つめあい、己の頭を触り、髪を目元に持つてきて事態を理解した彼らは、幽鬼のような表情でエドモンドを振り返る。

「副団長……なんですか、これは……？」

「うーん？おつかしいなあ、これで元に戻るはずだったんだけど」「はず！……？」

「そうだ、この際もう一つ新しい魔法を試して」

そこで不意にエドモンドの言葉が途切れた。ドン、と鈍い音を立てて倒れた彼の前には、拳を突き出したフェリシアが仁王立ちしていた。

「いい加減にしてください」

今までダルルやオズワルドの顔を立てて黙っていたフェリシアだったが、そろそろ限界だった。

「血を流さずに戦闘を終わらせたって言うから、どんなすごい人なんだろうって期待してたのに、人に迷惑ばかりかけて！拳句の果てに新しい魔法を試してみよう、じゃないでしょう！？まずはちゃんと皆にごめんなさいして、元に戻さない！！」

まるつきり子供のようなエドモンドの態度に、フェリシアは腹を立てていた。自然と幼い弟を叱るときの口調になりながら、尻餅をついているエドモンドを見下ろす。

「でも、僕の開発した変身魔法に有効な解除の魔法を研究するには時間が」

「ただ魔法を解くだけなら、消去の魔法を使えばいいでしょう。貴方ができないなら、私がやります」

フェリシアは憤然とした態度で踵を返した。彼女は抜け殻だった頃から、ダルルに「魔法は世のため人のため使うべき力だ」と教わってきたのだ。それを面白半分に、他人の迷惑も顧みず振るうエドモンドに、強い失望を感じていた。怒りのままに魔道師団員たちに向けて消去の魔法を放ってから、ふと気がつく。

（そういえば、他人の魔法を消去したら、消去した人とされた人双方に結構なダメージが来るんだっけ）

と、思った瞬間、足元がぐらりと揺れた。ふらふらと倒れかけ、この事態を予期していたらしいダルルに抱きとめられる。丁寧にソファの上に座らされ、フェリシアははにかんだ笑みを浮かべた。

「あ、ありがとうございます、お師匠様」

「いや。あのように複雑に組み上げられた魔法を解いて、よくふら

つくだけで済んだものだ。だが、感情に任せて後先考えずに力を使うのはよくない」

「はい。以後気をつけます」

師弟の会話の横では、魔法を解かれて撃沈しているエドモンドと、彼をげしげしと踏みつけるオズワルドがいた。踏みつけられるたび呻くエドモンドは、どうやら死んではいないようだ。それだけ確認した魔道師団の魔術師たちは、王と副団長の姿を見なかったことにして、互いの無事を喜びあつた。

「良かった、戻った！」

「ありがとう、お嬢さん、ありがとう！！」

「まさかダリル団長以外に副団長の暴走を止められる者がいようとは」

「俺たちで副団長の魔法を消去したら、死ぬところだったよ！お嬢さんの魔力は強いんだねえ」

「あれ？そういえばお嬢さん、誰なの？」

今更の質問に、フェリシアはソファから身を起した。

「紹介が遅れてすみません。私は、フェリシア・チェンバレンです」
受け入れられるかどうか不安に思いながらもぺこりと頭を下げると、案の定ざわついた。エドモンドの暴走を唯一止められるダリルが任地から離れる羽目になったのは、フェリシアのためなのだから無理もない。そんなざわめきの中、エドモンドがむくりと起き上がった。
「君が人形姫？」

まだ少し顔色の悪い様子ながらもふらふらと立ち上がった彼は、おもむろにフェリシアの肩を掴んだ。オズワルドの顔が般若のようになるが、エドモンドは気づくそぶりもなく、ぺたぺたとフェリシアの頬や額を触り、顔を覗き込んだ。

「なるほど、前に見たときより自然放出される魔力が随分抑えられているけど、なんて素晴らしい量の力だ！本当に人間なのかい？」

「え、あの、離してください」

悪気皆無の笑顔で失礼なことをのたまうエドモンドから距離をとる

うと身じろぐフェリシアだが、相手の力は思いのほか強い。

「ねえ君、僕の実験台になってくれ」

さらにはそんな事を言い出したエドモンドをとフェリシアの間に割って入ったのはダリルだった。

「離しなさい、フェリシアが嫌がっている。この子はお前の玩具ではないのだぞ」

「団長？」

静かな睨みを利かせるダリルに一瞬氣をとられたエドモンドの背中に、更に魔術師達が飛びついて引つ張る。

「そうだそうだアホ副団長！」

「俺たちの恩人に何てことするんだ！」

すぐさま後ろに引き倒されて尻餅をついたエドモンドは、きょとんとしていた。

「せっかくこんなに大量の魔力の持ち主がいるのに」

なぜ引き離されるのかまるでわかっていないらしい彼に、フェリシアは溜息をつく。

（子供みたい、じゃなくて本当に子供なんだ、この人……）

呆れ返りはしたものの、対処法はなんとなく見えきた。要は幼稚園児の弟と同じように扱えばいいのだ。

（耕太はもつと物分りが良くていい子だけだねー）

姉馬鹿丸出しでそんな事を思いつつ、フェリシアはエドモンドの前にかがんで視線を合わせた。

「エドモンドさん、私も皆さんも無理矢理魔法をかけられたり実験台にされたりするのは嫌です。貴方だって、私に殴られたり魔法を消去されたりしたら、痛くて苦しいでしょう？」

「うん、痛いのが苦しいのは嫌だな」

「だから、人の嫌がることはしちやいけないんですよ」

するとエドモンドは小首を傾げ、大きく頷いた。

「わかった。僕が悪かったよ！」

本当にわかっているのかと言いたげな空気が流れたが、フェリシア

はひとまずこれでよしとして立ち上がった。

「じゃあ仲直りですね。実験も、危なくないので私に出来ることがあれば協力しますから、これからよろしくお願いします」

「本当かい！？ありがとう、よろしく頼むよ！」

このやり取りにたちまち、周囲がどよめいた。

「あの子、副団長を諭した上に実験台まで引き受けてくれたわよ！？」

「フェリシア嬢って天使の化身か何かなのか！？」

「正直、ストッパーの団長を取り上げやがって、なんて思って悪かったなあ……」

魔術師達の囁き声に、フェリシアの顔が引きつる。

「え、あの、皆さん？」

「フェリシア……ダリルが今まで君に付きっ切りだったからといって、責任を感じることはないんだよ？」

「いや、実験に付き合うのはあくまでも安全な魔法だけで……」

「やはり君はわかってないな、エドモンドの開発した魔法が安全なはずないだろう」

オズワルドの脅しじみた言葉にフェリシアが恐る恐るエドモンドを振り返ると、彼は満面の笑みで請け負った。

「あはは、危険なんてないさ。安心したまえ、痛いのは最初だけだよ！多分ね！」

「安心できません！！！」

フェリシアが副団長へ全力ツッコミを入れる横で、ダリルがなんとも複雑そうな表情をした。色々と弟子の身が心配ではあるが、懸念していた魔道師団の面々との摩擦は生じていない。部下達に受け入れられ生き生きとエドモンドへの説教を再開するフェリシアを見て、ダリルは思わず苦笑を零したのだった。

20・魔道師団（後書き）

フェリシアは魔道師団員たちの尊敬を手に入れた！という話でした。そのために払った犠牲は未知数ですが。エドモンドは悪気がない分、ヴェロニカよりも厄介かもしれません。

21・武器

エドモンドと魔道師団の魔術師達が帰還して数日経ったある夕暮れのことである。王の警護を同僚へ引き継ぎ、一足先に王族棟へ向かっていたキアランは、ふと妙な気配を感じて背後を窺った。立ち止まって振り返ることはせず、さりげなく歩調を変えると、その気配は同じ調子でついてくる。

（城の中枢部に不審者……？）

キアランは顔を顰め、尾行に気づかないふりをして中庭のはずれへと足を向ける。すると、隠れる気があるのかも疑わしいせわしない足音がパタパタとついてきた。尾行に慣れない一般人か、あるいは尾行に気づかれても構わないと思っているのか。嚴重な城の警護を破ってここまで来たからには後者だろうと、キアランはうんざりした気分で中庭の奥へ踏み入っていく。そして、人の気配から離れたところでおもむろに短刀を抜き、振り返った。

「何者だ」

すぐ背後まで忍び寄っていた相手の喉元に切っ先を突きつけ、誰何する。不審者は使用人の服を着た、人畜無害そうな中年の男だ。これといって特徴のない、二、三言葉を交わしてもすぐに忘れてしまうであろう平凡な男。しかし彼は、刃物を突きつけられているにもかかわらず、不気味な笑みを浮かべていた。

「おやおや、私は何者かなど、聞かれずともお分かりなのでしょう？不審者でございますよ」

「ふざけるな。貴様、何処の間者だ？何が目的でこの城に来た？」
国王陛下のお命を頂戴しに来ましたなどと言おうものなら口を割る隙も与えず刺し殺してやると物騒なことを考えながら男を睨みつけると、男は相変わらずへらへらと笑いながら口を開いた。

「ご心配なく、王様にも人形姫にも手を出すつもりはございませんよ。邪魔ですけどね」

キアランは黙って短刀を押し込んだ。男の喉が切れ、血が滴り落ちる。男は少し眉を顰めて、降参と言うように両手を挙げた。

「止めてください、恐ろしい。私の目的は取引、標的は貴方ですよ、キアラン殿下」

「取引、だと？」

聞いてはならない、相手の目的を聞いた以上はこの場で殺してしまえばいい。そう思うのに、キアランはうっかり聞き返していた。してやったりと言わんばかりに、男の唇が弧を描く。

「先程私は人形姫が邪魔だと申し上げましたが、貴方もそうでしょう？」

「……だからどうした？」

「馬鹿のフリなら今くらいおやめください。聡明な貴方なら齒がゆく思っているはずだ。城に匿われ最高の教育を受けながら、齡二十を超えるまで何の貢献もなかった娘が、今や英雄扱い。比べて自分は城内で王の警護に、頼まれるのはお使いばかり。腹立たしいことこの上ないでしょう？」

「……」

「しかも人形姫の魔力は強大で、彼女の身柄が万一敵勢力に渡れば、戦況はあつという間にひっくり返る諸刃の剣だ。そんな者を抱えるくらいなら、いっそ殺してしまった方がお互いフェアな戦いができると言うものじゃないですか、ねえ？我らと手を組み人形姫を」

「断る」

よどみなく話す男の言葉を断ち切るように、キアランは短く告げた。男は驚いたように目を見開き、一瞬後にはまたへつらうような笑みを浮かべる。

「ひよつとして、排除を試した後でしたかな？しかし貴方ともあるうお方が、一度の失敗で諦め」

そこで男は言葉を切り、後ろへ飛んだ。間髪入れず、その場所をキアランの剣が薙ぎ払う。腹を浅く裂かれた男は、飛んだ勢いを殺さず背後に立つ木の低い幹に足をかけた。

「交渉決裂。この場合は引かせていただきますよ、王弟殿下」

「待て！」

叫びながら短刀を投げつけると、小さな刃物は正確に男のいた場所を刺し貫いたが、そこにもう侵入者の姿はなかった。

「幻惑の魔法か……小賢しい」

キアランは苛立ち紛れに短刀を回収し、城の警備強化を指示するため城内へ戻ろうとして、足を止めた。きよろきよろと辺りを見回しながら、フェリシアが中庭をうろついている。こちらには気づいていないのか、特に警戒することなく無防備そのものだ。その姿を見て更に苛立ちを募らせたキアランは、すたすたと背後から彼女に近づいた。

「今度は何をする気だ、フェリシア・チェンバレン。こんなところをほっつきまわる時間があるなら、部屋に戻って次の戦闘に備えている。魔物を葬るしか能がないのだから」

幻惑の魔法を使って逃げたあの男は、まだこの近くにいるかもしれない。そして彼はフェリシアの命を狙っていた。それを思うとフェリシアが無防備な姿を晒していることに何故か怒りを覚えて、いつもの通りに嫌味をぶつける。するとむっとした表情のフェリシアが振り返った。

「言われなくても、この辺りを調べたらすぐに戻ります」

「調べる？」

「王弟殿下は何か知りませんか？さっき、この辺りで変な魔力が動く気配がしたの」

先程の男が使った幻惑の魔法に気づいたのかと思い当たり、キアランは顔を引きつらせた。

「エドモンドさんがまた、隠れて変な魔法でも使ってたら大変だし。まったく、あの人はどうしてああ自由人なのかしら。好奇心旺盛なのは結構だけど、尻拭いをする私やお師匠様の身にもなって欲しいわ」

キアランの様子に気づかず一人で喋り続けていたフェリシアは、ふ

と気がついたように王弟を見上げた。

「それともさっきのは、貴方が使った魔法ですか？」

「何……？」

キアランは火起しや水呼びなど、日常で使う魔法以外は人前で使うことはない。彼が本格的な魔法を使えることを知る者は少ないが、フェリシアは妙に確信に満ちた顔をしていた。

「だって貴方、結構魔力があるでしょう。ええと、お師匠様やエドモンドさんほどではないけど、鍛錬すれば魔道師団に入れるくらいかな。前々から、使わずにいるなんて勿体無いと思ってたんですけど」

「……知ったような口を。いいから部屋に戻れ」

しゅしゅと追い払うように手を振ると、フェリシアは頬を膨らませた。

「なんで隠すんですか。貴方こそせっかくの魔力を腐らせてないで、大事な陛下の役に立てたらどうなんですかー」

フェリシアとしては先程の嫌味に対しての軽い意趣返しだったのだろう。しかしキアランは、その言葉に奥歯を噛み締めた。

「お前が、それを言うのか？」

「？」

「長年、民を騙し、俺のことも欺いていたお前が、それを言うのか！？」

最近なりを潜めていた憎悪の炎が、燦りはじめていた。憎しみのままフェリシアを見下ろすと、彼女は脅えた様子で後ずさる。その様子に暗い満足を覚えながら、キアランは彼女へ詰め寄った。

「お前こそ、ずっと隠していただろう」

「何のことですか？」

「惚けるな、お前が自意識のない人形姫だったと言うことだ。話も出来れば笑うことも出来るくせに、ずっとそれを隠していたんだらう？」

「そんなこと、していません！」

震えながらも心外そうな様子で言い返すフェリシアを、白々しいと見下ろして、気づけば言うつもりはなかったことまで口走っていた。「俺は、知っている。十二年前、この中庭で、お前と兄上が楽しそうに話しているのを確かにこの目で見た」

あのときから、あるいはそれよりずっと前から、騙されていた。それを思うと泉のように憎しみが湧き出してくる。

「そ、そんなの、私、知らない……フェリシアさんがどうだったのか知らないけど、私が、『斉藤優花』がこの世界に来たのは本当に二ヶ月前からです」

フェリシアはそれだけ言っ、キアランから逃げるように後ろを向いて駆け出した。それでいい、とキアランは思う。今やフェリシアは名実ともに救国の英雄で、それを害する方が兄に迷惑をかけてしまう。フェリシアとの嫌味のやり取りが、最近はそこまで不愉快ではなかったとしても、こうしてふとした瞬間に憎しみが蘇る。係わり合いにならない方が互いのためなのだ。

「何なのよもう、あの馬鹿王弟ー！！！」

翌日、フェリシアは怒りのままキアランを罵倒していた。昨日の夜からメリッサ相手に愚痴り続けていたのだが、まだ言い足りないのである。場所は魔道師団の研究室、向かいにはダリルが、斜向かいにはエドモンドが座っており、各々の作業に没頭していた。ちなみにそのほかの魔道師団の魔術師たちは副団長の魔法を恐れて軍事棟や第二研究室の方へ回っている。

「聞いてくださいよお師匠様、エドモンドさん。あの馬鹿ときたらずうやく私を嫌ってる理由らしきことを口走ったくせに、詳しい説明もせず怒鳴るだけですよ？人としてどうかと思いますよね！！」
口ではキアランへの不満不平を吐き出し続けながら、手では正確に鉄を操るフェリシア。彼女の前には、一抱えほどある大きな植木鉢が置かれていた。植えられているのはエドモンドが育てた薬草だ。元々風邪薬の原料となる植物だが、エドモンド曰く最高の万能薬の

材料に変化したと言うそれは、育て主の様々な投薬により人面花と化し、ぐひゃぐひゃと花にあるまじき不気味な笑い声を立てていた。
「五月蠅い」

「ぐひゃ、くひゃん……」

しかしフェリシアが鬼の形相で睨みつけると、大人しくなった。力の差には聡い植物である。あろう事かこの植物に興味を抱いているシャロンに仕方なくサンプルを届けるため、フェリシアは人面花の実や葉をてきぱきと切り落としていた。書き物をしていたエドモンドが、その様子を見て口を出してくる。

「フェリシア君、僕の可愛いハニーに八つ当たりはよしてくれたまえよ」

「だって頭にくるんですもの！」

バチンバチンと音を立ててフェリシアが鋏を握り開きする度、脅えたように茎をすくませる人面花。荒れているなあとぼやいて、エドモンドはペンを置いた。

「キアラン君が君を嫌う理由は知らないけれど、魔法が使えることを隠している理由は知っているよ」

意外なことを聞いて、フェリシアは目を瞬いた。

「知りたいかい？」

「ええと、私が知ってもいいことなら」

「うーん、まあ、大丈夫じゃないかな」

エドモンドの言葉はまったく当てにならないが、ダリルが止める様子のないことを見て、フェリシアは先を促した。

「僕らが子供のころの話になる。先王陛下がご存命の頃、次の王座に誰がつくか、実は結構もめていてね。通常であれば次の国王は正室を母に持つ第一王子、だけどオズワルドは子供のころは体が弱く、魔力は一般人程度。対して第二王子のキアラン君は、母君こそ平民だが幼い頃からよく武術の鍛錬を積み、人形姫に近づいても平然としているほどの強い魔力を持っていた。外見も、キアラン君のほうが伝説の初代国王陛下や先王陛下に似ているようだね。オズワルド

は母親似だから」

普段の奇天烈な物言いが嘘のように淡々と語るエドモンドは至極真面目な顔つきで、その様子だけ見れば大貴族の跡取り息子というのも頷けた。フェリシアが場近いな感心をしている間にも、話は続く。「そんな調子だから、先の王妃陛下の実家と対立する勢力が、キアラン君を次期国王にと推していた。だけど彼は知つての通り、オズワルドを心から慕っている。それで兄より突出することがないように、身辺警護の腕だけ磨いて、帝王学は遠ざけ、そこそ強い魔法が使えることも隠して、ついには王位継承権まで放棄したのさ」

「本当に、オズワルド陛下が大事なんだねえ……」

感心半分、呆れ半分でフェリシアが呟くと、ダリルが視線を上げた。「……そこまでしても、まだキアラン殿下に王位篡奪を持ちかける愚か者はいる。殿下にとってこの城は、さほど居心地はよくないだろうな」

「なんとなく、わかる気がします」

フェリシアは以前城下町で見たキアランの様子を思い出した。親しい人と軽口を叩いていた様子は、フェリシアの変装に気づいていなかったことを差し引いても自然体で、生き生きとしていた。

「お城の環境自体が殿下にとって生きづらいつて事はわかりました。同情する気持ちもあります。……でも、やっぱりそれとこれと話は別！」

怒りが再燃してきたフェリシアに苦笑を返し、エドモンドは珍しく空気を讀んだ。

「まあまあ、いいものもあげるから落ち着きたまえ」

「いいもの、ですか？」

「フェリシア君には最近、団長の次に世話になつてゐるからね」

「ええ、大変でしたよエドモンドさんが蛙に変えた兵士さんを元に戻したり、金ぴかに塗りたいくった城壁を元に戻したり、一夜にして訓練場が巨大アスレチックへ変貌していたときは魔道師団の皆さんの副団長閣下計画に参加しようかと……」

不満がキアランからエドモンドへ移りかけたフェリシアの前に、細長い布の包みが差し出された。

「？これは……受け取った瞬間、爆発とかしないですよね？」

「あはははは、何処まで信用がないんだい、僕。大丈夫だよ、軽快に開けたまえ！」

フェリシアは警戒しながら包みを受け取り、中を開けた。すると出てきたのは、白銀色に輝く杖だった。美しい曲線を描く、杖以外の何かを想起させる意匠を幾重にも施された杖はフェリシアの身長半分ほどで、握りやすい太さになっている。そして、金属で出来ているとは思えないほど軽かった。

「わあ、どうしたんですか、これ」

美しい杖に怒りも忘れて顔をほころばせると、エドモンドは得意げに胸を張った。

「三日前、魔術師用の武器がないかと言っていたらどう？」

「あ、そういう言いしましたね、そんな事」

それは今日のように、魔道師団の研究室に三人で集まった雑談中の出来事だった。この世界では、魔法を使うときは基本的に素手である。魔法使いといえば杖、魔女と言えば箒と思っていたフェリシアは、当初密かにがっかりしていたのだ。それを雑談中エドモンドに告げると、彼は「魔術師用の武器か、面白い発想だ」などといった早々に自宅へ帰ってしまったのだ。

「僕のコレクションの中に、フェリシア君の御眼鏡にかないような物があつてね。改造して持ってきたよ！」

「エドモンドさんの改造……」

その点に一抹の不安を感じないでもなかったが、フェリシアはそれよりも杖に惹かれて持ち上げてみた。そして、杖以外の何を思い起こしたのか納得する。軽いのは杖が筒状になっているため、そして杖の上部には引き金のようなものがついており、銃に似ているのだ。（そういえば、会話の弾みで銃のことも話したんだっけ）

勿論フェリシアの中身が現代日本人であることや、現代兵器の詳細

まで語ったわけではないが、「こんな感じの武器があつたらな」という話はしていた。

「いつだったかウルリークとの小競り合いに勝ったときの戦利品でね。元々、魔術師の集中力を高めるアイテムで、ただの魔法金属の棒だったんだけど、使い道がなくて埋もれていたんだ」

ただの棒呼ばわりするエドモンドだが、魔力を帯びる性質のある魔法金属自体が高価なものである。フェリシアは思わず勿体無いと呟いた。

「だから君にあげるのさ。引き金を引いてエネルギーを打ち出す道具、というフェリシア君の意見が非常に参考になった。そのお礼にね」

「え、でも、いいんですか？」

「うん。というより、その杖は多分君にしか使えない」

「？」

「やつぱり、フェリシア君には何が問題なのかわからないか。団長ならわかるでしょう？」

首を傾げるフェリシアに、エドモンドがダリルへと水を向けると、

彼は実験器具から視線を上げて困ったような顔をした。

「まったく、物騒なものを作ったものだ。出来ればお前にはあまり持っていて欲しくないが。少し貸してもらえるか？」

フェリシアは請われるまま、銃杖をダリルの手へ渡した。

「魔法金属の回路に魔力を流し、引き金を引いて魔力のエネルギー弾を撃つ仕組みだな。ふむ。……私ならば、もってせいぜい三発か」

「流石ですね、団長。僕は一発試し撃ちして倒れましたよ」

「それで昨日欠勤だったのか……」

頭を抱えるダリルと、彼から銃杖を受け取ったエドモンドを交互に見遣り、フェリシアが首をかしげる。

「あの……？」

「ああ、すまない。フェリシア君、この杖は一発打つだけで凄まじく魔力を消耗するんだ。並みの魔術師なら、一発打つだけで命を落

としかねない」

「ええっ！？なんて危ないもの作るんですか！！」

「だからこれは、無尽蔵の魔力を持つ君専用なのさ。そうでなければこんな面白い武器、絶対手放さな」

「ありがとうございますエドモンドさん、大事にしますね！！」

すぐさまエドモンドから銃杖をひったくったフェリシアは、笑顔を浮かべて礼を告げた。

「しかしフェリシア、いくらお前の魔力が無尽蔵と言っても、使って本当に影響がないか試した方がいいぞ」

「勿論です、エドモンドさんの作った武器なんて怖くていきなり実戦では使えませんよー」

笑顔で断言するフェリシアに、

「何だか失礼じゃないかい……？」

エドモンドはぽつんと呟いたのだった。

銃杖を肩に担ぎ、ダリルとエドモンドを伴ったフェリシアは、騎士団と国軍、そして魔道師団が共同で使う訓練場に来ていた。マルグリットの協力の下、フェリシアも偶に体力づくりで走らせて貰ったり、軽い筋トレをさせてもらったりしている。そこへ今日は弓用の的をたて、更に念を入れて周囲にダリルたちが魔法障壁を張る。

「試し撃ち一発目、いきまーす！」

フェリシアは元気に片手を上げて宣言し、銃杖を構えた。エドモンドが「動力部」と呼ぶ魔法金属の部品に魔力を流し、引き金を引く。すると銃身の中で成型された魔力の弾丸が勢いよく発射された。銃声もなければ反動もなく、エネルギーの弾は真っ直ぐに飛ぶ。フェリシアがその気になればミリ単位で軌道修正も可能だったが、ただ撃つだけでどの程度狙えるか見るために、あえて打ちっぱなしにする。すると弾は的を掠り、ダリルの障壁に当たって派手な火花を散らした。

「ぐっ……！！」

障壁を崩されたダリルが、額に汗を浮かべて呻く。

「お師匠様！すみません、大丈夫ですか！？」

すぐさま駆け寄ると、ダリルは心配そうな顔の弟子の頭をぽんぽんと撫でた。

「大事無い。お前こそ体に異変はないか？」

「はい、何発打つても倒れる気がしません」

フェリシアはそう請け負うと、再び銃杖を構えなおし、先程撃ち損ねた的を狙ってエネルギー弾を立て続けに発射した。まずは的を支える棒を打ち抜き、次にくるくると回転しながら落ちていく的上下左右を十字に、最後にど真ん中を打ち抜いて、ボロボロになった的が地面に落ちる。その様子を、エドモンドが顔を輝かせて見入っていた。

「すごい、すごいよフェリシア君！体調に変化はないのかい！？」

「ええと、まったく平気です」

「すごいなあ、あんなに正確に大量の弾を撃ち込んで、ピンピンしているだなんて！フェリシア君、次は是非君の魔力を使った実験を」

「遠慮します」

「えー」

巧みな魔術を見て純粹に感嘆するエドモンドは微笑ましいと言えなくもないが、実害が出るとなると別だ。すげなく断るフェリシアと食い下がるエドモンドにダリルが溜息混じりで仲裁に入った。

「やめないか、二人とも。フェリシア、お前の腕は見事だが、その武器は燃費が悪すぎる。普通の魔術の鍛錬も忘れず積むように」

「はい、お師匠様。これだと本当に攻撃だけですものね。早く発動したいときは便利だけど」

「……そうだな。その武器を扱う練習も、しておくといい。いずれ、大きな戦になるかもしれない」

妙に確信めいた言葉に、フェリシアとエドモンドは顔を見合わせた。

「お師匠様……？何か、戦の心当たりでも？」

「さて。私の杞憂であればいいのだが……」

フェリシアの問いかけをはぐらかして、ダリルは軽く瞑目したのだ
った。

21・武器（後書き）

フェリシアはマイ武器を手に入れた！という話でした。魔法使いと言えは杖や箒！でも実際の機能としては銃に近い感じ。接近戦では格闘技、遠距離からは銃攻撃って、ファンタジーの主人公、しかも魔法使いとも思えない戦法ですね……。

22・戦いの国

ダリルの危惧が現実となったのは、僅か一週間後のことだった。

謁見の間へ召集を受けたフェリシアは、準正装のドレスを綺麗に捌いて部屋に入り、優雅に腰を折る。すると、部屋に集まった顔ぶれに目を丸くした。玉座についたオズワルドの背後には護衛のキアランが控え、両脇には宰相ベネディクトと將軍ハロルド。その前には主だった武将や重臣たちが整列していた。中にはダリルやマルグリット、エドモンドもいる。城中の偉い人をかき集めたのではないかという光景に驚いていると、ベネディクトが微笑んで手招きしてきた。自分が玉座近くに寄っていいものか訝しみながらも、フェリシアは父に促されるまま、その隣に立つ。

「お父様、急ぎで開く軍議に参加するよう言われてきたのですけど、これは……？」

「すまないね、フェリシア。じきにわかるから、大人しくしておいで」

小声でベネディクトに囁くと、優しく窘められた。フェリシアは素直に謝罪して、前を向く。その後もちらほら重臣たちが入室していた。

（何だか大事みたい……）

その様子を見て、フェリシアは一人考え込む。謁見の間に集まった中には文官の姿も見えるが、軍議の場に呼ばれることは稀だと聞いている。そもそもフェリシア自身、戦場に行くときはいつもオズワルドから個人的に通達を受けるのだ。軍議らしい軍議に参加するのはこれが初めてだった。そして、彼女が考えているうちに召集された人員が全て集まったらしい。オズワルドが立ち上がり、口を開いた。

「これで全員だな。皆、忙しいところよく召集に応じてくれた」
「労いの言葉にかしこまる一同を見渡し、面を上げよと静かに命じる

オズワルド。若いながら威厳を滲ませる国王の姿を、臣下たちは一心に見上げた。

「今日、皆に集まってもらったのは他でもない。国を揺るがす一大事が起こった。昨夜、長らく停戦状態にあったボニファーツ帝国より宣戦布告が届いた」

その言葉に、人々はざわついた。オズワルドの即位以来、国境での小競り合いはあったものの、大きな戦はなかったのだ。宣戦布告の言葉に、不安げな言葉が飛び交う。

「静粛に」

しかし、ベネディクトの鋭い声が飛ぶと、謁見の間は再び静まり返った。

「奴らの目的は我らが戦女神、フェリシア嬢だ。最近目覚しい戦果を挙げる彼女を危険視した皇帝が、自ら大軍を率いてこの国に攻め入ってくる」

予想外のところで自分の名前を出されて、フェリシアは弾かれたように顔を上げた。

「知つての通りボニファーツは強大な軍事国家。国土も兵力もわが国が上とはいえ、全力で迎え撃たなければ防衛は難しい。無論、私も戦場に出るつもりだ」

その言葉に、人々は更に驚きの声を上げた。再び場を沈めようとすべネディクトを制して、オズワルドは声を張り上げる。

「恥ずかしながら即位十一年目にして、これが私の初陣となる。この場を戦い抜くためには、諸君らの力添えが不可欠だ。どうか、私とともに戦ってはくれまいか！」

王の求めに、臣下たちは歓声で答えた。

その後、軍議は細かな配置の話へと移り、多少の反駁はあったものの比較的スムーズに進んだ。オズワルド率いる主力部隊と、王の護衛である近衛騎士団がボニファーツの進軍してくる西部へ。他の部隊が残る東南北の守備に入り、先日ウルリークとの小競り合いが

続いていた魔道師団は中央にて休養を取りつつ、睨みを利かせる。それぞれの部隊の統率者も決まり、軍議は終盤に差し掛かった頃だった。

「恐れながら申し上げます。フェリシア嬢はこの度、どちらの戦地へ赴かれるのでしょうか」

意見を求められた重臣の一人が、オズワルドに尋ねる。皆密かに気にしていた話題に、注目が集まった。

「フェリシア嬢は王城にて魔道師団と共に待機だ。彼女は魔物専門だからな。魔物軍に動きがあれば、北へ行ってもらうことになるかと思うが、その采配は魔道師団の総責任者であるダリル・スマイサーに一任する」

畏まり、頭を垂れるダリル。この言葉に、人々はざわめいた。

「この戦、フェリシア嬢のために始まったようなもののに、本人は安全な中央で待機だと？」

「救世主様の癖に、魔物としか戦わないなんておかしいじゃないか」
「しかし下手に戦場に出して、あの戦力が奪われでもしたら大損害だぞ」

ざわめく声にフェリシアはちらりとオズワルドを振り返った。人の国に対しては武力ではなく話し合いで交渉を持ちたいと理想を語った彼が、戦場に出るのはどんなに不本意なことだろうか。そして、きっかけとなったのは他ならぬフェリシアなのだ。

（やっぱり、私だけが安全なところにいるなんて、できない）

彼女は覚悟を決めて、発言を求めた。

「どうしたんだい、フェリシア？」

意外そうな顔で尋ねるオズワルドを真っ直ぐに見返して、フェリシアは告げた。

「お許しいただけるのであれば、私も陛下にお供したいと存じます！」

その言葉に、周囲のざわめきが一層大きくなる。その中で、オズワルドの隣に控えていたハオルドが立ち上がり、王に発言の許しを求

めた。オズワルドが頷くと、將軍の鋭い眼光がフェリシアを射抜いた。

「フェリシア嬢、貴女に人間を殺めることができるのですか？」

特に声を荒げているわけでもない、ただの質問。しかし気迫のこもった声に、フェリシアは気圧されないよう背筋を伸ばして答えた。

「残念ながら、今回私が戦闘でお役に立てることはないでしょう。

ですが事態はどうであれ『グランデールの救世主』が敵軍の中にいるという事実だけでも、無用な争いを食い止められるかもしれない」

実を言うとフェリシアは、ボニファーツ軍と戦う気などなかった。

人殺しに抵抗があるというのもその理由だが、何より自分が帝国との交渉のきっかけになればいいと思ったのだ。ハロルドはその思惑を見透かしているかのように、甘いですなと切り捨てた。

「ボニファーツは何より武を重んじる戦いの国。奴らは人の姿をした野獣です。人一人殺したこともない小娘など恐れるものか」

「アーデン將軍」

娘を虚仮にされたベネディクトが怒りを込めてハロルドを呼ぶが、將軍の弁舌は止まない。

「それに万一、貴女の身柄が帝国に渡ればどうします、フェリシア嬢？」

「將軍は、私が祖国に刃を向けると仰るのですか？」

フェリシアがむっとして言い返すと、ハロルドはあっさり頷いた。

「我が国に仇為すことを貴女が望まなくても、仕向ける方法はいくらでもありますよ。例えば、皇帝に従わなければお父上を殺すと脅されて、拒否することは出来ますか？」

はっとベネディクトの方を振り返り、フェリシアは言葉を詰まらせた。

「自分がどれだけ無謀なことを口走っているのかお分かりになったのなら、大人しく中央や北部で魔物退治でもされることですか」
そう結論付けたハロルドに、オズワルドが陰しい視線を向けた。

「ハロルド・アーデン。それを決定するのは貴公ではない」

その言葉に、ハロルドは頭を垂れた。

「フェリシア、君の申し出はまさに天からの贈り物にも等しい。救世主殿の手を野蛮な帝国人の血で汚すわけには行くまいと中央に残そうと思っただが、君がそう言ってくれるのなら、私と共に来てはくれまいか？」

ハロルドの言葉で多少ぐらついたものの、元は自分から申し出たことだ。フェリシアは真っ直ぐにオズワルドを見つめ返し、頷いた。

「喜んで、お供いたします」

フェリシアの返答によって、王の決定は為された。

「皆、今度こそ異議はあるまい。だがアーデン將軍の危惧も、もつともなことだ。フェリシア、君には私の身辺警護を任せよう」

その言葉を聞いて、フェリシアは力強く頷いた。飛んでくる矢からオズワルドを魔法の障壁で守ったり、いざとなれば突風の魔法で逃がしたりという程度なら容易いことだ。

「これで私とフェリシアは四六時中行動を共にすることとなる。生半可な間者は近づけまいよ。万一フェリシアが攫われることがあれば、そのときは私も死体だ」

「……そのようなことにならぬよう、努めさせて頂きます」

ハロルドの返事を聞いて、オズワルドは満足げに頷いた。心中はとうあれ、王の決定を覆そうと試みる者などいない。ただ、キアランだけが不満を隠そうとすることなくフェリシアを睨みつけていた。

（陛下の身辺警護って事は、今回は王弟殿下も一緒か……）

キアランの視線に気づいて辟易としながらも、やれるだけのことはやろうとフェリシアは一人気合を入れなおしたのだった。

長い軍議がようやく終わり、フェリシアはオズワルドの執務室へと呼び出しを受けた。

「やあ、フェリシア。すまないね」

執務室へやってきたフェリシアを見て、オズワルドは微かに疲労の

滲んだ笑みを浮かべた。その横には、仏頂面のキアランが控えている。

「そんな、オズワルド陛下の方こそお疲れでしょう？お休みにならなくて大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ、それより君に謝りたかったんだ。こんなことになって、本当にすまない」

「こんなこと？」

「ボニファーツの宣戦布告だよ」

オズワルドはそう言って、端正な顔を忌々しそうに歪めた。

「君を積極的に魔物との戦闘に出したのは、グランディールの救世主の強さを広めて各国を牽制する目的だったのに。逆に君を危険に晒す事態にしてしまった」

「そんな顔、なさらないで下さい。陛下は武力解決をよしとしていないのに、私のせいで、こんな……」

「謝らないで。君を戦場で力を振るえば、いつかは起きたことだ。それに気づかなかった私の浅慮だよ」

フェリシアの両手を取り、諭すオズワルド。キアランの眉間の皺が一層濃くなった。

「でも……今更ですけど、本当に陛下自らが戦場に出る必要はあったんでしょうか？」

相手は皇帝とはいえ、ボニファーツ皇帝には男女合わせて十人以上の子供がいる。対して、オズワルドに世継はいない。オズワルドに何かあれば、国が王位争いに陥るのは目に見えていた。

「ああ、側近達には早く結婚して世継を作るべきだと迫られたよ。あわよくば自分の娘を王妃に、と考えているのだろうね」

どこか冷たい調子でオズワルドは言って、フェリシアの手を離れた。「だが、私は行くよ。この国でもボニファーツ帝国ではないにせよ、王には強さが求められているからね。そろそろ、軟弱な国王陛下の汚名を返上しなければ」

茶目っぽく笑ったオズワルドは、すぐまた真面目な顔に戻り、壁に

かけられた世界地図を見上げた。

「何より私は、これを絶好の機会と考えているんだ。城で催しを開けば各国の使者を招くことは出来るが、統治者と直接話せるわけではない。この戦、皇帝の人となりをもこの目で見て、できることなら交渉に持ち込みたいと思っている」

オズワルドは話し合いで戦いを終わらせることを、諦めたわけではなかった。それを知ったフェリシアは、顔を輝かせる。

「とてもいいお考えです、陛下！私も、お助けできるように頑張りますね！」

「……ありがとう、フェリシア。君に応援してもらえるだけで、力がわいてくるようだ」

さりげなく、しかし先程よりも強い力でフェリシアの手を握ったオズワルドは、目を細めて彼女の顔を覗き込んだ。

「ねえ、フェリシア。私たちは、とてもいいパートナーになれると思わないかい？」

「オズワルド陛下？」

美貌の王に見つめられて頬を染めながらも、後退りをするフェリシアを、逃がさないとも言つようにオズワルドの片手が肩をつかんだ。

「家臣たちが結婚を決めると、最近特に五月蠅くてね。私には、君しか見えないと言つのに。君さえ良ければ、私の妃になってはくれないか？」

「ご、ご冗談を」

辛うじてそれだけ答えるフェリシアに、オズワルドは更に詰め寄った。

「酷いな、私は真剣だよ。私達の間には何の障害もない。国王と救世主の婚姻ならばきっと、万民に祝福されることだろう」

「そこまでなさいます、陛下」

するとオズワルドの言葉を遮るようにして、キアランが割って入った。フェリシアと握り合った手を取り上げて、強制的に二人の間に

空間を作る。強引な方法だったが、フェリシアは寧ろオズワルドから離れることが出来てほつとした。

「何だい、キアラン。こんな時にヤキモチだなんて、お前は可愛いね」

「お戯れはおやめください。この女と兄上が婚姻を結ぶなど、冗談でもぞつとします」

「まったくお前もフェリシアも、私は本気だと言っているのに」

「尚更とんでもないことです」

オズワルドのぼやきを切り捨てたキアランは、フェリシアにも厳しい視線を向けた。

「お前も、これ以上兄上を誑かしていないで、とつとと部屋に戻れ」

「なっ、だ、誰がいつ陛下を誑かしたのよ！言われなくても、失礼します！」

フェリシアは苛立ち紛れに部屋を出て行った。ボタン、と執務室の扉がありえない大きな音を立て、外に控えていた護衛兵がびくりと直立する。そんな姿を見送った国王兄弟は、どちらからともなく長い溜息をついた。

「ふう。ところでキアラン、お前が嫉妬しているのは私とフェリシア、どちらなのかな？」

「兄上、何を言い出すのです？俺は別に、嫉妬など」

「そう？なら、フェリシアが結婚するのは、私でなければ誰でもいいのかい？」

「それは」

一瞬言葉を詰まらせたキアランは、ぼそぼそと答えた。

「俺には、関係のないことです」

返答を聞いたオズワルドは、ただ静かに微笑んでいた。

部屋に戻り、事の次第をメリッサに打ち明けたフェリシアは、専属メイドの第一声に度肝を抜かれた。

「もったいない！」

「な、何が……？」

「オズワルド陛下のプロポーズを冗談で済ませたことですよ！」

基本的に大人しい性質のメリッサが、拳を握って力説する姿に、フェリシアは思わず身を引いた。

「私がボニファーツとの戦争に行くって言つのは……？」

「その事なら、お嬢様なら大丈夫ってわかっていますから。私もお供いたしますし。そんなことより、私のお嬢様が国王陛下に求婚されたなんて、なんて素晴らしいでしょう！」

「は、はあ……」

「お嬢様は絶対に王妃様になるべきです。優しくて可愛らしいのに、お強くて、考えてみればお嬢様以外の誰がこの国の王妃に相応しいと言つのでしょうか」

「でも、別に正式な婚姻の申し込みってわけじゃないし、そもそも冗談だと思うし」

するとメリッサはきつとフェリシアを振り返った。

「お嬢様、謙遜は婦人の美德といいますが、こんなときまで弱腰でどうなさるんですか！ ああ、嫁入り道具に、婚礼衣装はどうしましょう！」

メリッサの秘められた肉食女子ぶりに暫くぼかんとしたフェリシアは、ポリポリと頬をかいいた。

（オズワルド陛下のあのノリは、先輩を思い出すから苦手なんだけどなあ）

大学時代、数ヶ月だけ付き合っていた先輩を思い出して、苦い顔をするフェリシア。容姿も性格もまるで違うのに、何故彼を彷彿とさせるのだらうと首を傾げた。

（まあいいや。陛下のこと、そういう目では見れないなんて言ったらメリッサが発狂しかねないし、放っておこうっと）

じきに収まるだらうと、一人で盛り上がっているメイドを放置したフェリシアは、慣れた手際で出立の準備を始めたのだった。

22・戦いの国（後書き）

女の子主人公の醍醐味、プロポーズ。を、歯牙にもかけない主人公。この辺は過去の恋愛経験が影響しているようですが、詳しいことはまだ先の話です。

とうとう人間の国との戦争になりました。この先、ちょっとシリアスめな展開が続くかもしれません。

23・襲撃

出立の朝は、生憎の雨模様だった。今にも泣き出しそうな曇天を見上げ、フェリシアは幸先悪いなあと零す。更に、ボニファーツとの国境へ向かう馬車へ同乗した面々も憂鬱な気分には拍車をかけた。隣にはメリッサが座っており、彼女の正面に座るキアランと静かににらみ合っている。フェリシアの前にはオズワルドが座っており、ニコニコと満面の笑みを浮かべているが、これはこれで居心地が悪い。ダリルとエドモンドは中央、マルグリットは南部の防衛軍に参加しており、この場に呼べる知り合いもないフェリシアとしては肩身が狭かった。

「あの、私たち、馬車を降りた方がいいんじゃないでしょうか」

居たたまれなくなったフェリシアがオズワルドに申し出ると、キアランがにやりと笑い、オズワルドが残念そうな顔をした。

「珍しく気が効くじゃないか。降りろ降りろ」

「キアラン、なんて事を言うんだ。ごめんね、フェリシア。弟のことは気にせず、私だけを見てくれればいいからね」

犬でも追い払うような態度のキアランと、相変わらず甘い言葉を吐くオズワルド。余計に空気を悪化させてしまったフェリシアは、溜息をついて馬車の窓から外を眺めた。前方には、長い兵士の列が続いている。国王オズワルドの乗るこの馬車は、最後尾に近い場所に付いているのだが、フェリシアが見た事もない数の兵士だ。しかも途中に寄る皆で兵力を補給するので、その数は更に膨れ上がると言う。

「本当に、大きな戦いが始まるんですね」

「後悔しているのかい？」

「どちらかと言えばこの空気に……」

フェリシアはどんよりとした目で、にらみ合うキアランたちと笑顔のオズワルドを見比べた。戦場に着くのはあと十日ほどかかると言

うが、これにあと二週間近く耐えろというのか。

（ちよつとした拷問だよ……）

フェリシアがげんなりしていると、急に馬車の外が騒がしくなった。止まれという濁声に、馬の嘶き、御者の制止の声。

「まさか襲撃者！？」

「でも、まだ城下町を出たばかりだよ？」

「いや、彼はおそらく……」

騒ぎの元凶に心当たりのあるらしいキアランが言い出す間もなく、ガタンという大きな音を立てて馬車の扉が開いた。続いて、大きな影が姿を現す。

「ぎゃああああつ、戦闘熊！！？」

扉から覗く巨体に、フェリシアが飛び上がった。

「落ち着け、フェリシア・チェンバレン。あれは人間だ。一応」

そのフェリシアをガシツと捕まえ座席に座らせたキアランが、呆れ顔でそう言った。

「人間……？」

フェリシアは恐る恐る、目の前の影を見上げる。すると、目の前にいたのは戦闘熊ではなく大柄な男だった。栗色の髪を刈り込んだ巨軀の男は、フェリシアと目が合うと、悪人とは思えない凶悪な顔でニカツと笑った。すると、意外に人好きのする顔になる。

「ガハハ、戦闘熊とはひでえや、お嬢さん。キアラン、テメエも上司を一応人間だとはどういう言い草だ、ああ？」

「戦闘熊は言い過ぎにしても、団長が人間離れた巨体だと言うのは事実です」

しれつと答えるキアランに男はやれやれと溜息をつき、オズワルドの方を見た。

「ご機嫌麗しく、国王陛下。遅ればせながら、参上いたしました」

「やあ、ヘイグ団長。相変わらず元気そうで何よりだ。いつも弟が世話になっているね」

男の無礼をとがめる様子もなく、にこやかに挨拶を返すオズワルド。

ヘイグと呼ばれた男は次にフェリシアの方へ向き直ると、見かけとは裏腹にしなやかな動きで一礼した。

「そっちのお嬢さんが噂に聞く救世主殿か？俺はグランディール王国騎士団の団長、ディラン・ヘイグ。よろしくな」

「騎士団の団長さん……？せ、戦闘熊だなんて、失礼しました。お察しの通り、私がフェリシア・チェンバレンです。こちらは私の世話をしてもらっているメリッサ・ラングトン男爵令嬢」

主の紹介にぺこりと頭を下げるメリッサにも気さくに返事を返したディランは、失礼と言って馬車に乗り込んできた。国王の使う広々とした馬車とはいえ、巨体の彼が入ってくると少し窮屈だ。

「団長、ここは陛下の専用馬車です」

キアランの指摘に、ディランは悪びれることなく答えた。

「いいじゃねえか。俺の仕事は陛下の護衛だ、近いところにいればいるほど守りやすい。だいたいお前やフェリシアお嬢さんが同乗しているのも同じ理由だろ」

「それはそうですが、せめてその陛下の許可くらい取ってください」
それもそうだなと素直に頷いたディランは、オズワルドに問いかけた。

「オズワルド陛下、同席してもよろしいですか？」

「構わないよ」

「はっはっはっ。さすが陛下」

頭を抱えるキアランの背中をバンバンと叩いて一人笑っているディランを、フェリシアは微笑ましいような気持ちで眺めた。屈託なく人懐っこいディランの物言いは、馴れ馴れしい態度でも不快感を与えない。

「そういうわけだ、気にせず出しな」

このまま進んだものか、馬車の中を窺って迷っている御者にディランが声をかけると、馬車はゆっくりと動き始めた。

思いがけない闖入者は、どことなく重苦しかった馬車の空気をが

らりと明るいものに変えてしまった。軍門名家の貴族出身であるにもかかわらず、少年の頃一般兵として軍へ入隊し、左官まで上り詰めた後に騎士団へ転向した異色の経歴を持つディランは、軍属時代に国内を転々としていた。面白おかしく語られる各地の様子に、フェリシアは笑い声を上げ、オズワルドやメリッサもつい馬車に持ち込んだ仕事の手を止め、キアランすらどこことなく楽しげに話を聞いていた。

しかし楽しい時間も長くは続かないものである。出発から一週間が経ち、初日から降ったり止んだりを繰り返していた雨が、愈々本降りになってきた。出発時と比べて倍近い数に膨れ上がった兵士たちは、雨に打たれて黙々と進んでいる。勿論、オズワルドの乗る上等な馬車には湿気も寒さも入り込む余地などないものの、兵士達の声にならない疲労感や車上の人々にも伝わってきた。

「皆、大丈夫かな」

土砂降りの雨に打たれる兵士たちの列を窓から眺め、フェリシアは呟いた。

「グランディールの兵は皆、頑強だ。お前に心配されるいわれはないだろう」

「そんな言い方ないじゃないですか」

いつものように嫌味を言うキアランに言い返したフェリシアは、再び窓の方を見た。心配なのは、兵士だけではない。日に日に緑が少なくなっていく窓の外は、ひたすら険しい荒野が広がっており、見かける植物と言えば雑草が茂みくらしいものだ。付近には、サナデイス大河に繋がる川も多く流れている。地盤のゆるみや河川の氾濫も気がかりだった。フェリシアがそれを指摘すると、ディランがおやという顔をする。

「フェリシアお嬢さんは博識だな。そうとも、森には土砂崩れを抑える力がある。山に雨が降っても崩れないのはそのおかげだな」

この世界で、普通のお嬢様なら知らないことなのだろう。必要以上に感心されて恐縮しつつ、フェリシアは考えてもわからないことを

尋ねた。

「どうしてこの辺りは荒れた土地ばかりなんでしょう？近くに川もあるし、こうして雨も降るんだから、水には不足しないはずなのに」

「この辺りは雑草ぐらいしか育たないほど、痩せているのさ」

肩をすくめ、なんでもないことのようにディランは言う。しかし、その目には珍しく深い憂いがあった。

「初代王陛下のもと、人の国が一つだったところは肥沃な穀倉地帯だったという話だがね。豊かな土地に物を言わせて作物を作りすぎ、初代王陛下亡き後は奪い合い、幾度も焼き払われては血が流れ、サナデイス大河がグランデールとボニファーツの国境になった頃にはすっかりこの有様だ」

「酷い話ですね……」

眉を顰めたフェリシアはふと、中庭に広がる麦畑を思い出した。

「でも、こういう土地で育つ麦なんかも、いずれ品種改良されるかもしれないね」

するとキアランの麦畑のことはディランも知っていたのか、にやりと笑って調子を合わせてきた。

「そうだな、荒野で育つ麦を作ろうなんて奇特的な馬鹿もいるかもな」
「いやいや馬鹿なんていつちやいけませんよ、ディランさん。立派なことじゃないですか」

「成功すればな」

そんな話をしながら、二人でニヤニヤ笑ってキアランの方を眺めてみる。視線を感じたキアランは、数の不利を悟ったかそっぽを向いてしまった。その頬がなんとなく赤いように見えるのは、ひよつとして照れているのか。

（ちよつと面白いかも）

久々にキアランにかかわって愉快的気分を味わったフェリシアは、そつとほくそ笑んだのだった。

こうして概ね無事に戦場への行程を終えた一行だったが、最終日

になって試練が待ち構えていた。

「ここ、渡るの……？」

呆然と立ちすくむフェリシアの前には蛇行する溪谷が続いていた。戦の拠点となるサナデイス大砦へ続く道である。道はその崖際、大人が三人並んでやっと歩けるほどの幅だった。今は止んでいるものの、先日から降り続いた雨で滑りやすい道は、足を滑らせれば谷底へ真つ逆さまだ。当然馬車など使えるはずもない。それでも谷底には川が流れており、高さはフェリシア自身の身長ほどで、通常なら落下してすぐ即死が危ぶまれるほどではなかったが、今の川は増水で激流と化していた。

（何だか水にはろくな思い出がないわ……）

初めて水呼びを使ったときのことや、子供のころプールで溺れかけたときのことを思い出し、重苦しい溜息をつくフェリシア。

「大丈夫ですよ、お嬢様。私でも通れますー」

震え上がると思いきやひよいひよいと先を行くメリッサの声に励まされ、フェリシアは恐る恐る足を踏み出した。その瞬間、脆くなっていた足場が崩れて体が傾ぐ。

「うぎゃああやあつ！」

「フェリシア！」

乙女にあるまじき悲鳴を上げて落ちかけたフェリシアを、すぐ横にいたオズワルドが引つ張り上げた。

「あ、ありがとうございます陛下」

念のため用意しておいた銃杖を、本来の杖の用途に使って体を支えながら、頭を下げるフェリシア。

「あの、私、足手まといだったらあそこで待ってましようか……？」

「護衛がそんな事でどうする」
馬車の預け所を指差すフェリシアの弱音を、ばつさり切り捨てるキアラン。今回ばかりは彼の方が正論である。フェリシアは不承不承頷いた。

「わかってますよー」

いつそ突風の魔法で飛んでいこうかと考えていると、フェリシアの手を隣のオズワルドが優しく掴みあげた。

「私が手を引こう。安心して、フェリシア」

「え……？」

にこりと笑うオズワルドに、フェリシアはきよとした。こういう場合、普通の女の子ならときめくものなのだろうとわかっているのだが、何故かオズワルドには大事にされればされるほど戸惑いしか生まれない。先程の絶叫といい、自分には乙女としての何かが欠けているのだろうかと真剣に悩んでいるうちに、つないだ手はキアランの手で強制的に引き離された。

「おや、キアラン。何をするんだい？」

「兄上がこの女に引つ張り落とされでもしたら一大事です。俺が連れて行きましょう」

そう言つて、キアランの節くれだった大きな手がフェリシアの手を握りこむ。その瞬間、フェリシアの中で何かが跳ね上がった。

（な、何今の、どきって何）

混乱を鎮めようと、とりあえずキアランをからかってみる。

「王弟殿下なら引きずり落としてもいいってことですか？」

「何故引きずり落とす前提だ、お前は！兄上よりはマシと言っただけだ！！」

すると、落ち着けと言つようにディランが二人の肩をぼんぼんと叩いた。

「いいから行こうぜ、本隊から随分離されちまった」

言われて前を見れば、兵士の最後尾は遠くのカープに消えようとしていた。五人はフェリシアの歩調に合わせてゆっくりと進み始める。「どうして主要な皆に行くのに、こんな道通らなきゃならないの……」

……

「対人戦を想定した皆へ簡単に行けたら攻め放題だろ？コナリー大皆は魔物侵攻からの防壁を想定した造りだから、そうでもないが」ディランの蘊蓄を聞きつつ、キアランに手を引かれて、何とか行程

の半分を終えたときだった。

ビュオオオオオッ！！！！

強い風の吹きつけるような音と共に、谷の上からばらばらと人が振つてきた。タン、と軽やかな足取りで着地した彼らは、フェリシアたちの前に五人、後ろに十人。皆一様に黒装束を纏い、手には鈍く光る刃物が握られており、その顔はうかがい知れない。すぐさま反応して剣を抜いたデイランとキアランが、それぞれ前後に散って不届き者と切り結んだ。

「ボニファーツの暗殺者か！？」

「わからん！奴ら、魔法を使わなかったか！！？」

ボニファーツの民は神への信仰を捨てると共に、魔法の力も捨てた。故に、突風の魔法で降りてきたと思しき彼らが帝国人である可能性は低い。暗殺者という輩は身元の割れないようにするために工作するものだ。魔法を使うからといって断定はできまいと冷静に考えながら、フェリシアは銃杖を空へ向かって撃ち放った。のろし代わりの一発を見た兵士達が、これで戻ってきてくれるはずだ。

「陛下、メリッサ、私の傍へ！」

次を守るべき二人に声をかけて、すぐさま攻撃を跳ね返す障壁の魔法を張る。すると次の瞬間、飛んできた矢が障壁に当たった。カツンという硬質な音を立て、矢が谷底へ落ちる。

「ふう。危機一髪」

「ふふ、やはり頼りになるね、救世主殿は」

曲者に襲われている最中だと言うのに余裕の笑みを見せるオズワルドとは反対に、メリッサは脅えてフェリシアに擦り寄ってきた。

「お嬢様……」

「大丈夫だよ、陛下もメリッサも私が守るから」

フェリシアはそう請け負ったが、実際のところ彼女も焦っていた。障壁の中のことではない。曲者と直に戦うキアランたちを心配して

いた。特に一人で十人を相手しているキアランが、徐々に押され気味になってくる。それでも三人ほどを切り殺した彼は、大きく体勢を崩して顔を顰めた。

「王弟殿下！」

フェリシアはとつさに障壁を拡大しようとし、踏みとどまる。激しく動き回るキアランやディランを障壁の中に入れれば、一緒に戦う曲者まで中に入れてしまふ危険性があつた。

（どうしたら……！）

するとフェリシアの心の声を聞いたかのように、キアランが振り返つた。

「おい、お前、援護しろ！」

いかにも不本意といわんばかりの悔しげな顔で、キアランはフェリシアに助けを求めた。

「得意の魔法で、こいつらを皆殺せ！！」

「え……」

しかしそれは残酷な要求だつた。そんな事できない、と無意識に頭を振つたフェリシアを冷たい目で一瞥し、キアランは呟いた。

「ならいい。俺がやる」

同時に、キアランの周囲で魔力の密度が上がっていく。赤く熱気の籠つたその魔力に、発動する魔法の種類を悟つたフェリシアは目を見開いた。

「や、やめて……お願い、それはやめて……！！」

彼女の懇願を聞いて、キアランの口元が嗜虐的な笑みに歪んだ。そして彼は、大規模な火焰の魔法——この世界で最もポピュラーな、攻撃魔法を発動させる。

ゴオオオオオッ……！！

すぐさま炎の塊が曲者達を焼き尽くし、真っ赤な炎が燃え上がった。蛋白質の焼ける悪臭があたりに漂い、真っ黒に焼けた死体が、同じ

く焦げ付いた岩肌の上にゴロゴロと転がった。

「ひっ……！」

凄惨な光景に息を呑んだのはメリッサだった。オズワルドはまっすぐに弟を見つめ、戦闘中のディランも背後を窺っている。その中で、フェリシアが唐突に膝をついた。

「嫌っ……」

脳裏に浮かぶのは真っ赤な炎の幻覚と燦る煙。そして何よりも鮮明な、真っ黒に焼け焦げた家と、大小五つの焼死体。

「いやあああああああ……！！！」

それをはつきりと思い出した瞬間、彼女は絶叫した。見開かれた目にはもはや、現実の光景は見えていない。

「嫌だあぁっ、おいて、か、なで、おじいちゃん、おばあちゃん！おとうさん、おかあさん、こうちゃ……！！！」

「お、お嬢様……！？」

尋常ではない様子で泣き叫ぶフェリシアにメリッサが近づこうとするものの、フェリシアはその手を避けてふらふらと前に出た。

「嘘、こんなの嘘だっ……！！！」

錯乱状態に陥ったフェリシアは自分の張った障壁から飛び出し、足をもつれさせて転倒した。そのまま、崖から足を踏み外して川の中へ転がり落ちる。

「フェリシア！」

オズワルドの叫び声とメリッサの悲鳴が谷間に木霊するよりも早く、キアランが川に身を投げた。

「団長！兄上を」

頼みます、まで言い切らないうちに、彼もまた激流の中に消えた。ディランは部下の言葉に無言で頷き、鋭い目で残りの一人を睨みつける。

「てめえらのせいでとんでもねえことになったぞ。どう落とし前つけてくれる……！」

ビリビリと空気を震わせる怒号に怯んだ曲者を、ディランは握った

剣ごと殴り飛ばした。ぐえっと呻いて倒れる不届き者を手早く拘束し、ようやく駆けつけた兵士達に大声で指示を飛ばす。

「おいお前ら、こいつを皆へ運んで口を割らせる。奇襲をかけてきた暗殺者だ、何処の差し金かわかるまでくれぐれも殺すんじゃないぞ！」

兵士達が緊張した面持ちで了承し、拘束した黒装束を引つ立てていく。ディランは崖の淵から身を乗り出し、苦い顔で唸った。もう、フェリシアの姿もキアランの姿も視認できない。何も出来ない自分に悔しさを募らせるディランだったが、彼は王を守る騎士の長である。部下の頼み通り、立ち尽くすオズワルドと泣きじゃくるメリッサを宥めて、皆への道に誘ったのだった。

23・襲撃（後書き）

そろそろ急展開も必要になってことで次回へ続く！です。ようやく主人公の過去とかトラウマが明らかに！長かったなあ。でもこの先はもっと長いんですが。

エドモンド兄さん以来の新キャラはヘイグ団長。気のいいおっちゃんです。でもそのがさつさが仇となって、お城での護衛はほぼキアランが担当していました。

そしてメリッサの苗字初登場回でもあったりする。今まで必要ないので決めていなかったんですが、フェリシアなら腹心のメイドを「ただのメリッサ」とは紹介しないかな、と。

あとキアランが初めて魔法を使いますね。もとのポテンシャル＋隠れて独学で勉強していたので、それなりに強い魔法が使えます。結果は別の意味で残念なことになりましたが。

24・人形姫の昔語り

激しく流れる水の中、娘は朦朧とした意識で、口からこぼれて上る泡を見上げていた。水の入り込んだ肺が悲鳴を上げ、徐々に視界が黒く塗りつぶされていく。覚えのある感覚だ。幼い頃、足のつかないプールに飛び込んで溺れかけた時と、同じ感覚。少し前まではあちらこちら岩にぶつけて、激流に揉まれた体が痛かったが、今はその痛みも遠のきつつあった。

（私、死ぬのかな）

目を閉じると、懐かしくて愛おしい顔が浮かんた。大好きな父方の祖父母に優しい両親、可愛らしい弟。

（なんだ、みんな、そこにいたんだ）

もう会えないと思っていた大事な家族に向かい、娘はうつすら微笑んで手を伸ばす。するとその手首を、大きな手が掴んだ。

「お父さん？」

喋ろうとして、大量の水が口の中に入ってむせ返った。腕は構わず娘の腹に回され、体を引き上げていく。娘に向かって手を伸ばしていた家族の姿が、ぐんぐんと小さくなった。

（嫌だ嫌だ、私は皆のところに行くの！）

抵抗しようと試みるが、体は鉛のように重く、指一本自由に動かせない。やがて娘の意識は完全に暗転した。

パチパチと火の爆ぜる音に、フェリシアはふっと目を覚ました。何だか幸せな夢を見ていた気がするが、もう少しでそれは彼女の手から零れ落ちてしまった。

「わ、たし……？」

起き上がろうとして全身に鈍い痛みが走り、すぐに後悔する。かわりに横たわったまま視線をめぐらせて、辺りの様子を窺った。彼女がいるのは薄暗い洞窟のようで、激しく川の流れる音も遠く聞こえ

る。すぐ傍には焚き火が燃えていて暖かった。火を恐れてもがいていると、暗がりからゆっくりと人の気配が近づいてきた。

「焚き火も駄目なのか、お前は」

呆れた調子のキアランの声に、フェリシアは首を動かして上を見上げた。上半身裸のキアランが、なんともいえない顔でこちらを見下ろしている。その顔を眺めているうちに、フェリシアは段々と自分の身に何が起こったのか理解していった。キアランが使った火焰の魔法の焼け跡にパニックを起して川に落ち、拳句この男に助けられたのだ。

「知ってて、使ったでしょう」

目の前の男を睨みつけて尋ねると、キアランは決まり悪そうに目を逸らした。

「ああ。嫌がらせのつもりだった。まさか、ここまで過剰反応をされるとは思わなくてな」

「……どうして助けたんですか。私のことなんか大嫌いで、出来れば死んで欲しかったんでしょう？ 絶好の機会だったじゃないですか」
「五月蠅い。考える前にお前の後を追っていたんだ、仕方ないだろう」

ふてくされながら答えたキアランは、それからふと思いついた様子で再びフェリシアのほうを向いた。

「お前、死にたかったのか？」

その問いに、今度はフェリシアのほうが視線を逸らした。

「あの後だって、死にたいなんて思ったことはありません。……でも、死んでもいいとは思ってた。会えるかもしれないから」

ぼそぼそと細い声で話す声は、ともすれば炎の音にかき消されるほどに弱々しい。キアランは少し距離をとって、焚き火の前に座った。

「あの後？ 会えるとは、お前の家族に、か？……お前の魂は本当に、異世界から来たものなのか？」

心持ち、聞きにくそうな、聞いてもいいものか戸惑いの含まれた声音に、フェリシアは苛立って身を起す。打ちつけた体が痛かったが、

構わずキアランに掴みかかった。

「最低！そこから信じてなかったの！？全部『フェリシア』の演技だと思つてたの！！？」

グランディールに来るまでの全ての人生を、大切な家族の存在までもを否定されたようで、怒りに任せてキアランの頬を張り倒す。

「いいわよ、それなら教えてあげる。私が何処の誰で、今まで何をしていたのか。何で火が怖いのか、貴方がどれだけ酷いことをしたのか、教えてやる！」

呪いの言葉でも吐くような剣幕で、フェリシアは捲くし立てた。もう、体の痛みも水を飲んだ苦しさも感じない。ただ怒りのままに、彼女は話し続けた。

齊藤優花の父親は、嘗ては貧しい青年だった。高校も出ておらず、母親がアメリカ人でその容貌が日本人とは異なるために、就職が困難だったのである。それでも彼は捻くれることなく、日雇いの仕事を続けながら両親と慎ましく暮らしていた。そんな彼に心惹かれた優花の母親は、あろう事か皇族の流れを汲む財閥のお嬢様だった。

「結婚するときは、私の親兄弟、親族一同に大反対をされたわ」

幼い優花を膝に乗せて、母は深刻な話を笑って聞かせたものだった。反対されればされるほど、若い二人の恋心は燃え上がるものだ。優花の両親は駆け落ち同然で結婚し、父親の両親と四人、貧しい暮らしを始めた。若かりし頃の祖父も母も働きに出かけ、家事全般は祖母が担当していた。働かざるもの食うべからず、が齊藤家の家訓になったのもこの頃である。

「すまない。苦勞を知らない君に、こんなことをさせてしまつて」父は、荒れ果てた母の手を見て、申し訳無さそうによくそう言った。それに、母は笑って返すのだ。

「そうね、じゃあ、家にお金が溜まつたら、樂させてもらいましょ

うか」

彼女の言葉に、優花の父親は一念発起した。雇ってもらえないなら自分で会社を興せばいい、と発想の転換を行ったのだ。家族の協力のもと仕事を減らして勉強に打ち込み、大学に合格した。丁度その頃優花が生まれ、母が数年働けなかったために家計は火の車だったのだが、斉藤家の人々は仲がよく、小さな家に暮らす人々は皆幸せだった。貧しさは優花が小学生のころまで続いたが、大好きな家族がいれば、平気だった。

貧しさに耐え抜いて十年程が過ぎたころ、優花の父親が大学卒業後立ち上げた会社が徐々に業績を伸ばし、一家は人並みの生活を送ることができるようになった。

「優花、今年は誕生日もクリスマスも、プレゼントを買ってやれるぞ。何がいい？」

普段は寡黙な父親が珍しく弾んだ声で言うのに、優花は答えた。

「お父さんと一緒にいい！お父さん、いつもお仕事で遊んでくれないもん」

すると、遊園地や動物園に連れて行ってもらったりもした。

優花の父は仕事が軌道に乗っても疎かにはせず、会社は急成長を遂げる。やがて人並みの生活は、どんどんと豊かになっていき、優花が中学に入る頃には大きな家で何不自由ない暮らしが出来るようになった。祖父は仕事をやめて趣味に打ち込み、優花ともよく遊んでくれるようになった。母も専業主婦になり、よく祖母と並んで台所に立つ姿が見られるようになった。俄か金持ちの娘となった優花は、誘拐などの危険から自衛できるようにと空手を習い始め、父が休みの日にはプロレス技から柔道の型まで様々な武道を習った。元々運動神経は良かったので、めきめきと上達していくのも嬉しかった。

こうして生活スタイルは大きく変わったものの、斉藤家の人々の絆にはなんら問題はなかった。寧ろ問題だったのは、優花の学校生

活の方だ。優花が中学に上がると同時、新しく買った家に引っ越した。そこで今までの友達と離れ離れになり、新しい環境に放り込まれた優花は、アメリカ人と日本人のクォーターであることをネタにいじめを受けるようになったのだ。

「優花、また喧嘩してきたのか」

泣きつ面で帰ってきた優花に、真っ先に声をかけるのは、いつも庭で盆栽の手入れをしていた祖父の役目だった。

「喧嘩じゃないもん。あいつら、おばあちゃんのこと馬鹿にするから悔しくて」

「泣いて帰ってきたのか？」

「うん。一発ずつ殴ってやった」

「ははは、それでこそじいちゃんの孫だ、よくやった」

「でも先生には怒られたよ。悪いのはあいつらなのに」

それが悔しいと泣く孫娘の頭を撫でて、祖父は寂しげな笑みを浮かべた。

「そうだな、先に暴力に出ちまったのは、優花が悪い。でも、酷いことを言われて抗議できるのは、立派なことだぞ。今度は口で言い返してみるといい」

「うん」

しかし、優花に対する苛めはどんどん深刻になっていった。最初は物を隠すだけだった悪戯も、学校へ来るなど脅迫めいた手紙から、持ち物を汚されたり壊されたりとエスカレートしていく。先生に相談しても取り合ってくれないと家族に相談すると、ズタズタに引き裂かれた優花の体操服を持った祖母が「米国人の血に文句があるなら自分に言え」と直談判に学校へ乗り込んだこともあった。それ以来、面と向かって悪口を言われることはなくなった変わりに、無視や陰口が横行した。優花はすっかり学校生活を楽しむことを諦めて、中学では機械的な日々を過ごしていた。それでも彼女が心根までも歪めてしまわなかったのは、家族のおかげだ。とくに、年の離れた弟が生まれたことが大きい。耕太と名づけられた小さな弟は、優花

の最大の癒しだった。

「耕ちゃんがおおきくなったら、苛めなんかする奴、いなくなるといいねえ。いたら、お姉ちゃんがぶん殴ってあげるからね！」
姉の物騒な台詞にもきやつきやとはしゃぐ赤子に、優花は相好を崩したのだった。

高校と大学は中学時代の同級生がいない私立校を選び、中学時代の経験を生かして上手く立ち回った優花は、再び穏やかな日々を取り戻していた。学校での友人も出来たが、彼女にとっての一番は、変わらず家族だった。

「優ちゃん、耕ちゃん、おやつクッキーが焼けたわよ」
若い時分に苦勞をしているにもかかわらず、いつも穏やかでにこやかな母親が焼く、甘い菓子のおい。お姉ちゃんと呼びながら、自分の後をついてくる小さな弟。おやつをつまみ食いして祖母に怒られている祖父。忙しい営業の合間に家へ立ち寄り、コーヒーを飲みながら家族の様子を眺める、父親の大きな姿。その全てが、優花にとって宝物だった。

そして、幸せが一瞬で壊される悪夢の日がやってきたのは、突然のことだった。

その日は優花が二十歳を迎える誕生日で、珍しく優花以外の家族全員が自宅にそろっていた。忙しい父親は愛娘のために休みを取って誕生日を用意し、母と祖母は料理の準備。祖父は孫息子と共に息子夫婦が育てた花で部屋を飾っていた。夕方の講義を終えて大学から帰って来る優花のために、家族総出で準備をしていた矢先に、悲劇は起こった。放火と見られる不審火で、家が全焼したのだ。誕生日祝いを楽しみに家に帰ってきた優花を迎えたのは、焼け落ちた家と物言わぬ五つの焼死体だった。

突然家族と家を失い茫然自失となった優花を、周囲はそっとしておいてはくれなかった。まずは母の親族だという人々がどこからともなく現れ、葬式の最中に父の残した財産を自分たちが管理するべきだと言いつ出したのだ。幸か不幸か、成人していた優花はそれを突っぱねることが出来た。しかし、そうすると新たな疑いが生まれる。今度は警察が、優花を財産目的の一家殺害犯のように扱い始めたのだ。取調べの結果、証拠不十分で優花は釈放されたが、一度疑いの目で見られた優花に世間の目は冷たかった。

それでも優花は、自ら死を選ぶことはしなかった。そんな事をしても皆は喜ばないとわかっていたから、大学卒業までの学費と生活費を除いて遺産は全て寄付に回し、アパートを借りて細々と暮らしていた。せつかく作った友人達も離れていき、何より一人きりの生活は酷く味気ない。無気力な毎日を過ごしていた優花がトラックに撥ね殺されたのは、家族の死から三ヶ月ほど経ったころのことだった。

話を終えたフェリシアは、じっとキアランを睨みつけた。その頬に一筋、涙が伝う。

「その、話は」

「本当なのか、なんて聞いたら締めますよ」

首に絡み付いてきたフェリシアの指を引き離して、キアランは頭を振った。

「……お前は、フェリシアなのだと思っていた。兄上を誑かして、民には人形だと思わせていたのだと。異世界から突然迷い込んだに
しては、あまりにも平然としていたから」

「平気なはずないでしょう!!」

ついに耐え切れずボロボロと涙を零しながら、フェリシアはキアランに詰め寄った。

「戻れるものなら戻りたいわよ！返してよ、お金なんかいくらでもあげるから！！私が殺すわけじゃないじゃない！！皆が死んだなんて嘘だって言つてよ！！耕太なんて、まだ六歳なのよ！？何であの子が、あんなに可愛い子が死ななきゃならないのよ！！！」

それは、血を吐くような悲痛な嘆きだった。泣きじやくりながら、段々と意味の為さないう単語を並べるようになったフェリシアを、キアランはそつと膝の上から下ろして、フェリシアの顔が焚き火の反対方向を向くように横たえた。

「お前があつさりグランデールの救世主を了承したのは、そのせいか。もとの世界に戻つても、家族はいないから」

問いかけに、しばらくフェリシアは答えなかった。くすくすんと鼻を吸る音が数回続き、やがて頷く気配がする。

「私、多分、自棄になつてました。わけのわからない世界で戦いに巻き込まれて死んでも、それもまあいいか、なんて思つちやうくらいには」

「お前の家族は、それを望まないと思うが」

「貴方に言われたくないわ」

「……悪かつた」

素直に非を認めるキアランに、フェリシアは一瞬驚き、それから自虐的な笑みを浮かべた。

「さっきまで私のことを国ごと騙した悪女だと疑つていたくせに、妙な同情しないで下さい。わかつたでしょう、私は別に、この国を救いたいとか平和に導きたいとか、ご大層な志を持っているわけじゃないんです。むしろ、人間相手の局面ではただの役立たず。殺したいならさつさとやればいいじゃないですか」

「お前こそ、死に急ぐような物言いはらしくないだろう。不本意だが、この世界はお前の世界からみた死後の世界なのかもしれないぞ」

「へ……？」

「記憶がないだけで、お前の家族の魂も、こちらで転生しているかもしれない」

思いがけない言葉にフェリシアはきょとんとした。根拠も何もない言葉だが、それが事実なら彼女は救われる。家族がこの世界のどこかで別の人として生きているなら、フェリシアがグランディールを守ったことは、決して無駄ではないのだから。

「って、一瞬思っただけ、皆がグランディール以外の国の人とか、ましてや魔物なんかになってたら最悪ですよね」

「あ……」

「言う前に気づかなかったんですか……？」

「う、五月蠅い」

「まあ、いいです。別の世界に転生なんてほとんどありえない話だつてことも、貴方が私を励ますためにない知恵搾っただけなのもなんとなくわかってますから」

「……そうか」

キアランは、がしがしと頭をかいて、フェリシアの方を見た。

「お前が泣いているところ、はじめて見た」

「そりゃあ、こっちに来てから初めて泣きましたから」

「……だからというわけではないが、お前の話を聞いて疑いが晴れた。最近はお前が二十年も国を騙せるような、狡猾な人間ではないんじゃないかと思っではいたが」

「し、失礼な」

「すまなかった」

万感の思いが籠った謝罪の言葉に、フェリシアは目を丸くしてキアランを仰ぎ見た。琥珀色の瞳には、憎悪も悪意も、気まずささえも浮かんでいない。

「サイトー・ユウ力殿。国のために尽力いただいた貴女に対する数々の暴言と暴挙、許してもらえらるだろうか」

真剣な眼差しで許しを請われ、フェリシアの心臓が早鐘を打ち始めた。なぜか火照る自分の頬に戸惑いながら、フェリシアはぎこちなく頷く。

「た、助けてくれたし、仕方ないから、チャラにしてあげます」

するとキアランは穏やかに微笑んだ。それから、ふと首をかしげる。
「だが、どうにもまだ腑に落ちないことが一つあるんだが……」

「な、何よ、まだ何か因縁つける気ですか？」

「いや、あれはユウカ、お前ではなくて、フェリシアだったんだろう。十二年前、兄上と会話していた話のことだ」

キアランの言葉に、フェリシアはびくりと肩を震わせた。

「あ……そ、それは、そのことなんですけど……」

先程川に流されているうちになんとなく思い出してしまった事実を、おっかなびつくり打ち明ける。

「それ、多分私です」

「何……？」

「さつき流されているときに、何だか覚えのある感覚だなあって思い出したんだけど、私、八歳の頃、深いプール……ええと、足のつかない遊泳所で溺れかけたことがあるんです」

唐突な話にもかかわらず、キアランは黙って続きを促してくる。

「引き上げられたときには意識もなくて、お父さんたちには滅茶苦茶心配かけました。でも私本人は暢気なもので、夢を見てたんです。綺麗なお城で、金髪の王子様とお話した夢。あれ多分、うっかり死に掛けた私がフェリシアさんの中に入っちゃって、当時のオズワルド陛下と話してたんじゃないかなあと」

「……遊泳所というからには、浅いものもあるんじゃないのか？何故わざわざそんな深いところへ」

なんと返したもののかわからず、とりあえず気になった点をつっ込んだキアランに、フェリシアは首をすくめた。

「勿論浅いプールもたくさんありましたよ。でも私、運動は得意なのに泳ぎだけがどうしても駄目で、それが悔しくて。深いところに入ったら生存本能が刺激されて泳げるようになるんじゃないかなあって」

「馬鹿だろう、お前」

「うっ、馬鹿言う方が馬鹿なんですよ、馬鹿殿下ー！」

憤然と言い返すフェリシアに、キアランは頭を抱えた。

「俺はそんな間抜けな顛末に、十二年間もあらぬ疑いを抱き続けていたのか？」

「やーい、馬鹿殿下」

「五月蠅い、馬鹿言うな愚か者め。……名前で呼べばいい」

不意に出された許可に、フェリシアは目を瞬いた。

「キアラン？」

「……なんだ？」

自分で許可を出しておきながら、照れているのかぎこちなく振り返るキアランに、フェリシアは今更ながら頼んだ。

「あの、上、何か着て。目のやりどころに困ります」

「そういうお前は、自分が下着姿なのに気づいていないのか？」

言われて、フェリシアははっと自身の体を見下ろした。着ていたはずの乗馬服は全て剥がされて、彼女は下着姿を晒していた。

「きやあああああつ！！！何これ！」

「濡れたままでは風邪を引くだろう。そこに干しておいた」

フェリシアはすぐさま起き上がると、キアランが指差す先に引っかけていたシャツを掴んで被り、蹲った。

（何、私この格好で上半身裸のキアランの上乗っかって殴ったり詰ったりしてたの！？ありえない、超恥ずかしいんだけど！！！）

頭から火を噴く勢いで羞恥に悶えるフェリシアを眺めながら、キアランも彼女の求めに応じて干していた自分のシャツに袖を通した。ぐっしりと濡れていたシャツは、まだ湿っていて冷たい。

「安心しろ、この状況で流石に欲情はできん」

「よ、よくっ……？きつ、キアランの馬鹿！助平！！」

「……何故俺が怒鳴られなきゃならんのだ」

溜息をついたキアランは、外の様子を窺い、勢いの弱まった焚き火に流木を放り込んだ。

「フェリシア。服が乾いたら、外に出るぞ」

「うえええ、もうお嫁にいけない」

「嫁に行く気も予定もないくせに何を言う。……乾くまで時間が掛かりそうだな。お前の話を聞いたからには、俺も何か話した方がいいか？」

キアランの問いかけに、フェリシアは被っていたシャツから頭だけ出して、こくんと頷いた。キアランの方から自分のことを話すなど、貴重な機会である。恥ずかしさを忘れるためにも、ぜひとお願いしたかった。キアランは一つ頷くと、燃える焚き火を眺めながら、ぼつりぼつりと話を始めた。

24・人形姫の昔語り（後書き）

主人公の過去編でした。ちなみに今話、一つだけ作者の実体験があります。……泳げないのが悔しくて、生存本能に期待して足のつかないプールに入った拳句おぼれることってよくあるよね……。ない？過去話打ち明けてツンデレ王弟殿下とちょっと仲良くなりました。この後キアラン君には大型デレ期が到来する予感。今までが今までだったので、反動がすごいことになるんじゃないでしょうか。

25・憎しみの理由

溪谷沿いの洞窟の中で、キアランは思いつくままに子供のころの思い出話を語っていた。父王が生きていた頃のこと、母が城にいた頃のこと、仲睦まじかった両親の様子、そしてフェリシアとの思い出話。フェリシアは相変わらず湿ったシャツを被ったままだったが、時折共感や驚きを含んだ相槌が返ってきた。やがて話のネタも尽き始めたところで、キアランは一度立ち上がって洞窟の外を窺った。「川の流れが緩くなってきた。崖の上に登る道もしっかりしている。今夜はここで夜を明かして、明日砦に向かうぞ」

「野宿、か」

「非常事態だ、我慢しろ。誓って手は出さん」

「……わかりました」

あっさり了承され、キアランは眉根を寄せた。救世主役を引き受けたときといい、妙に物分りがいいのが、逆に不安になってくる。というより、もう少し警戒心を持った方がいいのではなからうか。そう言っと、フェリシアはシャツから顔を出して答えた。

「だって、キアランが襲い掛かってきたら返り討ちにすればいいだけだもの。閃光の魔法で」

「……」

別に信賴されているわけではないことにキアランがなんとなく気落ちしている、フェリシアは続けて躊躇いがちに聞いてきた。

「それで、話は戻るけど……あの、言いたくなかったら答えてもらわなくてもいいけど、キアランのお母さんって、どうして離宮にいらつしやるんですか？」

挨拶ぐらいはしたいのに、と表情を曇らせるフェリシアに、裏表があるようには思えなかった。泣きながら家族を返せと迫ってきた必死な様子を見た後で、疑うつもりはない。おそらく人生で一番重大な事柄を話してくれたのであろう彼女に報いるため、キアランは今

まで直視を避けていた現実を告げた。

「表向きは、体調を崩して療養のためということになっている。だが、母上が離宮に移されたのは罪を犯したためだ。俺の母は、先の王妃陛下を殺害した」

「オズワルド陛下のお母様を？」

重い告白に、フェリシアが驚きの声を上げた。

「俺とて信じ難かった。しかし情況も動機も本人の証言も、全てそろっている」

キアランはつかの間目を閉じて思い返した。彼の母親と正妃は仲がいいわけではなかったが、対立しているわけでもなかった。オズワルドの母親である正妃は慎ましい、淑女の鏡のような人で、庶民出の側室を目の仇にするようなみっともない真似はしなかった。一方キアランの母親は朗らかな気質で、側室を苛め抜く妃も多い中、王の寵愛を奪った自分を黙認している正妃を立派な女性と認めていた。しかしそれは、表面上のことだったのだ。

「母は、口では王妃陛下を褒めながら、腹の中では邪魔者を憎み殺す卑劣な人間だったということだ。何故か父上が庇い立てして、この話は一般に知られていない上、極刑も免れたが」

淡々と母親を貶めて話していた顔を歪め、キアランは吐き出すように呟いた。城では絶対に口に出来ない本音を。

「だが、それでも、俺はどこかで母上を信じている」
すると、フェリシアがはっと顔を上げた。

「あ……ひょっとして、前に影王妃の間にいたのって」

「そうだ。母の使っていた部屋で、無実の証拠を探していた。あれから十年以上経つというのに、我ながら未練がましいことだ」

「だから、私が何しているのか聞いたらあんなに怒ったんですか。貴方がお母さんの無実を信じているって、オズワルド陛下に告げ口でもすると思っただから？」

「すまん」

謝罪することで肯定され、フェリシアが心外そうに頬を膨らませた。

「あの時私はあの部屋が何の部屋かも知らなかったし、知っていたとしても告げ口なんかしません。子供がお母さんを信じたいって思うのは当然でしょう」

思いがけないことを言われて、キアランは目を瞬いた。彼の母は王妃を殺した重罪人で、それ庇うような発言は許されるものではないところがフェリシアは、キアランが母を信じたいと言う気持ちを当然のものだと断言する。それは意外なほど暖かな言葉だった。

「というか、オズワルド陛下もそのくらいで怒ったりしないと思いますけど」

もそもそとそんな事を言いながら亀のようにシャツの下に引っ込んでいくフェリシアを見て、キアランの口元に笑みが浮かんだ。そして、昔のように穏やかな気持ちでフェリシアと接していることに、自分で驚く。

（俺も現金だな。昔のようにには戻れないと自分で言っておきながら）そして、遠い昔のことに思いを馳せた。

子供のころは、それほどフェリシアが嫌いではなかった。不気味な人形姫だと陰口を叩かれる彼女を、別に可愛いじゃないか、と思うくらいには。そう思うのは、彼女が抜け殻だったからこそだろう。

「オズワルド様は、正妃様の御子であられますから」

「第一王子殿下に、おゆずりしなくてはなりませんよ」

幼い頃から、いつもいつも、優先されるのは兄だった。それを不満に思ったことはない。妾腹の第二王子が正妃の産んだ第一王子より優先されるなどあってはならないことだと納得していたし、自分などに優しく接してくれる兄のことと尊敬していた。ただ、母親を除く誰もがオズワルドを重要視し、その母すらも遠ざけられたことが、少し、寂しかっただけで。

「フェリシア、遊ぼう」

「……」

「ほら、花蜜の焼き菓子だよ」

「……」

キアランが話しかけても、何を差し出しても、フェリシアは何も言わず笑わない。けれどもそれは、オズワルドに対しても同じだった。誰もが兄を優先する広い城の中で、彼女だけが兄弟に対して平等だった。それがとても心地よくて、キアランはフェリシアが好きだった。いつかオズワルドとフェリシアがこの国を守り、自分が二人を守れたらいいと、本気で思っていたのに。

「ねえ、お兄さんは、王子様なの？」

十二年前のあの日。初めて聞くフェリシアの抑揚ある声に、氷の手で心臓を鷲掴みにされたようだった。

「王子様は、格好いいねえ」

覗き見たのは、今まで見た事のないような笑顔で、オズワルドと話すフェリシアの姿。年相応に笑う彼女はやはり愛らしく、そして（フェリシアだけは、僕と兄上を区別しないと、思っていたのに）どこまでも絶望的だった。それでもキアランは、めげずにフェリシアに話しかけたのだ。

「君が僕と兄上を区別するわけがないよね。たまたま喋れるようになったのが、兄上の前だったというだけで。ねえ、僕ともお話ししよう？」

再び魂の抜けた人形となったフェリシアの前で、キアランは何日も懇願した。しかしいくら話しかけようと、フェリシアに声は届かず、その瞳にキアランの姿は映らず、言葉を返すなどもつてのほかだった。

（結局、フェリシアも他のやつらと同じだったのか）

そして、いつしか絶望は深い憎しみへと姿を変えたのだった。

「……兄上を誑かしたのだ、お飾りの救世主だの、お前を嫌う理由は散々言ったが。俺がお前を憎んだ一番の理由は、多分それだ」
懺悔でもするような気持ちでそつと告げたキアランは、違和感を覚えてフェリシアを見下ろした。シャツを被ったフェリシアのほうか

ら、いつの間にかすうすうと規則正しい寝息が聞こえてくる、

「おい、そこで寝るか普通！？俺は今、一世一代の告白をしたようなものなんだぞ！！？」

「ぐー……」

寝息か腹の音がわからない声で返事をされ、キアランはがくりと肩を落とした。

「貴族の娘が、こんな場所でよく寝られるな……」

呆れながらシャツを捲ってみると、穏やかな寝顔があった。キアランは一瞬その顔に見入って、無言でシャツを戻し再び洞窟の外に気を配る。相変わらず川の流れる音と焚き火の爆ぜる音、フェリシアの寝息以外は何も聞こえなかった。どうやらあの暗殺者たちの生き残りや仲間が追ってくる様子はないようだ。狙いがフェリシアではなくオズワルドだったのか、デイランや兵士達が不屈者を全て捕縛できたのか、あるいは主の元へ逃げ帰ったのかまではわからないが、キアランは僅かに緊張を解いて壁にもたれかかった。すると、疲労の溜まった体に眠気が訪れる。少しだけ、と目を閉じて、彼もまた浅い眠りに落ちていった。

翌朝、洞窟の中に差し込む朝日で目が覚めたフェリシアは、むくりと起き上がった。川の中で散々ぶつけた上、硬い地面の上で寝た体は凝り固まって鈍い痛みを発している。しかし差し込んでくる光と風は徐々に気持ちのいいもので、誘われるように何とか起き上がった。振り返ると燦る焚き火の跡に、すっかり乾いた二人分の洋服、そして少し離れたところで壁にもたれて眠るキアランの姿が目に入る。

（まだ、寝かせておいた方がいいかな）

嫌な記憶を思い出させる黒い焼け跡をなるべく視界に入れないように服を着て、キアランの服は畳んで本人の横に置いてから、洞窟からひよいと顔を出した。見上げれば谷はなだらかな斜面になっていて、すっかり乾けば歩くのに問題は無さそうだ。下方に流れる川の

流れも、昨日に比べると穏やかになってきている。

（体は痛いけど、登れないことはないか。あとは腹ごしらえができると言うことないんだけど……）

何しろ昨日から何も食べていないのだ。先程からぐうぐうと腹が切ない音を立てていた。溜息をついて洞窟に引き返すと、目を覚ましたキアランと目が合う。

「あ……おはよう、ございます」

「ああ」

なんとなく気まずい空気が流れ、二人は沈黙した。僅かの間をおいた後、キアランが口を開く。

「……腹の音で目が覚めた」

「し、失礼な、私のお腹の音はそんなに大きくありません！」

「いや、自分の腹の音だが」

「うー……」

フェリシアは唸り、すんと腰を下ろした。

「お腹、すきましたね」

「ああ。川で魚でも獲って食うか」

「獲れるの？」

「魚影を見つければ、突風の魔法で引き上げられるだろう」

「あ、そうか。よし、とっ捕まえて焼き魚にしてやる！」

腕まくりをして洞窟の外へ向かうフェリシアに、キアランが呆れた眼差しを向けた。

「お前、火が苦手なんじゃなかったのか？」

するとフェリシアは思案しながら振り返り、苦笑した。

「まあ苦手ですけど、厳密には、焼け跡が駄目みたいです。家が燃えている現場を見たわけじゃないから」

彼女が家に帰ったころには、家も家族も全てが焼け落ちていた。うかつなことを聞いてしまったかと焦るキアランに、フェリシアは続ける。

「それに、こんな非常事態で気にしている場合じゃないでしょう。」

せっかく拾った命だもの。私は、ここで生きていくって決めたんだから」

そして魚を獲りに出るフェリシアの背中を、キアランは眩しそうに目を細めて見送った。

しかし、二人が魚を取る必要はすぐになくなった。オズワルドの派遣した搜索隊に程なく見つかったのである。

「フェリシア様、王弟殿下、よくぞご無事で！」

「そんなことよりご飯下さい」

搜索隊の若い兵士へ、二人はそろって朝食を要求した。食事の間、オズワルド一行はつつがなく砦に入ったものの、線状では膠着状態が続いているという報告を聞く。そして兵士達に先導され、サナデイスの大砦へと向かったのだった。

25・憎しみの理由（後書き）

今回は少し短め、キアランサイドの過去話を少し。
次回はVSボニファーツ戦、かな？

26・荒野の砦

先導の兵士の後を追ひ、砦へと向かう道中。フェリシアは揺れる視界にぐったりとしながら、本日三度目となる訴えを起した。

「あの、そろそろ下ろしてもらえませんか？」

するとキアランは、少し不機嫌そうに言葉を返す。

「俺に運ばれるのがそんなに不満か？」

「いや、不満というか……」

言葉を濁すフェリシアは、キアランの手で運ばれていた。それも背中と膝裏に腕を回された、いわゆるお姫様抱っこと言う形で。

「子供じゃないんだから恥ずかしいし、もう歩けますから」

ちらりちらりとこちらを窺いながらも、妙な気遣いをしているのか一定の距離を置いて歩く兵士達の姿に、フェリシアは居たたまれない思いだった。

「そう言つてすつ転んだ挙句、這つて進むしかなかった奴が何を言う。俺は早く砦に行つて状況を確認したいんだ。運んでいるのはお前のためじゃない」

「……ごめんなさい」

体が痛いのと足場が悪いのとで動けなくなり、迷惑をかけたのは確かなので、フェリシアはしゅんとして謝った。するとキアランは若干慌てて言いつくろつ。

「いや、その、何だ。俺がいつているのは効率の問題で、お前がどうと言うわけではなく……俺に運ばれるのは嫌だろうが耐えてくれ」するとフェリシアは、きょとんと小首を傾げた。

「いい年して抱っこして運んでもらうしかない自分が情けなくて恥ずかしいだけで、別にキアランに運ばれるのが嫌なわけじゃないよ？」

「……そうか」

するとキアランは機嫌を直し、改めて正面を向いた。ちなみにその

やり取りの間、先導の兵士達が今にも痴話喧嘩勃発かとハラハラし、結局丸く収まったことに独り者の苛立ちを募らせたりしていたのだが、二人は知る由もない。そんな光景を繰り広げながら一刻ほど歩くと、蛇行する谷間の奥にようやく砦の姿が見えてきた。

「うわあ、絶景だ……」

絶壁の上に建つサナデイス大砦は赤土色の煉瓦を積み上げられた防壁に何重にも囲まれた荘厳な建物だった。岩を削って地下まで作られているらしく、絶壁の所々に小さな窓が並んでいるのが見える。

崖の上に登れば、どこまでも続く赤い荒野と時折地割れのように刻まれた渓谷、そして東には長く尾を引くサナデイス大河が見渡せた。

「あの向こうはもう敵国なんだね」

「ああ。歩けるか？」

「？うん」

フェリシアの呟きに答えたキアランは、彼女の返答に頷くと、そつと地面の上におろす。下ろしてくれるよう頼んでも頑として譲らなかったキアランを怪訝そうに見上げると、砦の方から微かに人の声が聞こえた。

「お嬢様ー！！！」

風に乗ってまず聞こえてきたのは、メリツサの声だ。目を凝らせば、門から赤毛の少女が走ってくるのが見えた。

「メリツサ！」

離れていたのはたった一日だと言うのに、懐かしく感じる姿を見たフェリシアも、痛む体を庇いながら早足で道を進む。そして二人は、出会い頭にしっかりと抱きあった。

「お嬢様、ご無事でよかった、本当によかった……！！！」

涙声で何度も主の無事を喜ぶメリツサの姿に、フェリシアは申し訳ない気持ちで赤毛の頭を撫でた。

「うん、私は大丈夫だから、泣かないで。心配かけてごめんね」

「いいんです、無事で戻ってきてくだされば、それで。本当によかった」

まだくすくすんと鼻をすすっているメリッサを宥めるように彼女の背中を叩きながら、フェリシアは視線を上げた。防壁の門の外にはずらりと並んだ見張りの兵士、その中には苦笑しながらこちらへ歩いてくるオズワルドやディランの姿もある。

「陛下にディランさんも、ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

メリッサを抱えたまま謝罪すれば、オズワルドは無事でよかったと微笑み、ディランが気にすんなと手を振った。

「兄上、団長、どうしてここに？」

フェリシアが背後の気配に振り返ると、どこか緊張した面持ちのキアランもやってきたところだった。

「お前たちが帰ってくると先触れから知らせがあつてな。陛下とメイドのお嬢ちゃんがどうしても迎えに行きたいと言い出して、俺はその護衛だ」

ディランの言葉に頷いたキアランは、オズワルドに向かって堅苦しい一礼をした後、淡々と挨拶した。

「ただ今戻りました。勝手に不在にいたしましたして、申し訳ございません」

「いいや。よくやった、キアラン。フェリシアが川に落ちたときは肝が冷えたからね。彼女を助けてくれて、ありがとう」

「勿体無いお言葉です」

オズワルドの労いに畏まるキアラン。その姿になんとなく違和感を覚えたフェリシアは、長身の彼を仰ぎ見て手を伸ばした。

「キアラン……？」

しかし伸ばした手がキアランの袖口をつかむ前に、横合いから出されたオズワルドの手が強引に割って入ってフェリシアの手首を掴んだ。

「フェリシア、本当に怪我はないかい？ 疲れただろう、ゆっくり休んで、食事もしっかりとるといい」

「え、あ、あの……」

我に返るといつの間にかメリッサは離れた場所で「どうぞあとはお二人でごゆっくり」と言わんばかりの笑顔で手を振っていた。オズワルドは優しく、しかし有無を言わせずフェリシアをの手を引いて皆へと歩き出す。

（顔色が悪いような気がしたんだけど、大丈夫かしら……？）

オズワルドに手を引かれながら、キアランの方をちらりと窺うと、彼はどこか硬い表情でこちらを見ていた。それに気づいたか、オズワルドがフェリシアの顔を覗き込んでくる。

「どうしたんだい、フェリシア？」

「えっ」

「キアランを気にしているみたいだけど、何かあった？今まで呼び捨てなんてしていなかったのに」

オズワルドの柔らかな笑みを浮かべた瞳が、一瞬探るような気配を帯びた気がしたが、フェリシアが瞬くとそれはいつもの穏やかな笑みだった。

「い、いいえ。強いて言えば、長年の誤解が解けた、というか」

「ふうん。長年の誤解、ね。それならキアランの君に対する態度も、少しは軟化するかな」

「だといいんですけど」

フェリシアは答えながら、ふとオズワルドがキアランの誤解の内容を知っていたのか、知っていたなら何故指摘してやらなかったのか気になったが、話しているうちに門の傍まで来てしまった。

「さあ、皆君を待っているよ。早く入ろう」

「は、はい」

結局聞きそびれたまま、フェリシアたちは皆の門をくぐったのだった。

サナデイス大砦は荒野に建つ砦で、内部や近隣では食糧を賄えなため、補給は最重要事項の一つである。ただ、周囲に何本もの川が流れ、何より「水呼び」という魔法が存在する以上、水に関して

はその限りではない。限度はあれど比較的自由に大量の水を使うことが出来るのだ。フェリシアもその恩恵を受けて、客室の浴槽で体を清めていた。濁流に流され泥だらけだった体を綺麗に洗うと、打撲や打ち身にシャロン特製湿布を張って手当する。そして、メリッサの用意してくれた遅い昼食を食べ始めた。

「コナリー大砦では食堂で食べてたのに、今回はいいのかなあ？」
冷めた料理を口に運びながらフェリシアが呟くと、給仕をしていたメリッサが頷いた。

「今日のお昼にはもう遅いですから。お夕飯は、食堂でお召し上がりになるかと思えますよ」

「と、いうことは軍の偉い人たちと一緒に……」

フェリシアはげんなりとした気分で呟いた。自分がボニファーツ進軍の歯止めになれると大見得を切っておきながら、戦地にいく前に川へ転落して流された拳句、助けに入った王の護衛共々、一日行方知らずという大失態をしかしたのだ。無理からぬ話ではある。

「アーデン將軍とか滅茶苦茶怒ってそうよね。なまじヴェロニカさんみたいな敵意垂れ流しじゃなくて、理路整然と人の弱みを突いてくるから性質が悪いわ……」

「だ、大丈夫ですよ、お嬢様。將軍閣下は確かにお厳しいですが、公平な方だとも聞いています。お嬢様の有能さを持つてすれば、昨日の事なんてすぐに忘れてくださいますよ」

「う、うーん」

「それに、いざとなればきっと陛下が庇ってくださいます！あんなにも深くお嬢様のことを想って下さっているのですから」

「オズワルド陛下が？」

フェリシアが怪訝そうな顔を見ると、メリッサは御伽話の恋物語に憧れるような顔で力強く頷いた。

「はい！実は陛下が本気でお嬢様を王妃様に望んでおられると、陛下の側近の方が仰っていたんです。内々に、お嬢さまのお耳に入れるように、って。きっと正式な婚約の申し込みもすぐですよ！」

「そう……」

浮かない顔で俯くフェリシアに、メリッサは首をかしげた。

「お嬢様……？何だかあまり気乗りされないようですが、まさか他に想う方がいらっしゃるのですか？それなら話は別です、メリッサはお嬢様の味方ですよ！」

「あ、ありがとう。でも、好きな人なんて別に」

言いかけて、フェリシアの脳裏に黒髪の青年の顔が一瞬浮かんで消えた。水の中から引き上げて、今朝も抱えて運んでくれた大きな手を思い出し、ぶんぶん頭を振る。

（な、なんでキアランの顔が出てくるのよ！ちよつと態度が軟化したとはいえ……あ、そうか、今まで最低な態度だった人が普通に接してくれるようになったから、すごくいい人みたいに感じただけだよ、うん）

なんだかんだと心の中で言い訳を重ねて平静さを取り戻したフェリシアは、改めて言い直した。

「別に、好きな人なんていないわ」

「そうですか。では陛下とお嬢様の愛にはやはり何の障害もありませんね！」

「いや、陛下のことだって、人としては尊敬してるけど男の人として好きでは……」

フェリシアは言いかけて、口をつぐんだ。十中八九戯れにしろ、オズワルドが何故自分を王妃に、などという冗談を言うのかわからないが、この調子で話が広がっては厄介である。近いうちに妙な話を広めないよう頼んでおこうと心に誓った。

26・荒野の砦（後書き）

前回に続き短めでお送りします。

フェリシアの中でキアランは、映画版ジャ。アンみたいな位置づけになってきているようです。普段横暴な奴が真人間になると実際よりよく見える不思議。

あの態度が実は好意からだったらかなり切ないですが、まあ王弟殿下の自業自得です。

27・酒宴

恐れていた通り、その日の夕食の席はフェリシアにとって針の筵だった。救世主という肩書きと、それに恥じない今までの実績から、直接嫌味をぶつけられることはなかったが、食堂中の兵士達がチラチラと非難がましい視線を送ってくるのが痛い。せめてコナリー大砦の時のように下級兵に混じって末席で食事を取りたかったのだが、今はそれを良しとしない人物がいた。オズワルドだ。

「どうだい、フェリシア？この食事は、君の口に合うかな？」

自分の横にフェリシアを座らせたオズワルドは、満面の笑みでそう聞いてくる。フェリシアの前に広がるのはオズワルドとまったく同じメニューで、辺境の砦ながら贅を尽くした食事の数々が並んでいた。しかしこの状況では、何を食べても味などわからない。

「と、とても美味しいです、陛下」

ぎこちない笑顔で答えると、オズワルドは満足げに頷いた。

「それはよかった。私のおススメは平目のソテーなのだけど、君はどれが好きかな」

「ええつと……どれも素敵なお料理ですから、一つ選ぶのは難しいですね」

無難な答えを返しながらも、フェリシアは居心地の悪さに視線だけさまよわせた。ダリルもアーデン家の上の兄妹もいない今、頼れる知り合いといえばデイルンぐらいのものだが、彼は早々に食事を終えてしまったのか食堂にはいなかった。キアランは近くの席で黙々と食事を続けているが、多少打ち解けたからといって彼を呼びつけるのも気が引ける。後ろで給仕をしているメリッサを、まさか国王と同じ席に着かせるわけにも行かない。

（陛下って、こんな空気の読めない人だっけ……？）

唯一救いなのは、斜向かいに座るハロルド・アーデン将軍がさほどフェリシアに興味を抱いていない点だろうか。戦う前から失態を犯

した救世主が国王に侍っている図など、四六時中睨みつけられてもおかしくないとフェリシアは思っていたのに、ハロルドと視線が合っことはなかった。そんな事をつらつらと考えていると、オズワルドの端正な顔がぐいつと覗き込んできた。

「大丈夫かい？あまり食が進んでいないようだけど」

傍から見れば親密な王と救世主の様子に、周囲の空気が一層刺々しくなった。特に、娘を王の妃にしたがっている貴族階級の将校達からの視線は突き刺さるようだった。フェリシアは「陛下のせいで居心地が悪いです」とも言えず、あいまいに微笑んだ。

「心配をおかけして、申し訳ありません。戦いを前に、少し緊張しているみたいです」

すると、さりげなくオズワルドの手がフェリシアの背中に回された。びくりと震える肩を宥めるように撫で抱き寄せて、オズワルドは囁く。

「心配しないで、大丈夫だ。この戦いは、上手くいけば一滴の血も流さずに終わる。駄目だったとしても、決して君を傷つけさせはしないよ。君は、私の大事なお姫様だからね」

甘い言葉に優しい愛撫。幾度となく贈られてきたそれに、フェリシアは困惑して眉根を寄せた。

「へ、陛下……？」

「そうそう、例の話は聞いてくれたかな？色よい返事を待っているよ」

耳と唇がくつつきそうな至近距離で囁かれ、思考停止しかけていたフェリシアだが、その言葉にはっと我に帰った。

「例の話って、あの、私を王妃様につて、冗談ですよ……」

周囲に聞こえないようなるべく声を落とすと、落胆したような溜息が振ってきた。ぎよっとして見上げれば、オズワルドが責めるような目でフェリシアを睨みつけている。

「何度も言わせないでくれるかい？私は、本気だよ」

初めてフェリシアに向けられる、苛立ち紛れの声にぞくりと背中が

粟立つた。もつとも、怒りを露にされたのは一瞬の出来事で、フェリシアが瞬きをする間に、あれは幻だったのかと思うほど完璧な笑みをオズワルドは浮かべていた。

「そ、そんな……私が、王妃様なんて、畏れ多いことですから……」

「おや。君ほどの大貴族の令嬢が身分違いなどと言いついたら、私は国の女性の誰とも結婚できないよ？」

「でも、私、救世主のお役目をこなすだけで精一杯で、とても結婚なんて」

「だから、正式な式はいつだっていいんだ。君が望むなら一年後でも五年後でも、十年後だっていい。だから、婚約だけでも、ね？」
ぐいぐい押してくるオズワルドに、フェリシアは戸惑いを通り越してドン引きしていた。

（新聞の押し売りよりもしつこいんですけど……なんで陛下、私なんかとそんなに結婚したいかなあ）

その理由はすぐにいくつか思いついた。フェリシアに流れる大貴族の血統も、救世主と呼ぶに不足ない魔力も、当代の王が妃に望むには十分な素質だろう。しかしその中に、フェリシア自身が含まれているか聞かれると、どうにも違うような気がした。

（容姿はせいぜい中の上、中身は胡散臭い異世界からやってきた丸っきりの庶民。陛下が私に恋しちゃったってわけでは無さそうなのが、気乗りしない一番の理由なんだけど）

勿論フェリシアとて、王国貴族の世界では恋愛結婚より政略結婚の方が圧倒的多数派で、国王ともなると自由な恋愛など許されないのはわかっていた。しかしだからこそ、尊敬するオズワルドには政治的思惑だけで人を口説いて欲しくないのだ。つまりところフェリシアの我がままなのだが、オズワルドの口上に付き合うのもそろそろ疲れて来た。

「申し訳ありません、オズワルド陛下」

フェリシアの髪に絡んできた指をさりげなく避けて、彼女はなるべく無礼に当たらぬよう丁寧な謝罪と礼と共に立ち上がった。

「用意してくださったお料理があまりにも素晴らしすぎて、今日はこれ以上頂くのももつたいないと存じます。失礼させていただいてもよろしいですか？」

脱走する気満々のフェリシアに、オズワルドはうつすらと笑みを浮かべた。彼が本気になればフェリシアに立ち去る隙などないのだが、オズワルドは見逃すことにしたようだった。

「すまなかった、フェリシア嬢。女性やはり小食だね。もう下がるといい」

「恐れ入ります」

フェリシアは再度深々とお辞儀をして、居たたまれない食事の席から逃げ出したのだった。

フェリシアは背後にバスケットを下げたメリッサをつれて、よろと自室へ向かっていた。メリッサの運ぶバスケットの中身は、フェリシアが残した夕飯だ。食事の席から逃げたとはいえ、食べ物を捨てるなどという選択肢は端から存在しない。メリッサに頼んで持ってきてもらった夕飯の残りは、氷結の魔法できちんと冷凍保存されていた。明日の朝、暖め直して食べる予定だ。本来なら無作法とされることだが、国王から直接賜った食事を粗末に出来ない、と理由付けすれば体裁はついた。

「お嬢様、何だかお元気がありませんが、大丈夫ですか？」

気遣わしげなメリッサに、フェリシアは力ない笑顔を返した。

「う、うん、ちょっと精神的に疲れて……」

「そいつはいけねえな、フェリシア嬢。ちゃんとメシ食ってるか？」

そう横合いから声をかけたのは、メリッサではなくデイルンだった。

「デイルンさん、こんばんは。どうしたんですか、そのお酒」

デイルンは太い腕に抱えられるだけの酒瓶を抱えていた。フェリシアが尋ねると、デイルンは悪びれることもなく答える。

「厨房からかつぱってきた。これからうちの部下たちと飲み会だ」
「いつ戦闘が始まってもおかしくないっていうときに、いいんです

か？」

「何言つてんだ、明日戦死するかもしれない身だからこそ、今日呑んでおくじゃねえか」

そう言つて豪快に笑うディランに、フェリシアはうつかり納得しかけ、慌てて頭を振った。

「いやいやいや、おかしいでしょう、酔っ払ったまま戦う気ですか！？」

「おう、俺の酔剣は戦闘熊だつて一撃だぜ」

「そんな馬鹿な」

と、思いつつも、昨日の曲者との戦いぶりを見ているフェリシアとしてはあながち冗談ではない気もしてきた。真剣に悩むフェリシアを見下ろし、ディランは苦笑を浮かべる。

「なあ、フェリシアお嬢さん。そんなに暗い顔しているぐらいなら俺たちと一緒に飲まねえか？酒はいいぞ、陽気になって明日への活力が生まれる」

これ以上ディランが陽気になっても仕方ないのではないかという気はしたが、思いがけない誘いにフェリシアはぐらついた。

「何もとつて食おうつてわけじゃねえ、女騎士だっているからよ。楽しいぞ？」

確かにサークル仲間との飲み会は、酒が入らなくても十分楽しかった。現代日本家庭としては厳格な部類に入る斉藤家の規則を守って二十歳までは酒を飲まず、二十歳になってからは酒どころではなかった優花は、実は料理酒以外のアルコールを摂取したことがない。一度お酒を飲んでみたい、という気持ちも確かにあった。

「ええと、正直興味はありますけど。どうしよう、メリッサ？ついてくる？」

メリッサを振り返つて尋ねると、彼女は小さく首を横に振った。

「いいえ、私はお酒、弱いので。先にお部屋に戻っていますので、もしお嬢さまがお望みなら楽しんできてください」

「そっか。じゃあ、あとは任せていい？」

「勿論です。ヘイグ団長様、お嬢様をよろしくお願いします」

メリッサがディランに向かって丁寧にお辞儀すると、ディランは鷹揚に頷いた。

「ああ。日付が変わる前にはウチの部下に送らせよう」

「え、何もそこまでしていただかなくても」

恐縮するフェリシアに、ディランはにやりと人の悪い笑みを浮かべた。

「甘いなお嬢さん、俺が酒を飲ませた奴が素面でいられると思うなよ？」

「え？ええっ！？」

混乱するフェリシアを、ディランは酒瓶を抱えた手で器用に引っ張っていく。メリッサはお嬢さまを引き止めなかったことを若干後悔しながら、その後姿を見送ったのだった。

フェリシアが連行されたのは十人ほどが机を囲める小会議室だった。ただし、その部屋に漂う空気は厳肅さとは程遠い世界である。

そこでは既に数人の騎士たちが出来上がっており、空の酒瓶がきちんと整列していた。ディランはそこへずかずか踏み込むと、戦利品である酒を掲げた。

「おおい、てめえら帰ったぞ！」

「お帰り、団長！！」

「いやっほい！！酒だ酒だ！！！」

「よし、これで飲み比べの続きが出来るな！」

「あんたたち一体どれだけ飲む気！？」

「私の分も残しておいてよね！」

台詞だけ聞いているとこの盗賊団アジトかという騒々しさだが、不思議と下品さは感じない。真っ赤になって陽気に騒ぐ騎士たちの目には、きちんと理性が残っているからだ。フェリシアは気づいた。「それから今日の酒宴は話題の救世主フェリシア嬢が飛び入り参加だ！大事な客だ、くれぐれも酔い潰したりするなよ？」

デイランに軽く背中を押されたフェリシアが進み出ると、騎士たちは歓声を上げた。

「おおーっ、女の子だー!!!」

「私らだって女だけど?」

「お前らが女の子の範疇に入るかよ」

「あら、どういう意味?」

「お前らは女の『子』なんかじゃもったいねえ、頗るいい女ってことさ」

「まったく、調子いいんだから」

気の強そうな女騎士と話している軽薄そうな青年は、以前町で捕物をした際キアランと軽口を叩いていた騎士だ。他にもどこかで見かけた顔がちらほらある。

「フェリシア・チェンバレンです。よろしく願います」

思い切ってぺこりと頭を下げれば、騎士たちは陽気に迎えてくれた。一通り名乗り終わった後、机の中央に陣取っていた二人の女性騎士が間に入れてくれる。

「突然お邪魔してしまつてすみません」

「いいのよー。噂の救世主様と一緒に飲めるなんて光栄だわ」

ほんのり酒で頬を染めた女騎士は、あでやかに笑った。

「こちらこそ、むさい男達ばかりのところでごめんなさいね。フェリシアさんとお呼びしても?」

「はい、もちろん」

反対側に座る穏やかそうな女性騎士に頷くと、彼女は可憐な笑顔を浮かべてフェリシアの前にずらりと酒瓶を並べた。

「フェリシアさんは、どのお酒がお好み?」

「え、ええっと……私、お酒は初めてなので、まずは甘口の弱いお酒から試してみようかと……」

「そう! 弱いの中から順番に己の限界に挑戦するのね! 待ってて、今並べ替えるから、端から順に飲んでいくといいわ!」

「あ、あの」

「ギブアップしても大丈夫よ、残りは私たちが全部飲むから！」
良い笑顔で言い切られ、フェリシアは沈黙した。

（酒飲みが飲ませたがるって本当だったんだ……）

とはいえ、別に飲酒を強要されているわけでもない。渡された果実酒は冷却の魔法で程よく冷えており、飲みやすく美味だった。

「美味しいです」

「でしょう？」

正直な感想を言うと、女騎士は嬉しそうに笑う。こちらもつられて笑顔になると、周囲の男性騎士たちが羨ましげな目で三人を見てきた。

「おいお前ら、女だからってフェリシアちゃんを独占するとはどういうことだー」

「そうだそうだ、俺たちにも救世主様とお話させろー」

「こつちにはつまみもあるぜ、フェリシアお嬢さん」

中年に差し掛かった遅い体躯の騎士が、つまみの乗った皿を差し出してくる。フェリシアは礼を言って、塩の効いたチーズにハム、骨までカリカリに揚げた小魚など、少しずつ分けてもらった。夕食が少なかったせい、酒もつまみもどんどん進む。幸いフェリシアは酒に弱いということもないらしく、ほんのりいい気分でだんだんと騎士団にも打ち解けてきた。

「そついえば、こちらには騎士の方全員が集まっているわけじゃないんですよね」

その最中、不意に気になったことを聞いてみると、軽薄な青年騎士が頷いた。

「ああ、籤に負けた奴らは皆待機部屋だよ。流石に近衛騎士全員が酔ってちゃ格好がつかねえしさ」

「じゃあ、副団長さんも待機中なんですね。お会いしたことないし、一度ご挨拶しておきたかったんですけど」
すると、部屋の中がしんと静まり返った。

（あれ？私、何かまずい事言った？）

しかし部屋の空気はフェリシアを責めているというよりは、答えに窮しているような雰囲気だ。フェリシアがおろおろしていると、デイルンが話を切り出した。

「別にお嬢さんがへマしたわけじゃねえさ。ごめんな、妙な空気にしちゃって。近衛騎士団の副団長は、現在空席なんだよ」

空席というからには副団長という役職が存在しないわけではなく、適任者がいないということなのだろうか。フェリシアが考えていると、団長が答えたことで話してもいいと判断した団員達が教えてくれた。

「まあ、実質キアランが副団長みたいなものだけだな」

「王弟殿下が？」

「そうそう、俺たちの中で団長と互角にやりあえるのは、あいつだけだし」

フェリシアが目を瞬くと、騎士たちは次々に頷いた。

「団長じゃあ気の回らない事務仕事も率先してやってくれるし」

「助かるわよね」

「本人の前では絶対言わないけどな」

「うんうん」

頷きあつ団員たちに、フェリシアはますます首をかしげた。能力があつて、仲間達の信頼も得ているようなのに、キアランは何故平の騎士を続けているのだろう、と不思議に思っていると、これもデイルンが答えてくれる。

「俺としては、団長の座をキアランに譲って隠居してもいいと思っているぐらいなんだが。あいつは頑として偉くなりたがらねえからなあ」

その根本的な理由はキアランが王位継承権を放棄したものと同じだと、なんとなくフェリシアにもわかった。敬愛する兄の陰に隠れるために、なるべく下っ端でいたのだろう。

（本当に陛下が大事なら、さっさと偉くなって助けてあげた方がいいと思うけど）

それはこの場にいる騎士達全員の思いでもあるらしく、出来の悪い兄弟を思つように、みんな仕方無さそうな苦笑を浮かべている。すると真面目な空気を打ち払うように、ディランが膝を打った。

「まあ、マジな話よりは馬鹿騒ぎしようじゃねえか。おい誰か、酒の追加持って来い！」

その言葉を皮切りに、酒宴はまた元の騒がしさを取り戻した。ディランが話す面白おかしい話に団員達の一発芸、女騎士たちが歌う流行歌を肴に、部屋には空の酒瓶が増えていく。初めはどこか遠慮のあったフェリシアも、酒が入るにつれて皆に混じって陽気に笑い、歌を披露し、ついには騎士たちと飲み比べをすることになった。

「いやあ、酒も強えな救世主殿！吐き気とか頭痛とかしないのかい？」

「んー、何だか幸せな気分がするだけで、大丈夫ですよー」

ニコニコと上機嫌で高アルコールの酒を飲み干すフェリシアを、団員たちは畏怖と尊敬と対抗心の目で見つめた。やがて一人、また一人と酔いつぶれ、いつの間にか全ての騎士たちが撃沈した頃だ。コンコン、というノックの音と共に会議室の扉が開いた。

「団長、お楽しみのところ申し訳ありませんが、報告……って」

入ってきたのはキアランだった。この部屋で酒盛りが行われていることは知っていたらしく、部屋に入った瞬間は平然とした顔をしていたが、フェリシアと目が合うと驚きも露に目を見開く。

「フェリシア、何でお前がここに！？」

「んー、なんか、団長さんについてきちゃった！」

フェリシアが非常にいい気持ちでにつこり笑って答えると、キアランは一瞬固まり、次にぎこちない動きでディランを振り返った。

「団長、コイツに何杯飲ませたんですか……？」

「俺が付きつ切りでいたわけじゃねえんだ、本人に聞いてみればいいだろう」

すると、フェリシアは直接聞かれてもいないのに杯を掲げ、胸を張って答えた。

「お酒、たくさんのだのー」

精神年齢が逆行しているとしか思えない言動のフェリシアにキアランは顔を引きつらせ、彼女の周りに無造作に転がる酒瓶と、酔い潰れて撃沈している団員達を見回した。

「まさかこれ、全部お前が潰したのか……？」

すると、部屋の隅で死体のように転がっていた団員達の中から、辛うじて意識のあった一人が立ち上がった。

「いいや……まだだ、まだ俺は戦れる……勝負だ、救世主……！」

近衛騎士団の中ではディランの次に酒に強い中年騎士である。彼が酔い潰れているところなどキアランは見た事がなかったが、このまま勝負を続ければ勝敗は明らかだった。

「馬鹿者、限度を考えないか！」

思わずキアランがその騎士の頭を殴り倒すと、彼はがくりと倒れて動かなくなった。

「それで、キアラン。報告とやらを聞こうか」

しかしディランは何事もなかったように促してくる。意識を失った騎士たちの中で、フェリシアは幸せそうな笑顔を浮かべて酒を煽っていた。キアランは深い溜息と共に色々なことをあきらめ、上司に報告を開始した。

「昨日俺たちを襲った暗殺者が死にました。拷問官が目を放した隙に自害したと」

一応フェリシアには聞こえないように声を落とすと、ディランは眉間に皺を刻んで舌打ちした。

「まったく、死なせるなど言っただろうに。わかった、一度状況を聞いてくる」

「アーデン將軍も先に拷問部屋へ行っています。目をつけられないようお気をつけて」

「けっ、誰に物言ってやがる。こいつらじゃねえんだ、勤務時間外に酒を嗜んだ程度で潰される俺様じゃねえ」

ディアランは素面のようにしなやかに立ち上がり、会議室を出たと

ところでちよつと考え、後からついてくるキアランを振り返った。

「ああ、そうだ。お前、フェリシア嬢を部屋まで送ってやれ」

「俺がですか!？」

「お前が最後の一人を申しちまったんだ、しょうがねえだろう」

指摘されて返答に詰まるキアランを置いて、ディランはさつさと廊下を歩いていつてしまった。キアランは仕方なく会議室に戻り、ご機嫌で酒を飲むフェリシアに近づく。

「あー、キアランだ。飲むー？」

その姿を認識すると、フェリシアは満面の笑みで並々と酒の注がれた杯を差し出してきた。

「いや、俺はいい」

可憐な笑顔に思わず高鳴る胸を押さえて頭を振ると、フェリシアの目が釣り上がった。

「なんだとー、きゅーせいしゅさまのお酒がのめないのかー!」

「城ならともかく、戦地で酒が飲めるか。ほら、くだを巻いてないで部屋に帰るぞ」

「やだー、もつと飲むのー」

酒瓶に抱きついて駄々を捏ねるフェリシアは、まるで聞き分けのない子供だった。それでも引き剥がそうとすると、フェリシアはきつとこちらを睨み上げる。

「おーてーでんかとあろうものが、人のものをとるとは何ごとですか!そこにすわりなさい!いいですか、そもそもおさけというのはげんせんされたそざいにしょくにんさんのたましいがこめられうんたらかんたら」

基本笑い上戸のようだが、相手の反応が気に入らないと説教モードに切り替わるらしい。面倒な、と呟いたキアランは、ついに降参と両手を挙げた。

「わかったわかった、あと一杯だけなら付き合うから、それ飲んだら部屋に帰るんだぞ。約束できるか？」

「うん」

孤児院の子供たち相手の感覚で言い聞かせると、フェリシアは素直にこっくりと頷いた。そして、酒の入った杯をぐいぐいキアランに押し付けてくる。

「まったく、これが昨夜、あんなに真剣な顔で話していた娘か……」
呆れ半分で杯に口をつけ、キアランは思わずむせ返った。

「な、何だこのきつい酒。火酒か!？」

「おいしーよ?」

どちらかといえば酒に弱いキアランにとって一口飲むだけでも苦痛に感じる酒を、フェリシアは実に美味そうに飲み続けている。キアランはそれでも半分ほどを何とか飲み、体面は保ったとばかりに中身をこっそり捨てた。にもかかわらず、体が火照って頭がくらくらする。やや覚束ない足元で立ち上がり、丁度一杯飲み終わったフェリシアに手を差し出した。

「ほら、もういいだろう。部屋に戻るぞ」

「んー」

酔っついていても約束は守るつもりらしく、フェリシアは素直に手を重ねてきた。そして椅子から立ち上がり、そのままくらりと後ろに倒れる。

「おい、フェリシア!？」

なんとか抱きとめたものの、キアランとて酒の入っている身だ。足をもつれさせて無様に転び、二人は床の上に転がった。絨毯のおかげで二人とも怪我はないが、泥酔しているフェリシアとふらついているキアランでは、起き上がるのも一苦労だ。

「???」

何が起こったのかわかっていないのか、フェリシアはほんのり赤らんだ顔と潤んだ瞳で、自分に覆いかぶさるような体勢のキアランをきよとんと見上げている。

「っ……こんなところ、兄上に見られたら……」

思わずキアランは呟いて青ざめた。そして夕飯の後、オズワルドに呼び出されて言われた言葉を反芻する。

「ねえ、キアラン。お前は反対するだろうけれど、私はやはりフェリシアを王妃にしたいな」

「……彼女は、あまり乗り気ではなかったようですが」

夕食の席で、明らかに困惑していたフェリシアの様子を思い出しながらキアランが答えると、オズワルドはおやと呟いて微笑んだ。

「フェリシアが王妃に相応しくないとはい、もう言わないのだね。けれど、ねえ、わかるだろう？ 私は王だ。婚約もしていない貴族の娘が、王の求婚を断ることが出来るとでも思っているのかい？」

噛んで言い含めるような言葉が、脅しめいて耳に響く。

「私はこの戦いが終わったら、正式に彼女へ婚姻を申し込むよ」

その言葉が、最後通告のように聞こえるのは何故だろう。理由はなんとなくわかつているのに、キアランはただ頷くしかできなかった。

（フェリシアが兄上の求婚を断る術などない。だが、王といえど、既に相手のいる娘に横恋慕は出来ない）

少し手を動かせばすぐ傍に、若い娘特有の柔らかで張りのある体の感触があった。昨日下着姿を見て知った、意外に豊かな胸元や、荒い息遣い、ほんの少しだけ高い互いの体温に、ぐらぐらと理性が揺れるのは、はたして酒のためだけか。

「キアラン……？」

名前を呼ばれ、幼い頃から見てきた顔や、今朝からようやく自分にも向けられるようになってきた笑顔がちらついた。それに背中を押されて、ほとんど無意識にフェリシアを組み敷き太股から腰を撫で上げる。

「ひぁ!？」

衣擦れの音に混じり思いがけず甘い声を上げられて、誘われるように胸元をまさぐり首筋へ唇を近づけた。このまま自分の物にしてしまえば、いくら兄王といえど手は出せない。

「っ!」

その瞬間、キアランは弾かれるように体を起した。

（俺は今、何を考えた！？）

多少酔っつていようと、オズワルドが王妃に望む娘を手籠めにしようなど、キアランが考えるはずなかった。相手がフェリシアでさえなければ、だ。本当はずっと昔からわかっていた。そうでなければ、そもそもフェリシアがオズワルドとだけ話したくらいで、あんなにも憎めるわけがないのだ。

「フェリシア、俺は、お前を」

その先は言えるはずもない。口をつぐんだキアランを不思議そうに見上げるフェリシアの目は、とろんと半分閉じられている。襲われかけたにもかかわらず、フェリシアはそのまま気持ち良さそうな声を上げて、眠りに落ちた。

「……だからお前は警戒心が足りないというんだ」

キアランは疲れた声で呟き、何とか立ち上がるとフェリシアを抱き上げた。

「愛しているだなんて、今更言えるか」

彼女を散々傷つけたことを後悔しながら囁かれた言葉を、聞くものはいなかった。

27・酒宴（後書き）

王弟殿下自覚するの巻。次は戦闘シーンだなんて嘘をつきました、ごめんなさい。そのかわりについてR15相当エロ？入れたので許してください。

本来、酒宴は戦闘が終わった後の予定だったんですが、陛下にかの有名な死亡フラグを言わせたくて先に回しました。いや、別に陛下死にませんが。おそらく。

あと、お酒は勿論二十歳から、二十歳過ぎていても初めて飲む人は少量から始めましょう。決してフェリシアさんの真似をしてはいけません。真似をしてアル中になっても作者は責任とりません。

翌朝は昨日に引き続き快晴だった。先日まで続いた雨が嘘のようにさわやかな空の下、フェリシアは思い切り伸びをした。

「うーん、やっぱり天気の良い日は気持ちいいね。これでここが戦場じゃなければ最高なんだけど」

昨晚高濃度のアルコールを大量に摂取したにもかかわらず、彼女は二日酔いとは無縁のさわやかな笑みを浮かべていた。

「……それはよかったな……」

その隣では、キアランが青い顔をして力なく呟いた。二日酔いと、昨夜の愚行と、自責の念、寝不足、その他諸々の理由により、戦う前から落ち武者のような表情になっている。

「大丈夫、キアラン？ シャロン先生の薬いる？」

無言で手を出してくるキアランの手のひらにシャロンの胃薬を載せてやりながら、フェリシアは申し訳無さそうに息をついた。

「ええと、まったく記憶がないんだけど、私がお酒飲ませた挙句、ぶつ倒れた私を部屋まで運んでくれたとか。ご、ごめんなさい、ありがとうがとね？」

「……いいや、気にするな」

苦い薬を噛み砕いて嚥下しながら、キアランは唸るように答えた。彼としては出来ればこのまま、フェリシアには昨夜のことを忘れたままでもいいのだ。ただでさえ、部屋に運んだときにフェリシアの侍女から「うちのお嬢様に何しやがった」と言わんばかりの鬼の形相で睨まれ、不覚にも足が震えるほどの恐怖を味わったばかりなのだ。本人に知られようものなら生きた心地がしない。本来ならこうして話をしているだけでも気まずいのだが、律儀に謝罪と感謝を告げるフェリシアを無視するなど、それこそんでもないことだ。

（俺の阿呆……）

キアランは深い溜息と共に自分を罵倒した。

「あ、あの、やっぱり何か怒ってる？」

「そんなことはない」

多少脅えながら小首を傾げて覗き込んでくるフェリシアは、どんな美女も霞むほどに可憐だというのに、まともに目も合わせられないとは情けないやら勿体無いやら、ひたすら自己嫌悪で悶々としているキアラン。

「じゃあ、何でもこっち見ようとしてもしないんですか」

少し頬を膨らませて丁寧語口調になる彼女も、それはそれで可愛い。キアランは何を考えても「フェリシア可愛い」にしか行き着かない思考を無理矢理正常に働かせようとし、

「寝違えてこちらにしか首が向かないんだ」

無様に失敗した。

「な、何もそんな見え透いた誤魔化し方しなくても！さっきまで普通に前向いてましたよね！？」

案の定、フェリシアが全力でツツコミを入れる。やがて彼女は溜息と共にそっぽを向いた。

「はあ、もういいです。砦に来たとき何か顔色が悪かったから、ちょっと心配したのに」

最後の方はぼそぼそ話すフェリシアの言葉に、キアランは思わず振り返った。俯き加減で落ち込んでいる様子のフェリシアに、嬉しさや申し訳なさと同時に焦りを覚える。

（見られていたのか）

昨日キアランたちを出迎えたオズワルドと目が合った瞬間、兄に睨まれた気がして、思わず戦慄した一瞬の表情をフェリシアに見られていたらしい。

「だから昨日、俺を元氣付けようと酒を飲まそうとしてきたのか？」

「そうだ！覚えてないけど、きっとそう！」

すると、二人の後ろからさりげなくオズワルドが近づいてきて会話に混じった。

「ふうん……フェリシア、夕飯は早めに切り上げたわりに、騎士団

の酒宴には参加したのだって？」

オズワルドはあくまでも優しい笑顔と口調にもかかわらず、フェリシアとキアランはそろって青ざめながら王の方を向いた。そんな二人を救ったのは、傍で話を聞いていたディランだった。

「国王陛下、フェリシア嬢を酒盛りに誘ったのは俺ですよ。何か問題ございましたかね？」

「……いいや。戦場に慣れない彼女を気遣ってくれて助かったよ、ヘイグ団長」

「寛大なお言葉、ありがとうございます」

ディランは畏まった後、まだ固まっているフェリシアたちにも顔を向けた。

「お前達、楽しくおしゃべりもいいが、ここは敵地の目前だぞ。もう少し気を引き締めていけ」

その言葉に、フェリシアは息を呑みキアランが背筋を伸ばす。四人は近衛騎士団の総員に囲まれ、背後にはハロルド將軍率いる大軍を従えて、サナデイス大河の中州の西側にいた。裂け目だらけの荒野を両断する大河は対岸が見えないほど幅広で、過去何度も戦場になったという中州は小さな島ほどの面積がある。平らな中州の東陣営には、軍隊がそろっているのが遠目に見えた。あの先頭集団の中に、皇帝ゼルギウス・ボニファーツがいるはずだ。

「正直、あの皇帝陛下がこちらの提案を呑んでくれるとは思っていなかったのだけだね」

東に広がる軍勢を眺めながら、呟くようにオズワルドが言った。今日ここで行われるのは戦闘ではなく、話し合いである。オズワルドとゼルギウスによる会談の申し入れが、昨日先方から承諾されたのだ。

「そんなに直情的な人なんですか？ボニファーツの皇帝陛下って」
フェリシアが尋ねると、オズワルドは東の軍勢を見据えたまま頷いた。

「私は直接お会いしたことはないけれど、とにかく何でも武力で解

決したがる御仁らしい。この話に乗ったのも、自分は影武者を立てて、私を暗殺するのが狙いだというのがアーデン將軍の見立てだ。私もその危険は十分あると思う。いざとなったら君の障壁の魔法を頼りにしているよ、救世主殿」

「はい」

昨夜の空気を読まず口説いてくるオズワルドとは違い、今の理知的な彼はフェリシアが役に立ちたいと思った国王の姿そのものだった。フェリシアはぺちぺちと頬を叩いて気合を入れる。

（私の出番はたぶんここだけなんだから、しっかりしなきゃ）

一応銃杖は持ってきたものの、オズワルドならば乱暴な皇帝などすぐに言いくるめられる。そして自分たちも相手の方も血を流さずに帰れるのだと、このときのフェリシアは無邪気に信じていた。

会談の会場は中州の中央に設置された巨大な天幕だ。外は両軍の兵士が囲み、中にはオズワルドとゼルギウスの精鋭近衛が十数名、にらみ合うように左右に分かれてずらりと並ぶ。そして中央に設えられた即席の玉座に、それぞれの元首が向かい合って座っていた。玉座の右後ろに、キアランとデイランに挟まれて立つフェリシアは、目深に被ったフードの奥からちらりと皇帝を盗み見た。

（デイランさんが戦闘熊みたいな人なら、この人は火獅子みたいな人だな……）

火獅子は燃える炎の鬣を持つ猛獣の魔物だ。皇帝ゼルギウスは六十代という年齢もあり、体格はデイランにやや劣るものの、筋骨隆々とした体躯をぎらつく鉄の甲冑に包み、眼光は猛禽類のように鋭い。いかにも歴戦の猛者といった風格の皇帝に対して、オズワルドは準正装の華やかな衣装を纏っていた。見るからに正反対の二人の統治者は一時無言で向かい合っていたが、会談を申し出た側であるオズワルドが口火を切った。

「お初にお目にかかる、私がグランデール国王オズワルドだ。本日

「ゼルギウス・ボニファーツだ。敵の感謝などいらん」

皇帝だと言ふ必要もないと言いたげに刺々しい言葉に、キアランの眉間の皺が濃くなった。フェリシアが内心ハラハラしていると、ゼルギウスはちらりとこちらを見遣った後、立ち上がって威圧的な目でオズワルドを見下ろした。

「グランデールの国王陛下は人形遊びがお好きとの噂は本当のようだ。人形の小娘に身を守らせる腰抜けの王よ、戦わずして降伏するという話なら聞いてやらんこともないが？」

「……！」

あからさまな侮辱に、キアランが息を呑み、剣の柄に手を伸ばした。
「キアラン！」

フェリシアが止める前に、オズワルドの鋭い声が飛ぶ。

「これしきのことです手を出すな。この会談を用意するために動いてくれた者達の努力を無に帰すつもりか？」

「申し訳、ございません」

ゼルギウスは悔しそうに顔をゆがめて謝罪するキアランへ目を向け、せせら笑った。

「お前が王弟だな。腰抜け王陛下は弟のしつけも満足にできんらしい」

「失礼した、ゼルギウス殿。私は貴殿と違って弟が唯一の家族なので、どうしても甘くなってしまう。子宝に恵まれた貴殿が羨ましいことだ」

オズワルドの切り返しは一見無難な言葉だが、そこには痛烈な皮肉が込められていた。ゼルギウスの子供たちは彼が認知しているだけで十人を軽く越えている。しかしその多くが覇権を争って内部でいがみ合っており、決して後継者に恵まれているわけではないのだ。

「フン……」

ゼルギウスは流石に怒りのまま喚き散らすことはしなかったものの、明らかに気分を害した様子で席に着いた。対するオズワルドは余裕の笑みだ。

（これから会談だつていうのに、神経逆撫でしていいのかなあ……）
フェリシアがそんな事を考えながらキアランの方を窺うと、彼は「
兄上格好いい」とい wanna ばかりの表情で顔を輝かせている。会談の
席で弟のために嫌味を言い返すオズワルドといい、キアランといい、
この兄弟は根本的にブラコンであった。

（まあ、私だつて耕ちゃん馬鹿にされたら黙っちゃいけないけどさ）
自身もブラコンの自覚はあるフェリシアは胸のうちに呟いて、再び
視線を前へと戻した。

「残念ながら、私たちは降伏するために会談にお招きしたわけでは
ない」

「ならば、交渉は決裂だ。帰らせてもらおう」

早々に立ち上がるうとするゼルギウスに、オズワルドはあくまでも
ゆつたりと話を続けた。

「そこまで急ぎ戻らなくてもよろしいだろう、ゼルギウス殿。も
っと視野の広い、先の話をしようではないか」

「先の話だと？」

ここで話を蹴ればさも狭量だといわんばかりの言い回しに、ゼルギ
ウスはしぶしぶ聞き返す。

「そう、人の四国いずれかが人同士の戦いに打ち勝ち、国家統一を
成し遂げたところで、その国に北の魔物と戦う力が果たして残って
いるものか。今こそ人は団結し、グランディール初代国王の時代の
ように魔物を滅するとき」

「何を言い出すかと思えば、馬鹿馬鹿しい。四国が手を組むだと？
互いに流された血の歴史を、知らぬわけでもあるまい。今更手を取
り合うことなど出来るものか」

「いいや、不可能ではないと私は考えている。そもそも近年、人の
国同士では死人が出るような規模の戦闘は少ないだろう。禍根の少
ない今なら同盟の実現も」

「禍根は無くなったわけではない。家族を、友を、愛するものを殺
されて、殺し返せとこの血が叫ぶ限り、我らは殺し続ける。それが

ボニファーツの正しい姿だ」

物騒な宣言ではあったが、それは紛れもなく一つの国の総意を伝える統治者の言葉だった。ゼルギウスは鋭い眼光をオズワルドへと向け、冷たく問いかける。

「そもそも、背中に大軍をちらつかせて平和の使者面とは恐れ入る。本当に和平を望むなら、身一つで来るべきではないか、オズワルド殿？」

そして、オズワルドに反論の隙を与えず天幕を出た。こうして一方的に会談が終わりを告げると、ボニファーツ側の騎士たちが小声でざわめき始める。

（なんだか統一感のない人たちだなあ……）

ゼルギウスの態度は嘗てのキアラン並みに鼻についたが、皇帝と呼ぶに相応しい威厳と風格も備えてもいた。それに比べて、皇帝を護衛する騎士たちは精鋭というには疑わしい。会談の間中フェリシアや女性騎士をにやついた顔で眺めていた下品な騎士や、背中に負った剣につぶされてしまいそうな少年まで混じっている。どういふことかという疑問は、皆に戻る道程であきらかになった。

「ああ、彼らはボニファーツの皇子たちだろう」

会談が終わり、天幕が片付けられるのを横目にしながら、ディランが教えてくれた言葉にフェリシアは驚いた。

「皇子様！？」

「こつちだつて王弟のキアランが騎士として参加してたんだ、別に不思議なことじゃねえだろ」

「それは、そうですね……あのいやらしそうな人や、十歳になつてるかどうかって子も、みんな皇子様なんですか？」

「おそらくな」

頷くディラン。

「帝国には、十……あー、何人だったか、殺されたり追放されたり新しく生まれたりでしょっちゅう数が変わるが、とりあえず正統な帝位継承権を持つ皇子皇女は十人以上いる。一応長子が第一帝位継

承者ってことになってはいるけどよ、ボニファーツは軍事主義だからな。主要な戦で功績を挙げれば、第二子以降でも帝位を狙えるってことらしい」

「だから玉石混合だったんですね……」

逞しい武人からなよなよした変態に子供までそろっていた相手方の騎士たちを思い出し、フェリシアは呆れたように呟いたのだった。

一方その頃、ボニファーツの陣営では、ゼルギウスが軍師と話し合い、というより一方的な命令を下していた。

「グランデール軍に奇襲をかけよ」

冷徹な声を響かせる主君に、軍師は一応諫言を試みた。

「陛下、我が軍は既に皆への帰還を始めています。ここで命令変更となると、現場が混乱し味方にも大きな被害が出る可能性がございます」

「だからなんだというのだ。その程度で死ぬ弱小兵などいらぬ、寧ろ進んで殺してしまえ」

過激な皇帝に軍師はもはや口を挟む余地もない。

「それに最近、息子たちの中で余の命を狙う者も出てきたようだ。ついでにそれらも始末せよ。上手くすればグランデールの王と救世主、国内の反逆者を纏めて掃除できる」

「……御意に」

愉快そうに笑いながら、部下を、息子を殺せと命じる皇帝に、軍師は深々と頭を下げた。

そして、場所は再びグランデールの陣営に戻る。天幕を片付け終わったところに、撤退したと思われていたボニファーツ軍から矢を射掛けられ、兵士達の悲鳴が響いた。

「て、敵襲……!」

「相手は全軍……!ボニファーツの全軍がこちらに向かってくるぞ……!」

グランディール側とてまったくの無防備ではなく、奇襲の警戒もしていたが、それは少数部隊相手の想定だった。

「落ち着け！動揺しては敵の思う壺だとわからんか！！」

想定外の敵影に浮き足立つ兵士達をいち早く諫めたのは、ハロルドだった。

「全軍、迎撃の構え！！国王陛下と近衛騎士団の逃走経路を確保せよ！！！！第一部隊正面、盾を持て！！第二部隊、左翼より敵の刺客に入り、槍を見舞うのだ！！」

的確な將軍の指示に、恐慌状態に陥りかけていた兵士達もすぐさま立ち直り、指示通りに動き出した。しかしボニファーツ軍はもはや、その姿がすっかり視認できる位置まで接近している。雨のように降り注ぐ矢の中、一人、また一人と兵士が倒れ始めた。

「国王陛下、フェリシア嬢、こちらへ！」

混乱の中、フェリシアは防壁を展開しながらディランの誘導に従い走っていた。真後ろに迫った怒号に振り返ると、目の前で兵士が矢で貫かれて倒れる。

「ひっ……！！」

「止まるな！」

息を呑み、思わず立ち止まりかけるフェリシアの肩を、人ごみの中から現れたキアランが抱きかかえるようにして引っ張る。

「キアラン、人が……！助けなきゃ」

「こんな数、例えお前でも何ができる！今は自分の身と兄上を守ることだけ考える！」

正論に唇を噛み締めたフェリシアは、キアランに腕を引かれてオズワルドたちのあとを追った。時折飛んできた矢を魔法で叩き落しながら、後ろで聞こえる悲鳴には耳を塞ぐ。四人はとにかく川岸へ渡る船着場まで逃げ延びて、戦場を振り返った。

「ちっ、通りで方向転換が早いと思ったら、味方を巻き込んでもお構いなしだよ」

ディランが後ろを窺い、忌々しそうに舌打ちする。フェリシアは使

うと思っていなかった銃杖を強く握り締めた。

「心苦しいが、戦場は將軍に任せて私たちは皆へ戻ろう。残りの兵力ですぐに助けに向かわなくては」

オズワルドが静かな怒りを燃やしながら、ディランの手を借りて小船に乗り込んだときだった。

「させるか!!」

刺客の木立から、剣を構えた少年が飛び出してきた。狙うのはオズワルドだ。

「だ、駄目え!!!」

障壁を展開したのでは間に合わない。とつさに判断したフェリシアは、銃杖の引き金を立て続けに引いていた。閃光弾が飛び交い、少年騎士の手足を正確に打ち抜く。

「ぎゃああああっ!!」

悲鳴を上げて倒れこんだ少年は、十代の半ばほど。会談の場にいた騎士の一人だった。

（まさか、この子も皇子様……？）

フェリシアが倒した相手を呆然と見下ろしていると、同じ木立から更に小さな影が飛び出してきた。

「兄上え！」

まだ幼い少年の声が、泣きそうになりながらそう呼んだかと思うと、血を流して倒れる騎士の横に膝をつく。会談の場で背負った剣につぶされそうになっていた、一番小さな騎士だった。今はその剣も背負ってはおらず、兄と呼んだ少年の傍らでぼろぼろと涙を流している。

「兄上、兄上、死んじやいやだ……!!」

「クルト……出てくるなって言っただろ、逃げろ！」

クルトと呼ばれた少年は、兄の言葉にふるふると首を振ると、ガタガタと震えながら兄の前に立ちはだかり、彼を庇うように腕を広げてフェリシアを見上げた。

「おねがい……あにうえをころさないで……」

もとより、命までは奪うつもりはなかったフェリシアだ。おまけに、どこか死んだ弟を髣髴させる可憐な少年に、上目遣いでお願いなどされたらこちらが謝りたくなってくる。キアランを窺うと、彼もこの兄弟を見逃すつもりらしく、好きにしろと頷いた。

「二人とも殺すつもりなんかないよ。ええと、やった私がいうのもなんだけど、お兄さんの怪我、早く手当てしてあげてね」

その言葉に兄の方はフェリシアを睨み、弟の方はきよとした後満面の笑みを浮かべて頷いた。

（何この子、反応がすごく耕ちゃんに似てる！可愛い！！）

できるものならクルトをぎゅうぎゅう抱きしめたい衝動に駆られたフェリシアだったが、流石に敵国の皇子と思しき彼にそれをするのはまずいだろう。そう考えた矢先に、新手が現れた。

「どけガキども、手柄は俺のものだぁ！！！」

今度こそ真正正銘の殺意を漲らせたボニファーツの兵士だった。

「！」

兄弟に氣をとられていたフェリシアは、気づけば目前に迫っていた剣の切っ先に、声もなく目を見開く。それでも、手にしていた銃杖の引き金を引いて相手の心臓を打ち抜けば助かる、という判断はできた。出来たものの、人を殺す覚悟だけが追いつかずに立ち尽くす。

「フェリシア！」

すると横合いから名前を呼ばれ、杖をひったくられて銃口から魔法弾が飛び出した。

「グアアアアアアアアアッ！！！」

胸から大量の血を浴びて崩れ落ちる兵士。その返り血を浴びながら、フェリシアは横を見た。フェリシアの銃杖を構えたキアランが、次の瞬間崩れ落ち、地面の上に倒れる。「並みの魔術師なら一発撃つだけで命を落としかねない」とエドモンドが言っていた言葉が蘇り、体が震える。

「キアラン！！！」

呼ぶ声は、オズワルドのものか、ディランのものか、それとも自分

の叫びだったのか。わからないまま、フェリシアは震える手で銃杖ごとキアランを抱き起こす。

「フェリシア嬢、時間がねえんだ、手荒で悪いが逃げるぞ！」

四人のところまで、ボニファーツ軍が迫っていた。船から下りて駆けつけてきたディランが、二人を纏めて船に放り込み、小船を漕ぎ出す。こうして、和平の会談は戦闘の幕開けという最悪の結末を迎えたのだった。

28・開戦（後書き）

再びシリアス展開になってまいりました。死亡フラグ的な台詞吐いてたオズワルドが無事でキアランが死に掛けるという急展開。この人も酒飲まされたり素直にデレたと思ったら死に掛けたり、愛しのフェリシアとラブラブ生活はいつになることやら、不憫ですね。自業自得ですが。

しかし予想外に長いサナデイス攻防編。ようやく、26話になるはずだった戦闘に入ることが出来ました。

29・戦況

サナデイス砦は騒然としていた。和平の会談に出かけた国王と救世主が、数名の護衛騎士だけを共に帰還したのだ、無理からぬ話ではある。ボニファーツ軍奇襲の知らせは波紋のように兵士達の間を広がり、自然とオズワルドのいる大広場に人が集まってきた。

「和平の会場で卑怯にも奇襲を仕掛けてきたボニファーツ軍に、正義の鉄槌を！」

高らかに、意外にも勇ましい声で、オズワルドが兵士たちを鼓舞する。

「武器を取れ！今も戦場で戦う同胞たちを救うのだ！」

自らも軽鎧を纏って細身の剣を天に翳す、若く美しい王の姿に、兵士達が賛同の声を上げ、熱気と興奮が辺りを包む。フェリシアは小部屋の窓からその様子を遠目に眺め、嘆息した。

（本当なら話し合いで終わるはずの戦だったのに。陛下、悔しいだろうな）

そして、何も出来ないどころか足を引っ張っただけの自分がひたすら情けない。しかし何より彼女の心を占めているのは、目の前で力なく横たわる人物だった。

「ごめんなさい……」

憔悴しきった表情で、十数回目となる謝罪の言葉を繰り返す。フェリシアの視線の先には、ベッドの中で真っ青な顔をしたキアランが滾々と眠り続けていた。

魔力の少ない一般人が水呼びなどを使う際、一時的に魔力が尽きることで魔法が止まるように、魔力がなくなること自体が死に直結するわけではない。しかし、本人の許容量を超える大量の魔力が失われるとなれば、話は別である。銃杖を使い、限界以上の力を失ったキアランは死んだように眠ったままだった。フェリシアはその力を補うために、人形だった頃のように周囲に魔力を放出し、キアラ

ンに魔力を分け与えることで彼の命を繋ぎ止めていた。とはいえ、迂闊に他人の魔力を流し込んではおかえって危険である。スポンジに少しずつ水を含ませるように、周囲に循環させた魔力をキアランの体へ浸透させていく。恐ろしく神経をすり減らす作業だった。

「……はあ」

体を動かしているわけでもないのに額にかいた汗を腕で拭い、フェリシアは再び魔力の調整に入る。今、小部屋にいるのは彼女とキアランだけだ。キアランは外傷を負ったわけではないから、通常の医術士に出来ることはない。それに常人はフェリシアが放出する魔力に当てられて体調を崩す恐れもあった。そんな理由から、皆の中心から外れた小部屋に押し込められていた二人だったが、訪れる者はあった。

「失礼いたします」

主の集中を乱さないよう、小声で入ってきたメリッサだった。フェリシアの放つ濃密な魔力に影響を受けることのないメリッサは、軽食を持ったまましばらくオロオロとしていたが、大切な主のやつれた姿に意を決して話し掛けた。

「お嬢様、お食事をお持ちしました。どうか少しでもお休みください」

「……」

「お嬢様！」

「メリッサ……？」

大きな声にフェリシアはようやく傍らに立つ侍女に気づいて、メリッサの方を仰ぎ見た。

「ありがとう。後で食べるから、置いておいてくれる？」

「ですが、お嬢様も少しはお休みにならないと」

ふるふると首を振ってまたキアランの方を向くフェリシアを、メリッサは不満げに見つめた。

「どうして、お嬢様が王弟殿下のためにそこまでする必要があるんですか。あんなにひどいこと、言われたりされたりしてきたのに」

「そうだね。でも、それとこれとは話が別。私のせいで、キアランが倒れる羽目になったの。私が責任をとるのは当たり前」

キアランは二日酔いで本調子ではなかった上に、フェリシアを守るために銃杖を使って倒れた。自分を責め、まるで償いのように魔力を流す作業に没頭する主人に、何を言っても無駄だと悟ったメリッサは、溜息混じりに答えた。

「では、せめてお休みのときだけでもお部屋へお戻りください」

「うん、そうするよ。心配かけてごめんね。ありがとう」

疲れた笑顔を浮かべるフェリシアにとんでもないと首を振って、メリッサは小部屋を後にした。

小部屋から動けないフェリシアとキアランに変わり、オズワルドとディランは砦に残っていた兵士たちを編成し、サナデイス大河の中州へと向かった。オズワルドは戦嫌いではあったが、軍略を疎かにするほど視野の狭い王ではない。的確な采配を振るって戦地のアーデン将軍に加勢し、はじめは劣勢だったグランデール軍は徐々に盛り返しを見せた。グランデールとボニファーツの兵力は互角、中洲での戦いは一進一退の攻防を繰り返し、戦線は徐々に膠着状態が続くようになった。

「あれから、今日で三日目か」

その日もフェリシアはキアランの眠るベッドの傍らで、メリッサの運んできた戦況に目を通していた。オズワルドは初陣の指揮官としては善戦し、ディランやアーデン将軍も獅子奮迅の活躍を見せているというが、相手も肉弾戦に長けた軍事国家だ。形勢逆転に持ち込めるほどの決定打には欠け、長期戦に入る気配が濃厚に漂っていた。つい無力感から気落ちしそうになったフェリシアだが、いけないと気を引き締めて作業に取り掛かる。

この三日間で、いいこともあった。キアランの様子が、目に見えて回復してきているのだ。意識ははっきりしないが、時折目を覚まし

て水や流動食を取っている。顔色も随分よくなっていた。

（お師匠様もシャロン先生もいなくて、こんな治療法で大丈夫かって正直不安だったけど、効果があつてよかった）

その点だけは安心して、しかしフェリシアは再び表情を曇らせる。（でも、こんな失態続きで、また嫌われちゃったかな。せつかく、普通に話してくれるようになったのに）

それを思うと、何故だか少し胸が痛かった。

「う……………」

悪い考えを追い払うように頭を振っていると、キアランが呻いて目を開けた。琥珀色の瞳が薄く開かれ、ぼんやりと辺りを見回している。

「フェリシア……………」

目が合うと、かすれた低い声がフェリシアの名前を呼んだ。どこか不安そうなの姿が、寝込んだときの弟の姿と重なって、フェリシアは無意識にキアランの手をとる。

「キアラン、大丈夫？どこか、痛いところとか苦しいところはない？」

すると、重ねた手を握り返したキアランが、こくりと頷いて上体を起こした。

「あ、まだ寝てなきゃ駄目……………」

「ここは……………サナデイス大砦か？俺は、どうして、中州の会談は……………？兄上は！？」

徐々に意識が鮮明になってきたらしいキアランは、フェリシアに尋ねた。フェリシアはまずキアランに水分と栄養の補給をさせると、彼の質問に一つずつ答えていった。

「オズワルド陛下なら大丈夫。戦場に行ったり、砦に戻ったり、お忙しいみたいだけど、ディランさんがちゃんと守ってる。戦場でも、前線の方には出ていないという話だし」

戦況の簡単な報告書を交えてこの三日間のことを説明すると、キアランは深い安堵の溜息をついた。

「……そうか」

キアランのことだ、目を覚ませばすぐさまオズワルドの護衛に戻る
と言い出しかねないと警戒していたフェリシアは、その反応に肩透
かしを食らった。素直にそう告げると、キアランは苦笑を返す。

「勿論兄上の警護には戻りたいが、今の俺が戻っても役に立たんだ
ろうからな。団長が傍にいるなら安心だ。……お前こそ、大丈夫か
？」

「え？」

きょとんと目を瞬くフェリシアに、キアランは気遣わしそうな顔で
言った。

「まさか三日間俺に付きっ切りだったわけでもないだろうが、顔
色が悪い」

「え、ええつと……多分、魔力を流しっぱなしだったから、かな」
しどろもどろにキアランの治療法を教えると、彼は目を見張った。

「就寝時意外、俺について魔力を分けていた？戦場の兄上を放つて
？」

「う……ご、ごめんなさい」

怒られるだろうかと上目遣いにキアランの方を窺っていると、彼は
はつと息を呑んだ。

「いや、すまん、お前を責めているわけじゃない。しかし、そうか。
兄上ではなく俺に。そうか」

最後の方はぼそぼそと、どことなく嬉しそうに頷くキアラン。それ
から彼は気を取り直して、フェリシアに微笑みかけた。

「俺はお前の治療がなければ、多分死んでいた。ありがとう」

素直に礼を述べられて、フェリシアは内心飛び上がった。何故か火
照る頬に自分で動揺しながら、ぶんぶんと首を横に振る。

「も、元はといえば、あんな助けられ方した私の責任だし、ええつ
と、そう、そもそも私、あの銃杖は素人が使ったら最悪死にますよ
って教えておきましたよね！？何で使っちゃったんですか！」

逆切れに近い勢いの質問にも、キアランは真面目に答えた。

「剣を抜くより早かったからだ。お前があの兵士に刺し殺されるより、ずっといい」

「え……」

真剣な眼差しに射抜かれて、フェリシアは思わず絶句した。何だか自分の心臓の音が五月蠅い。

（オズワルド陛下にはベタ甘い台詞吐かれても平気なのに！なんで！？）

密かに大混乱中のフェリシアを置いて、キアランは再び寝台の上へ寝転がった。

「しかし、確かにあの武器は危ないな。ダリル辺りに改造は頼めないのか？」

「そうですね……検討しておきます。でも、その間杖を封印するとなると、ますます私の接近戦スタイルが格闘寄りになってくるなあ」とすると、キアランが久々に意地の悪い表情を浮かべた。

「だからといって、初対面の男の股座を蹴り上げる女が何処にいる」最初の夜を思い出したフェリシアは決まり悪そうに視線を逸らした。「あ、あれは本当にごめんなさい。でも、命の危機だった上に寝ぼけてたんだから仕方ないでしょう」

それから、ふと思いついてキアランの方を振り返る。

「でも心配しないで、キアランが不能になったら責任取って養子縁組の手伝いくらいはしてあげる」

「ふっ！？」

「どうしたの、驚いて。フェリシアが養子って言葉を知ってるんだから、この世界にも他人と親子関係を結ぶ制度はあるんでしょう？」

「問題はそこじゃない……！」

全力でツツコミを入れたキアランは、急激に疲労感を覚えて布団の中に潜り込んだ。

「……俺はいいんだ、子供を作る予定はない」

その言葉に、フェリシアは首をかしげた。以前城下町で見かけたキアランの様子では、子供が嫌いということでも無さそうだ。

「男の人が好きなの？」

「そんなわけがあつてたまるか！無用な王位継承争いを避けるためだ」

「じゃあ、結婚もしない？」

尋ねてから、フェリシアは流石にこれ以上根掘り葉掘り聞くのは失礼だろうと思ひ当たった。

「あ、ごめんなさい、疲れてるときに、色々聞いちゃって」

「……いや。少し前まで、結婚はしないつもりだった。今は少し、迷っている」

独り言のように呟いて、キアランは目を閉じた。フェリシアはそんな彼を、驚いて見つめる。

（迷っているって、好きな人が出来たかも知れないってこと？）

流石にそれを聞く勇氣はなくて、フェリシアが沈黙している間に、ベッドの方からは規則正しい寢息が聞こえてきた。もう、フェリシアが今のキアランにしてやれることは何もない。彼女はほんの少し残念な気分で、看病を切り上げて自室へと向かったのだった。

29・戦況（後書き）

お気に入り登録者数100人突破、ありがとうございます！

やっぱり王弟殿下デレ期到来の威力でしょうか、それともエロの威力でしょうか、今後のキアラン君は基本デレ全開ですのでご期待ください。作者悶絶しながら恥ずかしい台詞書くよ！！頑張る！！！頑張る方向間違っているとか言っちゃ駄目！！！！

えー、それはさておき今回は魔法の説明がちよろちよろ出てきてだれてないか心配です。一応、作中の魔力の強い順は、アバウトに

一般人<一般魔術師<キアラン 魔道師団員<エドモンド<ダリル
<<（越えられない壁）<<フェリシア

といったところ。これに技量が加わるとまた変動がありますが。キアランは銃杖使って息があったところを見るに、鍛え方次第ではエドモンドに肉薄できる感じです。

番外編：鷲の末姫（前編）

夕闇の向こうから、自分の名前を呼ぶ声がする。風に揺れる草木は長い影を引き連れて昼間とは様変わりし、まるで大きな魔物が襲ってくるよう。それでもヴェロニカは、逃げ出すことなく玄関扉の隅で佇んでいた。

「声は、メイドたちが私を探しているから。黒いのは、ただの影。こわくない、こわくない」

自分を探す使用人たちに見つからないよう小さな声で歌いながら、ヴェロニカはふと視線を上げた。歴史と栄華を誇り、グランディール貴族の頂点に立つ家柄の一つであるアーデン家の扉には、家紋である鷲のレリーフが荒々しくも優美に飾られている。小柄なヴェロニカの身長よりも大きな鷲は、鋭い眼光で眼下を睥睨していた。

「ひっ……！」

うつかり苦手なレリーフを見てしまったヴェロニカは、慌てて目を逸らしてうずくまる。夜の迫る風は冷たく、恐怖と寒さで足が震えた。屋敷の中に戻れば温かいミルクが待っているとわかつてはいたが、ここまで来て逃げ帰るわけにも行かない。ヴェロニカは咳を押し殺しながら、遠くに見える門の外をじっと見つめた。

どれほどそうしていたことが、日が完全に沈みきる直前に、ヴェロニカの目的はついに姿を現した。黒塗りの大きな馬車が、門衛に出迎えられてこちらの方へやってくる。鷲の家紋を掲げた馬車は、間違いなく彼女の父のものだった。

「お父様！」

ヴェロニカはぱっと顔を輝かせて、立ち上がった。少し泥で汚れてしまったスカートの裾を丹念に払い、馬車に駆け寄りたいのを我慢して、玄関前の階段下に立つ。父を護送する兵士たちが驚きの声を上げるが、ヴェロニカは構わず馬車が家の前に横付けされるのを待った。そして、父が降り立つ絶妙のタイミングで頭を下げる。

「お帰りなさいませ、お父様」

礼儀作法の家庭教師から習ったとおりの、ピシリと背筋を伸ばした状態からの深く優雅なお辞儀。スカートをつまんだ指先にまで気を配って、我ながら完璧な出来だとヴェロニカは得意に思った。きつと、いつもは硬い表情の父も喜んでくれるに違いないと、期待いっぱい顔を上げる。しかし、ヴェロニカの父ハロルド・アーデンは、強張った表情のまま娘を見下ろしていた。將軍職に就くハロルドはがっしりと筋肉のついた大柄な体で、瞳は驚のレリーフよりも眼光強く鋭い。その目がじろりとヴェロニカを睨み、口を開いた。

「ヴェロニカ…… お前が何故、ここにいる。日が暮れてからは外に出ないようにと、医者に言われていたはずだ」

「あ……」

怒られる、と思った瞬間、ヴェロニカは青ざめて立ち竦んだ。今日は体調が良かったからとか、教師が完璧だと太鼓判を押したお辞儀をみてもらいたかったとか、言いたいことはたくさんあるはずなのに、そのどれもが父の神経を逆なでするような気がして、言い出せないでいる。するとハロルドは深く溜息をつき、末娘のことなど視界にも入らない様子で、出迎えた執事に指示を出した。

「娘を部屋へ連れて行け」

それだけ言ってヴェロニカの脇を通り、屋敷の中へ消えるハロルド。ヴェロニカはその背中を、呆然と見送った。

ヴェロニカ・アーデン公爵令嬢。社交界にデビューしてからは大勢の貴族令息や令嬢達が傳き、人も羨む地位を確立することになる彼女だが、幼少期のヴェロニカは兄妹の中では一番目立たない少女だった。ほんの赤子の頃、母親と共に流行り病を患って以来病弱で、屋敷からあまり出られないことがより一層、影の薄さに拍車をかけた。

その時の病で亡くなった、絶世の美女だったという母に一番容姿が似ているのは、皮肉にも長男のエドモンドだ。黙って立ってさえい

れば、どんな美少女も霞むような華やかな美しさに、王国史上最年少で魔道師団入りに合格したという天才少年。加えて将来は大貴族アーデン家の当主とあって、彼の花嫁の座を争う令嬢は、若き国王オズワルドのそれと比べても遜色ない。

一方、姉のマルグリットも、基本的には母親似であるものの、父親の凛々しさも少しだけ受け継いで、どんな令息にも負けない美少年振りを発揮している。ヴェロニカと違って背が高く体も丈夫な彼女は、軍に入り日々鍛えているので尚更だ。職場でのマルグリットは、兄ほど目覚ましい活躍をしているわけではないが、剣の腕はめきめきと上達し、同じ年頃の男の子は誰も敵わぬほどだという。メイドたちには「上のお嬢様はせっかく美しいのだから、もつと着飾らせて欲しい」と嘆かれながらも、勇ましく剣を振るうマルグリットには大勢の女性ファンがいることを、ヴェロニカは知っていた。

そして、アーデン家の出来損ないがヴェロニカだった。魔力は人並みで、剣など持つことも出来ない、病弱な末娘。ハロルドが兄と姉について悩んでいることといえば「どうして二人の性別が逆ではないのか」ぐらいのものだろうが、ヴェロニカについては数え切れない悩みがあるだろう。

（いいえ、ひよつとすると、私のことなんて悩んですらいらっしゃらないかもしれない）

無理が祟って夕食前から頻繁に咳を繰り返し、寝台に押し込められたヴェロニカは、憂鬱な気分で寝返りを打った。痛めた喉は唾を飲み込むだけで激痛を発し、微熱を出した体は頭をぼうつとさせる。それが日常茶飯事とはいえ、せっかく忙しい父が家で食事をするというのに、共に食卓につくことすらできない自分の体が酷く疎ましかった。

「お嬢様、失礼いたします。お薬をお持ちしました」

ベッドの中で悶々としてしていると、軽いノックと共に薬湯を持ったメイドが入ってきた。

「いない。出て行って」

かすれた声でそう言って、布団の中に潜り込む。若いメイドは困ったように、主の傍らに立った。

「ですが、お嬢様。お薬を飲まないと体調もよくなりませんし……」
「だから何よ、私なんか死んじゃえばいいんだわ！」

父親に見向きも去れず、優秀な兄姉の足元にも及ばない、こんな惨めな人間は消えてなくなってしまうがいい。ベッドから身を起こしてやけくそ気味に喚くと、メイドはオロオロとうろたえた。

「お、落ち着いてください、お嬢様。お嬢様に何かあつては、旦那様が悲しみます」

「偉そうなと言わないで、お前に何がわかるの！？そんな無能だから、お父様に疎まれている私なんかの世話をするはめになるのよ！」

令嬢にあるまじきしわがれた声で叫び、メイドに向かってぽんぽんとクツシヨンや枕を投げつける。ヴェロニカのひ弱な腕では大した勢いも出なかったが、たまたまそのうちの一つがメイドの持った盆に当たり、まだ暖かい薬湯がぶちまけられた。

「きゃっ！？」

「あ……」

ガシャンという音と、薬湯をかぶったメイドの小さな悲鳴に、ヴェロニカは一瞬苛立ちを忘れて体をすくませる。しかし、罪悪感を振り払うように首を振って、再び布団の中に潜り込んだ。

「お、お前が早く出て行かないから、悪いのよ」

言い訳のように呟くと、メイドがその場を片付ける気配がした。本来の計画なら今頃、立派な淑女に成長した自分を褒めてくれた父親と、夕飯を共にしているはずだったのだ。鬱屈した気分で、ヴェロニカは目を閉じた。

「失礼いたします、旦那様」

部下のメイドからヴェロニカの様子を報告された老執事は、ハロルドの書斎を訪れた。すると、部屋の主のにこりともせず迎えられる。

しかしハロルドの祖父の代からアーデン家に仕える執事は気にした様子もなく、話を切り出した。

「ヴェロニカお嬢様のことですが」

「……ヴェロニカがどうした」

ハロルドは書斎机に座って書類に視線を落としたまま、どうでも良さそうに問い返す。しかし若干の語尾の震えをきちんと聞き分けた老執事は、少し意地の悪い笑みを浮かべた。

「あのようにそっけない態度をとらなくてもよろしいでしょう。今日は熱もなくて、習っていた礼儀作法で合格点を取ったから、お父様に見て貰うのだと張り切っておられたのに」

「……」

「私から見ても、あのお辞儀は完璧でしたよ。せめて一言褒めて差し上げればいいものを」

「……そんな事をして、私が帰るたびヴェロニカが出迎えるようになったらどうする」

じろりとこちらを睨む主の眼光にも、老執事は怯まなかった。

「素直に受け入れればよろしいではありませんか。かわいげのない上のご兄妹と違って、目に入れても痛くないほど大事な姫君なのでしょう？あのみままではヴェロニカ様まで性格ねじ曲がってしまいますよ。もう手遅れになりつつありますが」

「五月蠅い」

主人の子供たちに対する遠慮のない、しかし的を射た評価に、ハロルドは苦虫を噛み潰したような顔で唸った。

「ヴェロニカに無理をさせて、妻のように、突然いなくなるようなことだけは、どうしても避けたいのだ」

「身を守って心を傷つけていては、かえってよくない結果を産むこともございます」

「わかっている」

ハロルドは頷いたものの、ヴェロニカへどう接していいかまったくわからなかった。図太く厚顔なエドモンドや負けん気が強いマルグ

リットには、厳しく接していればおのずと親子の絆らしきものが芽生えたと思っているが、可憐で繊細な末娘には、傷つけるのが怖くてまともに言葉もかけられないのだ。散々言い淀んだ拳句、ハロルドはなんとか話題をひねり出して執事に尋ねた。

「ヴェロニカは、あの年で礼儀作法に熱心なようだが、よもや叱り付けて強制しているのではあるまいな」

「まさか。ヴェロニカ様が望んでなさっていることでございます。

幼き頃より作法の授業を嫌って逃げ出してばかりいたどこかの若君と違って、非常に優秀です」

「……そうか」

どこぞの若君、もといハロルドは気まずそうな顔をした。

「ヴェロニカ様は病弱ではありますが、気質は寧ろ外に向いておられます。城の様子や社交に高い興味をお持ちのようですから、体調のいい日に一度お連れになつてはいかがです？」

「考えておこう」

ハロルドは執事の提案に頷いて、再び書類に視線を落とした。

それから数日後、いくらか元氣を取り戻したヴェロニカの元に、嬉しい知らせが届いた。

「このまま体調が悪くならなければ、お父様がお城に連れて行つてくださるのですって！」

「よかったじゃないか。でも、それなら絶対に体調を崩さないように、安静にしていなくてはね」

子供らしく顔を輝かせて報告するヴェロニカの頭を撫でて答えるのは、姉のマルグリットだ。彼女の横では、兄エドモンドが嬉々として立ち上がった。

「ヴェロニカ、お兄様の開発した魔法道具『一日十刻間全自動看病君』を使ってみないかい！？定時になったら強制的にお薬を飲ませて寝かしつけてくれる優れものだよ！」

「それ、打ち身をこしらえた兵士を看病して頭痛胃痛複雑骨折に追

「いやったという魔法道具では……？」

ヴェロニカが恐る恐る尋ねると、エドモンドは満面の笑みで頷いた。「よく知ってるねヴェロニカ！その通りだよ！君も激しい看病を受けてみないかい？」

「そ、そんな恐ろしいものいりません！」

「えー、おもしろいのに。僕が」

打撲を重傷に変える魔法道具のどこがどう面白いのだろうか、とヴェロニカは疑問に思ったが、兄の無茶苦茶ぶりはいつものことだ。溜息と共に疑問を頭の隅に追いやって、マルグリットを見上げた。美しく凛々しい姉は、兄妹の様子を見て苦笑交じりに肩をすくめて見せる。

ヴェロニカは優秀な兄姉に多大な引け目を感じていたし、特にエドモンドにはついていけないと毎度思うのだが、それでも二人のことは好きだった。物心突く前に母親をなくし、父の関心も薄いと思っている彼女にとって、兄と姉が唯一素直に甘えられる肉親なのである。エドモンドとマルグリットも病弱な末の妹を可愛がっており、ヴェロニカが寝込めば必ず日に一度は見舞いに訪れた。ヴェロニカは、自分を優しく見つめる二対の瞳を見返して、弾んだ声で問いかける。

「ねえ、お兄様、お姉様。お城ってどんなところなのか、お話して」

「いいよ。そうだな、私たちがはじめて城に上がったのも、今のヴェロニカくらいの頃だっけ」

それを聞いて、ヴェロニカは意外そうに目を瞬かせた。できのいい兄と姉はもつと幼い頃に城に行ったことがあるのだばかり思っていたが、今の自分と同じくらいだったという事実に、置いていかれるばかりではないのだとほっとする。マルグリットはそんな妹の頭を撫でながら、話し始めた。

「私は、当時はまだ王子殿下だったオズワルド陛下の話し相手として城に呼ばれたんだ。兄上はアーデン家の長男として軍部や騎士団の見学。でもね」

「僕はチャンバラごっこなんて興味なかったし、マルグリットは王子様の話し相手なんて退屈だって言うから」

言葉を引き継いだエドモンドとマルグリットは顔を見合わせてにやりと笑い、

『入れ替わっちゃった』

いたずらを告白する子供のような顔で声を合わせた。

「ええっ！？だ、大丈夫だったんですか？」

「昔の私たちは今以上にそっくりだったから、最初は誤魔化せたよ。結局帰る前にばれて、父上に大目玉を食らったけれど」

ヴェロニカが必要以上に父親を恐れるのは、兄姉が父の恐ろしさを誇張して話すのも一因だったりするのだが、二人は滔々とハロルドの怖さについて語り続けた。そしてヴェロニカが震え上がるのを見計らって、楽しい話へ移行する。

「でも父上を怒らせても決行する価値はあったな。私はキアランはじめ、その場の見習い騎士や将校候補生を叩きのめしてやったし、強い人とも戦えたし」

マルグリットがあでやかに笑えば、

「僕も僕も。オズワルドと親友の契りを交わして、興味深い城の秘宝や魔法道具を見せてもらって、二人で王城の七不思議めぐりの冒険の旅に出たんだ！」

エドモンドが弾んだ声で言う。

「いや、兄上のは、自分の知識欲を満たすためだけにオズワルド陛下を案内役に仕立て上げた拳句、無理矢理城中を引きずりまわしたというんじゃないかな」

「僕が楽しければ別に体裁なんてどうでもいいさ！マルグリットだってエリートのお坊ちゃんたちをこてんぱんにして憂さ晴らしたんだろ？」

「ああ。それもそうだね。ふふふふふ」

「あはははは」

実に楽しそうに思い出話に花を咲かせる兄たちを見て、ヴェロニカ

もつられて笑いながら、まだ見ぬ城への憧れを強くした。

（いいなあ、お兄様たち。私も早くお城に行きたい）

二人の話は綺麗なものや驚きに満ち溢れて、聞いているだけでときどきしてくる。ヴェロニカは期待に高まる胸を押さえながら、王城訪問の日を待ちわびたのだった。

番外編：鷲の末姫（前編）（後書き）

お気に入り登録数100人突破御礼番外編です。アーデン家の三兄弟の昔の話。でも、主人公はあまり人気のないであろうヴェロニカ。マルグリットやエドモンド主役になると、どうしてもネタバレになってしまうので。まあ、兄ちゃん姉ちゃんの話もまたいずれ。

番外編：鷲の末姫（後編）

そして、待ちに待ったその日が訪れた。ヴェロニカは姿見を覗き込んで、一つ頷く。身を包むドレスは新調した流行のもの、メイドたちにたつぷりと注文をつけてようやく満足のいく形に結い上げた金髪の輝きは、姉にだって負けはしない。細心の注意を払って整えてきただけあって、体調も万全だ。

「失礼いたします、ヴェロニカお嬢様。用意はよろしいですか？」
「当然よ」

青い瞳を自信に輝かせて昂然と告げる令嬢に一礼し、執事は彼女を屋敷の外へと導いた。屋敷の前には既にアーデン家の馬車が停まっており、ハロルドがその横で立つて待っていた。

「まあ、お父様。お待たせして申し訳ございません」

「……いや、いい。大して待つてはあらん」
父が馬車の中にいなかったのが意外で、素直に驚き、丁寧に頭を下げるヴェロニカに、ハロルドはそっけなく返す。早速怒らせてしまったらどうかと不安に思っていると、老執事が失礼いたしますと断つて耳打ちして来た。

「旦那様は、お嬢様があまりにもお綺麗なので戸惑っておいでなのですよ」

いつもなら下らない気休めはやめてと怒るところだが、待ちに待った素晴らしい日のせい、ほんの少しだけその言葉も信じられるような気がした。ヴェロニカはこくりと頷いて、馬車に乗り込む。すると、先に乗っていた父の大きな手が引き上げてくれた。

（今日はとてもいいことばかりが起こる気がするわ）

ヴェロニカはうきうきとした気分で、動き出した馬車の窓から進行方向を眺めた。屋敷の窓から眺めるだけだった荘厳な城の姿が、どんどん近づいてくる。そして、半刻もたたないうちに、馬車は王城の門をくぐった。

「わあ……！」

馬車は父の職場である軍事棟や訓練場、使用人棟を横目に進み、中庭へと入っていく。いかめしい兵士たちが門扉を守っていたかと思えば、遠目に行き交う使用人の姿に、中枢部を訪れた紳士淑女たちの華やかな装い。無骨だと思っていた城の、近くによると意外にも精緻なレリーフが施された外壁に、垣間見える内部の重厚かつ壮麗な内装。どれもこれも珍しくて、小さく歓声を上げるヴェロニカに、ハロルドが声をかけた。

「ヴェロニカ。今日の予定はわかっているな」

「はい、お父様。まずは王弟殿下とご挨拶、それから救世主と名高いフェリシア嬢と会食でしたな」

ヴェロニカの王城訪問の目的は、彼女の兄姉がそうだったように、城に住む王族や貴族の子供との交流だった。これから、王弟のキアランと、救世主としての役目を期待され城に住んでいるというチェンバレン公爵令嬢に会うのである。本当は絶世の美少年だという新国王、オズワルドにも拝謁を賜りたかったのだが、王位について日の浅い彼はとにかく多忙で、とても時間を割くことなどできないのだ。

（不満に思っては駄目。お城に来られただけでも、とても光栄なことなのだから）

ヴェロニカは気持ちを切り替え、到着した馬車から降りると、父の後について歩き出した。

父と娘は城の侍従に恭しく案内され、行政棟中枢部の応接間に通された。数人が議するためのそれほど広くはない部屋で、窓辺では黒髪の少年が退屈そうに外を眺めていた。

「お久しぶりございます、キアラン殿下」

ハロルドが臣下の礼をとって挨拶するのに、少年は渋々といった様子で振り返り、頷いた。整った、美しいというよりは凜々しい顔に、どこか不機嫌そうな琥珀の瞳がじろりとアーデン家の親子を睨む。

（この方が、キアラン殿下……）

ヴェロニカは慌てて腰を折りながら、キアランの顔を不安げに盗み見た。貴族階級の友人はいるものの全員女の子だったし、男の子との接触といえば彼女達の兄弟をたまに見かける程度だ。しかし、ヴェロニカがにつこり笑えば彼らは例外なく可憐な令嬢の虜になることも知っていたから、父の陰に隠れたいのを我慢して、勇気を振り絞り、許しの言葉と共に顔を上げる。

「久しいというほどでもない。アーデン將軍、本日は何用だろうか」
「殿下に娘を紹介したく、参上いたしました。次女のヴェロニカにございます」

父に軽く背中を押されて、ヴェロニカは前に進み出た。優雅に美しく、再度頭を下げ、小鳥の囀るようと評判の可憐な声音で名乗る。

「ヴェロニカ・アーデンと申します、王弟殿下。どうぞお見知りおきを」

「ああ。よろしく」

完璧な笑みを浮かべるヴェロニカに、キアランはそれだけ返事をして黙り込んだ。粗雑に扱われているわけではないが、予想外の反応にヴェロニカは焦る。何か気のきいた事を言わなくてはと話題を探し、どうにか次の予定から話を捻出した。

「私、これから、チェンバレン家の救世主様とお食事させていただきますの。王弟殿下は救世主様と幼馴染なのですよね？」

それはキアランにとって地雷に等しい話題だった。話を続けることで精一杯のヴェロニカは、一気に険しくなるキアランの表情や、それに気づいて口を挟もうとする父親に気づかないまま、言葉を紡ぐ。

「もしよろしければ、お昼を三人で一緒に」

「断る」

にべもない返答に、ヴェロニカは目を丸くした。そもそも、父以外の人間に話を遮られることすら初めてだった。恐怖より先に驚きで絶句している彼女に、キアランは棘のある言葉を投げつける。

「フェリ……あいつと食事？冗談じゃない。あんな奴、顔も見たくない。ヴェロニカ嬢、貴女に非がないのは承知しているが、そんな下

らない提案は二度としないで欲しい。失礼する」

キアランの悪意は直接ヴェロニカに向けられたものではないが、甘やかされて育ったお嬢様が茫然自失の体になるには十分だった。あつけにとられるヴェロニカをつまらなそうに一瞥し、キアランは足音高く部屋を出て行った。背後からハロルドの重苦しい溜息が聞こえ、ヴェロニカは真つ青になって振り返る。

（お、怒っていらっしやる……？）

ヴェロニカにとって、失礼な王弟よりも敬愛する父を怒らせるほうが恐ろしかった。事実、ハロルドは苛立っていた。可愛い可愛い愛娘に八つ当たりのような言葉を投げつけたキアランと、それを止められなかった自分への怒りだったが、ヴェロニカにそんな事がわかるはずも無い。ヴェロニカはすっかり意気消沈して、父に促されるまま部屋を出た。

次はチェンバレン公爵令嬢フェリシアとの顔合わせと食事会だ。

外庭の塔に住んでいるという彼女とは、城の中庭で会う手はずになっっている。ヴェロニカが父と並んで外へ向かう廊下を進んでいると、不意にハロルドが口を開いた。

「ヴェロニカ。体調が悪くなったらすぐに言いなさい」

ヴェロニカはそれを、自分を心配しての言葉だと受け止められるほどに、父に愛されているとは思っていないかった。少しでも体調を崩そうものならすぐに帰らせるという意味に解釈した彼女は、硬い表情で頷いた。これでは、多少気分が悪くても申し出るわけにはいかない。父に嫌われないためにも、これ以上の失態を犯すわけにはいかないのだ。

こうしてしょんぼり歩いていたヴェロニカだったが、そんな気分も吹き飛ぶ嬉しい出来事もあった。

「アーデン將軍？」

ハロルドとヴェロニカが、行政棟の渡り廊下に差し掛かったとき。後ろから呼び止められ、二人は振り返った。振り返った先にいたの

は、数人の文官を連れた美しい少年だ。肩で切りそろえられた金髪に、どこかで見た琥珀色の瞳、優しげな、それでいて芯の強そうな顔立ちと眼差し。ヴェロニカは生まれてはじめて初めて、兄のエドモンドと同じ位綺麗な少年を目の当たりにして驚いた。

「これはこれは、国王陛下。ご機嫌麗しく」

「公式の場ではないのだから、畏まった礼は必要ないよ」

慇懃に礼をとるハロルドに、美しい少年王は爽やかに笑って許しを与えた。

「ありがたき幸せ」

謝意を伝えて顔を上げるハロルドに頷き、国王オズワルドはヴェロニカにも視線を向けた。

「はじめまして。君はアーデン將軍のご息女か？」

「は、はい……ヴェロニカ・アーデンと申します」

「そう、素敵な名前だね。私はオズワルドだ。お父上にはとてもよく助けていただいている」

「め、滅相もないことでございます……！」

ふんわりと向けられる優しい笑顔に、ヴェロニカはただ夢見心地で答えた。

（国王陛下……なんて、素敵な方なのかしら）

キアランとのファーストコンタクトが最悪だっただけに、臣下の娘にも礼儀正しいオズワルドが殊の外立派に見える。これこそヴェロニカの望む、正しい「王子様との出会い」だった。

「君は確か、生まれてすぐに流行風邪を患ったと聞いていたけれど、大丈夫かい？小さいころにあれを発症すると、体が弱いうちは大変だろう」

「い、いいえ、大丈夫です。でも、何故それを……？」

「私も幼い頃、同じ病にかかったんだよ。おかげで子供のころは体が弱くて、自分が情けなかったな」

「まあ」

それは、今まさにヴェロニカが抱えている悩みとまったく同じもの

だった。自分と同じ苦しみを知る王に、ヴェロニカは憧れと共に親しみも覚える。

「でも、心配しないで。大人になればほとんど影響は消えるそうだから。私も成人した前後から、ほとんど体調を崩すことはなくなっただんだよ」

「本当ですか？では、大人になるまで頑張ります」

素直に頷くヴェロニカに、オズワルドは笑みを深くした。

「いい子だね。でも私は、そろそろ行かなければ。機会があったらまた話そう」

文官たちに急かされたオズワルドは、そう言つて親子の前から立ち去った。ヴェロニカは頬を染めて、その後姿を見送る。

（オズワルド陛下……あんな方と結婚できたら、王妃様になれば、なんて素晴らしいことでしょう）

その思いつきは、とてもいいことのように思えた。剣も魔法も扱えないヴェロニカだが、容姿にも家柄にも社交術にも自信はある。この国の女性で一番の地位を手に入れば、きっと父も自分を見直してくれる。

（私なら、出来るわ）

その日から、ヴェロニカの目標は社交界の女王、そしてオズワルドの正妃の地位になった。ただ、顔を輝かせて静かに燃える娘とオズワルドの去った方角を、ハロルドは厭わしそうな顔で眺めていた。

やる気に満ち溢れたヴェロニカが父親と共に中庭の東屋を訪れると、そこではハロルドよりいくつか年上と思しき紳士が待っていた。きつちりとしたスーツに身を包み、逞しくはないがちゃんと背筋の伸びた姿勢のいい体勢で、初老に差し掛かってなお甘い顔立ちには、人好きのする笑みを浮かべている。

「やあ、アーデン將軍。今日は忙しいところ、娘のためにありがとう」

「宰相位を勤める貴殿ほどではない。紹介しよう、これが次女のヴ

エロニカだ。ヴェロニカ、こちらはこれからお会いするフェリシア嬢の父君、ベネディクト・チェンバレン殿」

父の紹介に、ヴェロニカはちょこんと可愛らしいお辞儀と共に挨拶をした。

「はじめまして。ヴェロニカ・アーデンと申します」

「これはこれは、可愛らしいお嬢さんだ。今日は来てくれてありがとう」

「とんでもございません。それで、あの、救世主様は……？」

フェリシアらしき少女の姿が見えないのに怪訝そうな顔をしたヴェロニカに、ベネディクトは苦笑する。

「あの子は、少し特殊な子でね。手を引いてやれば歩くし、指示すれば簡単な動作や言葉を発することも出来るのだが、なんと言えればいいかな。自分の意思が丸ごと欠如しているから、それを知らせた上で引き合わせたいと思ってね」

ベネディクトの言葉に、ヴェロニカは頷いた。噂で聞いたことがある。救世主として莫大な魔力を持つて生まれたチェンバレン家のご令嬢は、自意識のない状態で、人形姫と揶揄されているらしい。しかし人形を相手にしているのだと思えばかえって楽だと、ヴェロニカは気楽に頷いた。

「大丈夫です。きっとお友達になれますわ、私たち」

「それは嬉しいことだ。では、娘を呼ぶことにしよう」

ベネディクトはそう言っ、魔法道具らしい小さな金属の玉を東屋の外の地面に放った。玉は石に当たってぱちんと弾け、赤い煙が狼煙のように細く高く上っていく。それが合図だったのだろう、程なくして、何か大きな気配が近づいてきた。それは強大で濃密な、魔力の気配。

（……！）

その空気が近づいてくるたび、ヴェロニカは息苦しくなった。ざわざわと血の流れる音が耳に響く。フェリシアの魔力に当てられたのだ。「体調が悪くなったらすぐに言いなさい」という父の言葉が一

瞬頭をよぎったが、ここまできて取りやめにするわけにもいかない。額に脂汗を浮かべてじっと待っていると、ついにその姿が現れた。

「ひっ……！」

ヴェロニカは辛うじて、悲鳴と吐き気を飲み込んだ。魔術師らしき男に手を引かれたフェリシアは、ヴェロニカより少し年上の少女だった。ゆるく癖のある長いこげ茶の髪に、黒曜石のような黒い瞳。顔立ちは悪くないが、特別美人というほどでもない。着ている服も格式張った形で、いつものヴェロニカなら「地味でダサイ子」と一蹴するところだ。しかし、今の彼女にそんな余裕はなかった。

（何、あの子、怖い……！）

感情が一切感じられない奈落の底の様な黒い瞳に見据えられ、小さな体に収まりきらず溢れ出す魔力の塊に晒されて、ヴェロニカは蒼白になった。見てはならない化け物にでも遭遇したような気分で、一步一步自分に近づいてくるフェリシアに見入る。もう、礼儀作法も何もあつたものではなかった。

「い、いや……」

「ヴェロニカ？」

うわ言のように呟いて後退る娘に、ハロルドが眉をひそめて娘の名前を呼ぶ。

「いやああああああっ……！来ないで……！」

悲鳴を上げて、ヴェロニカは目の前の少女を突き飛ばした。付き添いの魔術師の手を離れていたフェリシアは、何の抵抗もなくドサリと後ろに尻餅をつく。

「フェリシア！」

すかさずベネディクトが娘に手を伸ばした。ヴェロニカは父親に助け起こしてもらったことなどいともない。その事実には傷つく隙もなく、ヴェロニカは目を閉じて蹲った。

（怖い怖い怖い……！誰か助けて、お兄様、お姉様！オズワルド陛下……！）

「大丈夫か……？」

すると、呼びかけが聞こえたようにオズワルドの声が響いた。まさかと思いい目を開けると、先程別れたオズワルドが、こちらへ向かって走ってくる。

（陛下……来てくれたの？）

しかし喜びは、すぐに絶望と取って代わった。オズワルドはヴェロニカのことなど見えていないかのように脇を素通りし、フェリシアの傍らに立って父親に抱き起こされた彼女の頬に手を当てた。

「大丈夫かい、フェリシア！？怪我はない？」

「国王陛下、娘に大事はございません。それよりも……」

世界で一番大事な宝物のようにフェリシアに触れるオズワルドとベネディクトの会話をどこか遠くに聞きながら、ヴェロニカの胸に黒い感情がわきあがってきた。似たような気持ちを抱いたことは幾度もあれど、今までで一番強くて激しい気持ち。

（なによ……何よ、何よ何よ！！あんな怖くて気持ち悪い子が、何であの子のお父様にも陛下にも大事にしてもらえるのよ！）

恐怖を凌駕する、それは紛れもない嫉妬だった。自分がいくら望んでも手に入れないものを、黙って佇んでいるだけのフェリシアが持っている、その事実が許せなくて、目の前が霞む。自分が泣いているのだと気づくと同時に、ヴェロニカは意識を手放した。

ヴェロニカが気を失ったことで当然食事は中止となった。その後も城で仕事があったハロルドは、気を失った娘を先に馬車で帰らせた。夕方になってヴェロニカが自室のベッドで目を覚ますと、周囲は無人である。ヴェロニカは一瞬で、何があったのか悟った。自分は大切な王城デビューで、無様にしくじったのだ。

「あんな子が、いなければ……」

ヴェロニカは悔しさに唇を噛み締めた。それでも、抱いた目標を變更する気にはならない。

「いつか、王妃様になって、あの子もお父様も見返してやるんだから……！」

無邪気な夢はどす黒い野望に姿を変えて、小さな少女の心を蝕み始めた。

番外編：鷲の末姫（後編）（後書き）

十年くらい前の、まだ一応はかわいげがあったころのヴェロニカ嬢スピントフ。もしくはヴェロニカ版『憎しみの理由』という感じでしようか。嫌なお嬢さま全開の彼女もただ闇雲にフェリシアを敵視しているわけではなく、敵視するだけの理由があるのです。それが正当な恨みかどうかはさておき。

嫌な奴といえばキアラン少年も対フェリシア時ほどでないにせよ嫌な奴ですが、この頃の彼にはまだ王位継承権があります。近づく人間、特に年頃の娘は皆継承権狙いに見える。ので、あの態度。貴族の子弟の中では友達というか味方はほぼゼロだったり。屈折したものの同士、ヴェロニカとキアランの組み合わせもそれはそれでお似合いと思うのは作者だけでしょうか。

ちなみに斉藤さんちの姉弟に負けないくらい実は互いにデレデレなアーデン家の三兄妹が描けて、作者は満足です。人形の救世主はブラコン・シスコン率高めですね。そのうち仲の悪い兄弟姉妹も出てくると思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1582u/>

人形の救世主

2011年10月31日21時41分発行